地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 京都(11)第40号 NI-53-14-3

京都東南部地域の地質

脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聰志・竹村恵二・田口雄作

平 成 25 年

独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター 【訂正とお詫び】

「京都東南部」の報告書 43 ページ第 4.1 表に誤りがありました。 表の上部 4 行が欠落し、試料種類・試料数・場所及び SiO₂ 値が欠けてしまいました。 正しい表をここに再掲します。

お詫びして訂正いたします。

	試料	石山長石	低品位鉱	粗粒鉱石	中粒鉱石	細粒鉱石	花崗岩
		IN 5	IN 8	平均 n=26	平均 n=13	平均 n=12	平均 n=2
_	場所	原石置場	東山切羽	鉱口から-90	m,-70m,-50m,-	-30m,0mレベル	
	SiO ₂	77.58	75.20	67.62	65.93	66.39	75.59
	TiO2	0.01	0.02				
	Al203	12.86	14.25	19.08	19.80	20.30	14.97
	MgO	0.07	0.03				
	CaO	0.35	0.18	0.36	0.39	0.37	0.46
	Na2O	4.26	2.57	5.47	5.74	7.51	4.01
	K20	4.10	4.81	6.67	7.35	4.70	4.11
	Ig. loss	0.24	1.87				
_	Total	99.67	99.86				
	出典	а	а	b	b	b	b



()は1:200,000図幅名

11-27	11-28	11-29
京都西北部	京都東北部	近江八幡
Kyōto-Seihokubu	Kyōto-Tōhokubu	Ōmi-hachiman
NI-53-14-6	NI-53-14-2	NI-53-8-14
⁽¹⁹⁸⁹⁾	(1998)	(2003)
11-39 京都西南部 Kyōto-Seinambu NI-53-14-7 (2005) (仕員 Fuchimi	11-40 京都東南部 Kyōto-Tōnambu NI-53-14-3 (2013) 1:75 000 (1032)	11-41 水口 Minakuchi NI-53-8-15 (2003)
11-51	11-52	11-53
大阪東北部	奈良	上野
Ōsaka-Tōhokubu	Nara	Ueno
NI-53-14-8	NI-53-14-4	NI-53-8-16
(2001)	(2000)	(1996)

5万分の1地質図幅索引図 Index of the Geological Map of Japan 1:50,000

京都東南部地域の地質

脇田浩二 * + · 竹内圭史 * · 水野清秀 * · 小松原 琢 * · 中野聰志 * * · 竹村恵二 * * * · 田口雄作 * * * *

産業技術総合研究所地質調査総合センターは、1882年にその前身である地質調査所が創設されて以来、国土の地球科学的実態を解明 するために調査研究を行い、様々な縮尺の地質図を作成してきた、その中で、5万分の1地質図幅は、自らの地質調査に基づく最も詳細 な地質図であり、基本的な地質情報が網羅されている、京都東南部地域の地質は、この5万分の1地質図幅シリーズの一環として作成 されたもので、5万分の1縮尺の地質図幅と地域地質研究報告(説明書)から構成されている。

「京都東南部」地域における現地調査は、平成18~21年度に実施した.調査研究と執筆について、丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスのうち瀬田川・大石川以西を脇田が、同コンプレックスの変成作用を受けた東部と南縁部を竹内が、花崗岩及び岩脈を中野が、中新世の綴喜層群を竹内が、古琵琶層群及び大阪層群を水野が、高位段丘以降の更新統・完新統を小松原が、地下地質を竹村が、水資源を田口が、地下資源を中野が、災害地質を小松原・竹村が、それぞれ主に担当した.全体の調整は脇田・竹内が行った.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスのⅠ型地層群とⅡ型地層群の区分や地質図の描き方については、京都教育大学副学長武蔵野 實 氏,箕面東高等学校教頭貴治康夫氏,同志社女子中・高等学校教諭楠 利夫氏,龍谷大学講師三上禎次氏にご教示・ご議論いただいた.また, 貴治康夫氏には、丹波帯付加コンプレックス中の小岩脈についても多大なるご教示と試料類の貸与をいただいた.丹波帯付加コンプレッ クスの調査に当たって,京都市埋立事業管理事務所(エコランド 音羽の杜),鴻池建設株式会社大津採石工場,日清都ゴルフ場及び京 |都国際カントリークラブに便宜を図っていただいた. 放散虫化石処理と鑑定については新潟大学栗原敏之氏と石田直人氏にお世話になっ た、南東部の丹波帯付加コンプレックスについて、京都大学平島崇男教授には王 革凡博士の岩石薄片・資料を貸与していただいた. 火成岩類の記載に当たり、田上花崗岩体・信楽花崗岩体については、周琵琶湖花崗岩団体研究グループによる調査資料と採取試料を活 用させていただいた。田上花崗岩体とそのペグマタイトについては、河野俊夫氏に多数貴重なご教示をいただいた。野外調査に当たっ ては、新名神高速道路建設工事に伴う露頭観察を頻繁に行った際に、西日本高速道路井手俊也氏及び第二名神大津特定建設工事共同企 業体副所長岸本三好氏はじめ多くの方に便宜を図っていただき、関係資料も参考にさせていただいた、瀬田川洗堰南の大戸川の瀬田川 流入地点付近の川原の露頭観察及び鎧ダム東方の田上花崗岩体観察に当たっては、国土交通省琵琶湖工事事務所及び田上砂防出張所の 方々に便宜を図っていただいた.実際の野外調査に当たっては、安達孝紀氏(大津市立長等小学校)、大橋義也氏(中津川市立坂本中学 校),花田遥平氏(滋賀県立信楽高校)に協力をいただいた(当時,滋賀大学教育学部院生・学生).また,大津放水路工事の現場観察 及び関係資料閲覧については建設省近畿地方建設局の菅沼忠男氏に、大津市瀬田「ニューびわこサウナ」地下のボーリング試料の観察 については総支配人青木 勉氏と副支配人森口照雄氏にお手数をおかけした. 原山 智氏(信州大学)には鉱物組成分析の標準試料を 貸与いただいた. 古琵琶湖層群・大阪層群などの鮮新-更新統に関しては、石田志朗博士に露頭情報をご教示いただいた. 藤原重彦氏に はボーリングによって採取された火山灰試料をご提供いただいた。千葉大学園芸学部の百原 新博士には植物化石の同定をしていただ いた.地下地質関係では,京都盆地地下地質情報収集に当たっては,京都市消防局,(株)阪神コンサルタントの末廣匡基氏にお世話になっ た. 京都盆地及び山科盆地のボーリング断面の作成に当たっては、関西地盤協議会(KG-Net)の地盤データベースを利用させていただ き、地域地盤環境研究所の北田奈緒子氏にご協力いただいた。千木良雅弘博士をはじめとする京都大学防災研究所の方々にはボーリン グ資料をご提供いただいた. 京都市役所都市計画局公共建築部企画設計課からは, 山科地区のボーリング資・試料をご提供いただいた. 資源地質関係では、上田上公民館長大森秀次氏には上田上牧地区の石材について多くのご教示をいただいた、温鉱泉の資料は、京都府 健康福祉部薬務課及び滋賀県健康福祉部生活衛生課から、地下水の文献の多くは、立命館大学文学部地理学教室の吉越昭久教授から提 供を受けた. 京都府建設交通部砂防課及び城陽市役所からは,土砂採取量に関する資料をご提供いただいた. ここに記して謝意を表する. (各氏の所属・役職は当時のものである)

地質調査総合センター内では、石原舜三氏から暗色包有岩の全岩化学分析値のデータの提供を受けた.また丹波帯付加コンプレック スについて、地質情報研究部門の木村克己氏・中江 訓氏から助言を受けた.活断層地震研究センターの小泉尚嗣氏からは、ボーリン グ資料の提供を受けた.本研究に用いた岩石薄片は、地質標本館の大和田 朗・佐藤卓見・福田和幸各氏の作製によるものである.

本報告では国土地理院発行の5万分の1地形図の地域を指す時に"「京都東南部」地域"のように「」をつけて記述することがある. 本報告で用いた試料のうち, GSJ R No.の岩石試料は,地質標本館に登録・保管されている.本文中で記述した露頭・試料採取地点の位置は付図の地形図に示したが,球顆花崗岩は乱採集の恐れがあるため示していない.

(平成 23 年度稿)

所 属

** 滋賀大学教育学部

Keywords: areal geology, geological map, 1:50,000, Kyoto, Shiga, Tamba, Ryoke belt, Tanakami Granite, Tsuzuki Group, Kobiwako Group, Osaka Group, terrace, Permian, Triassic, Jurassic, Cretaceous, Miocene, Pliocene, Pleistocene, Holocene, accretionary complex, metamorphic rocks, contact metamorphism, mélange, chert, basalt, limestone, mudstone, sandstone, conglomerate, granite, sand, mud, clay, gravel, active fault, water, resources

^{*} 地質情報研究部門

^{***} 京都大学理学研究科

^{****} 地圈資源環境研究部門

⁺ 現所属 山口大学大学院理工学研究科

目 次

第1章 地 形	1
1.1 地形概説	1
1. 2 京都盆地	1
1.3 桃山丘陵	2
1. 4 山科盆地	2
1.5 黄檗丘陵	2
1. 6 字治丘陵	2
1.7 醍醐山地	3
1.8 石山丘陵	3
1.9 近江盆地	3
1. 10 瀬田丘陵	4
1. 11 田上低地	4
1.12 田上・大石丘陵及び宇治田原丘陵 ······	4
1. 13 田上山地及び信楽山地	4
1. 14 朝宮丘陵	4
第2章 地質概説	5
2.1 地質図研究史	5
2.2 地質概要	7
2.3 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス	7
2. 4 後期白亜紀火成岩類	8
2.5 中新統綴喜層群	8
2.6 鮮新-中部更新統古琵琶湖層群及び大阪層群	8
2.7 段丘堆積物・沖積層とその相当層	9
2.8 活構造	9
第3章 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス	10
3.1 概 要	10
3. 2 用語解説	11
3.3 研究史	12
3. 4 Ⅱ型地層群	12
3.5 I型地層群	15
3.6 平野地下の丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス	18
3.7 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの地質構造	18
3.8 領家変成作用と接触変成帯	20
3.8.1 領家変成作用	20
 8.2 白亜紀花崗岩類による接触変成帯	20
第4章 後期白亜紀火成岩類	22
4.1 概 要	22

4. 2 研究史	23
4.3 信楽花崗岩体	24
4.4 田上花崗岩体	25
4.5 岩脈類	46
4.5.1 苦鉄質岩脈	46
 4. 5. 2 非顕晶質細粒斑状花崗岩脈 ····································	48
4.5.3 珪長質岩脈	49
4.6 全岩化学組成	49
4.7 田上花崗岩体の鉱物学	50
4.8 本図幅地域火成岩類の位置づけ	54
第5章 中新統綴喜層群	55
5.1 概要と研究史	55
5. 2 奥山田層	55
5.3 湯屋谷層	57
第6章 鮮新-中部更新統古琵琶湖層群及び大阪層群	58
6.1 研究史と概要	58
6.1.1 古琵琶湖層群の研究史と概要	58
6.1.2 大阪層群の研究史と概要	60
6. 2 古琵琶湖層群	62
6. 2. 1 信楽(朝宮)地域	62
6. 2. 1. 1 阿山層	62
6. 2. 1. 2 甲賀層	62
6. 2. 2 草津~膳所地域	63
6. 2. 2. 1 蒲生層	63
6. 2. 2. 2 草津層	64
6. 2. 2. 3 堅田層	65
6.3 大阪層群	66
6.3.1 字治~字治田原~大石丘陵	66
6.3.1.1 登美ヶ丘	66
6.3.1.2 長山層	67
6.3.1.3 禅定寺層	68
6.3.1.4 長池層	68
6.3.2 桃山丘陵~黄檗丘陵	69
6.3.2.1 深草層	69
第7章 段丘堆積物・沖積層とその相当層	72
7.1 研究史	73
7. 2 高位段丘堆積物	73
7.2.1 高位 I 段丘堆積物	73
7. 2. 2 高位 Ⅱ 段丘堆積物	74
7.3 中位段丘堆積物	75

7. 4 低位段丘堆積物	75
7.4.1 低位 I 段丘堆積物 ······	75
7. 4. 2 低位 II 段丘堆積物 ······	75
7. 5 斜面堆積物	75
7. 5. 1 崖錐堆積物	75
7. 5. 2 埋谷緩斜面堆積物	75
7. 6 沖積層	76
7. 6. 1 緩扇状地堆積物	76
7. 6. 2 後背湿地堆積物	76
7. 6. 3 天井川堆積物	76
7. 6. 4 自然堤防堆積物	76
7. 6. 5 旧河道堆積物	76
7. 6. 6 現河床堆積物	76
7. 6. 7 干拓地堆積物(旧湖沼堆積物)	76
7.6.8 盛 土	76
第8章 堆積盆地の地下地質	77
8.1 近江盆地	77
8.2 京都盆地及び山科盆地	77
8.2.1 地下深部層の層序と地質構造	77
8.2.2 地下の段丘相当層及び沖積層	81
第9章 地質構造	87
9.1 中生界の地質構造	87
9.2 綴喜層群の地質構造	87
9.3 活構造	88
9. 3. 1 瀬田傾動帯	88
9.3.2 膳所断層	90
9. 3. 3 黄檗断層	90
9.3.4 花山-勧修寺断層	91
9.3.5 桃山断層	91
9.3.6 宇治傾動帯	91
9.3.7 宇治川断層	92
9.3.8 曾束断層	93
9.3.9 和束谷断層	93
9.3.10 裏白断層	94
9.3.11 田上断層群	94
第10章 資源地質	95
10.1 鉱物資源	
	95
10. 1. 1 長石鉱床	95 95
10. 1. 1 長石鉱床 ······ 10. 1. 2 マンガン鉱床 ·····	95 95 97

10. 1. 4 ウラン鉱床	98
10. 1. 5 珪灰石鉱床	99
10.2 地下水	99
10. 2. 1 山科・醍醐地区	99
10. 2. 2 東山・伏見地区	99
10.3 温鉱泉	100
10. 3. 1 京都府の温泉	101
10. 3. 2 滋賀県の温泉	101
10.4 砕石・砂利	101
第11章 災害地質	102
11.1 地 震	102
11. 2 斜面災害	102
11.2.1 地すべり	102
11. 2. 2 斜面崩壊	102
11. 2. 3 土石流	104
第 12 章 その他の地質関連事項	105
12.1 天然記念物	105
12.2 巨椋池の干拓	106
12.3 オランダ堰堤	107
文 献	122
Abstract	122

図・表目次

第1.1図	「京都東南部」地域とその周辺の地形概略図	1
第1.2図	「京都東南部」地域の接峰面図	2
第1.3図	比叡山頂からの石山~南郷~田上地域遠望写真	3
第1.4図	音羽山系~南郷地域遠望写真	3
第1.5図	田上山系遠望写真	3
第1.6図	^{かみたなかみ} 上田上山系(狛坂山)遠望写真	3
第1.7図	森林収奪によるはげ山が残る田上山地西端部の風景	3
第2.1図	「京都東南部」地域の地質概略図及び地質帯区分図	5
第2.2図	「京都東南部」地域の地質総括図	6
第3.1図	「京都東南部」地域における丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスのⅠ型地層群とⅡ型地層群の分布	10
第3.2図	ジュラ紀付加コンプレックスのメランジュにおける用語	11
第3.3図	メランジュの泥質基質(泥質混在岩)・・・・	13
第3.4図	塊状砂岩と泥岩優勢砂岩泥岩互層の繰り返し	13
第3.5図	泥岩優勢破断砂岩泥岩互層	13
第3.6図	天ヶ瀬ダム周辺の厚い砂岩層で特徴づけられる堆積相	14
第3.7図	宇治市志津川支流池ノ屋川の右岸の露頭	14

第 3.	8 図	層状チャートの露頭	16
第 3.	9図	砥石型珪質粘土岩の露頭	16
第 3.	10 図	大津市膳所上別保町の珪質泥岩から産出した放散虫化石	17
第3.	11 図	丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス中の破砕帯	18
第3.	12 図	ボーリングコア(KD-0)の岩相の概要	18
第 3.	13 図	KD-1 コアで観察されるメランジュ(破断砂岩泥岩互層)	19
第3.	14 図	KD-1 コアで観察されるメランジュ(泥質混在岩)	19
第 3.	15 図	宇治田原 - 和束地域の領家変成帯と接触変成帯	21
第4.	1図	本図幅地域北東部周辺の火成岩類の分布概略図	22
第4.	2図	湖東コールドロン・琵琶湖コールドロンの輪郭を示す琵琶湖周辺花崗岩体分布図	24
第4.	3 図	本図幅地域に分布する火成岩類のスラブモード組成	25
第4.	4 図	信楽花崗岩体の接写写真	25
第4.	5 図	田上花崗岩体の中~粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)	26
第4.	6 図	岩相境界部の写真	27
第4.	7 図	中-粗粒相 (Gt3) 中の細粒-細粒斑状相 (Gt1) のシート状産状	28
第4.	8 図	天井相としての細粒黒雲母花崗岩(Gt1)	28
第4.	9 図	中-粗粒相(Gt3)の岩相	29
第4.	10 図	中 - 粗粒相(Gt3)の薄片接写写真	30
第4.	11 図	中 - 粗粒相(Gt3)の顕微鏡写真	31
第4.	12 図	中~粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)に見られるポットホール	33
第4.	13 図	中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の岩相	33
第4.	14 図	中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の接写写真	34
第4.	15 図	中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の薄片接写写真	35
第4.	16 図	中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の顕微鏡写真	36
第4.	17 図	中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒-細粒斑状相(Gt1)岩脈	38
第4.	18 図	中 - 粗粒斑状相(Gt2)中の MME と黒雲母レアリング及びペグマタイト岩相との共存	38
第4.	19 図	細粒 - 細粒斑状相(Gt1)の接写写真	39
第4.	20 図	細粒 - 細粒斑状相(Gt1)の薄片接写写真	39
第4.	21 図	細粒 - 細粒斑状相(Gt1)の顕微鏡写真	41
第4.	22 図	中~粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)中のペグマタイト	41
第4.	23 図	ペグマタイトの産状	41
第4.	24 図	球顆花崗岩の露頭	42
第4.	25 図	球顆花崗岩の接写写真	42
第4.	26 図	井上平津鉱山の長石鉱石	43
第4.	27 図	中 - 粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩(MME)の露頭写真	44
第4.	28 図	中 - 粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の岩相	44
第4.	29 図	中 - 粗粒斑状相 (Gt2) 中の細粒暗色包有岩の薄片接写写真	45
第4.	30 図	中 - 粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の顕微鏡写真	45
第4.	31 図	中 - 粗粒相(Gt3)中に見られる細粒暗色包有岩の露頭写真	46
第4.	32 図	宇治市域の貫入脈岩の薄片接写写真	47

第4.	33 図	宇治市域の火成岩脈の顕微鏡写真	48
第4.	34 図	非顕晶質細粒斑状花崗岩弧状脈(Pg)の岩石組織	49
第4.	35 図	田上花崗岩類の SiO ₂ 量比較図	52
第4.	36 図	田上花崗岩体中の黒雲母の MgO-FeO 図	54
第5.	1図	奥山田層基底の不整合露頭	56
第5.	2図	奥山田層上部の塊状細粒砂岩	56
第5.	3 図	湯屋谷層下部の貝化石床	57
第6.	1図	古琵琶湖層群・大阪層群の地域ごとの層序対比図	59
第6.	2図	信楽地域の古琵琶湖層群の地質柱状図	62
第6.	3 図	草津~膳所地域の古琵琶湖層群の地質柱状図	63
第6.	4 図	桜ヶ丘砂泥部層の露頭	65
第6.	5図	宇治田原~大石地域の大阪層群の地質柱状図	67
第6.	6図	大福礫部層の露頭	69
第6.	7 図	長山層の露頭	69
第6.	8 図	禅定寺層の中礫サイズのチャート礫を主とする礫層の露頭	69
第6.	9図	桃山丘陵~黄檗丘陵の大阪層群の地質柱状図	70
第7.	1図	高位 I 段丘柱状図 ······	73
第7.	2図	高位Ⅱ段丘柱状図	74
第7.	3図	中位段丘柱状図	75
第 8.	1図	近江盆地の沖積層の厚さ	77
第 8.	2図	ボーリング及び反射法位置図	78
第 8.	3 図	KD-1の柱状図	79
第 8.	4 図	KD-2の柱状図	79
第 8.	5 図	KD-0の柱状図	80
第 8.	6図	反射法断面(南北方向:堀川—巨椋池測線)	82
第 8.	7図	反射法まとめ図	83
第 8.	8図	深部ボーリング対比まとめ	83
第 8.	9図	ボーリングデータからみた京都盆地の南北断面	83
第 8.	10 図	沖積層分布層厚	84
第 8.	11 図	沖積層の優勢な土質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	85
第 8.	12 図	ボーリングデータからみた山科盆地の南北断面	86
第 9.	1図	近畿地方活断層図	88
第 9.	2図	京都東南部図幅の活構造	89
第 9.	3 図	瀬田傾動帯の平面図	90
第 9.	4 図	瀬田川の段丘縦断面形	90
第 9.	5 図	黄檗断層(御蔵山断層)の露頭	91
第 9.	6図	花山 - 勧修寺断層の断面図	92
第 9.	7図	桃山時代の遺物包含層を切る小断層	92
第 9.	8 図	宇治傾動帯の地形	93
第 9.	9 🗵	宇治川の段丘縦断面形	93

第 9. 10 図	曾束断層の露頭	94
第 9. 11 図	田上断層群の露頭	94
第10.1図	井上長石鉱山平津鉱床6号坑内地質図	96
第 10. 2 図	井上長石鉱山遠望	96
第10.3図	井上平津鉱床の産状	97
第10.4図	田上花崗岩体中での交代性長石~変質花崗岩の形成過程モデル図	97
第10.5図	溪井南郷鉱山坑内地質図	97
第10.6図	溪井南郷鉱山	98
第10.7図	乾長石朝宮鉱山	98
第10.8図	珪灰石の露頭	98
第10.9図	京都市内不圧地下水面図及び水温分布図	99
第11.1図	京都近江盆地地震跡図	104
第11.2図	天ヶ瀬ダムと大戸川支流の堆砂量変遷	104
第12.1図	石山寺珪灰石露頭	105
第 12.2 図	三川合流付近の地形図(1590 年代)	105
第12.3図	三川合流付近の地形図[淀川改修工事(1896‐1911)以前]	106
第 12.4 図	三川合流付近の地形図(現在)	106
第 12.5 図	オランダ堰堤	106
第3.1表	大津市膳所上別保町の珪質泥岩から産出した放散虫化石リスト	17
第3.2表	ボーリングコアの位置情報	19
第4.1表	井上長石鉱床の鉱石と母岩の全岩化学分析値	43
第4.2表	井上平津長石鉱石中の長石類と白雲母の化学分析値	43
第4.3表a	田上花崗岩体各岩相の全岩化学組成(主成分元素)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51
第4.3表b	田上花崗岩体各岩相の全岩化学組成(微量成分元素)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	52
第4.4表	田上山ペグマタイト産の鉱物種	53
第6.1表	古琵琶湖層群・大阪層群の主な火山灰層と関連するテフラのガラスの屈折率及び化学組成一覧	64
第6.2表	岩山火山灰層のフィッション・トラック年代データ一覧	68
第7.1表	研究者別層序対比表	72
第9.1表	研究別の活構造名対照表	89
第10.1表	京都府及び滋賀県の温鉱泉の水質	100
第10.2表	京都府及び滋賀県内のその他の温泉	101
第11.1表	京都近江地震歴史	103
付図 A-D	露頭・試料採取位置図	121
Fig. 1 Geo	ological summary of the Kyōto-Tōnambu district	123

(小松原 琢)

1.1 地形概説

京都東南部地域は、世界測地系の北緯 34°50′11″7 -35°01′11″6, 東経 135°44′49″8 - 135°59′49″3 (日本測 地系の北緯 34°50′- 35°00′, 東経 135°45′- 136°00′)の範 囲に位置し、行政区としては京都府京都市、宇治市、城 陽市、宇治苗原前、和東町、久御山町、八幡市、京田 辺市、滋賀県大津市、草賀市、草津市、稟東市が含まれる.

本図幅の範囲は京都盆地東部から近江盆地南部周辺の 山地・丘陵に至る地域である.この地域は、後期第四紀 の構造運動を反映した幅約2~30kmの南北ないし北 東-南西方向に長軸を持つ地塊に分断され(第1.1図), 地塊ごとに異なる地形・地質的特徴をもつ.本図幅の東 部と中央やや西寄りには稜線の高度が400~600mの山 地が広がるが、西部(京都盆地)と北東部(近江盆地) は標高100m以下の低地となっている(第1.2図).こ れら2つの低地は瀬田川及び宇治川によって結ばれてお り、この川が山地を横断する部分では丹波帯の地層を削 り込んで深いV字谷が形成されている.瀬田川も宇治川 も共に琵琶湖から流れ出る淀川本流の名称で滋賀県内で は瀬田川,京都府内では宇治川と呼ばれる.一方,接峰 面図では瀬田川・宇治川の流路の南東側に接峰面高度 200~300mの幅広い谷状の低地があり,ここに古琵琶 湖層群・大阪層群及び段丘堆積物が分布する丘陵が広 がっている.以下では西から順に地塊や地質と対応する 地形区(池田ほか,1979;小林ほか,1982の地形区名 を一部改称)ごとにその地形及び地質的特徴を記す.

1.2 京都盆地

京都盆地は、南北約20km東西5~6kmの、ほぼ長 方形の盆地である.京都盆地は概ね北に高く南に低い地 形をなす.盆地の北西を桂川が、中央部を宇治川、南部 を木津川が貫流している.盆地の西縁は京都西山断層帯 に、盆地の東縁は花折断層、桃山断層及び宇治傾動帯に よって画される.京都盆地の北部は鴨川によって形成さ れた扇状地となっており、北端部の標高は約80mであ る.一方盆地の中・南部は標高30m未満の自然堤防帯 となっており、自然堤防と後背低地が分布している.こ のうち盆地南部の木津川周辺には特に明瞭な自然堤防が



第1.1図 「京都東南部」地域とその周辺の地形概略図 国土地理院発行数値地図 50 m メッシュ標高データをカシミール 3D で表示.「京都 東南部」等は5万分の1地形図図画名.



第1.2図「京都東南部」地域の接峰面図 接峰面図は幅1km以下の谷を埋めて作図.

発達する.また中部の宇治川周辺には後背低地が高い割 合を占め、自然堤防の占める割合は低い.特に宇治川左 岸には昭和期の干拓事業によって消滅するまで、 戸椋池 と呼ばれる面積 794 ha の湖沼が存在していた.この干 拓地付近における標高は 10 m である.京都盆地は構造 性の盆地で、地下には大阪層群から沖積層に至る厚さ最 大約 800 m の盆地を埋積する堆積物が分布する.本図幅 西部は京都盆地の中央部にあたり、北から順に鴨川の扇 状地、自然堤防帯、巨椋池干拓地、木津川沿いの自然堤 防帯が分布している.

1.3 桃山丘陵

桃山丘陵は、西縁を桃山断層(花折断層帯南部),東 縁を花山-勧修寺断層によって境された、南北約8km, 東西2kmの「く」の字型の丘陵である.丘陵の最高点 は清水山(標高242.3m)である.この丘陵の頂部は緩 傾斜の小起伏面をなす.丘陵の中軸部には丹波帯 I 型地 層群が、その両側には大阪層群が、更に縁辺部の京都盆 地及び山科盆地との境界付近には段丘堆積物が、それぞ れ分布する.

1.4 山科盆地

山科盆地は西縁を花山-勧修寺断層,東縁を蘣櫱断層 によって境された漏斗状の形の南北約5km東西約3km の盆地である.山科盆地の大部分は山科川などの河川が 作り出した扇状地で占められるが,中央部に残丘状に低 位段丘堆積物が露出する.この盆地は小さいながらも厚 さ最大360mに達する新生代の堆積物で覆われた構造盆 地である(京都市, 2001).

1.5 黄檗丘陵

黄檗丘陵は山科盆地の南に位置し,西側の京都盆地と 東側の醍醐山地に挟まれた幅1~2km,長さ6km程度 の小規模な丘陵である.丘陵のほぼ全域に大阪層群と段 丘堆積物が分布し,それらは黄檗断層によって変位して いる.

1.6 宇治丘陵

宇治丘陵は,西を京都盆地,北東を醍醐山地,南東を



第1.3図 比叡山頂からの石山〜南郷〜田上地域遠望写真 比叡山中腹(北隣京都東北部図幅内)から南方に東 山山系,音羽山系(醍醐山地),中央奥に田上山系 がかすんでいる.中央左手前には瀬田川が琵琶湖南 湖から流れ出ている.



第1.4図 音羽山系~南郷地域遠望写真 琵琶湖東南湖岸から南西方の袴腰山(左奥),石山寺 のある伽藍山(左手前),岩間山(左~中央奥),音 羽山系(中央~右の後方につらなる)を見る.中央 手前から音羽山系に向かって右に延びる小尾根群に ほぼ沿った分布で斑状花崗岩脈が伸びている.

字治田原丘陵と接する標高 300 m 未満の丘陵である.丘陵の西部は西に向かって傾く高位段丘堆積物が広く分布する.段丘面は高位のものほど大きく傾き,傾動帯(宇治傾動帯)による変位を受けている.丘陵の東部には大阪層群が分布し,特に大阪層群の分布する地域には幅50~300 m の幅広い埋谷緩斜面が発達する.

1.7 醍醐山地

醍醐山地は標高 602 m の[↑]頭岳を最高地点として東 西 3 ~ 5 km,南北約 7 km に広がる主として丹波帯の地 層からなる山地である(第1.3,1.4 図).この山地の 西側外縁部には黄檗断層が,東側外縁部には膳所断層が 通っている.この山地を穿入蛇行しつつ流下する宇治川 の谷壁は傾斜 30 度を越える急斜面が卓越する一方,稜 線部は幅広く定高性のある高原状の地形をなす.山地北 部にあたる音羽山周辺にはチャートが広く分布し,谷密 度が低いが,他の地域では樹枝状の比較的密な谷系が発 達する.

1.8 石山丘陵

石山丘陵は醍醐山地と近江盆地に挟まれた東西1~2 km,南北約8kmの細長い丘陵である.この丘陵には古 琵琶湖層群と段丘堆積物が分布し,ともに膳所断層とそ れに伴う褶曲によって変位している.



第1.5図 田上山地遠望写真 瀬田川左岸大日山から見た天神川を挟む堂山~笹 間ヶ岳の田上山地.より後方には太神山(599.7 m) から矢筈岳(562 m)へと連なる山並みが見える. 中腹に直線状に見える林道が通り,右手前の高まり は笹間ヶ岳(432.8 m)である.



第1.6図 上田上山系(狛坂山)遠望写真 岩間山中腹から東北東方向を眺めた上田上地域の花 崗岩山系(中央から右手遠方).手前中央から左に 瀬田丘陵(古琵琶湖層群)が広がり,その奥bに新 名神高速道路(当時は工事中)が見える



第1.7図 森林収奪によるはげ山が残る田上山地西端部の風
 景
 (笹間ヶ岳北東山麓から堂山をのぞむ)

1.9 近江盆地

近江盆地は南北約60km東西約30kmの, 琵琶湖を 取り囲む盆地である.盆地床に位置する琵琶湖の湖面標 高は84.5 mである. 盆地の西縁は琵琶湖西岸断層帯に よって画される.一方, 盆地の東縁は部分的に鈴鹿西縁 断層帯や柳ケ瀬断層などが存在するものの西方に傾動す る構造運動(近江傾動運動:植村, 2001a)が卓越する. 近江盆地の西側(湖西)では扇状地が発達する一方, 東 側(湖東)では上流から下流に向かって扇状地,自然堤 防帯,三角州という地形配列が発達する.本図幅は近江 盆地の南端部にあたり,湖西では扇状地,湖東では三角 州が卓越する.

1.10 瀬田丘陵

瀬田丘陵は近江盆地の南東に位置する大部分が標高 200 m以下の低起伏の丘陵である. 丘陵の北部には高位 段丘堆積物が,主部には古琵琶湖層群が分布する. これ らはともに緩く北西に傾斜し,瀬田傾動帯と呼ばれる傾 動帯を構成している.古琵琶湖層群分布地域には幅広い 埋積緩斜面からなる谷地形が発達する.

1.11 田上低地

田上低地は大戸川沿いに発達する幅1~2km,長さ 約5kmの盆地状の沖積低地である.この低地は田上山 地から供給される多量の土砂によって埋積されたもので あり,周囲の丘陵・山地との間に活構造は認められてい ない.田上低地に周囲から流入する大戸川の支流はいず れも天井川となっている.また1960年代以前の空中写 真には大戸川の旧河道が認められ,この川が河道変遷を 繰り返してきたことを読み取ることができる.

1.12 田上・大石丘陵及び宇治田原丘陵

田上・大石丘陵は瀬田川の狭窄部に位置する標高 300 m以下の丘陵である.田上・大石丘陵では瀬田川河床に 先新第三系が露出するが,丘陵中には主として古琵琶湖 層群が分布し、それを覆って薄い段丘堆積物が分布する.

宇治田原丘陵は宇治川の流路の数km東に位置する,標高100~300mの幅広い谷状の凹部を占める丘陵である.この丘陵には先新第三系を被覆して大阪層群が分布する.

田上・大石丘陵, 宇治田原丘陵ともに丘陵と周囲の山 地を境する新生代の断層はなく, 大阪層群堆積以前に作 られた谷地形をその後の堆積物が埋積した地形と考えら れる.

1.13 田上山地及び信楽山地

田上山地は大戸川の流域に広がる標高300~600 m(本 ^{たなかみ} 図幅内の最高点は太神山:599.7 m)の山地である(第 1.5,1.6 図).この山地には広く花崗岩(田上花崗岩体) が分布する.田上山地では,花崗岩体中の断層や節理と 並行する格子状の極めて密な谷系が発達する.特に山地 中央部の標高300~600 mの山地斜面を中心に,バッド ランドと呼ばれる,細かな谷筋が斜面を開析して造られ た平坦面を欠く斜面地形が発達する(池田,1982)(第 1.7 図).田上山地には広範囲にはげ山が見られる(松田・ 奥西,1970).

信楽山地は,田上山地と一連の山岳地帯であるが,丹 波帯の堆積岩類が分布し,田上山地とは異なる地形的特 徴を持つ.信楽山地には樹枝状の谷系が発達し,平坦地 は乏しい.また田上山地のようなバッドランドは発達し ない.

1.14 朝宮丘陵

朝宮丘陵は裏白断層と和束谷断層によって信楽山地と 境された標高 300 ~ 400 m の丘陵である.朝宮丘陵の東 は東隣水口図幅内の信楽盆地へと連続する.丘陵内には 先古琵琶湖層群の地層・花崗岩が露出し,それらを覆っ て古琵琶湖層群下部が分布する. (脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聰志・竹村恵二)

2.1 地質図研究史

本地域及びその周辺地域でこれまで作成されてきた 主な地質図について挙げる.地質調査所が発行した地 質図としては、7万5千分の1地質図幅「伏見」(石井、 1932)と20万分の1「京都及大阪」(河田ほか、1986) 及び「名古屋」(水野ほか、2009b)が本地域周辺をカ バーしている.本地域周辺の5万分の1地質図幅はすべ て2000年代初期までに完成しており、「京都西北部」(井 本ほか、1989)、「京都東北部」(木村ほか、1998)、「近 江八幡」(吉田ほか、2003)、「京都西南部」(宮地ほか、 2005)、「水口」(中野ほか、2003)、「大阪東北部」(宮地 ほか、2001)、「奈良」(尾崎ほか、2000)、「上野」(川辺 ほか、1996)が利用可能となっている.本地域を含む 地質図はほかに, 宮村 (1959), 上治 (1961b・1962), Yoshizawa *et al.* (1966), 中沢ほか (1979), 石田ほか (1980, 1984b) がある.

また、本地域周辺の地質についての総合的な地方地質 誌として日本の地質『近畿地方』編集委員会編(1987)、 日本地質学会編(2009a)がある.地方自治体関係の出 版物として滋賀自然環境研究会編(1979)、滋賀県自然 誌編集委員会編(1991),記録しておきたい滋賀県の地形・ 地質編集委員会編(2011)、京都府農林部耕地課・滋賀 県企画部土地対策課編(1984)、甲賀市史編さん委員会 編(2007a, b)、宇治田原町史編さん委員会(1980)、和 束町町史編さん委員会編(1995)、及び水山(1973)が あり、一般向けの巡検案内書として地学団体研究会京都 支部編(1976, 1978, 1990)、滋賀地学研究会編(1977)、







第2.2図「京都東南部」地域の地質総括図

京都地学会編(1993)や滋賀県高等学校理科教育研究会 地学部会編(2002a, b, c)がある.

2.2 地質概要

本地域には、ジュラ紀付加コンプレックス・白亜紀火 成岩類・中新統綴喜層群・鮮新統-中部更新統大阪層群 及び古琵琶湖層群・沖積層が分布している(第2.1図. 第2.2図).本地域で最も古い地質体は、ジュラ紀付加 コンプレックスである、この地質体は、ジュラ紀を中核 にした後期三畳紀から前期白亜紀の間、アジア大陸の東 縁で海洋プレートが沈み込むことによって形成された地 質体で主にメランジュから構成されている.後期白亜紀 には、珪長質の火成作用が活発となり底盤状の花崗岩体 や斑状花崗岩を主とする珪長質岩脈及び苦鉄質岩脈が形 成され、ジュラ紀付加コンプレックスに貫入している. 新生代になると、前期中新世末-中期中新世初頭には、 海成層である綴喜層群が堆積した. 鮮新世から中期更新 世には、構造盆地を埋積する本地域北東部の古琵琶湖層 群及び西部の大阪層群が厚く堆積した。本地域の段丘堆 積物は、高位Ⅰ段丘堆積物・高位Ⅱ段丘堆積物・中位段 丘堆積物・低位 I 段丘堆積物・低位 II 段丘堆積物に区分 される.山地・丘陵の斜面などにはマスムーブメントで 形成された斜面堆積物が分布している。また、最終氷期 後期以降に平野部に堆積した緩扇状地堆積物、後背湿地 堆積物、自然堤防堆積物及び天井川堆積物、旧河道堆積 物及び現河床堆積物などが京都盆地や近江盆地の平野部 を覆っている.

2.3 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、図幅北西部に 小地塊として、図幅中央部にほぼ南北に延びた形状で大 きな地塊として、また東南部に変成した地塊としてそれ ぞれ分布している.丹波帯付加コンプレックスは新生代 の地層に覆われ、東側は白亜紀の花崗岩に貫入されてい る.しかし、北西部や中央の地塊は、その延びの方向や 分布から判断して、南北ないし北北東-南南西方向の断 層などで区切られた構造地塊であることは、想像に難く ない.その証拠に山科盆地の西縁や東縁に近い部分には、 丹波帯付加コンプレックスからなる地塊の境界に平行に 活断層が分布しているし、丹波帯付加コンプレックスの 中央の地塊の中にも北北東-南南西方向の断層が、明瞭 にその構造を切っている.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、石賀(1983) によって、Ⅰ型地層群とⅡ型地層群に区分された.本地 域には、その両者が共に分布している.白亜紀の深成岩 の影響で、放散虫化石の産出が不充分であること、様々 な岩相が入り乱れて分布することから、更に詳しいユ ニット(コンプレックス)への細分はできていない.本 報告では、これまでの研究成果に基づき、構成岩石や砂 岩の組成から、I型地層群とII型地層群を区別している.

I型地層群は、本地域北西部と、中央北部、南東部な どに広く分布している.具体的には,京都市東山区清閑 寺から伏見区小栗栖までの北西地域,大津市大津から宇 治市炭山へ至る中央部の地域、大津市大石から甲賀市信 楽町宮尻に至る南東部の地域などである. 主に砂岩・泥 岩・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩などからな り、玄武岩・石灰岩・石灰岩チャート互層・チャート角 礫岩などを伴う. 泥質基質に泥岩以外の岩塊やスラブを 含むメランジュを形成している. 地質図上で最も顕著な 岩塊はチャートと砥石型珪質粘土岩で、露頭では砂岩が 顕著に礫として含まれる。年代決定に有効な化石の産出 は少ないが、中期から後期ジュラ紀の放散虫化石を泥岩 や珪質泥岩から産出することから、形成年代は中・後期 ジュラ紀であると判断している.また、チャートからは 三畳紀の放散虫化石が、石灰岩チャート互層からは三畳 紀のコノドントが産出しているが、ペルム紀の化石の産 出報告はない.

Ⅱ型地層群は、本地域中央南部から東南縁に比較的ま とまって分布する、具体的には、宇治市黄檗山萬福寺東 方の高峰山から宇治市池尾の喜撰山を北限とし、南限は 宇治市宇治白川から宇治田原町荒木にかけての地域、更 に宇治田原町湯屋谷,奥山田南方,甲賀市信楽町上朝宮 南方など、本地域の南縁部に沿っても露出している、主 に砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩 などからなり、玄武岩・石灰岩・チャートドロマイト互 層などを伴う、チャート角礫岩は見いだされない、泥質 基質に泥岩以外の岩塊やスラブを含むメランジュを形成 している. 地質図上で最も顕著な岩塊は砂岩である. 破 断砂岩泥岩互層(broken formation)や泥岩優勢砂岩泥岩 互層がしばしば広く分布している. またチャートのスラ ブは I 型地層群と比べて大きなものは少ない. I 型地層 群と同様に年代決定に有効な化石の産出は少ないが、前 期ジュラ紀の放散虫化石を泥岩や珪質泥岩から産出する ことから、形成年代は前期ジュラ紀であると判断してい る。また、チャートドロマイト互層からは石炭紀の放散 虫化石が、チャートからはペルム紀のコノドントが産出 している.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの一部は,後期白 亜紀の領家変成作用と,白亜紀深成岩類による接触変成 作用を被っている.領家変成作用は,西南日本内帯を特 徴づける領家変成帯の高温低圧型変成作用である.近畿 地方中央部では奈良県から京都府南部にかけて広範囲に 及んでおり,本図幅地域南縁部の宇治田原町及び和束 町地域は領家変成帯の最北縁部にあたる(Yoshizawa et al., 1966;尾崎ほか,2000).本図幅地域南縁部で東西 に走る国道 307 号線付近より南では泥質岩に変成鉱物と して緑泥石・白雲母が生じており,領家変成帯の最弱変 成度の鉱物帯である緑泥石帯に区分される(Wang et al., 1986;竹内・西岡, 2005).

白亜紀深成岩類による接触変成作用は,信楽花崗岩体 によるものと田上花崗岩体によるものがある.本図幅地 域の南東隅から南方にかけて分布する信楽花崗岩体に 沿って,接触変成により泥質岩に菫青石・黒雲母が生じ ており,黒雲母帯は花崗岩体からの距離約2.7 kmの裏 白峠近くにまで及んでいる.本図幅地域中央部の丹波帯 付加コンプレックスは,田上花崗岩体による接触変成作 用を被っている.花崗岩の貫入境界が低角なため平面図 である地質図では接触変成帯の幅が広くなっており,岩 間山からその西の宇治市東笠取にかけての地域や東部の 大津市猪背山周辺では広く黒雲母帯が認められる.これ らの地域の花崗岩体近傍では菫青石及び一部で紅柱石が 生じている.また,本図幅北東隅の草津市・栗東市に分 布する丹波帯の地層も,全体に田上花崗岩体による低度 の接触変成作用を被っている.

2.4 後期白亜紀火成岩類

琵琶湖周辺には、北から時計回りの順に、白亜紀~古 第三紀の江若花崗岩体・貝月山花崗岩体・鈴鹿花崗岩 体・田上花崗岩体・信楽花崗岩体・比叡花崗岩体・比 良花崗岩体が分布し、その内側に小規模に鮎河花崗岩 体・野洲花崗岩体が分布している(藤本, 1979;吉田ほ か、1991). また、近江八幡市長命寺の宮ケ浜で粗粒黒 雲母花崗岩の小規模な露頭が確認されている(石田ほか, 1984a). そのほかに、比叡山岩体と比良岩体との間には、 やや苦鉄質の仰木花崗閃緑岩体(比叡花崗岩体の北方) (貴治ほか, 2000) と霊山花崗閃緑岩体(中本, 1982; Uchivama, 1983;琵琶湖基盤地質研究会, 2001;中野, 2001)が位置している.また、大津市雄琴では深層ボー リングにより花崗岩の存在が報告されている(橋本ほ か. 2000). 一方, これらの花崗岩体の内側には、湖東 ~琵琶湖域内にかけて同時代の湖東流紋岩類が分布して いる(西川ほか, 1979; 西堀ほか, 1991; 琵琶湖基盤地 質研究会、2001).各花崗岩体には、それぞれ斑状花崗 岩(花崗斑岩)を主とする岩脈類が貫入している. その うち比良-鈴鹿以南の琵琶湖南部周辺の各花崗岩体中の 逛状花崗岩脈は、内側の湖東流紋岩の分布域を囲むよう に、琵琶湖南部の周囲に環状に連なっている(沢田ほか、 1994;周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 2008).

本図幅内の火成岩類としては、花崗岩体として、上記 の環状花崗岩体のうちの山陽帯に位置づけられる田上花 崗岩体の西端部と、それに貫入されている新期領家花崗 岩に位置づけられる信楽花崗岩体の北西端部が分布して いる(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ,1982・2000). 岩脈としては、比叡花崗岩体中から田上花崗岩体分布域 にかけて南北方向から東西方向へと弧状に伸びる斑状花 崗岩脈が特徴的である(宮村,1959).この弧状斑状花 崗岩脈は,水口図幅内に分布している北西-南東方向に 雁行状の分布を示している斑状花崗岩脈及びほかの花崗 岩体中の斑状花崗岩脈と同一の岩相である.このほかに 本図幅内の特徴的な岩脈として,図幅中央部の宇治市東 端部山中で丹波帯堆積岩中に貫入している珪長質と苦鉄 質の2種類のそれぞれ特徴的な定向配列を示す小規模な 岩脈群がある(貴治,1986).

2.5 中新統綴喜層群

本図幅地域南部の宇治田原町地域に分布する綴喜層群 (石田ほか,1954)は、前期中新世末-中期中新世初頭 の海成堆積岩からなる.西南日本に広く点在するこの時 期の海成中新統は、第一瀬戸内累層群と総称されている (日本地質学会,2009).

綴喜層群は丹波帯付加コンプレックスを不整合に覆っ っかだに でまとまって分布する.下位の奥山田層と上位の湯屋谷 層に層序区分され(石田ほか,1954),それぞれ礫岩・ 砂岩及びシルト岩などの砕屑岩からなる.綴喜層群は *Vicaryella* などの貝化石を豊富に産することでも知られ る.綴喜層群は東西に延びる裏白断層・湯屋谷断層を境 に,北側は南傾斜,南側は北傾斜する向斜構造をなして いる.

2.6 鮮新-中部更新統古琵琶湖層群及び大阪層群

近畿中軸部(近畿三角帯内)には,鮮新世から現在ま での期間に,構造盆地を埋積する一連の地層が堆積して いて,丘陵地や平野・盆地の地下に厚く分布している. これらの地層のうち,段丘堆積物・沖積層及びそれらと 同時代の地層を除いて,主として琵琶湖の周辺及び南方 丘陵にみられる地層は古琵琶湖層群,大阪平野周辺や京 都・奈良盆地周辺などに分布している地層は大阪層群と 呼ばれている.本図幅地域は,両層群分布地域の境界域 に当たり,古琵琶湖層群は近江盆地地下,琵琶湖南東及 び南西方の丘陵地と信楽山地内に,大阪層群は,京都盆 地及び山科盆地の地下,周辺の丘陵地並びに宇治田原町 付近の丘陵地に分布している.大阪層群の上部に浅海成 層が挟まる以外は,河川などの淡水成層であり,また薄 い火山灰層や亜炭層を挟むことがある.

古琵琶湖層群は、信楽山地に鮮新世の地層が分布して いて、阿山層から甲賀層層準と考えられる中郷礫泥部層 とその上位の湖東流紋岩の礫を特徴的に含む信楽礫部層 に区分される.更に上位の下部更新統蒲生層及び草津層 層準の地層は琵琶湖の南方や南東の瀬田丘陵などに分布 していて、下位より泥層と礫層を主体とする南郷礫泥部 層,砂層を主体とする浅柄野砂部層、砂礫層を主体とす る瀬田礫部層,砂層及び泥層を主体とする桜ヶ丘砂泥部 層に区分される.また,琵琶湖西方の丘陵地には,更に 上位の層準である堅田層層準が分布し,下位より砂礫層 と泥層を主とする国分礫泥部層,砂層と泥層を主とする 富士見台砂泥部層,礫層を主体とする茶臼山礫部層に区 分される.国分礫泥部層中には,およそ1.0 Maの広域 テフラである猪车田ピンクテフラに対比される池の内II 火山灰層が挟まれている.

大阪層群は、最も下位の層準が宇治田原町からその北 の大津市南部地区に分布しており、下位より京阪奈丘陵 の登美ヶ丘層層準にあたる大福礫部層、長山層及び禅定 的に含み, 信楽地域の信楽礫部層に対比される. また長 山層は泥層と礫層が主体で、南郷礫泥部層に対比され、 更に禅定寺層は、砂礫層が主体であり、瀬田礫部層層準 にほぼ対比される. 宇治市街地南部から城陽市東部, 宇 治田原町西部にかけての地域には、非常に厚い砂礫層が 分布していて、禅定寺層層準から更に上位に及ぶと考 えられる.この地層を長池層と呼ぶ(新称).長池層や 禅定寺層の砂礫層は骨材資源として採掘されている. 宇 治市北部から山科盆地周辺、京都盆地東縁部に分布する 大阪層群は長池層の更に上位の層準に及び、深草層と呼 ぶ (新称). 泥,砂,礫層からなり、地質図では海成粘 土層を数枚挟む上部と挟まない下部に区分した. 最も下 位の海成粘土層は広域テフラのアズキ火山灰層(約0.85 Ma)を挟んでおり、Ma3に対比される.また深草層最 上部には、阿蘇1テフラ(約0.25 Ma)に対比される火 山灰層が挟まれている.

2.7 段丘堆積物・沖積層とその相当層

本地域の段丘堆積物は、高位段丘堆積物(I及びII)、 中位段丘堆積物、低位段丘堆積物(I及びII)に区分で きる.一方、沖積層の表層は、緩扇状地堆積物、自然堤 防堆積物、後背湿地堆積物、沼沢地堆積物、天井川堆積物、 現河床堆積物に細分される.山地・丘陵の斜面には段丘 堆積物から沖積層の堆積時にかけて堆積した斜面堆積物 (埋谷緩斜面堆積物、崖錘堆積物)が分布するが、段丘 化した斜面堆積物は段丘として表記している.これら自 然の堆積物以外に古墳や埋立地などの人工堆積物(盛土・ 干拓地堆積物)が分布する.

段丘堆積物は,堆積物の風化程度,堆積物を覆う表土 の色調や組織に基づいて以下のように区分される.

高位段丘堆積物は,著しく風化した礫(くさり礫)を 多く含み,赤色に酸化した表土に被覆される.このうち 表土や堆積物中のシルトに網斑状組織(ロース斑と呼ば れる)が発達する最高位のものを高位 I 段丘堆積物,そ れと比較して堆積物の風化程度が低いものを高位 I 段丘 堆積物とする.これらは,堆積物の風化程度や段丘面の 開析程度などにより、中期更新世後期に離水した堆積物 と考えられる。

中位段丘堆積物は、風化(酸化)皮膜をもつ礫を多く 含み、褐色の表土に被覆された段丘堆積物を総称したも のである.これは堆積物の風化程度から中期更新世末期 から後期更新世前半ごろに離水した堆積物と考えられ る.

低位段丘堆積物は、比較的新鮮な礫層からなり、暗褐 色の表土に覆われる段丘堆積物を総称したものである. これは堆積物の風化程度から後期更新世後半以降に離水 した堆積物と考えられる.低位段丘堆積物が発達する場 所ではしばしば2段の低位段丘面が認められ、古期のも の(低位 I 段丘)と新期のもの(低位 II 段丘)に細分で きる.

マスムーブメントで形成された斜面堆積物のうち,埋 谷緩斜面堆積物は、山地・丘陵の斜面や低次の谷から土 石流や泥流といった集合流動によって運搬され、谷沿い に堆積した粗大な礫を主として砂及び泥を含む堆積物で ある. 崖錐堆積物は、斜面の基部に落石や匍行によって 堆積した粗大な礫や岩屑を主とする堆積物である.

沖積層は,最終氷期最寒冷期以降に堆積し現沖積面を 構成する堆積物で,緩扇状地堆積物,後背湿地堆積物, 自然堤防堆積物及び天井川堆積物,旧河道堆積物及び現 河床堆積物などがある.本図幅では既往研究を基に,京 都盆地及び山科盆地では主として軟弱な細粒堆積物の下 限を,近江盆地では腐植質堆積物の上限を,それぞれ沖 積層基底として扱っている.このように沖積層の基底は, 堆積盆地ごとに堆積環境の違いとそれに伴う層相の違い を反映して異なっている.

2.8 活構造

本地域には、①京都盆地の東縁を画する桃山断層,宇 治傾動帯,②山科盆地の西縁を画する花山-勧修寺断層, ③山科盆地の東縁を画する黄檗断層,④近江盆地の西縁 を画する膳所断層という比較的明瞭で活動度の高い断層 のほか、⑤京都盆地を東西に横断する宇治川断層、⑥近 江盆地南端部の傾動帯(瀬田傾動帯)、⑦醍醐山地南東 縁に位置する檜束断層、⑧信楽山地と朝宮丘陵の境界に 位置する和束谷断層、&信楽山地と朝宮丘陵の境界に 位置する和束谷断層、などの活動度の低い活構造が存在 する(第1.2図).また、活断層であることを示す証拠 は得られていないが、⑨田上山地には田上断層群が存在 する.これらのうち、京都盆地、近江盆地及び山科盆地 周辺の活構造はいずれも撓曲帯を伴い、伏在する逆断層 に伴う構造と考えられるが、曾束断層、和束谷断層及び 田上断層群は横ずれ断層と考えられる。

(脇田浩二・竹内圭史)

3.1 概 要

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、本地域の基盤 となる地層群である。1960年代までは秩父古生層とも 呼ばれ地向斜堆積物として理解されてきたが、現在では 後期三畳紀から最前期白亜紀にアジア大陸の縁辺部にお いて海洋プレートの沈み込みによって形成された付加コ ンプレックスであると理解されている。形成年代の主体 がジュラ紀であることから、ここでは丹波帯ジュラ紀付 加コンプレックスと総称する。

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、日本のほかの 地域のジュラ紀付加コンプレックスと同様に、海洋プ レート層序を基本として構成されている. 海洋プレート 層序は、海洋プレートが海嶺で生まれて、途中で海山が 出来、その後大洋を移動し、海溝で沈み込むまでに堆積・ 形成された岩石や地層から構成される。主たる構成岩石 は、玄武岩・石灰岩・砥石型珪質粘土岩・チャート・珪 質泥岩・砂岩及び泥岩である。部分的に、礫岩やチャー ト角礫岩,石灰岩チャート互層,チャートドロマイト互 層などが挟在する. 玄武岩や石灰岩は, 海洋プレート 上に形成された海山や海台の頂部が付加過程で、付加 コンプレックスに取り込まれたものと解釈されている. チャートは遠洋性堆積物, 珪質泥岩は半遠洋性堆積物, 砂岩・泥岩・礫岩やチャート角礫岩は海溝充塡堆積物で ある.石灰岩チャート互層やチャートドロマイト互層は. 海山の麓で当時の炭酸塩補償深度(CCD)に近い深さ で堆積したと考えられている.

玄武岩・石灰岩・砥石型珪質粘土岩・チャート・珪質 泥岩・泥岩・砂岩・礫岩・チャート角礫岩,そして石灰 岩チャート互層やチャートドロマイト互層などは本来一 連の堆積物で,全体としては数百mの層序であったが, 海溝付近で海洋プレートが沈み込む際に,それらが変形・ 混合して複雑な構造の地質体を形成し,その後1億年以 上にわたる後世の変形も受けて現在に至っている.それ が,現在本地域に露出している丹波帯ジュラ紀付加コン プレックスである.

海溝近傍で、海洋プレート層序を変形させる主要な造 構過程は、デコルマ面に沿った変形、剥ぎ取り過程や底 付け過程で起こるデュープレックス(duplex)などを作 りながら起こる変形、順序外衝上断層(out-of-sequence thrust)による変形などがある.泥岩や珪質泥岩の一部、 砥石型珪質粘土岩の有機炭素に富んだ部分などは、これ らの構造変形の際に流動して、ほかの岩石を取り込んで、 礫状構造(block-in-matrix structure)を取るようになる. こうして、細粒の基質に様々な岩種の礫やスラブを含ん だ地質体をメランジュ(melange)と呼ぶ.メランジュ は岩石名ではなく、構造変形を受けた地質体の総称で、 2万5千分の1縮尺の地質図上に描くことのできる広が りをもったものをいう(Raymond, 1984).この意味で、 本地域の丹波帯付加コンプレックスは、I型地層群もⅡ 型地層群もメランジュと呼ぶことができる.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、石賀(1983) によって、I型地層群とⅡ型地層群に区分された.区分 の主要な理由は構成岩石の種類で、ペルム紀の玄武岩や 石灰岩、チャートなどが含まれるかどうかが、一番重要 な区分の鍵となっていた. その後, 丹波帯や隣接する美 濃帯などで,ジュラ紀付加コンプレックスを細分する研 究が進展し、丹波帯では「コンプレックス」(木村ほか、 1998; 中江, 2000; 宮地ほか, 2005) や「ユニット」(井 本ほか、1989)という単位で、細分が進んできた、近年 では、丹波帯では、ジュラ紀付加コンプレックスを田能・ 出灰・本山寺・周山・雲ヶ畑・灰屋・鶴ヶ岡・由良川 の各コンプレックスに分ける区分が一般的になっている (中江, 2000;宮地ほか, 2005;菅森, 2006). これらの うち、出灰・周山・雲ヶ畑・灰屋コンプレックスが石賀 (1983)のⅡ型地層群で、鶴ヶ岡・由良川コンプレック スが I 型地層群に相当する.本報告では、産出化石の保 存や産出頻度が限られており、ユニットあるいはコンプ レックスに相当する単位での区分は行っていない.

本地域の丹波帯Ⅰ型地層群とⅡ型地層群の分布は, 第



第3.1図「京都東南部」地域における丹波帯ジュラ紀付加コ ンプレックスのⅠ型地層群とⅡ型地層群の分布

3.1図の通りである、両者は断層で接している、石賀 (1983)が指摘しているように、I型地層群はII型地層 群の構造的下位に位置している、全体として大きく正立 褶曲しており、後世の断層によって変位しているため、 第3.1図のように、本地域南部では、両者が繰り返し 出現している。

3.2 用語解説

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの記述に関する用 語は、一般の地層や岩石とは異なるので、以下に解説を 加える.

付加プリズム:海洋プレートが沈み込む海溝において, 海洋プレート上の堆積物や岩石が陸源砕屑物と混じり 合って形成された楔状の地質体.付加コンプレックスの 素となった地質体.

付加コンプレックス:付加プリズムが陸上に上昇・露出 し観察されるようになった地質体.

海洋プレート層序:海洋プレートの上に堆積した遠洋性 堆積物や火山島や海台の岩石,更に陸に近い場所で堆積 した半遠洋性堆積物などが,海洋プレートの沈み込みに 伴って,海溝において陸源堆積物に覆われてできる層序. メランジュ:細粒の基質に異地性の岩石が礫として含ま れる礫状の地質体で,地質図で描くことのできる広がり を持ったもの.礫状構造という形態を特徴的に有する. 日本における多くのメランジュは,海洋プレート層序を なす地層・岩石が海洋プレートの沈み込みに伴って,破 断変形して形成される場合が多い.

異地性の岩石:形成の場から離れた場所からもたらされ た岩石.メランジュの定義では異地性の岩石を含むこと が必須となっている.日本のメランジュでは,海洋プレー ト層序の陸源堆積岩以外を異地性とみなすことにしてい る.

メランジュの基質:定義では基質は細粒であれば,岩質 を問わない.日本のメランジュでは泥岩が多い.メラン ジュ形成過程で,流動的に動くものが基質になるので, 必ずしも若い年代のものが基質になるとは限らない.丹 波帯ジュラ紀付加コンプレックスでは,砂岩泥岩互層の 泥岩を起源とするものが多いが,ペルム紀-三畳紀境界 付近の砥石型珪質粘土岩やペルム紀の玄武岩凝灰岩も基 質に含まれる場合がある.メランジュでは,規模によっ て相対的に基質と礫の区分を行うので,地質図規模では 礫を含んだ泥質混在岩を基質と呼ぶことになる.

泥質混在岩:上記のようにメランジュは地質図で描ける 規模の地質体であり,一方メランジュの基質は定義では 相対的な存在であって,岩石として定義されていない. 従って実際に野外で観察される礫と泥岩が混じり合った 岩石をどのように呼ぶかは,国際的に定義されていない. 地質図の記載においては便宜上,露頭規模や採取する試 料規模で基質と礫が混じり合った岩石に対して泥質混在 岩と呼ぶ。

混在相:メランジュはその定義においても相対的なもの で、露頭規模で礫状構造を有する場合と、露頭規模では 整然とした状態(整然相)に見えるが地質図で描くとメ ランジュの一部として捉えられる場合がある。野外で調 査する場合、この両者は明瞭に区別されるのであるが、 メランジュの定義ではその区分が曖昧になる、露頭規模 で礫状構造を有する場合の状態を記述する場合に、整然 相と対比するために、混在相を用いる。

メランジュの礫・スラブ・岩塊:メランジュにおいて 基質に包まれて産する礫状の岩石. Wakita (1988) で詳 しく議論されている(第3.2図).メランジュでは、基 質(matrix)と礫(clast)が相対的な関係で述べられて いる. 基質と対比する意味で用いられる clast に対して, 本報告では、礫という用語を用いている。この礫は、大 きさに制限はないが、特に長さが1m以上1km未満の もので塊状のものを岩塊(block),長さが1km以上で 走向方向に細長く伸びたものをスラブ(slab)としてい る. 1 m 未満のものを Wakita (1988) は fragment として 区別しているが、本報告では、礫(clast)に含まれるも のとして特に新たな用語は宛てなかった、スラブは、脇 田(2000)で示されたように、海洋プレート層序の破断 変形の残存物であり、岩塊や1m以下の礫とは異なる 成因で形成されている. またそのような成因が理解され てきたことで、岩塊(block)は1km以上のものが形成 されないということが明らかになり、本報告の定義は Wakita (1988) とその点が異なっている. また. slice も slab と同義として除外した.

コンプレックス:付加過程で形成された地質体で用いる 場合には、特定の構造セッティングを想定し、その構造 セッティングが継続された期間に形成された一連の付加 プリズムが陸上に現れた地質体をコンプレックスと呼 ぶ、本報告では、後期三畳紀から前期白亜紀において一 連の海洋プレートの沈み込みによって形成され、現在日 本の丹波地域に露出することになった地質体にこの用語 を適用した.

規模(長さ)	>20km	20km>1km	1km>1m	>1m
用語	ユニット	スラブ	岩塊	礫

第3.2図 ジュラ紀付加コンプレックスのメランジュにおけ る用語

ユニット:Wakita (1988) で述べられているように,ジュ ラ紀付加体を区分するのに用いられた便宜的な区分.付 加コンプレックスを岩相と年代で差別化できる場合に便 宜的に名前をつけて,区分している.中江(2000)らの コンプレックスと同義であるが,上記の付加コンプレッ クスの"コンプレックス"と混同しやすいこと,ある特 定のテクトニクスによって定義された地質区分でない便 宜的な区分であることから,本報告ではWakita (1988) の unit を用語として用いている.中江(2000)の他多 くの研究者が,これらのユニット区分をある特定のテク トニクスによって定められた区分として理解し,全国レ ベルで対比を行っているが,付加体の形成過程は十分に 解明されておらず,偶然の断層で区切られて露出してい る地質体を表現するには,便宜的な区分としてのユニッ ト (unit)が適切である.

3.3 研究史

西南日本内帯の丹波帯の研究は、中村ほか(1936)や 松下 (1950, 1953), Sakaguchi (1961, 1963) などがある. Sakaguchi (1961) は、現在の丹波帯ジュラ紀付加コン プレックスを上部古生界の丹波層群と命名した。1960 -70年代には、丹波地帯研究グループの研究によって、 詳細な地質構造が明らかになってきた(丹波地帯研究グ ループ, 1971, 1974, 1975, 1979a, b, 1980). 放散虫 やコノドント化石による生層序の研究も盛んに行われ \mathcal{E} (Isozaki and Matsuda, 1980; Ishiga and Imoto, 1980; Ishiga, 1982, 1986; Ishiga et al., 1982a, b, c). 石賀 (1983) は、丹波層群をI型地層群とII型地層群という2組の地 層群に分けることを提案した.また、中江(2000)は、 丹波帯と美濃帯・足尾帯など広域のジュラ紀付加コンプ レックスの対比を行った. 最近では, 菅森(2006) など が、三畳紀に形成された付加コンプレックスの存在を明 らかにしている.

本地域の周辺では,京都西北部(井本ほか,1989), 京都東北部(木村ほか,1998),京都西南部(宮地ほか, 2005)などの地質図幅において丹波帯ジュラ紀付加コン プレックスが詳しくマッピングされた.

本地域に限定すると、古くは石井(1932)や上治(1961a, 1962), Yoshizawa et al. (1966)があり、更に滋賀県南部 地域の地質図(石田ほか、1980)、5万分の1表層地質 図「京都東南部」(石田ほか、1984b),20万分の1地質 図「京都及大阪」(河田ほか、1986),井本(1991),田 村ほか(1979)などの地質図がある.

宇治市天ヶ瀬地域の砂岩について楠(1989, 2010)が 報告し,楠(2001a, b)は天ヶ瀬地域の地質図を描いて いる.また,八尾(1968),岡田(1990), Zhang(1996MS) もそれぞれ化石の産出を報告するとともに近隣の地質図 を示している. 3.4 Ⅱ型地層群(Ⅱb, Ⅱl, Ⅱd, Ⅱt, Ⅱc, Ⅱi, Ⅱm,

II br, II a, II s, II x,)

概要 Ⅱ型地層群は、本図幅地域の中央南半部と東南部 に分布している。分布面積は、Ⅰ型地層群より狭い。前 期ジュラ紀に付加過程によって形成されたメランジュで ある。砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘 土岩とともに玄武岩を伴う。基質の泥岩の剥離性は一般 に弱い、塊状砂岩と泥岩優勢砂岩泥岩互層・破断砂岩泥 岩互層を多く含み、チャートスラブは薄く優勢ではない。 チャートにはドロマイトを伴う場合があり、そのような チャートには石炭紀からペルム紀の微化石が含まれてい る(楠ほか、2004)。

対比 Mikami et al. (2008) では、字治田原ユニットと して記載している. 楠 (2001a) では、産出する微化石 の年代から雲ヶ畑ユニットと周山ユニットの中間的なユ ニットと判断している. 中江 (2000) が述べているよう に、雲ヶ畑ユニット (原記載ではコンプレックス) が大 規模な岩体で特徴づけられ泥岩の年代が中期ジュラ紀で あるとすると、小規模な岩体が主体の本地層群は周山ユ ニットに対比するのが適切かもしれない.

分布 本地域の丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスⅡ型 地層群は、本地域中央南部から東南縁に比較的まとまっ て分布する.具体的には、宇治市黄檗山萬福寺東方の高 峰山から宇治市池尾の喜撰山を北限とし、南限は宇治市 宇治白川から宇治田原町荒木にかけての地域、更に宇治 田原町湯屋谷、奥山田南方、甲賀市信楽町上朝宮南方な ど、本地域の南縁部に沿っても露出している.

観察適地 Ⅱ型地層群については,特に模式地は定められていない.本地域でⅡ型地層群を観察するに最も適しているのは,宇治市天ヶ瀬ダム周辺地域である.ダム下流側には砂岩及び破断砂岩泥岩互層の好露頭がある.また宇治市東部志津川支流の池ノ屋川沿いに微化石を産出する好露頭がある.

岩相 主に砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャート・砥石型 珪質粘土岩などからなり、玄武岩・石灰岩・チャート ドロマイト互層などを伴う.チャート角礫岩は見いだ されない.泥質基質に泥岩以外の岩塊やスラブを含むメ ランジュ(泥質混在相)を形成している.地質図上で最 も顕著な岩塊は砂岩である.破断砂岩泥岩互層(broken formation)や泥岩優勢砂岩泥岩互層がしばしば広く分布 している.またチャートのスラブもI型地層群と比べて 大きなものは少ない.メランジュ基質は黒色泥岩で、露 頭ではmmオーダーから数十 cm までの礫を含んでいる. 剥離性は一般にはあまり強くないが、断層沿いなどでは 強い剪断変形が観察される(第3.3図).礫の多くは砂 岩で、まれに珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩・ 玄武岩などを伴う.砂岩の鏡下の観察では泥岩の岩片が 多く、まれに珪長質凝灰岩や玄武岩の岩片を含む.地質



第3.3図 メランジュの泥質基質(泥質混在岩)(宇治田原町高尾:付図 B の KSE76)



第3.4図 塊状砂岩と泥岩優勢砂岩泥岩互層の繰り返し (宇治市天ヶ瀬:付図BのKSE34)



第3.5図 泥岩優勢破断砂岩泥岩互層 塊状砂岩と互層する.(宇治市天ヶ瀬:付図B)

図に描ける規模のスラブや岩塊には,砂岩・砂岩泥岩互 層・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩・玄武岩・ 石灰岩・石灰岩チャート互層・チャートドロマイト互層 などがある.

本地域のII型地層群は、大きく分けて3つの岩相に分けられる.宇治市高峰山・五雲峰から喜撰山ダムにかけての地域は、厚さ100m未満の薄いチャートスラブや岩塊を多量に含むメランジュで特徴づけられる.宇治市菟道から喜撰山ダムの下流にかけての地域から天ヶ瀬ダム周辺にかけては、厚い塊状砂岩と泥岩優勢砂岩泥岩互層・破断砂岩泥岩互層を主体とするメランジュが分布しており、これが本地域のII型地層群の中核をなしている岩相である.宇治田原町郷之口から同町奥山田を経て、甲賀市信楽町上朝宮南方の地域にかけては、泥質混在岩から構成される泥質基質が優勢で、厚さ100m未満の薄いチャートや砂岩などのスラブや岩塊がわずかに挟在されている.

砂岩は、メランジュの基質の中に礫として含まれる場 合もあるが、しばしば塊状-厚層理砂岩(Ⅱs)として分 布している.塊状-厚層理砂岩は厚さ2~5mの厚い塊 状砂岩と同程度の厚さの泥岩優勢砂岩泥岩互層の繰り返 しからなる.砂岩優勢砂岩泥岩互層(IIa)を伴う場合 もある. 天ヶ瀬ダムの下流側には, 厚い砂岩と砂岩泥岩 互層が繰り返す典型的な露頭が存在する(第3.4図). このダム付近の砂岩泥岩互層は、砂岩層の連続性が悪く、 破断砂岩泥岩互層(broken formation: Ⅱbr)となってい る(第3.5図).砂岩の単層の厚さは,5~20 cm 程度 でより厚い泥岩層と互層している. 互層の破断の程度は 様々で、ほとんど互層の構造が残っているものから、か なり礫状になったものまで存在する. 地質図上では, 礫 状になった部分を除いて、泥岩優勢砂岩泥岩互層あるい は破断砂岩泥岩互層として示してある. ダム周辺の砂岩 の堆積相については、楠(1989)が詳しい解析を行って いる (第3.6図).

砂岩は中粒から粗粒で,灰色ないし暗灰色を呈する. 鏡下の観察では,淘汰がよく基質は20%程度でワッケ 質である(楠・武蔵野,1989)ものが多いが,まれに淘 汰の悪い砂岩が含まれる.鉱物粒子としては石英が最も 多く,長石は斜長石よりカリ長石が多い.岩片はやや多 く含まれており,珪長質深成岩や珪長質~中性の火山岩 などを含む.天ヶ瀬ダム付近には厚さ4m以上の礫岩層 が知られており,径数mmから30cm以上の礫が含まれ ている.礫種は,砂岩・チャート・珪長質凝灰岩・中性 ~塩基性火山岩・ホルンフェルス・結晶片岩などである (楠,1989).

珪質泥岩(Ⅱi)は、暗灰色ないし灰色で一般の泥岩 より放散虫の遺骸を多く含むため珪質である。字治市志 津川東方などで観察されるが、全体としては分布は少な い、層状チャート(Ⅱc)は、厚さ2~10 cmの珪質部 と厚さ0.5~2 cm 程度の泥質部からなり, 灰色・黒色・ 灰褐色・赤褐色などを呈する.本地域の岩石は花崗岩に よる接触変成作用を受けているため, 化石を産出しない か産出しても非常に保存が悪い.字治市五雲峰の近くで は,チャート層が剪断変形でレンズ状になっている箇所 が存在する.

砥石型珪質粘土岩(IIt)は、優黒色の炭質部と灰白 色の珪質部の互層である。両者の比率は様々であるが、 珪質部が優勢なものが多い。それぞれの厚さは数 cm か ら数十 cm である。変形していることが多く、閉じた褶 曲構造がしばしば観察される。

石灰岩(II1)は、宇治田原町奥山田南方で黒色塊状の厚さ6m以上の岩塊が観察される.八尾(1968)が 紡錘虫化石を報告したのはこの石灰岩と思われる.岡田 (1990)が報告したように、この地域では泥質混在岩中 に厚さ数 cm ~数+ cm の石灰岩岩塊がしばしば見られる.

宇治市志津川付近では、チャートドロマイト互層(IId) が層状チャートに伴っている。厚さ10~25 cmの灰 白色ドロマイトが厚さ1~5 cmの灰白色ないし灰色の チャートと互層している。ドロマイトのみが層状に重 なっている場合もまれにある。楠ほか(2004)はこのド ロマイトを伴うチャート層から石炭紀からペルム紀の化 石の産出を報告している。

玄武岩(IIb)は、宇治市天ヶ瀬から東南方の宇治川 沿い、宇治田原町高尾・荒木山周辺に厚さ数十mから 100 m程度のスラブや岩塊としてメランジ基質中に挟在



第3.6図 天ヶ瀬ダム周辺の厚い砂岩層で特徴づけられる堆 積相

楠 (1989) を一部改変し無関係部分を消去.(1):
 塊状砂岩,(2):層状砂岩,(3):礫岩,(4):含礫
 泥岩,(5):泥岩,(6):断層,(7):破砕帯,(9):
 放散虫化石産出点(位置は付図 B)

している. これらの玄武岩は, 灰色あるいは暗灰色・灰 緑色などを呈する凝灰岩が主体であるが, 凝灰角礫岩や 溶岩を伴う. 天ヶ瀬ダム東側では, 枕状溶岩も観察され る. 玄武岩質凝灰岩は, 鏡下では, 極細粒の基質中に斜 長石の斑晶を含んでいる. 溶岩は斜長石からなる完晶質 の岩石である. 宇治田原町奥山田の南では厚さ十 m 以 下の比較的小規模な灰緑色凝灰岩の岩塊が見られる.

産出化石前期ジュラ紀の放散虫化石を泥岩や珪質泥岩 から産出する. 楠(2001a)は、天ヶ瀬ダムの北方の広 い地域において Parahsuum simplum, Bagotum pseudoerraticum など前期ジュラ紀の放散虫化石を泥岩から報告 している、更に、同地域のチャートから、Follicucullus scholasticus や Pseudoalbaillella sakmarensis など後期ペル ム紀の放散虫化石と、Neogondolella bisselli, Streptognathodus elongatus など前期~中期ペルム紀のコノドント 化石が報告されている(楠, 2001a). また,楠(2001b)は, 宇治田原町北西部の大峰山周辺において、緑灰色珪質泥 岩(頁岩と記載)から, Parahsuum simplum, P. ovale を 含む前期ジュラ紀の放散虫群集を報告している.また, 楠ほか(2004)は、宇治市東部志津川支流の池ノ谷側沿 いの右岸に露出するチャートからは後期石炭紀後期から 後期ペルム紀後期のコノドント化石及び放散虫化石を報 告しており、特に最前期ペルム紀(アッセリアン期)か ら後期ペルム紀後期(チャンシンギアン期)までは、連 続した露頭として観察される(第3.7図).また,宇治 田原町奥山田の南方の林道での暗灰色のチャートから中 期ペルム紀の放散虫化石 Follicucullus scholasticus を岡田 (1990) も報告している。更に字治田原町奥山田の石灰 岩小規模岩体から、八尾(1968)が中期ペルム紀後期の 紡錘虫化石 Yabeina sp. を報告している.

形成年代 前期ジュラ紀の放散虫化石を泥岩や珪質泥岩



第3.7図 字治市志津川支流池ノ屋川の右岸の露頭 石炭紀からペルム紀の化石を産するチャート(一部 ドロマイトが互層)が連続的に露出している(楠ほ か,2004のFig.2). a:チャート,b:ドロマイトチャー ト互層,c:ドロマイト,d:石灰岩,e:ハイアロクラ スタイト,f;断層,g:走向傾斜

から産出する.付加年代は砕屑岩類の年代に近似できる ことから,本地域のⅡ型地層群の付加形成年代は前期 ジュラ紀であると判断している.

砂岩は, 泥岩とほぼ同じ前期ジュラ紀に堆積したと推 定される.チャートの堆積年代は,後期石炭紀から三畳 紀である.砥石型珪質粘土岩は,丹波帯各地でコノドン トなどの化石によって,その形成年代が最後期ペルム紀 から最前期三畳紀とみなされている(Imoto and Kozur, 1997)が,本地域での化石の産出はない.石灰岩は,産 出化石からペルム紀の存在は知られているが,他の地域 のⅡ型地層群の石灰岩年代から考えて石炭紀に及ぶもの と考えられる.玄武岩の年代は化石では明らかではない が,石灰岩などと密接に随伴することなどから,やはり 後期古生代のものが多いと判断される.

構造 丹波帯付加コンプレックスのⅡ型地層群の走向 は、北西・南東方向である.ほぼそれと平行する断層に よって区切られており、更に北北東・南南西の断層に よっても切られている.宇治市高峰山から喜撰山ダムに かけて他の箇所と岩相が異なっているので、地質構造と しては独立した地塊と考えられる.宇治市菟道から宇治 田原町高尾にかけての地質体は、厚い砂岩層が卓越する 箇所と泥質混在岩が卓越する地域が繰り返している.こ の繰り返しは、褶曲によるものと推定されるが、その正 確な構造は鍵層にあたる地層がないため明らかになって いない.

3.5 I型地層群(Ib, Ils, Ilc, It, Ic, Ii, Im, Ibr, Ia, Is, Icb, Ix,)

概要 I型地層群は、本図幅地域の北中部から東南部に 広く分布している.厚いチャートや砥石型珪質粘土岩な どのスラブや岩塊で特徴付けられる混在相で、ジュラ紀 中-後期に形成されたメランジュである.砂岩・泥岩・ 珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩などからなる海 洋プレート層序が破断変形し、形成されている.メラン ジュの泥質基質の剥離性は非常に弱いか存在しない地域 と非常に強い地域がある.砂岩層には、特徴的な岩相で あるチャート角礫岩をしばしば伴っている.また、石灰 岩チャート互層が石山寺などで観察される.

対比 木村ほか(1998)では、本地域のI型地層群の北 部延長の地層群を丹波帯I型地層群の大原ユニット(コ ンプレックス)と記述している。本地域のすべての地層 群がこのユニットに所属するかどうかは明確ではない。 楠(2001a)は、本地域南部の丹波帯付加コンプレック スがI型地層群とII型地層群の中間の年代を示すことか ら、美濃帯の久瀬ユニットのようにII型地層群に接する I型地層群のような位置づけを想定した。大部分は中江 (2000)の総括的な区分における由良川ユニット(コン プレックス)に対比できると考えるが、一部は楠(2001a) の想定のように久瀬ユニットに相当するものも含まれる 可能性がある.

分布 本地域の丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス I 型 地層群は、本地域北西部と、中央北部、南東部の広い地 域及び南西部のわずかな地域などに分布している.具体 的には、京都盆地と山科盆地を分ける京都市東山区清閑 寺から伏見区小栗栖にかけての地域と山科盆地の北縁の 山科区御陵・安朱・髭茶屋地域(本地域北西部)、大津 駅前から南に音羽山・千頭岳を経て宇治市炭山へ至る地 域(本地域中央北部)、大津市大石から宇治田原町奥山 田北部を経て甲賀史信楽町宮尻に至る地域(本地域南東 部)である.飛び地としては、宇治市宇治白川や綴喜郡 宇治田原町郷の口南方などに小分布がある.

観察適地 I型地層群については,特に模式地は定めら れていない.本地域でI型地層群を観察するに最も適し ているのは,宇治市志津川の上流(炭山以北)から醍醐 寺周辺にかけての地域と,大津市大谷から音羽山・千頭 岳に至る東海自然歩道沿いの地域である.前者は珪質粘 土岩や泥質混在岩が卓越し,後者は厚い砂岩層やチャー ト層が卓越する.両地域では,岩相は異なるが,どちら もI型地層群の典型的な岩相を観察することができる. 岩相 主に砂岩・泥岩・珪質泥岩・チャート・砥石型珪 質粘土岩などからなり,玄武岩・石灰岩・石灰岩チャー ト互層・チャート角礫岩などを伴う.泥質基質にスラブ や岩塊を含むメランジュを形成している.地質図上で最 も顕著な岩塊はチャートと砥石型珪質粘土岩で,露頭で は砂岩が顕著に礫として含まれる.

メランジュ基質を構成する泥質混在岩(Ix)は、黒 色泥岩で、露頭ではmmオーダーから数十 cm までの礫 を含んでいる.基質の泥岩の変形の程度は地域によって 異なり、京都市山科区御陵から四ノ宮では剪断変形が非 常に弱い.一方、京都市東山区稲荷山付近、山科区醍醐 寺周辺及び宇治市西笠取下荘川西付近の砥石型珪質粘土 岩が卓越する地域では、泥質基質中の剪断変形が強い傾 向がある.露頭で観察される泥質混在岩中の礫の多くは 砂岩で、その多くは径数 cm 以下である.チャートは砂 岩より大きく、径数十 cm から数 m のものが含まれてい る.それ以外には、珪質泥岩・砥石型珪質粘土岩・玄武 岩などを伴う.鏡下では、泥質基質中にシルト岩や玄武 岩、珪長質凝灰岩などの岩片が含まれている.

地質図に描ける規模のスラブや岩塊には,砂岩・砂岩 泥岩互層・珪質泥岩・チャート・砥石型珪質粘土岩・玄 武岩・石灰岩・石灰岩チャート互層・チャート角礫岩な どがある.そのサイズや含まれる量比は地域によって大 きく異なっている.山科盆地北部に当たる図幅地域北縁 部では,変形の弱い泥質混在岩が卓越し、チャートや砥 石型珪質粘土岩からなるスラブを伴っている.泥岩優勢 砂岩泥岩互層,砂岩,珪質泥岩,チャートなどからなる 海洋プレート層序の上部にあたるスラブが繰り返す岩相

もこの地域に含まれている。本地域北部の音羽山の北側 では, 塊状砂岩と泥岩優勢砂岩泥岩互層そしてチャート のスラブや岩塊から構成され、メランジュの泥質基質は 比較的少ない。音羽山トンネルの東側出口に近い大津市 膳所上別保町から千頭岳にかけては、砥石型珪質粘土岩 を伴う厚さ 200~300 m のチャートと泥岩優勢砂岩泥岩 互層のスラブが主体で、メランジュの基質の泥質混在岩 は多くはない. 京都市伏見区の醍醐寺から宇治市西笠取 相月西や東笠取平出にかけては、チャート・砂岩・泥岩 優勢砂岩泥岩互層が厚さ100m以下の比較的薄いスラブ として泥質基質中に含まれている. 京都市伏見区日野か ら宇治市西笠取下荘川西にかけては、砥石型珪質粘土岩 とチャートが卓越することで特徴付けられる. 泥質基質 の割合は少ない、本地域東南部は、泥質混在岩や破断砂 岩泥岩互層(Ibr)などが卓越し、厚さ100m以下の比 較的薄いチャートスラブが挟在する. 塊状砂岩や泥岩優 勢砂岩泥岩互層も伴う。

砂岩(Is)は、灰色ないし暗灰色を呈し、中粒から粗 粒の塊状砂岩として産出する場合と、砂岩泥岩互層・破 断砂岩泥岩互層あるいは泥質混在岩中の細粒から中粒の 砂岩礫として含まれる場合など多様な形で産出する.鏡 下では基質がやや多くワッケ質で,石英が多く含まれる. 斜長石とカリ長石は同量かやや斜長石が多い.岩片はII 型地層群の砂岩よりやや少なく、珪長質-中性の火山岩 などが含まれる.これらの特徴は、楠・武蔵野(1989) の示したI型地層群の砂岩の特徴と一致する.これらの 砂岩の後背地については、楠(2010)に詳しく議論され ている.

粗粒砂岩にはしばしば泥岩の岩片を多く含み,チャートの角礫を含むことがある.粗粒砂岩と密接に伴って産 出するチャート角礫岩(Icb)は,径0.5~5 cmの灰白 色チャートの角礫からなり基質も放散虫を含むチャート あるいは珪質泥岩である.優黒色の砥石型珪質粘土岩の 岩片もわずかに含んでいる.チャートと見間違うほど固 く緻密な岩石である.

泥岩(Im)は、砂岩と互層を形成する場合、メランジュ の泥質基質を構成する場合など、付加コンプレックスの 重要な構成要素である.本地域北部の音羽山の北側で塊 状砂岩と互層する泥岩優勢砂岩泥岩互層は海洋プレート 層序での本来の姿に近いもので、メランジュ形成過程に おいて、破断砂岩泥岩互層を経てメランジュ基質へと変 形が進んでいく、本地域で観察される泥岩優勢砂岩泥岩 互層には、変形の非常に弱いものから、破断砂岩泥岩互 層に近いものまで多様な岩相が存在する.

珪質泥岩(Ii)は、灰色ないし暗灰色を呈し、単層の 厚さ数 cm の層状を呈するものと弱い剥離性が発達する 塊状のものが存在する。チャートに密接に伴って産出す る場合とメランジュ中に単独のスラブや岩塊として含ま れる場合がある。全体としては、産出は多くない。



第3.8図 層状チャートの露頭 (山科区高塚山北方:付図A)



第3.9図 砥石型珪質粘土岩の露頭
 河床の露頭であるため写真に水面が写っている。
 (宇治市志津川上流:付図 A)

チャート(Ic)は、厚さ2~10 cmの珪質部と厚さ0.5 ~2 cmの泥質部からなる層状チャートである(第3.8 図). 灰白色から暗灰色を呈するものが最も多いが、ま れに赤色や灰褐色などを呈する場合がある.まれに褶 曲変形が観察される場合がある.チャートは風化に強 く、醍醐寺・伏見稲荷など多くの寺社の裏手にはチャー トからなる小山が聳えており、京都市伏見区大岩山では チャートが大きな高まりとして露出している.

砥石型珪質粘土岩(It)は、5~30 cmの灰白色珪質 粘土岩と優黒色炭質粘土岩の互層からなる(第3.9図). 本地域のI型地層群には多く観察され、特に京都市伏見 区日野から宇治市西笠取下荘川西にかけて卓越してい る.砥石型珪質粘土岩を伴うメランジュの基質の泥岩で は剪断変形が強く、露頭規模でも褶曲が観察される.ま た宇治市西笠取下荘川西の東南の採石場では砥石型珪質 粘土岩・泥岩優勢砂岩泥岩互層のセットが閉じた褶曲を 形成しているのが観察できる.地質図には示していない



第3.10図 大津市膳所上別保町の珪質泥岩から産出した放散 虫化石

1. Eucyrtidiellum sp., 2. Hsuum sp., 3. Linaresia? sp. (1-3: 試料番号 KSE427)

4. Striatojaponocapsa plicarum (Yao), 5. Hsuum cf.brevicostatum (Ozovoldova), 6. Spongocapsula ? sp. (4-6: 試料番号 KSE431) (試料地点は付図 C)

が、砥石型珪質粘土岩の卓越するこの地域は折りたたま れた褶曲をしている可能性が高い。

大津市石山の石山寺には、天然記念物となっている 石灰岩チャート互層(Ilc)がある(清水,1989;高瀬, 2001:第12章参照).本来は石灰岩とチャートの互層で あるが,花崗岩による接触変成作用によって、珪灰石 あるいは大理石と珪岩の互層となっている.厚さ10~ 100 cmの灰白色石灰岩と厚さ5~30 cmの灰色チャー トの互層で、露頭においても褶曲構造が観察できる(第 12.1図参照).チャート部はしばしばレンズ状となって、 石灰岩の中に取り込まれている.石山寺の北側には砥石 型珪質粘土岩が広く分布しているが、その西方の国分に は、大理石の小露出があり、石山寺の石灰岩チャート互 層の西方延長と考えられる.

宇治市西笠取黒出には石灰岩(Ils)が厚さ50m長さ200mほどの岩塊として露出している.この石灰岩は灰色から暗灰色を呈し、大部分は塊状であるが、一部は1

~ 5 cm の角礫からなる石灰岩礫岩となっている.

玄武岩(Ib)は、暗灰色から暗褐色の凝灰岩である. 京都市山科区御陵や行者ヶ森、宇治市西笠取・天下峰付 近などに厚さ数十 m の薄いスラブとして含まれている ほか、泥質混在岩中に礫や岩片として含まれる.一般に これらの礫や岩片は多くはないが、行者ヶ森の付近の泥 質基質中には数多く含まれる.

産出化石本地域の I 型地層群は, 花崗岩による接触変 成作用の影響などより、年代決定に有効な化石の産出は 少ないが、まれに中期~後期ジュラ紀の放散虫化石を泥 岩や珪質泥岩から産出する.本研究において新たに珪質 泥岩やチャート12試料について放散虫化石処理を行い, 2 試料から放散虫化石が抽出できた(第3.10図).いず れも,大津市膳所池内の西側の尾根に露出する暗灰色珪 質泥岩である. 産出化石は, Eucyrtidiellum sp., Hsuum cf. brevicostatum などであり、年代は中期ジュラ紀と推 定される(第3.1表). 楠(2001a, b)は、宇治田原町 北西部の大峰山周辺において、緑灰色珪質泥岩(頁岩と 記載) から, Gongylothorax aff. sakawaensis, Protunuma *japonicus*, Guexella nudata を含む中-後期ジュラ紀(中・ 後期カロビアン期~オックスフォーディアン期)の Tricolocapsa conexa 帯から Stylocapsa (?) spiralis 帯の放 散虫群集を報告している. また, 楠 (2001a, b) は, 喜 撰山ダム周辺においても, 黒色泥岩から Protunuma sp., Eucyrtidiellum sp., Mirifusus sp. などの放散虫化石を報告 している. また黒色チャートからは前期三畳紀のコノド ント Gondolella cf. jubata や後期三畳紀後期のコノドン ト Misikella hernsteini や M. posthernsteini などが産出して いる(楠, 2001a).

形成年代 泥岩や珪質泥岩から中-後期ジュラ紀の放散 虫化石を産出することから、本地域の丹波帯付加コンプ レックスの形成年代は中-後期ジュラ紀であると判断し ている.

砂岩・泥岩・珪質泥岩の堆積年代は,泥岩とほぼ同じ 中期-後期ジュラ紀と推定される.チャートの堆積年代 は、主に三畳紀と推定される.砥石型珪質粘土岩は、本 地域では化石の産出はないが、ペルム紀のものは少なく、 最前期三畳紀のものが主体である可能性が高い.石灰岩 チャート互層は、接触変成作用によって化石の産出の報 告はないが、丹波帯の同様の岩相では、後期三畳紀の化 石が報告されている(小阪・石賀、1996 など).

地質構造 丹波帯付加コンプレックスの I 型地層群の走向は, 西北西-東南東方向で, 一部東西あるいは, 東北

第3.1表 大津市膳所上別保町の珪質泥岩から産出した放散虫化石リスト

標本登録番号	原番号	岩石名		産出化石		地質年代
GSJ F18043	KSE427	珪質泥岩	Eucyrtidiellum sp.	<i>Hsuum</i> sp.	<i>Linaresia</i> ? sp.	中期ジュラ紀
GSJ F18044	KSE431	珪質泥岩	Eucyrtidiellum sp.	Hsuum cf. brevicostatum (Ozvoldova)	Striatojaponocapsa plicarum (Yao)	中期ジュラ紀

東-西南西となっている.またこれらの地層は,60°以 上で南あるいは北に傾斜している.メランジュの剥離性 の方向と地質図に描けるサイズのスラブの延びの方向は ほぼ平行である.大津市西部の音羽山北方では砂岩・泥 岩・チャートからなるスラブの集合体が褶曲しているの が観察できる.音羽山の南東部にもそのような褶曲の存 在の可能性が推定される.

砥石型珪質粘土岩が卓越する京都市山科区醍醐から宇 治市西笠取にかけての地域では、メランジュの泥質基質 中や砥石型珪質粘土岩中に閉じた褶曲が露頭規模で観察 される.また西笠取下荘川西の東にある採石場では、砥 石型珪質粘土岩・チャート・泥岩優勢砂岩泥岩互層が褶 曲している様子が観察できる.これらのことからこの地 域のメランジュには全体として閉じた褶曲構造を有する ことが推定される.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスは、付加過程以降 (おそらく新生代)の高角断層によって所々分断されて いるが、それほど大きな変位は受けていない.地質図に 描かれた断層は、露頭で破砕帯は観察されることは少な いが、トンネルの工事記録などでは、明瞭に破砕帯が報 告されている.より小さな規模の断層も存在し、まれに 露頭で破砕帯が観察できる(第3.11図).

3.6 平野地下の丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス

地表が第四紀の地層に覆われている平野部の地下に も、丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスが分布している ことが、ボーリング調査などにより明らかになっている. 地震関係基礎調査交付金による京都盆地の地下構造に関 する調査において、KD-1(平成11年度)、KD-2(平 成12年度)、KD-0(平成14年度)のボーリング調査が、 反射法地震探査とともに実施された.KD-1とKD-0は、 京都東南部図幅地域内であるが、KD-2はわずかに図幅 北縁の北側に位置している. 掘削深度はそれぞれ、350 m(KD-1)、350 m(KD-2)、800 m(KD-0)である. そ れぞれの位置は、第3.2表に示した通りである.

それぞれのボーリングコアの下部は基盤で, 丹波帯付 加コンプレックスに相当する岩石からなる.大半がメラ ンジュ基質を構成する泥質混在岩であるが, 一部に破断 砂岩泥岩互層やチャート層を挟む(第3.12図).チャー トは厚さ50~100 cm の小岩体と厚さ15 m の大規模岩 体がある.泥質混在岩の岩相や変形の程度は,場所によっ て若干異なっているのが観察される(第3.13図;第3.14 図).変形が激しい箇所では,しばしば多くの砂岩礫と ともに,玄武岩凝灰岩の礫を含んでいる.玄武岩凝灰岩 の礫は細長く伸びている.また,メランジュの泥質基質 (泥質混在岩)が褶曲している様子が細い径のコアでも 観察される.

放散虫化石の抽出を試みたが、種や属の同定が可能な



第3.11図 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス中の破砕帯 (京都市山科区大宅東方:付図A)



保存のよい化石を得ることができなかった.しかし,岩 相と分布の位置関係から,隣接する丹波帯付加コンプ レックスのうち,I型地層群のメランジュに相当すると 考えられる.

3.7 丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの地質構造

付加コンプレックスでは、付加過程での剥ぎ取り作用 の際に形成される断層と、更に付加プリズムが発達する 過程で形成される順序外衝上断層など低角の衝上断層が 発達する.付加コンプレックスのほとんどの構成要素 (スラブ,岩塊,基質など)には、付加過程から後世の 変形過程において形成された大小様々な断層が発達して いる.地質図では、付加コンプレックス内部に発達する 付加過程で形成された断層の多くは、表現していない.

第3.2表 ボーリングコアの位置情報 地質図上に地点は示してある:凡例参照

	日本測地系				世界測地系				標高		
名称	给 庄	经 庄	平面直角座標系(VI系)		给 庄	级度	平面直角座標系(VI系)		(TP)	地名	
	祥皮	1 花皮	Х	Y	祥及	1 程度	Х	Y			
KD-1	N34 [°] 58' 2.6″	E135° 45' 24.7″	-114516m	-22200m	N34 [°] 58' 14.3″	E135° 45' 14.5″	-114169m	-23198m	21.0	京都市南区上鳥羽鉾立町 鉾立公園内	
KD-2	N35° 0' 45.2″	E135° 45' 1.3″	-109506m	-22781m	N35° 0' 56.8″	E135° 44' 51.1″	-109159m	-23041m	40.0	京都市中京区二条城町 二条城北苗圃	
KD-0	N34° 53' 42.0″	E135° 44' 56.4″	-122545m	-22937m	N34° 53' 53.6″	E135° 44' 46.2″	-122198m	-23198m	10.8	京都府久世郡久御山町大字森字北大内30-1 (旧日本道路公団関西支社京滋バイパス管理事務所敷地内)	
	座標値は, 1/250	E標値は、1/2500地形図上において日本測地系の平面直角座標系にて読み取っている.									
備考	日本測地系の経緯度および世界測地系の座標値は、"TKY2JGD1379"を用いて変換した値である.										
	博告(+ 1/2500+	ミリナ 1/2500地形図 トレインレス 笑言娘(ルト 1の1)なるいけ声にの博言とのはたちトレイボルズいる									





第3.13図 KD-1コアで観察されるメランジュ(破断砂岩泥 岩互層)



第3.14図 KD-1コアで観察されるメランジュ(泥質混在岩)

地層境界と同じ線で示された各地質要素の境界の大半は 断層とみなしてよい.各ユニットの境界は付加体形成時 には基本的に低角衝上断層であるが,後世の構造運動に よって断層がより高角になったり,より高角な別の断層 によって切られたりしている.したがって,本地質図幅 地域の付加コンプレックス内の断層は,その大半が付加 コンプレックス形成後に形成されたものである.

本地域の丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスのうち北

西部や中央の地塊は、南北ないし北北東-南南西方向の 断層などで区切られた構造地塊である(第3.1図).特 に、北西部の地塊の西縁に沿って、活断層が知られてお り、その北方延長は花折断層に延長する(第9.1図参照). 新生代の地質構造に強く規制された分布であることが明 瞭である.大津市石山から、岩間山の西を経て、宇治田 原町郷之口にかけては、北北東-南南西の断層が走って いる.これは、花折断層や北西部地塊の西縁の構造方向 と一致する.同方向の断層は、より東にも分布するが、 図幅地域東方では花崗岩の分布によってその構造が明瞭 ではなくなっている.

丹波帯付加コンプレックスを切る断層としては,西北 西-東南東の断層がしばしば観察される.これは,丹波 帯付加コンプレックス内部の構造とほぼ平行である.他 には北西-南東の断層が丹波帯付加コンプレックスの分 布の北部で観察される.京都市山科区髭茶屋付近で南北 に走る断層は,多くの地点で岩相のずれから位置が特定 され,新幹線音羽山トンネル内でも破砕帯が確認されて いる.

丹波帯付加コンプレックスの一般走向は,西北西-東 南東あるいは北西-南東方向が卓越している.地域中央 北部の音羽山付近や大津市大石などでは東北東-西南西 の走向で,京都市山科区御陵などでは東西方向の走向と なっている.傾斜はいずれの箇所においても50°~90° の高角で北ないし南に傾斜している.メランジュのスラ ブ内の地層の走向傾斜は,メランジュの泥質基質の剥離 性の方向とほぼ平行に近く,それほど大きく斜交しては いない.

宇治市西笠取下荘川西の東にある採石場では,砥石型 珪質粘土岩・チャート・泥岩優勢砂岩泥岩互層が褶曲し ている様子が,採石場全体のマッピングで明らかになっ た.この地域から,京都市山科区醍醐にかけての地域で は,砥石型珪質粘土岩とチャートのスラブが卓越するメ ランジュが分布しているが,そのメランジュの泥質基質 中や砥石型珪質粘土岩中には露頭規模の比較的閉じた褶 曲が観察される.また,砥石型珪質粘土岩やチャートの スラブの分布から,閉じた褶曲構造が推定されるが,鍵 層が存在しないメランジュであるため,地質図上に正確 な褶曲の位置を示していない.

図幅地域中央北部の音羽山の北側の塊状砂岩と泥岩優 勢砂岩泥岩互層が卓越する地域でもその分布から褶曲が 推定される. 音羽山南東の厚いチャートが卓越する地域 でも、閉じた褶曲の可能性は否定できない、更に、宇治 市天ヶ瀬ダム周辺のⅡ型地層群においても厚い塊状砂岩 が卓越する地域と泥質混在岩や破断砂岩泥岩互層が卓越 する部分が交互に繰り返しており、これが褶曲構造によ る分布である可能性は高いと考えられる. メランジュを 主体とする付加コンプレックスの場合. このような褶曲 は当然存在すると推定されるが、鍵層がないメランジュ では、正確な褶曲軸の特定は容易ではない、したがって 本地質図幅では褶曲の可能性は示唆するが、地質図上に 褶曲軸は一部を除いて表現していない。なお、砂岩優勢 砂岩泥岩互層中の級化成層によって判定した地層の上位 方向を, 地質図中に示してある. 南上位が卓越するが, 判定できた箇所が少なく褶曲構造解明には不充分であ る.

3.8 領家変成作用と接触変成帯

本項では、丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの一部 に変成作用を及ぼした、後期白亜紀の領家変成作用と、 第4章で述べる後期白亜紀花崗岩による接触変成作用と を併せて述べる。

3.8.1 領家変成作用

奈良県から京都府南部にかけては領家変成帯が広がっ ており、本図幅地域南部の宇治田原町地域は領家変成帯 の最北縁部すなわち最弱変成部にあたる(Yoshizawa et al., 1966;尾崎ほか, 2000). この地域では Wang et al. (1986), Wang (1989),竹内・王 (1999),宮崎 (2000), 竹内・西岡 (2005)の一連の研究がある.

竹内・西岡(2005)によれば、宇治田原町地域は領家 変成帯の変成分帯のうち最弱変成の帯である緑泥石帯に あたる(第3.15図).緑泥石帯の始まりは、砕屑粒子 の外形を横切って細粒の緑泥石ないし白雲母が生じてい ることで認定される.変成鉱物が出現するのは、おおよ そ宇治田原町を東西に走る国道307号線より南の地域で ある.ただし非変成岩と弱変成岩の分布は混在しており、 緑泥石帯の始まりは明瞭な鉱物アイソグラッドとしては 認定されない.緑泥石帯の高温側の鉱物帯である緑泥石 -黒雲母帯の始まりは、やはり鉱物アイソグラッドとし ては定義されないものの、実用的には泥質岩における黒 雲母出現で認定され、それは南隣「奈良」図幅地域北縁 の城陽市中から驚峰山を東西に結ぶ線に位置する(竹内・ 王,1999,竹内・西岡、2005:第3.15図).

このように変成分帯の認定が不確実なため、本図幅の 地質図では緑泥石帯の範囲を図示していない。

3.8.2 白亜紀花崗岩類による接触変成帯

本図幅東半分の丹波帯の地層のかなりの範囲は, 白亜 紀花崗岩類による接触変成作用を被っている. 接触変成 作用には新期領家花崗岩である信楽花崗岩体によるもの と,田上花崗岩体によるものがある. 論理的には接触変 成作用でも黒雲母帯の外側に緑泥石帯が存在するはずで あるが,弱変成・変形を被っている丹波帯ジュラ紀付加 コンプレックスの地層において緑泥石帯を認定すること は困難であり,地質図では接触変成による黒雲母帯の範 囲を示した.

信楽花崗岩体による接触変成帯 本図幅地域の南東隅から南方にかけて分布する信楽花崗岩体により,幅の広い接触変成帯が形成されている.領家変成帯北縁部の緑泥石帯地域における接触変成帯の範囲は,地質図上で東の 信楽花崗岩体に近づくにつれて黒雲母が出現することにより識別される.接触変成帯は黒雲母帯が認定でき,それは貫入面から裏白峠近くまでの水平距離約2.7 kmの範囲に及ぶ(第3.15 図).南隣「奈良」図幅地域では 貫入面から最大約2 kmの範囲まで菫青石が出現するが (竹内・王,1999;宮崎,2000),本図幅地域では菫青石 の出現は貫入面の近傍でしか確認されず,最大でも距離約500 m以内の範囲である.また,接触変成作用による 緑泥石帯を領家変成作用による緑泥石帯から識別することはきわめて困難である.

本図幅地域で信楽花崗岩体による黒雲母帯の幅が2.7 kmに達することが判明したことから,竹内・王(1999), 竹内・西岡(2005)で示されていた和束町東部地域の領 家変成作用による黒雲母帯は,信楽花崗岩体(柳生花崗 岩)の接触変成によるものである可能性がある.

田上花崗岩体による接触変成帯 本図幅南東部では,東 方の田上花崗岩体の貫入境界から4km以上離れた大津 市猪背山周辺や甲賀市桶井・宮尻でも変成黒雲母が認め られた.ただし4kmという黒雲母帯の幅は広すぎるよ うにも思われ,地下浅所に花崗岩体が伏在していてその 接触変成である可能性も考えられる.

矢筈ヶ岳から東西に延びる貫入境界に沿う接触変成帯 の幅は西部の山城谷で約1.2 km である. 貫入面近傍で は丹波帯の泥岩が接触変成により硬堅になっており,し ばしば菫青石の斑状変晶が見られるほか,大津市大石富 川町の不動岩の川岸では長径5 cm に達する紅柱石の斑 状変晶が見られる.

本図幅中央部では岩間山や千頭岳南東方-東方で,広 範囲に菫青石斑状変晶が生じている.岩間山の西方では 貫入境界から約1.5 kmの範囲まで黒雲母帯が広く認め られ,笠取山の北では黒雲母は生じていないものの緑泥 石・白雲母が生じている.

大津市伽藍山の石山寺では,接触変成により石灰岩に 珪灰石が生じており天然記念物に指定されている(第 12章参照).



第3.15図 宇治田原-和束地域の領家変成帯と接触変成帯

竹内・王(1999)の第3図を改変し宇治田原地域の資料を追加した図. 鉱物の略号は Chl: 緑泥石, Ms: 白雲母, Bt: 黒雲母, Pl: 斜長石, Grt: ざくろ石, Crd: 菫青石, Kfs: カリ長石, And: 紅柱石, Qtz: 石英, Ab: 曹長石. 本図幅地域は南隣「奈良」 図幅から連なる領家変成帯のうち最低変成度の緑泥石帯にあたる.東部では信楽花崗岩体(柳生花崗岩)による接触変 成帯が裏白峠まで及んでおり,接触変成帯の水平幅は2.7 km に達する.

本図幅北東部の栗東市地域では,地表に露出する丹 波帯付加体の全域が,田上花崗岩体の北縁に沿って幅1 km以上の黒雲母帯となっている. 地質図上で田上花崗岩体の貫入境界から離れた広範囲 まで接触変成作用が認められることは,丹波帯の地層と 田上花崗岩体との貫入境界が低角度であることを反映し ている.

(中野聰志)

4.1 概 要

本図幅内の火成岩類は、岩体(花崗岩)及び岩脈(珪 長質~苦鉄質)として産出している.火成岩類分布の概 略を第4.1図に示した.本図幅域南東端には、信楽花 崗岩体(Gs)の一部がわずかに露出している.本図幅 内中央部~東部の田上山地には、田上花崗岩体(Gt)の 西端部(全体の約1/3)が分布している.岩脈として、 本図幅中央部北半の音羽山地には非顕晶質細粒斑状花崗 岩の弧状岩脈が、その南半の醍醐山地以南には珪長質~ 苦鉄質の定向配列を示す小規模岩脈が分布している.

本図幅内の田上花崗岩体は、「水口」図幅(中野ほか, 2003)とほぼ同様の岩相である。「水口」図幅では、田 上花崗岩体について、中粒斑状黒雲母花崗岩相(Gt4)・ 中-粗粒黒雲母花崗岩相(Gt3)・細粒-粗粒斑状黒雲母 花崗岩相(Gt2)・細粒黒雲母花崗岩相(Gt1)の岩相区 分が行われた。その後の調査により、水口図幅で定義さ れた中-粗粒斑状黒雲母花崗岩(Gt4)には本図幅内に おいて粗粒相がほとんどなく中粒斑状相が主であること が判明したが、本図幅でも同じく中-粗粒斑状黒雲母花 崗岩相(ただし記号としてはGt2として再定義)とし た、また、「水口」図幅では阿星山~飯道山にかけて広 く見られる天井相としての細粒・細粒斑状黒雲母花崗岩 相(Gt2)と区別して、図幅西端部の田代付近で細粒黒 雲母花崗岩(Gtl)を記載したが、本図幅では岩相の整 合性から、細粒-細粒斑状黒雲母花崗岩相(Gtl)とし て一括した.細粒・細粒斑状相(Gtl)は、これまで中・ 粗粒相(Gt3)中の天井相として考えられてきたが、そ の多くがシート状及び岩脈状の産状を示しているととも に、中-粗粒斑状黒雲母花崗岩相(Gt2)中では非顕晶 質細粒斑状花崗岩(従来の花崗斑岩)を含む大小の岩脈 として存在している. 本図幅では, これまで"アプライト" とされてきた Gt3 相と Gt2 相中の緻密な非顕晶質細粒花 崗岩 [Le Maitre (2002) 参照] 岩脈やペグマタイト岩脈 も含めて、以上の細粒の岩脈類はすべて Gtl 相に区分し ている。したがって、本図幅での田上花崗岩体について は、中-粗粒黒雲母花崗岩相(=中-粗粒相:Gt3)・中-粗粒斑状黒雲母花崗岩相(中-粗粒斑状相:Gt2)・細粒 - 細粒斑状黒雲母花崗岩相(= 細粒-細粒斑状相: Gtl) の3岩相からなる岩体として再定義して記載する.なお,



第4.1図 本図幅地域北東部周辺の火成岩類の分布概略図

粗粒・中粒・細粒の区分は5mmと1mmをそれぞれ境 界としている.上記区分以外では、これまで花崗斑岩あ るいは石英斑岩とされてきた脈岩については、その石基 粒子が肉眼的に識別できないことから非顕晶質細粒斑状 花崗岩(Pg)として記載した.

田上花崗岩体は瀬田川を超えて西に弧状の岩脈状に伸 び、その先端部は大津市国分南方約1kmまで達してい る.その花崗岩体の分布を引き継ぐかのように、非顕晶 質細粒斑状花崗岩脈が大津市と京都市山科を分ける音羽 山地を切るように更に弧状に伸びている.この非顕晶質 細粒斑状花崗岩脈は、音羽山以西では2重の弧状岩脈に なっている.北側の弧状岩脈は名神高速道路を超えて更 に北側に伸びており、その延長部は北隣「京都東北部」 内に続き、比叡花崗岩体中では幅最大500mの非顕晶質 細粒斑状花崗岩脈としてなお北に伸びている.したがっ て、この非顕晶質細粒斑状花崗岩脈は、全体としては琵 琶湖南湖南端部を取り囲むように弧状に連なっている.

一方,本図幅内西半部の中央部~南部にかけての醍醐 山地には,苦鉄質[安山岩(A)・玄武岩(B)]と珪長 質[非顕晶質細粒斑状花崗岩(Pg)・流紋岩及び安山岩 (F)]の小規模な岩脈が点在する(貴治,1986).そのうち, 苦鉄質岩脈は,大峰橋近傍の安山岩(貴治,1989)を除き, ほぼ北北東-南南西伸長方向を示しており,岩脈全体と しても宇治市西笠取~天ヶ瀬にかけての約7kmにわた り同一方向に連なっているものが大半である.珪長質岩 脈も,宇治市炭山から二尾にかけて西北西-東南東方向 の小岩脈が同一方向に約4kmにわたり連なっている.

4.2 研究史

本図幅内の火成岩類を理解するためには、琵琶湖周辺 の火成岩類についての研究史が重要であるので、以下に その概略を述べる,かつて藤本(1979)がレビューした 時点では、野外での岩相区分はもちろん化学組成・年代 等を含めてデータは少なく、琵琶湖周辺の花崗岩類につ いての共通の視点での体系的な研究はほとんどなかっ た. その後,周琵琶湖花崗岩団体研究グループを中心に, 琵琶湖周辺の各花崗岩体や岩脈類についての詳細な野外 調査が行われるとともに、化学組成や放射年代測定デー タが順次公表されてきた [江若岩体:澤田ほか(1997)・ 田結庄ほか(1999), 貝月山岩体:杉井・沢田(1999), 沢田・斎藤(2000),鈴鹿岩体:周琵琶湖花崗岩団体研 究グループ(1990),田上岩体:周琵琶湖花崗岩団体研 究グループ(1982, 2000),野洲岩体:周琵琶湖花崗岩 団体研究グループ(2005),比叡岩体:周琵琶湖花崗岩 団体研究グループ (2008), 比良岩体: Yoshizawa et al. (1965)・周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1997)・中 野(2001)]. その結果,これまでにまとった記述のな い岩体は、地下に伏在する岩体 [たとえば、橋本ほか (2000)]を除けば、小規模な鮎河花崗岩体と本図幅域 に入る瀬田川以西の大津〜山科地域の火成岩類、及び仰 木花崗閃緑岩体となった.なお、鮎河花崗岩については 宮村ほか(1981)によりその分布と岩相が紹介されてお り、仰木岩体についてはその分布と化学分析値が報告さ れている(貴治ほか、2000).なお、これらの花崗岩類 はいずれも、イルメナイト系列(Ishihara, 1977)に属 する.

一方,これらの岩体についての放射年代測定と野外調 査が進んだ結果,琵琶湖周辺の白亜紀花崗岩体のうち, 貝月山花崗体と比叡山花崗岩体及び一部の鈴鹿花崗岩の 活動年代はより古く,一方江若花崗岩体の活動はより新 しい古第三紀であることが明らかになった(沢田ほか, 1994;沢田・斎藤,2000;田結庄ほか,2000).残りの 琵琶湖南部周辺の花崗岩体は,仰木と霊山の岩体を除き, ほぼ70 Ma頃の活動の産物である.残る仰木岩体につ いては一部それより古い活動時期のものがあり(貴治, 私信),霊山岩体はそれより新しいものである可能性が ある(中野,2001).

上記花崗岩体の内側(琵琶湖側)に分布する湖東流紋 岩類(三村ほか, 1976)については、それがバイエス型 カルデラ形成に伴う火砕流堆積物であることが明らか にされ、そのカルデラは湖東コールドロンと命名され た(西川ほか, 1983). このモデルを土台にして、上記 花崗岩研究の進展の中で、白亜紀末の琵琶湖周辺の火成 活動を考える視点として、琵琶湖南部周辺の花崗岩類・ 流紋岩類を火山-深成作用の観点から総合的に把握した "琵琶湖環状花崗岩体"モデルが提起された(沢田ほか、 1994). このモデルは、湖東コールドロン(西川ほか、 1983; 西堀ほか, 1991)の範囲を大きく上回る琵琶湖コー ルドロン(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ,2000・ 2008;琵琶湖基盤地質研究会, 2001)として再定義され た(第4.2図). 現在は、琵琶湖コールドロンモデルに よる白亜紀末における琵琶湖周辺の火成活動の検証が行 われている(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 2008; 天白ほか未公表資料). その結果,沢田ほか(1994)に より琵琶湖南部周辺の一連の花崗岩体の1つと考えられ ていた比叡花崗岩体は、比良・田上・鈴鹿・野州花崗岩 体とは活動年代や化学的特徴が異なることが明らかにさ れ、更により広域的な火成活動史の視点で琵琶湖周辺の 花崗岩類を位置づける作業が進められている(Kutsukake et al., 2010). かつて,近畿地方における白亜紀末火成 活動場は、第Iステージから第Vステージまで順次北上 してゆき,琵琶湖周辺の火成活動はいずれも第 II ステー ジ(約110~80 Ma ないし75 Ma)に属すると要約され ていた(田結庄ほか, 1985). 上記の研究は、その第Ⅱ ステージでの火成活動のより具体的な変遷を解明したも のであり、これまでのステージ区分による火成活動史の 改訂が必要であることを示している.



第4.2図 湖東コールドロン・琵琶湖コールドロンの輪郭を 示す琵琶湖周辺花崗岩体分布図 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2008)の第1図 を加筆改変し、田上花崗岩周辺を修正。

本図幅地域の火成岩類についてのまとまった記載はこ れまで行われていない.本図幅内の火成岩類の存在を最 初に報告したのは Hiki et al. (1917) であり、本図幅内 の非顕晶質細粒斑状花崗岩脈を四ノ宮付近まで三つのブ ロックに分けて示した. 宮村(1959)は、比叡花崗岩体 と田上花崗岩体の間の地域の地質を記載し、音羽山頂付 近の非顕晶質細粒斑状花崗岩脈(原記載は石英斑岩)を 環状断層または裂罅に沿って貫入した環状脈岩として示 した.その後の本地域の火成岩類についての調査結果は、 公表された地質図(上治, 1962;石田ほか, 1980)と、 以下に示す田上・比叡両花崗岩体についての報告以外に はない. 上記地質図には、岩脈類とともに瀬田川以西の 花崗岩についてもその分布が示されているのみである. したがって、本図幅の火成岩の記載は、これまでの比叡 花崗岩体と田上花崗岩体の間に位置する火成岩類につい ての記載の空白を埋めるとともに、以下に述べる琵琶湖 周辺の火成岩類の火成活動史の観点からも新しい知見を 提供するものである.

田上花崗岩体については、鉱物関係の文献を除くと、 早瀬(1950)の田上花崗岩・三雲花崗岩の岩相区分への

言及が最初の研究報告であろう、早瀬(1951)は田上 花崗岩体の地質図と3試料の化学分析値を報告してい る. その後 Asayama (1954) は岩石化学的な研究を行い 多数の化学分析値を公表するともに,田上地域の花崗 岩ではラジウム含有量が高く三雲地域の花崗岩ではラ ジウム含有量が低いことを示した. その後, Yoshizawa et al. (1965)は、田上花崗岩と三雲花崗岩とを岩体区分 し、田上花崗岩に似た小さな岩塊が三雲花崗岩に貫入し ていると述べた.また,田上花崗岩は岩相変化が激しく ペグマタイトに富むことや全体として優白質であること から,比叡花崗岩よりは比良花崗岩体に似るとした.そ して、琵琶湖南部周辺の花崗岩体の活動時期を、より新 期の比良花崗岩グループ(比良・田上ほか)と比叡花崗 岩グループ(比叡・三雲ほか)に分けた. 横田(1974) は、節理系の解析に、Yoshizawa et al. (1965, 1966)の 田上花崗岩と三雲花崗岩を区分した地質図を引用して示 した. その後,田上花崗岩体の地質図としては、この図 が普及していった.しかし、これらの岩相区分は、詳細 な野外調査によって行われたものではなかった. 田上花 崗岩体についての野外での詳細な露頭観察による岩相区 分は、西橋(1977MS)などの滋賀大学教育学部の卒業 研究によって行われた、その成果にもとづいて、吉田・ 西橋(1987)は、三雲花崗岩体は田上花崗岩体に含めら れるべきであることや、三雲地域における花崗閃緑岩の 分布を記載した.また、吉田ほか(1991)は詳しく花崗 岩類の分布を示すとともに、特徴的な岩脈類の分布も報 告した.これらの研究により、現在にいたる田上花崗岩 体の基本的岩相区分が確立された. その後、周琵琶湖花 崗岩団体研究グループ(2000)及び中野・原山(2003) により更に改訂が行われて、本図幅作成に至っている. かつて三雲花崗岩とされた地域には、観音寺花崗閃緑岩 体が分布するのをはじめ,田上花崗岩体の岩相変化に加 え斑状花崗岩~斑状花崗閃緑岩脈が雁行状(弧状)に分 布する(中野ほか, 2003 参照).本稿では、本図幅内の 田上花崗岩体及び信楽花崗岩体については、周琵琶湖花 崗岩団体研究グループの調査成果を基本に,今回新しく 調査を行った成果を加えて記載する.

なお、本図幅内に一部露出している信楽花崗岩体 [領家新期花崗岩(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 1982)]の研究史については、中野・原山(2003)を参 照されたい。

4.3 信楽花崗岩体 (Gs)

命名 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1982)の命名 による.柳生花崗岩[有田(1949)命名]から連続する 木津川以北に分布する領家帯の新期花崗岩として定義さ れた.

分布・産状 北側に分布する田上花崗岩体と木津川以

南に分布する柳生花崗岩体(中島, 1960;川辺ほか, 1996)との間に,東西約 10 km・南北約 10 km の範囲で 分布する.

貫入関係 木津川以南の柳生花崗岩とは連続しており, 両者は同一岩体中での南北方向における岩相変化と考え られる(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ,1982).北 端部では,田上花崗岩体によって貫入されている(周琵 琶湖花崗岩団体研究グループ,1982;西村ほか,1990). 岩相・構造 南部の岩相は普通角閃石を含みアルカリ長 石斑晶に弱い定向配列が認められる.田上花崗岩体との 境界部では田上花崗岩体に似た岩相になり普通角閃石も 認められず等粒状であるが,田上花崗岩に比較してやや 優黒質である.また,黒雲母のクロットが特徴的に見ら れ一部で斑晶状のアルカリ長石も見られる.

上記の岩相変化に対応して、モード組成も広範囲に変化し、木津川に近い南部に分布する普通角閃石を含む トーナル岩質のものを除き、田上花崗岩体のモード組成 と重複している. 信楽花崗岩類のモード組成を、田上花 崗岩類や非顕晶質細粒斑状花崗岩等のモード組成ととも に、中野・原山(2003)から第4.3 図に再録した.

アルカリ長石の色が淡赤色(桃色)になっている部分 が、岩体の一部で認められる.本図幅域内の上朝宮地域 でも、一部に淡赤色アルカリ長石が認められる.この付 近の花崗岩もかなり風化が進んでおり風化との関係が推 測されるが、アルカリ長石の赤色化は熱水変質による場 合が多い.長石類の赤色化は地殻における物質循環の 重要な指標であることが提起されている(Plumper and Putnis, 2009)ので、他の岩相中の場合も含めて注目す べき花崗岩体の特徴になる.

放射年代本図幅範囲外の4試料について,68.4±1.4 ~72.6±1.5 Ma(後期白亜紀)の黒雲母K-Ar年代が得られている(沢田・板谷,1993).

岩石記載



第4.3図 本図幅地域に分布する火成岩類のスラブモード組 成

中野・原山 (2003) を抜粋・改変.



第4.4図 信楽花崗岩体の接写写真
 a:スケールは1目盛が1cm.(朝宮小学校南)
 b:(乾朝宮鉱山)

粗粒黒雲母花崗岩(Gs)(甲賀市信楽町上朝宮朝宮小 学校南:付図 D)(第4.4 図 a)

田上花崗岩体に近い岩相を示している粗粒等粒状~斑状黒雲 母花崗岩である.スラブ色指数がやや高い(4.2). 長径数 mm ~数 cm の卵型の黒雲母クロットが含まれるほか,一部にアル カリ長石の斑晶が見られる.上朝宮付近では粒度変化に富み, 中粒相の露頭があるほか,細粒花崗岩の転石が多い.

粗粒黒雲母花崗岩(Gs)(甲賀市信楽町乾長石朝宮鉱山:付図D)(第4.4図b)

丹波帯堆積岩との接触部に当たり、一部鉱山内で堆積岩との 高角境界が観察できる.接触部付近を含めてほとんど細粒化の 現象は見られず、中粒質に近い粗粒黒雲母花崗岩である.黒雲 母のクロットと一部アルカリ長石の斑晶状のものが見られる点 で、田上花崗岩体(Gt3)とは異なる.

4. 4 田上花崗岩体 (Gt3, Gt2, Gt1)

命名 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1982)の再定 義による.既に述べたように、本図幅域から水口図幅 域にかけての花崗岩体については、古くは田上花崗岩
と三雲花崗岩との区分が提唱されていた(早瀬, 1951; Asayama, 1954; Yoshizawa et al., 1965;横田, 1974). しかし,その後の野外調査により,そのような岩相区分 はできないこと,その境界部付近を中心に金勝~三雲地 域には観音寺花崗閃緑岩体が広く分布すること(周琵琶 湖花崗岩団体研究グループ, 1982)などが明らかになり, 不明であった南の信楽花崗岩体との境界も確定した(周 琵琶湖花崗岩団体研究グループ, 1982).田上~信楽山 地に分布する花崗岩体から,観音寺岩体と信楽岩体を除 いた分布域が田上花崗岩体である(周琵琶湖花崗岩団体 研究グループ, 2000;中野・原山, 2003).

分布・産状 本岩体は、本図幅内から水口図幅内にか けての東西約20km・南北約8kmの範囲に分布してい る. 餅盤状の岩体であるが、その西側延長部は瀬田川を 越えて更に北西に弧状に(岩脈状に)に伸びる.地表で は古琵琶湖層群とルーフの堆積岩類に被覆されて分布が 途切れているように見えるだけであり、田上花崗岩体は 連続していると推定できる(第4.1図).なお、近江盆 地の地下には花崗岩が広く存在しているはずであり(沢 田ほか、1994)、本図幅域の平野部地下でも現在までに 数ヶ所で花崗岩の存在が確認されている:(1)瀬田川沿 い大津市瀬田大萱ローヤルホテル地下約400m(沢田ほ か,1994),(2) 国道1号線沿い大津市瀬田「琵琶湖温泉」 地下約400mで花崗岩が出現しており(中野,未公表資 料).(3)建設省大津放水路工事におけるボーリングコ アに基づく地質断面図においては、大津市螢谷伽藍山南 山麓において地表下約30mに中粒花崗岩が確認される とともに、そこから西方約4kmの堂の川~諸子川間に おいては地下に花崗閃緑岩が確認されている(建設省近 畿地方建設局大津放水路地質平断面図), (4) 瀬田川河 床における花崗岩露頭(第4.5図).

貫入関係 丹波帯堆積岩及び信楽花崗岩に貫入している

(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ,1982,2000;西村 ほか,1990). 信楽花崗岩との貫入境界は,水口図幅内 の数地点で確認されている. 丹波帯への貫入面は一般的 に高角度であり,本図幅内でも確認される. 丹波帯の堆 積岩がルーフ状に田上花崗岩体西縁部に残っている. 天 神川ダムサイトの南尾根部への途中のペグマタイト多産 地域でも堆積岩が小規模に残っており,岩体天井部の状 態を示している. 中-粗粒斑状相(Gt2)と中-粗粒相(Gt3) の関係については,産状(第4.6図a)や境界付近での 岩相変化等から,中-粗粒斑状相(Gt2)は中-粗粒相(Gt3) よりやや遅れたマグマ活動の産物と推測される.

岩相・構造 本岩体は主として中・粗粒相(Gt3)から なる.本図幅内分布域の西北部に中-粗粒斑状相(Gt2) が紡錘状に伸びて分布する. ほかに細粒-細粒斑状相 (Gt1) が、中-粗粒相 (Gt3) 天井部では主としてシー ト状に、中-粗粒斑状相(Gt2)中では大小の岩脈とし て広く散在している. 主岩相の中-粗粒相(Gt3)のう ち,中粒の部分が岩体の主として周辺部(瀬田川以西, 瀬田川東岸大日山,岩体南端部大津市大石等)で観察さ れるほか, 岩体内部でも粗粒部分と混在して広範に分布 する. 中粒・粗粒を問わず等粒状組織が一般的である が、粒度や組織は場所により変化し、石英プールや間隙 充填不規則形状のアルカリ長石の目立つ部分もある。ま た、アルカリ長石の(淡)赤色化が岩体の各所で認め られ、本図幅域内では岩体北部の大津市田上上桐生地 区や岩体南部の大津市南郷大石地区で明瞭である。中-粗粒相(Gt3)と中-粗粒斑状相(Gt2)中には、多くの ペグマタイトが存在する.また.細粒暗色包有岩 [mafic micro enclaves (たとえば Słaby et al., 2008) または mafic magmatic enclaves (たとえば Barbarin, 2005) (両者とも に略して MME) に相当する] が存在することが最近確 認された.なお、石原・村上(2006)は、本図幅域の細



第4.5図 田上花崗岩体の中〜粗粒黒雲母花崗岩(Gt3) a:工事中の露頭,b:岩相写真.(瀬田川南郷洗堰南河床:付図C)



第4.6図 岩相境界部の写真

a:風化して真砂状になっている中粒斑状黒雲母花崗岩 (Gt2) 中の取り込まれているように見える中-粗粒黒雲母花崗岩 (Gt3) の露頭写真(牧地区神社東:付図 C), b:中粒斑状黒雲母花崗岩 (Gt2) と中-粗粒黒雲母花崗岩 (Gt3)(本露頭付近では中粒)の境界.(新名神建設工事ルート露頭:付図 C)

粒暗色包有岩(MME)を苦鉄質エンクレーブと記載している.

中-粗粒斑状相(Gt2)について、周琵琶湖花崗岩団 体研究グループ(1982)の調査により,中-粗粒相(Gt3) との相互関係が大戸川河床で観察され、両者が接する場 合は一般的に中-粗粒相(Gt3)が細粒になりアルカリ 長石の斑晶が増すとされている。今回の調査では、特に 新名神高速道路金勝山トンネル付近において, Gt2 相が 中-粗粒斑状から粗粒斑状になりまた一見等粒状花崗岩 に見える岩相になるが、この場合も全体としては斑状で あり Gt3 相に比較してやや優黒質である。本岩相と主岩 相の中-粗粒相(Gt3)との西側境界部と考えられる露 頭(田上牧地区)が2箇所見られた.そのうち1箇所で は真砂化や破砕帯の存在により直接の境界を明瞭に認 めることができなかったが、新名神建設工事における D ランプ奥の露頭では、両者の境界がほぼ確定できた(第 4.6図b). これらの西側境界付近(田上・牧地区)では, Gt2 相は斑状組織が極めて明瞭になる。一方、中-粗粒 相(Gt3)は境界部付近ではほぼ中粒質である。中-粗 粒斑状相(Gt2)中には、細粒暗色包有岩(MME)が多 数含まれており、ペグマタイト(脈)も多数存在する. 新名神高速道路金勝山トンネル西口までの約1km の工 事ルートでは、大量の玉石中に細粒暗色包有岩とともに 一部で黒雲母シュリーレンや小規模ペグマタイトポケッ トが見られた. なお,中-粗粒斑状相(Gt2)においては, 細粒暗色包有岩産出地点を中心に、アルカリ長石の赤色 (桃色) 化が広範に見られた.

細粒-細粒斑状相(Gt1)は、中-粗粒相(Gt3)中では、 岩体高所の天井部を中心にシート状あるいは岩脈状に広 く散在している(第4.7図).ペグマタイト(巨晶部分 を含み母岩から明瞭に区分される岩相)は、非顕質細粒 花崗岩〜細粒花崗岩(Gt1)岩脈あるいはシートの一部 に存在する場合が多い.また、田上・新免北東部には天 井相としての本岩(第4.8図)が、ミアロリティック・ ペグマタイト岩相としてまとまって分布している(河野 ほか,2008).

ペグマタイト部分を含む岩脈には、従来よく使われて きた用語である"アプライト"的な岩相も多い.しか し、本図幅地域での"アプライト岩脈"は、化学組成上 も鉱物組成上も細粒黒雲母花崗岩であり、既に述べた ように緻密な非顕質細粒斑状花崗岩として細粒-細粒斑 状相(Gtl)に一括した.中-粗粒斑状相(Gt2)中にも ペグマタイト部分が見られる.細粒-細粒斑状相(Gt1) 岩脈と密接な関係で産する場合もあるが、そうでない場 合もある(見かけ上の可能性もある).これらのペグマ タイトにも、後述するように一部アプライト的な部分(帯 状)があるが、上記にならい細粒帯として記述する.

田上花崗岩体は周囲を断層系で限られた上昇地塊であり、岩体内部に大小の破砕帯が認められる.破砕帯の花 崗岩は、強い変質作用を受けており緑色の変質花崗岩と なっている.このうち、中-粗粒斑状相(Gt2)中にお いて、新名神高速道路牧カーブ付近では、幅10m長さ 40m程度の規模で、N65°W、70°S~N80°W、80°N方 向に破砕帯が伸びている(西日本高速道路資料).また、



第4.7図 中-粗粒相(Gt3)中の細粒-細粒斑状相(Gt1)のシート状産状 細粒-細粒斑状相(Gt1)シートの露頭写真.a:天井相.後方に堂山(384m)が見える.(笹間ヶ岳南山麓尾根部),b:天井相(堂 山東側斜面尾根部),c:(堂山南西天神川沿い斜面),d:(天神川奥林道沿い)(地点は付図C参照)



第4.8図 天井相としての細粒黒雲母花崗岩(Gtl)
中-粗粒相(Gt3)の上位にある天井相としての細粒
黒雲母花崗岩(Gtl)(=ミアロリティック岩相).(新
免北:付図C)[河野ほか(2008)参照].

新名神高速道路建設ルートの St.450 付近での細粒斑状 相(Gtl)の大岩脈近傍で同じような緑色変質花崗岩が 認められた.破砕帯に伴っていると考えられる同じよう な緑色変質花崗岩は、浚渫工事によって現れた瀬田川河 床の露頭(第4.5図a)において中-粗粒相(Gt3)中 にも観察された.

田上花崗岩体中には大小の多数の節理が発達しており、節理による深層風化が進んでいる(池田, 1964, 1967). 池田 (1964) は、主な節理の方位として、N5°E ~ N10°W・N50~65°E・N65~75°Wを報告し、この方位と整合的な谷をC型谷として分類している.田上花崗岩体における節理系の成因的な解析は横田 (1974) により行われ、堂山付近をはじめとする尾根あるいは山腹部において認められる主要節理の方位としてN-S~ N10°W, 65~80°E(規則的なまた巨大な節理面を有す)と N60~70°W \perp 及び N60°E \perp (谷、特に直線的な谷に沿って卓越し、N60°E 方位のものと共存の場合がある)が挙げられている.これらの節理系は、冷却節理と剪断節理に区分されており、前者には N-S~ N10°W の方位



 第4.9図 中-粗粒相(Gt3)の岩相
a: 試料番号 KTC01 [大津市上田上大鳥居町北(水口図幅内)], b: KTC02 (大津市上田上牧の大戸川南), c, d: KTC03-a, b (太 神山北東), e: KTC04 (新名神牧カーブDランプ南), f: KTC05 (大津市大石鹿跳橋河床) スケールは1目盛が1cm.(本 文と第4.3 表を参照.地点は付図C参照)

の節理が,後者には N60 ~ 70°W・N60°E の方位の節理 が該当する (横田, 1974).

横田(1974)は、岩脈と石英脈の方位は、上記節理系のうちの冷却節理と考えられる $N-S \sim N10^{\circ}W$ 方位のものと調和的な方位であるとしている.しかし、本図幅調査では、特に中-粗粒斑状相(Gt2)中での岩脈の貫入方位はかなりばらついているという結果が得られた.な

お、横田が記載した信楽付近に分布する N-S 方向の卓 越したアプライト岩脈は、流紋岩であることが明らかに された(周琵琶湖花崗岩団体研究グループ,2000).

放射年代 早瀬・石坂 (1967) 等により報告された鉱物 Rb-Sr 年代は, 70 ~ 82 Ma (後期白亜紀)の範囲である: アルカリ長石 (70 ~ 82 Ma)・黒雲母 (71 ~ 77 Ma)・ 白雲母 (77 Ma).八木ほか (1969) は,田上花崗岩体



第4.10図 中-粗粒相(Gt3)の薄片接写写真 偏光フィルターを使用して薄片を接写した写真(クロスニコル状態).写真記号は第4.9回に同じ.いずれも写真の横幅 は13.5 mm.

からのアルカリ長石・黒雲母・白雲母の45 試料の鉱物 Rb-Sr 年代と2 試料の全岩 Rb-Sr 年代により,田上花崗 岩体の地質年代は信頼度 95% で77.5 ~ 76.3 Ma である とした.最近では,沢田・板谷 (1993) により,中-粗 粒相 (Gt3) について $67.9 \pm 1.4 ~ 74.7 \pm 1.5$ Ma の黒雲 母 K-Ar 年代が報告されている.信楽花崗岩体に田上花 崗岩体が貫入しているが,放射年代データの範囲は重複 しており明瞭な差は認められない.それぞれ4 試料の平 均では田上 = 71.8 Ma・信楽 = 70.3 Ma となるが,田上 花崗岩体では広く熱水変質作用が進んでいるので(須藤, 1991,2001;西村ほか,1990;橋本ほか,2005;中野ほ か,2006),若返り年代と考えることができる.沢田ほ か(1994)は、田上花崗岩体についてのRb-Srアイソ クロン年代を79.5±9.0 Maと報告している.本図幅内 新名神高速道路建設工事現場から採集した2種類の斑状 黒雲母花崗岩の黒雲母K-Ar年代は、粗粒斑状黒雲母花 崗岩(Gt2) = 75.8±0.8 Ma・中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2) = 74.5±0.8 Maであり、ほぼ同じ結果が得られた(松



第4.11図 中-粗粒相(Gt3)の顕微鏡写真写真記号は第4.9図に同じ.いずれも写真の横幅は約2.5 mm

本ほか, 2012).

岩石記載

中-粗粒相(Gt3)

田上花崗岩体で最も広く分布する岩相で、水口図幅内 の大津市三筋の滝〜大鳥居付近に見られる典型的な等粒 状岩相(石英がプール状に連結せず散在する)(水口図 幅記載:中野・原山,2003)から,多少なりとも石英がプー ル状に伸びたりアルカリ長石が連結して斑晶状になった りする岩相への変化がある.粒度から見ると、田上岩体 全体では粗粒岩相が主であるが、本図幅内では、中・粗 粒区分の境界に当たる5mm前後の中-粗粒質岩相が多 く、岩体周辺部を中心に中粒質の部分が多い。本図幅内 の粗粒岩相は露頭では風化が進んでおり、新鮮な試料を 得ることは一部を除いて困難である。本図幅内の新名 神建設工事ルートにおける中-粗粒相(Gt3)の新鮮な 岩石はほとんど中粒質であった。中-粗粒斑状相(Gt2) との境界でも粒度は基本的に中粒質である。

粗粒黒雲母花崗岩(試料番号 KTC01:第4.9 図 a):

大津市上田上大鳥居町北(付図 C)

本図幅の東隣の水口図幅域の試料であるが、本図幅内に続く 岩相であるので記載する.スラブモード組成は、石英(29%)・ アルカリ長石(41%)・斜長石(26%)・黒雲母(4%)である. 薄片での岩石組織(偏光フィルターを用いた薄片の接写写真: 以下同様)を第4.10図a,顕微鏡組織を第4.11図aに示した.

中-粗粒黒雲母花崗岩(KTC02:第4.9図b):大津市上田上牧,大戸川発電所南方(付図C)

典型的な等粒状岩相であり,径5 mm 前後の石英が散在して いる.スラブモード組成は,石英(22%)・アルカリ長石(43%)・斜長石(30%)・黒雲母(4%)である.薄片での岩石組 織を第4.10 図 b,顕微鏡組織を第4.11 図 b に示した.

鏡下では,他形の石英は波動消光を,自形~半自形の斜長石 は漸移的なコア→リムの弱い累帯構造と明瞭なアルバイト集片 双晶を,他形のアルカリ長石は脈状~パッチ状の汚濁したパー サイト組織とともに一部で汚濁の少ないラメラ状パーサイトを 示す.黒雲母(淡黄色~褐色の多色性)は,かなり緑泥石化し ている.

中-粗粒黒雲母花崗岩(KTC03-a, b:第4.9図c, d): 太神山北東(付図C)

薄片での岩石組織をそれぞれ第4.10図c,d,顕微鏡組織を 第11図c,dに示した.スラブモード組成は,KTC03-a=石英 (38%)・アルカリ長石(38%)・斜長石(22%)・黒雲母(3%), KTC03b=石英(42%)・アルカリ長石(42%)・斜長石(15%)・ 黒雲母(1%)である.鏡下では,他形の石英は波動消光を, 自形~半自形の斜長石は漸移的なコア→リムの弱い累帯構造と アルバイト集片双晶を,他形のアルカリ長石は汚濁した脈状~ パッチ状のパーサイト組織とともに曹長石パッチ周辺を中心に して部分的に格子状双晶を示す.黒雲母(淡黄色~褐色の多色 性)は,かなり緑泥石化している.

中粒黒雲母花崗岩(KTC04:第4.9図e):新名神建 設工事ルート露頭(付図C)

典型的な中粒・等粒状の岩相であり,長径5 mm以下の丸み を帯びた石英粒子が散在しているがまれに石英プールも認めら れる.黒雲母は長径1~2 mm 程度の粒子が散在しており,ク ロットもまれに存在する.

中粒黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTC05;GSJ R100371:第4.9図 f):大津市大石鹿跳橋(付図 C)

中粒等粒状の黒雲母花崗岩である. 黒雲母は, 長径1~2 mmの粒子が散在している. 石英は, プール状の粒子を含めて 径5 mm以下であり, 散在している. 長石類も長径5 mm以下 であるが, 集合してプールをつくり, 数 cmの大きさに達して いる場合がある. やや風化が進んでいる試料であり, 長石類の 一部に橙色の部分が存在する.

薄片での岩石組織を第4.10図f,顕微鏡組織を第4.11図f に示した.鏡下では,他形のアルカリ長石で変質が激しいが一 部かなり清澄な粒子も存在する.格子状双晶が見られる粒子が ある.斜長石は半自形で,累帯構造はあまり発達せず集片双晶 が発達している粒子が多い.黒雲母はかなり変質しており,白 雲母化している粒子も多い. 顕微鏡モード組成は,石英(29%)・ アルカリ長石(41%)・斜長石(26%)・黒雲母(4%)である.

本地点は、花崗岩と接する丹波帯泥岩ホルンフェルス中の径 1 cm を越える菫青石が採集できる所として知られている(滋 賀県高等学校理科教育研究会地学部会、2002b;中野,2011b). また、本試料採集地点付近でのポットホールはよく知られてい た(藤本,1966)が、最近の河川工事により観察できなくなっ た.しかし、増水していない時には少し下流側の河床で観察で きる(第4.12 図).

中-粗粒斑状相(Gt2)

水口図幅(中野・原山, 2003)ではダム建設予定地近 接の大戸川河床の岩相を模式地として記載してある. し かし,本図幅調査においては,新名神高速道路建設予定 ルートのほぼ全面露頭でその岩相(第4.13図)が詳し く観察できた上に、新鮮な化学分析試料(全岩化学組成 の項参照)及び年代測定試料(放射年代の項参照)が得 られた、本岩相は、岩相・構造の項で既に述べたよう に、ほぼ等粒状の岩相から斑晶の多い岩相まで変化する. |上記大戸川河床試料(色指数は 4.2 で平均的)| 第 4. 14 ~ 4.16 図 a, 中野・原山(2003)の第 4.15・16 図 c の顕微鏡写真1については、ほかの地点の岩相に比べる と、粒度は平均的であるがアルカリ長石の斑晶が少ない 特徴がある、本岩相のスラブモード組成は、本図幅内の 試料の平均では、石英(39%)・アルカリ長石(34%)・ 斜長石 (25 %)・黒雲母 (3 %) であるが、細粒黒雲母 の数え落しのため、下記に示す顕微鏡モード組成におけ る黒雲母の割合(6~7%)よりもかなり低くなってい ることに注意が必要である.

中粒斑状黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTM01; GSJ R100372:第4.14図b):新名神建設工事ルート露 頭(付図C)

他の地点の岩相と比べると、全体に細粒である.特に、黒雲 母は1mm 程度の粒子が多数散在しており、やや優黒質に見え る.まれに径2~3mmの粒子が見られる.アルカリ長石の斑 晶も大きい粒子はなく、長径1cm以下の細い短冊状斑晶が特 徴である.ほかの地点と比べるとアルカリ長石の淡桃色は目立 たないが、わずかに着色している.石英は、5mm 前後の丸み を帯びたプール状粒子が目立つ.ただし、粒径1mm 程度の石 英も単独で散在している.

薄片での岩石組織を第4.15 図 b, 顕微鏡組織を第4.16 図 b に示した.顕微鏡モード組成は、石英(36%)・アルカリ長石(31 %)・斜長石(27%)・黒雲母(6%)である(大橋,2010). 鏡下では、他形の石英は波動消光を、自形~半自形の斜長石(長 径1 mm 前後の粒子が多い)は若干の振動累帯を伴う漸移的な コア→リムの比較的明瞭な累帯構造と明瞭で微細なアルバイト 集片双晶を示す.また、他形のアルカリ長石(肉眼でほぼ自形 に見える斑晶状のアルカリ長石粒子も、鏡下での外形は他の鉱 物の輪郭に沿っており非常に不規則な境界面を示すので、以下 では斑晶状のアルカリ長石も基質部分のアルカリ長石もすべて



第4.12図 中〜粗粒黒雲母花崗岩 (Gt3) に見られるポットホール 低水位時に見られる節理の交差箇所に生じたポッ トホール.(鹿跳橋下流左岸河床,かつて良く知ら れていた場所のやや下流:付図 C)



第4.13図 中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の岩相 (新名神建設工事ルートでの玉石:付図C)

他形として表現する)は、脈状~パッチ(~ビード状)状の汚 濁したパーサイト組織とともに、一部で汚濁の少ないラメラ状 パーサイトを示す、黒雲母(淡黄色~明褐色の多色性)は一部 緑泥石化している。

中粒斑状黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTM02; GSJ R100373:第4.14図 c):新名神建設工事ルート露 頭(付図 C)

上述の大戸川河床の水口図幅模式岩石や瀬田川以東に分布す る後述の KTM08 の岩相と似ているが,アルカリ長石の色は桃 色で目立つ.薄片での岩石組織を第4.15 図 c,顕微鏡組織を 第4.16 図 c に示した.アルカリ長石斑晶のない薄片での顕微 鏡モード組成は,石英(38%)・アルカリ長石(28%)・斜長 石(28%)・黒雲母(6%)である(大橋,2010).

粗粒斑状黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTM03; GSJ R100374:第4.14図d)(K-Ar 年代測定試料番号 KT-Kt-NS-04):新名神建設工事ルート St.430 金勝山ト ンネル西口(水口図幅内:付図 C)

黒雲母は1~2mmの粒子が点在しているが,最大径5mm 程度のクロット状のものも散在している.石英は径2~4mm 程度の粒子も散在しているが,不定形プール状粒子が目立ち長 径3cm以上に伸びている場合も多い.淡桃色のアルカリ長石 が斑晶として目立ち(最大長径2cm),それらの半自形粒子が 集合して更に大きく見える場合(約2mm×3mm)がある.また, 5mm前後の半自形~他形アルカリ長石がつながって伸びてい る場合もある.半自形の斜長石は一般に5mm以下であり,や や量が少ない.全体にほかの地点の岩相に比べると粒度が高く, アルカリ長石と斜長石が見分けにくいこともあり,石英プール やアルカリ長石斑晶が多い面では粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)に 似る.

薄片での岩石組織を第4.15図d,顕微鏡組織を第4.16図d に示した.鏡下では、他形の石英(プール状の粒子で最大長径 1 cm)は波動消光を、自形~半自形の斜長石(最大長径5 mm 程度)はコアのパッチ状累帯構造を伴う弱い累帯構造と明瞭な アルバイト集片双晶を、他形のアルカリ長石は脈状~パッチ状 の汚濁したパーサイト組織とともにカールスバッド双晶を示 す.黒雲母は、淡黄色~明褐色の多色性を示す.

中粒斑状黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTM06; GSJ R100376:第4.14 図 f)(K-Ar 年代測定試料番号 KT-Kt-NS-06):新名神建設工事ルート露頭(付図 C)

長径1mm前後の黒雲母がごま塩状に点在している.石英 のサイズは幅があるが、プール状の大きいものも長径5mm以 下である.少量含まれている薄桃色アルカリ長石は5mm程度 の半自形斑晶状の粒子として散在する.斜長石は一般に長径5 mm以下であるが、まれに径5mm程度の斑晶状の粒子がある. 長石斑晶が小さいことが特徴である.

薄片での岩石組織を第4.15 図 f, 顕微鏡組織を第4.16 図 f に示した.鏡下では、アルカリ長石のパーサイト組織の多様性 が目立つ.顕微鏡モード組成は、石英(30%)・アルカリ長石 (31%)・斜長石(32%)・黒雲母(7%)である.他形の石英



第4.14 図 中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の接写写真 a: 大戸川河床(水口図幅内), b: KTM01, c: KTM02(新名神 St.437), d: KTM03, e: KTM04=KTM05, f: KTM06, g: KTM07, h: KTM08 スケールは1目盛が1cm.(本文と第4.3表を参照.地点は付 図 C 参照)



第4.15 図 中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の薄片接写写真
偏光フィルターを使用して薄片を接写した写真(クロスニコル状態). 写真記号は第4.14 図に同じ.
写真 a の横幅は 12.5mm, b の横幅は 14.3 mm, ほかはいずれも 13.5 mm



第4.16図 中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)の顕微鏡写真写真記号は第4.14 図に同じ.いずれも写真の横幅は約2.5 mm.

は明瞭な波動消光を示す. 自形~半自形の斜長石は, コア部に パッチ状累帯構造を伴う(石英パッチも伴う)漸移的なコア→ リムの比較的明瞭な累帯構造と, 粒子により明瞭あるいは不明 瞭なアルバイト集片双晶を示す. 他形のアルカリ長石(斑晶的 な粒子は長径1 cm 以上, 2 mm 程度の粒子が少ないが散在)は, 脈状~小脈状の汚濁したパーサイト組織とともに一部で flame パーサイト組織を示す. なお, 斜長石の一部にペリクリン集片 双晶が, 斑晶的アルカリ長石にカールスバッド双晶が認められ た. 散在している黒雲母(淡黄色~暗緑褐色の多色性)は, 一 部緑泥石化している.

中粒斑状黒雲母花崗岩(全岩化学分析試料 KTM07; GSJ R100377:第4.14 図 h):南郷千丈川上流旧採石場(付 図 C)

黒雲母は長径1mm 程度の粒子が散在しており、~3mm 程 度のクロット状のものもやや多い.石英の不定形につながる プールは見られず、径数mm~1cm 程度の丸みを帯びたプー ル状粒子が散在している.斜長石もアルカリ長石もともに白色 であり、色による肉眼的な区別は困難であるが、長径5mm 程 度の短冊状の粒子は斜長石である.いずれも長径5mm 以下の 粒子が多く、長石類が細長くプール状につながっている場合が ある.

薄片での岩石組織を第4.15 図 h, 顕微鏡組織を第4.16 図 h に示した.鏡下では,他形の石英は波動消光を示す.自形~半 自形の斜長石はコア部に一部弱いパッチ状累帯構造を伴う漸移 的なコア→リムの弱い累帯構造とアルバイト集片双晶を示す. 他形のアルカリ長石は脈状パーサイトがほとんどなくラメラ~ ビード~パッチ状パーサイト組織を示すが,それらもなく汚濁 のみに見える部分があるとともに,一部で格子状双晶が見られ る.なお,アルカリ長石中に斜長石がポイキリティックに含ま れている.黒雲母(淡黄色~褐色の多色性)は一部緑泥石化し ている.

細粒 - 細粒斑状相(Gt1)(細粒 - 細粒斑状黒雲母花崗岩・ 非顕晶質細粒 - 細粒斑状花崗岩:ペグマタイト・球顆花 崗岩・優白質花崗岩を含む)

本岩相は、中・粗粒相(Gt3)中では主として非顕晶 質細粒-細粒斑黒雲母状花崗岩として岩脈状あるいは シート状に産出している場合が多い.そのうち、細粒-細粒斑状黒雲母花崗岩のまとまった分布が田上・新免の 岩体西端部に見られる(河野ほか,2008).これは岩体 内での分布域から天井相と考えられ、著しい粒度変化は 見られず細粒花崗岩であり、全体としてミアロリティッ ク(ペグマタイト的)岩相である.その他の尾根部での シート状細粒-細粒斑状相(Gt1)(天井相)には、一般 に粒度変化が見られときに石英が斑晶状になる.また、 シート状天井相及び岩脈の一部にペグマタイト部分を伴 う場合が多く(たとえば天白,2011)、また球顆花崗岩 を伴う場合がある.これらの細粒-細粒斑状相(Gt1)シー トでは、黒雲母のシュリーレン構造[schlieren layering シュリーレン・レーヤリング(久保,1987,2000)]が 見られる場合(第4.18図a)も多く、含ペグマタイト 岩脈における層状構造の一部としての黒雲母濃集帯との 関係が注目される(以下、本報告では黒雲母レイアリン グと呼ぶ).なお、中-粗粒相(Gt3)中での岩脈〜シー トとしての本岩相の分布を地質図に正確に示すことが困 難なため、地質図では局所的なまとまった分布域として 示した.

本岩相は、中・粗粒斑状相(Gt2)中では、細粒-細粒 斑状黒雲母花崗岩・非顕晶質細粒-細粒斑状花崗岩の大 小の岩脈として貫入している(第4.17図).数 cm-数 十 cm 程度の岩脈(石英脈も多産)は地質図には表現し ていない、特に、新名神高速道路建設工事現場では、多 数の大小の岩脈が観察された。そのうち、幅5mの岩脈 はN70°E方向でほぼ垂直に貫入している(第4.18図b). 以下に記載する幅約100mの最も大きい細粒斑状黒雲 母花崗岩岩脈の貫入方向は、露頭では境界面が不規則で ありまた破砕されて不明瞭であったが、概略NW方向 の伸びと推定される。本岩脈中にもペグマタイトが存在 するが、岩脈との関係は中-粗粒相(Gt3)中での場合 ほど明瞭ではない、また、一部ではペグマタイト部分及 び黒雲母レイアリングが暗色包有岩と共存している(第 4.18図b, c, d).

なお,水口図幅内の大戸川河床の幅5 cm の細粒緻密 な岩脈(新鮮で青灰色)や上田上の幅1 m の細粒岩脈が 従来のアプライト相当岩相であるが,容量比約1%の微 細な黒雲母が点在しており,粒度も細粒斑状花崗岩脈の 石基部分とほぼ同じ程度であり,全岩化学組成でも両者 に大きな違いはない(第4.3 表参照).異なる点は,斑 晶状粒子の有無である.

細粒斑状黒雲母花崗岩(岩脈中央)(全岩化学分析試 料 KTF01;GSJ R100379:第4.19図a):新名神建設工 事ルート露頭(付図 C)

石基は1mm 程度の石英・アルカリ長石・斜長石・黒雲母の 集合体である.黒雲母クロット(長径数mm)がところどころ に見られ、5mm前後の丸みを帯びた石英と長径1cmを超える アルカリ長石の自形斑晶が目立つ.アルカリ長石の斑晶は薄桃 色である.中-粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)中での天井相としての (細粒~)細粒斑状黒雲母花崗岩(Gt1)の岩相に酷似している. 鏡下では変質がやや進んでいることがわかる.

薄片での岩石組織を第4.20図 a, 顕微鏡組織を第4.21図 a に示した.顕微鏡モード組成は、石英(34%)・アルカリ長石(28%)・斜長石(35%)・黒雲母(3%)である.鏡下では、他形 の石英($1.5 \times 2 \text{ mm}$ 程度)が単独あるいはプール状に存在し、 自形~半自形の斜長石(長径1 mm 程度で最大2 mm, 0.3×0.3 mmの小さい粒子も存在)は漸移的なコア→リムの弱い累帯構 造とアルバイト集片双晶を示し、他形のアルカリ長石はパーサ イト組織とカールスバッド双晶を示す.変質した黒雲母(淡黄 色~橙色あるいは橙色~褐色の多色性)の一部は、緑泥石化し ている.



第4.17図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒-細粒斑状相(Gt1)岩脈
aとb:新名神建設工事ルート露頭, c: KTF03, d: KTF04 大戸川河床(水口図幅内)(地点は付図C参照)



第4.18 図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の MME と黒雲母レアリング及びペグマタイト岩相との共存 a: 黒雲母レアリングを伴う細粒岩脈(天神川奥林道沿い露頭からの転石:付図 C),b:ペグマ ティティクな部分(新名神建設工事ルートの転石),c: 同様な転石中の小 MME と黒雲母レア リングの共存,d:ペグマタイトと MME の共存(上田上牧集落東の新名神建設工事ルート西端)



 第4.19図 細粒-細粒斑状相(Gt1)の接写写真
a: KTF01, b: KTF02, c, d: 優白質花崗岩脈(アプライト岩脈); c: KTF03, d:
KTF04[大戸川河床(水口図幅内)] スケールは1目盛が1 cm.(本文と第4.3 表 を参照.地点は付図 C 参照)



第4.20図 細粒 - 細粒斑状相(Gtl)の薄片接写写真
偏光フィルターを使用して薄片を撮影した拡大写真(クロスニコル状態).写真記号は第4.19図に
同じ(本文と第4.3表を参照).いずれも写真の横幅は13.5 mm.

細粒斑状黒雲母花崗岩(岩脈東端)(全岩化学分析試 料 KTF02;GSJ R100380:第4.19図b):新名神建設工 事ルート露頭(付図 C)

上記試料と基本的に同一岩相であり,石基は周辺相としての 粒度変化をあまり示していない.しかし,斑晶状の石英やアル カリ長石の粒径は岩脈中央部のそれと比べると小さく多くは5 mmを超えない.

薄片での岩石組織を第4.20図b,顕微鏡組織を第4.21図b に示した.鏡下では,他形の石英がプール状と文象的に存在し, 自形~半自形の斜長石は漸移的なコア→リムの非常に弱い累帯 構造と明瞭なアルバイト集片双晶を示し,他形のアルカリ長石 は汚濁しているがパーサイト組織はあまり発達していない.黒 雲母(橙色~褐色の多色性)は,一部緑泥石化している.

非顕晶質細粒優白質黒雲母花崗岩("アプライト")(全 岩化学分析試料 KTF03:第4.19図c):新名神建設工 事ルート平野高架下県道沿い(付図C)

露頭では,幅 10 ~ 30 cm の一部境界が平面状でない岩脈と して中粒斑状黒雲母花崗岩(Gt2)に貫入している(第4.17 図 c). おおよその伸びの方向は,N10[°]W,80[°]W である.割った断面 は白色であり一部薄褐色を帯びている.

1 mm 以下のアルカリ長石・斜長石・石英・黒雲母の集合体 である.薄片での岩石組織を第4.20図 c,顕微鏡組織を第4.21 図 c に示した.顕微鏡モード組成は,石英(47%)・アルカリ 長石(37%)・斜長石(15%)・黒雲母(1%)である(大橋, 2010).鏡下では,石英は最大径0.5 mm 程度であり,自形~ 半自形の斜長石にはアルバイト集片双晶はあるが累帯構造はほ とんどなく,他形のアルカリ長石にはパーサイト組織がほとん ど発達しておらず汚濁組織から斜長石等と区別できる程度であ る.点在している黒雲母(暗褐色~緑色あるいは緑褐色~暗緑 褐色の多色性)は,一部緑泥石化している.

非顕晶質細粒優白質黒雲母花崗岩("アプライト")(全 岩化学分析試料 KTF04:第4.19図d):大戸川河床(付 図 C)

水口図幅(中野・原山,2003:p.25-27)では中-粗粒斑状黒 雲母花崗岩(Gt4)として記載した中粒斑状黒雲母花崗岩(本 図幅ではGt2)の露頭において,幅約10 cmの直線状に伸びる 岩脈(N70°E,70°N)として産する(第4.17 図 d).薄青灰色 の基地に微細黒雲母が散在しており,露頭での岩脈としては灰 色に見える.ほとんど変質を受けていないので,非常に緻密堅 牢な岩石である.

1 mm 以下のアルカリ長石・斜長石・石英・黒雲母の集合体 である.薄片での岩石組織を第4.20 図 d, 顕微鏡組織を第4.21 図 d に示した.顕微鏡モード組成は,石英(54%)・アルカリ 長石(32%)・斜長石(12%)・黒雲母(2%)である(大橋, 2010).鏡下では,長径0.1 mm 以下の他形の石英が散在するの が目立つ.自形~半自形の斜長石は弱い累帯構造とアルバイト 集片双晶を示し,他形のアルカリ長石はパーサイト組織を示す. 微粒の黒雲母(黄色~暗緑色の多色性,長径0.4 mm 以下)が 散在している. ペグマタイト

田上山地域は、福島県石川・岐阜県苗木地域ととも に、日本での三大ペグマタイト産地として明治初年以来 知られてきた(大林, 2002;高田, 2004).かつて中司 (1929)は、田上ペグマタイトについて、「傾斜急な嶺及 谷には縦横に走るペグマタイト岩脈があって中に晶洞を なして」と記載した. 既に細粒-細粒斑状相(Gtl)の 記載でペグマタイトの産状にも触れたように、田上ペグ マタイトは概して母岩→細粒帯→文象帯→巨晶帯という 構造を有する(第4.22図)ので、ミアロリティックな もの(河野ほか,2008)は別にして、岩脈状あるいはシー ト状の細粒-細粒斑状相(Gtl)との産状関係が重要で ある.ペグマタイトは田上花崗岩体の西縁部に当たる笹 間ヶ岳~太神山~堂山~上田上地域の中-粗粒相(Gt3) 中に多産することが知られていた(中司, 1932).田上 花崗岩体の岩相との関係では、中-粗粒相(Gt3)中のみ ならず中-粗粒斑状相(Gt2)中にも多いことが確認さ れた. ここでは、新名神高速道路牧地区の境界部付近に おける, 中-粗粒相 (Gt3) 中のペグマタイト (第4.23 図a)と中-粗粒斑状相(Gt2)中のペグマタイト(アル カリ長石結晶多産)の産状を示す(第4.23図b).なお、 これらのペグマタイトの産出については、地質図では場 所・産状を表現できていない場合が多い.

田上花崗岩体中での本図幅域におけるペグマタイト の多産(ペグマタイト地帯)は、田上花崗岩体全体で の熱水系の問題として考える必要がある(須藤, 1991, 2001;中野ほか, 2006).ペグマタイトは産状的にも多 様であり(石原, 2003),その成因は世界的に非常に重 要な研究テーマである(London, 2005)ので、田上ペ グマタイトについても上記観点からの成因的研究が必要 である[(たとえば、河野ほか(2008)].なお、トパー ズや益富雲母に代表される田上産のペグマタイト鉱物に ついては、4.7 項で述べる.

球顆花崗岩

分布・産状 田上花崗岩体西縁部において,日本では珍しい球顆花崗岩の露頭が2箇所知られている:(1) 笹間ヶ岳北方(稲垣,1966),(2)上田上新免吉祥寺川沿い(竹本ほか,1977).(1)の笹間ヶ岳と天神川のほぼ中間の尾根部には,球顆花崗岩の密集地域が認められる(第4.24図).球顆花崗岩は中-粗粒相(Gt3)を直接の母岩として産出しているのではなく,いわゆる天井相の細粒(斑状)相(Gt1)中に産出している(第4.24図).この産状を,稲垣(1966)は球顆シートとして記載しており,また一部にペグマタイト相が見られることを報告している.新免の産出地点でも,球顆の充填部にペグマティチックな岩相が認められる.笹間ヶ岳北方の露頭は風化が進んでいるが,新免の露頭は比較的新鮮である. 構造 球顆の構造は,両地点ともに共通の特徴を示している.長径1~2 cmの自形アルカリ長石を核にして放



第4.21 図.細粒-細粒斑状相(Gtl)の顕微鏡写真 写真記号は第4.19 図に同じ(本文と第4.3 表を参照).いずれも写真の横幅は約2.5 mm.



 第4.22図 中~粗粒黒雲母花崗岩(Gt3)中のペグマタイト 代表的ペグマタイトである"中沢晶洞"(中沢、 1984)に見られる典型的な帯状構造.右側上方が 母岩の粗粒黒雲母花崗岩(Gt3).(地点は付図 C 参照)

第4.23図 ペグマタイトの産状→
a:中-粗粒相(Gt3)中の石英質ペグマタイト,b:
中-粗粒斑状相(Gt2)中の長石質ペグマタイト.(いずれも大津市上田上牧:付図C)





第4.24図 球顆花崗岩の露頭 (笹間ヶ岳北東尾根斜面)



第4.25図 球顆花崗岩の接写写真
a: 大球顆の切断面(笹間ヶ岳地域), b: 小球顆を割った断面(堂山地域).スケールは1目盛が1cm.

射状にくさび形のアルカリ長石結晶が伸びて球顆を構成 している(第4.25図 a). 放射状アルカリ長石には,石英・ 斜長石・黒雲母が包有されている(竹本ほか,1977). 石英はレンズ状であり,アルカリ長石の伸張方向に垂直 な方向に伸びている.なお,堂山南西方では,径数 cm の小型球顆花崗岩試料が得られている(第4.25 図 b: 河野俊夫氏採集).

熱水変質花崗岩

琵琶湖周辺の花崗岩体のうち,比良花崗岩体と野洲花 崗岩体中には、閃亜鉛鉱を代表鉱物とする鉱化作用を伴 う閃長岩(主としてカリ長石とAb成分95 mol%以上の 曹長石からなる)化した熱水変質岩が知られている(中 野ほか,2001;西村・中野,2002).田上花崗岩体中で これまで稼行されてきた長石鉱石は、上記変質岩と同じ く,岩石学的にはカリ長石と端成分に近い曹長石を主構 成鉱物とする閃長岩である(須藤,1991,2001:中野ほ か,2006).ここでは、その中でも代表的な井上平津長 石鉱床の鉱石(中野,2011a)について述べる.

本鉱石は、石英や有色鉱物をほとんど含まず、全体 が白色に見えるという特殊な岩相である(第4.26図). 部分的に,薄桃色ないしは黄褐色の微粒子が点在するが, いくつかの粘土鉱物の集合帯とされている(港, 1974). 細粒~粗粒の累帯構造が見られる. 粗粒部では、量的に は少ないが肉眼的に見える石英粒子が散在している. 瀧 本ほか(1964)及び港(1974)や小早川(1991)の岩石 記載がある、成因としては、田上花崗岩が熱水変質した ものと考えられており、源岩の花崗岩組織に対応すると 考えられている細粒~粗粒鉱石の岩相変化がある.本鉱 石の化学分析値(大阪通商産業局非金属鉱物資源対策 委員会, 1989;小早川, 1991)(第4.1表に再録)と年 代測定值(大阪通商産業局非金属鉱物資源対策委員会, 1989) が報告されている. 粗粒鉱石について, 66-67 Maの K-Ar 年代が求められており、田上花崗岩体の年 代測定値と調和的である. これらの報告によれば平津鉱 石は, SiO2が77.6 wt% に対してアルカリ酸化物量が8.43 wt% 程度の比較的珪長質なものと, SiO₂約 67 wt% に対 してアルカリ酸化物量が12 wt% 程度とアルカリに富む もの等が報告されている.

本鉱石(岩石)は、鉱物組成からみると石英や白雲母 を少量含む主としてアルカリ長石と曹長石からなる閃長 岩である.しかし、これまでそれぞれの鉱物の化学分析 値は求められてこなかった.今回得られたアルカリ長石 と曹長石の化学組成を第4.2表に示す.曹長石の化学 組成は、Ab95 mol%以上ときわめて端成分に近い.こ のような曹長石(An > 95 mol%)は、Le Maitre (2002) にまとめられている国際地質科学連合(IUGS)による定 義ではアルカリ長石である.なお、このような2種のア ルカリ長石からなる閃長岩を、Tuttle and Bowen (1958) はサブソルバスな閃長岩と分類した.一方、アルカリ長



第4.26図 井上平津鉱山の長石鉱石

a:長石鉱石に見られる帯状構造.右側上下方向の境界部を挟んでその右側に粗粒 部分が見られ,その部分では肉眼的に石英粒子が明瞭である.b:別の長石鉱石に 見られる帯状構造.岩相変化は北東-南西方向の境界を通して見られる.スケール は1目盛が1cm.(産地は付図C参照)

石には若干の組成変化があるが、それは基本的に河野ほか(2008)の組成変化と同じである。そのパーサイト組織は、小パッチ状である[用語については中野(1992)参照].

細粒暗色包有岩

本図幅中の細粒暗色包有岩は,既に述べたように,近 年 MME [mafic magmatic enclaves (Barbarin, 2005) ない しは mafic microgranular enclaves (Słaby *et al.*, 2008)]と 呼ばれているものに相当する (大橋ほか, 2009;中野ほ か,印刷中).

分布・産状 中-粗粒斑状相(Gt2)中に多く含まれる が(第4.27,4.28図),中-粗粒相(Gt3)中にも産出 する.前者は新名神高速道路建設ルートで多産し,Gt2 の分布域のほぼ全体に見られるようである.後者は,堂 山~笹間ヶ岳に産することが本図幅調査で判明した.大 きさは数 cm ~ 20 cm 強の長径のものが多いがそれ以下 の小さいものもある.形は球状~ラグビーボール状の場 合がほとんどであるが,芋状等不規則な形状の場合もあ る.近畿地方山陽帯の花崗岩類に細粒暗色包有岩が産出 するのは例がないと思われるので,その成因的解明が重 要であり,中野ほか(印刷中)はマグマ混合によるもの ではなく初期晶出相として位置づけている.この点で, 上述二つの異なる岩相を通して,既に述べたようなペグ マタイトや黒雲母レイアリングとの共存が見られる場合 があるので注目される(第4.18図).

構造 ほとんど内部構造は認められないが, 笹間岳付近 のものには狭い(1 mm ~数 mm) rim 状の部分が認めら れる.

岩石記載

中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩(第4.27図) 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の存在に ついては、既に周琵琶湖花崗岩団体研究グループによっ て言及されている.また、石原・村上(2006)は、新名 神金勝山トンネル付近の玉石中の試料について全岩化

第4.1表 井上長石鉱床の鉱石と母岩の全岩化学分析値 a=大阪通商産業局非金属資源対策委員会(1989), b=小早川(1991)

TiO ₂	0.01	0.02				
Al203	12.86	14.25	19.08	19.80	20.30	14.97
MgO	0.07	0.03				
CaO	0.35	0.18	0.36	0.39	0.37	0.46
Na2O	4.26	2.57	5.47	5.74	7.51	4.01
K20	4.10	4.81	6.67	7.35	4.70	4.11
Ig. loss	0.24	1.87				
Total	99.67	99.86				
出典	а	а	b	b	b	b

第4.2表 井上平津長石鉱石中の長石類と白雲母の化学分析 値

滋賀大学教育学部 JEOL - JXA8800M 使用 (15 kV, 0.02 µA, 5µm ビーム径)

Ab=albite, Kf=K-feldspar, Af=alkali feldspar, Mus=muscovite

	1	2	3	4	5	6	7
	Ab	Ab	Kf	Kf	Af	Af	Mus
SiO ₂	68.37	66.86	64.54	65.00	64.24	65.36	46.31
Al203	20.13	19.82	18.39	18.68	18.63	18.87	36.78
FeO(T)	0.00	0.05	0.06	0.01	0.00	0.03	1.95
CaO	0.12	0.44	0.00	0.00	0.01	0.01	0.05
Na2O	11.68	11.28	0.29	0.31	15.82	1.55	0.50
K2O	0.08	0.17	16.09	17.13	0.97	14.81	10.96
BaO	0.02	0.02	0.00	0.00	0.10	0.00	0.00
Total(wt%)							
c)r-Ab-An三成分	}系組成(mol%))				
Or	0.4	1.0	97.4	97.3	91.5	86.2	
Ab	99.0	96.9	2.6	2.7	8.5	13.7	
An	0.6	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	

学組成値(主成分・微量成分)を記載し、それが希土類 元素に富む特徴を有すると述べた、本図幅調査では、新 名神高速道路建設ルート牧地区と金勝山トンネル西方 St.440~439の範囲で、それぞれ集積されていたいわ ゆる"玉石"(コア岩)中で細粒暗色包有岩が大量に観 察され、多数の試料を採取した、中・粗粒斑状相(Gt2) 中の本岩は、肉眼的に非常に優黒質に見えるものからや や優白質に見えるものまである、本岩については、京都 東南部図幅作成と平行して、岩石学的鉱物学的解析が行 われている(中野ほか、印刷中).



第4.27図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩(MME)の露頭写真 a: 典型的な細粒優黒質の MME[大戸川河床(水口図幅内)],b:やや優白質の MME,c: 斜長石斑晶が顕著な MME.周の 母岩は非常に粗粒,言い換えるとややペグマティティック.d: 玉石中のやや大きな MME.(b-d: いずれも上田上牧集落 東方の新名神工事ルートの玉石)(地点は付図 C 参照)



第4.28図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の岩相
いずれも接写写真.a:R50MME[=MNK50:第4.3表:石原・村上(2006)参照],b:大戸川河床(水口図幅内)(=第4.27
図 a の試料),c,d:新名神建設工事ルートの玉石.スケールは1目盛が1cm



 第4.29図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の薄片接写写真
偏光フィルターを使用して薄片を撮影した拡大写真(クロスニコル状態).写真 a と d の横幅は 13.1 mm,写真 b の横幅 は 13.5 mm,写真 c の横幅は 12.5 mm. a: 大戸川河床(水口図幅内), b: MME01, c: MME02, d: MME03. (b-d: 新名神 建設工事ルート)



第4.30図 中-粗粒斑状相(Gt2)中の細粒暗色包有岩の顕微鏡写真 a: MME01, b: MME03(いずれも新名神建設工事ルート) al, bl: 複ニコル, a2, b2: 単ニコル.いずれも写真の横幅は約2.5 mm.

構成鉱物は、黒雲母・斜長石・石英であるが、それら の基質の中に斑晶状の斜長石(最大長径1 cm 強で自形 性が強い)と石英(5 mm 程度で丸みを帯びた外形)が 存在する場合が多い、アルカリ長石は、斜長石の変質し たコア部分を交代している不定形微粒のものしか存在し ない、岩石切断片の接写写真を第4.28 図に、偏光フィ ルターを使用した薄片の接写写真を第4.29 図に、顕微 鏡写真を第4.30 図に示す。

中-粗粒相(Gt3)中の細粒暗色包有岩(第4.31図)

本図幅調査により,中-粗粒相(Gt3)中にも数ヶ所 で暗色包有岩が存在することが明らかになった.特に, 笹間ヶ岳北方には多数存在する.しかし,これらの暗色 包有岩は砂状に風化しているものがほとんであり,新鮮 な試料は今のところ得られていない.したがって,本報 告では産状の写真を示すに留める.

4.5 岩脈類 (A, B, Pg, F)

本図幅地域の岩脈には,非顕晶質細粒斑状花崗岩脈(従 来の花崗斑岩)のほか苦鉄質岩脈・珪長質岩脈がある. このうち苦鉄質岩脈は田上花崗岩体以前である可能性が 高いが,本項でまとめて記述する.

4.5.1 苦鉄質岩脈 (A, B)

苦鉄質岩脈には下記のように多様な岩種があり,地質 図では安山岩(A)と玄武岩・スペサルタイト(B)に 区分して示した.

分布・産状 宇治市西笠取付近から宇治市天ヶ瀬にかけ ての醍醐山地に,ほぼ北北東-南南西伸長方向の小岩脈 が分布しており,その分布域は伸張方向と整合的な北北 東-南南西の方向性を示している(貴治,1986).ただし, 大峰橋近傍の高マグネシア安山岩(貴治,1989)の伸張 方向は例外的に異なる.脈幅は0.1~8mである.また, 大津市大石龍門南東方から宇治田原町南京都変電所にか けての範囲の数箇所に,伸長方向が西北西-東南東で幅 1~3mの安山岩岩脈が分布する.

貫入関係いずれも,丹波帯の堆積岩中に貫入している. 放射年代 本図幅内の岩脈については,直接の年代値は 報告されていない.本岩に関連して,京都東北部図幅域 の安山岩の角閃石 K-Ar 年代が 108 ± 5 Ma と報告され ている(木村・貴治, 1993).

岩石記載

普通角閃石安山岩[貴治(1986)の角閃石ひん岩]

黒色緻密な岩石であり, 粗粒の普通角閃石(最大径5 mm) が濃集している部分がある. 斜長石, 普通角閃石, 緑泥石, 他 形充填的な石英からなるインターサータル~インターグラニュ ラー組織を示す. 薄片の接写写真を第4.32 図 c, 顕微鏡写真 を第4.33 図 c に示した. 顕微鏡モード組成:斜長石 = 59.1 %, 普通角閃石 = 25.7 %, 黒雲母 = 0.4 %, 石英 = 4.4 %, 緑泥石 = 7.3 %, 不透明鉱物 = 4.0 %.

玄武岩 [貴治(1986)の輝緑岩]

暗緑色緻密な岩石であり,輝石の斑晶が目立ち集斑状(最 大径2mm)をなすことも多い.斜長石と単斜輝石からなるサ ブオフィティック組織やインターグラニュラー組織を特徴とす る.そのほか,黒雲母,針状緑色角閃石,緑泥石,黄鉄鉱,石 英の不規則粒を含む.杏仁状(最大径3mm)や脈状の方解石 が見られる.

普通角閃石玄武岩[貴治(1986)の輝緑岩]

黒色緻密な岩石で外観は普通角閃石安山岩に似るが,褐色普 通角閃石の斑晶(最大径 8mm)が目立つ.斜長石,単斜輝石, 普通角閃石,他形の石英からなるサブオフィティック組織やイ ンターグラニュラー組織を特徴とする.薄片の接写写真を第 4.32図d,顕微鏡写真を第4.33図dに示した.顕微鏡モード 組成:斜長石=52.5%,普通角閃石=24.3%,単斜輝石=6.5 %,石英=0.9%,緑泥石=12.3%,炭酸塩鉱物=1.0%,不 透明鉱物=2.5%.

スペサルタイト (貴治, 1986)



第4.31図 中-粗粒相(Gt3)中に見られる細粒暗色包有岩の露頭写真(a, bとも笹間ヶ岳北斜面:付図C)



第4.32 図 宇治市域の貫入脈岩の薄片接写写真 偏光フィルターを使用して薄片を撮影した拡大写真(クロスニコル状態). a: 非顕晶質細粒斑状花崗岩, b: 流紋岩, c: 普 通角閃石安山岩, d: 普通角閃石玄武岩, e: スペサルタイト, f: 安山岩. いずれも写真の横幅は 13.5 mm.

主として単斜輝石,角閃石,黒雲母,緑泥石,不透明鉱物, 炭酸塩鉱物からなる青緑色の岩石である.露頭規模で,斜長石 斑晶や石英を含む等の変化がある.全自形粒状組織~インター グラニュラーないしサブオフィティック組織を示す.角閃石, 緑泥石,炭酸塩鉱物は変質鉱物であろう.薄片の接写写真を第 4.32 図 e,顕微鏡写真を第4.33 図 e に示した.

玄武岩(貴治, 1986)

京都府宇治田原湯屋谷南方林道欠谷線の玄武岩脈(N14-16° E, 85°E, 幅約2mと幅15cmの2本)は、斜長石、単斜輝石、 かんらん石(仮晶)を含み、石基部分は斜長石、輝石類、炭酸 塩鉱物、不透明鉱物からなるインターグラニュラーないしはイ ンターサータル組織を示す(貴治・高田,1994). 貴治・高田(1994) は、本岩の全岩化学組成を報告し、単斜輝石の鉱物学的データ を記載している.

安山岩[貴治(1986)の高マグネシア安山岩]

京都府宇治市宇治川沿いの大峰橋近くの,N46°W,60°Nの 幅約8mの岩脈である.エデン閃石質の褐色角閃石が最も自形 性が強く,次いで自形性が強いのが斜長石であり,かんらん石



第4.33 図 宇治市域の火成岩脈の顕微鏡写真 写真記号は第4.32 図と同じ.いずれも写真の横幅は約2.5 mm.

(仮晶)も含まれる. 間隙を充填して,石英等の鉱物が存在する. 薄片の接写写真を第4.32図f,顕微鏡写真を第4.33図fに示 した.顕微鏡モード組成:斜長石=23.0%,角閃石=66.5%, 石英=4.7%,緑泥石=5.3%,炭酸塩鉱物=0.5%.

4.5.2 非顕晶質細粒斑状花崗岩脈 (Pg)

分布・産状 京都東北部図幅内の比叡花崗岩体中から本 図幅内の丹波帯に連続する最大幅数百 m の岩脈として 産するほか, 滋賀県境に近い京都府宇治市の醍醐山地に 小岩脈として産する. 前者が分布する山科地域の音羽山 地北端部では、その伸長方向が南北からほぼ東西方向へ 急激に変化することが知られていたが(宮村,1959;上 治、1962;石田ほか、1980)、本図幅調査で以下のこと が明らかになった.すなわち、比叡山地から南に伸びる 非顕晶質細粒斑状花崗岩脈は、上記屈曲とともにその幅 は音羽山地に向かい急激に狭小になる.音羽山付近では、 この岩脈とほぼ並行にもう一本の非顕晶質細粒斑状花崗 岩脈が、山科から大津市国分まで断続して伸びている. 貫入関係 隣接図幅では比叡花崗岩体及び田上花崗岩体 中に貫入しているが、本図幅内では丹波帯堆積岩中に貫 入している.これらは一連の岩脈と考えられる.

構造 本岩の主岩相は長径数 cm に及ぶアルカリ長石の 自形斑晶を多く含む典型的な非顕晶質細粒斑状花崗岩組 織を示すが,堆積岩との境界部では斑晶がきわめて小さ くなる周辺相が一般的に認められる.

放射年代 本図幅内の試料についての年代値は報告され ていない.同じ岩相を示す水口図幅内の非顕晶質細粒斑 状花崗岩脈については,69.0 ± 4.2 Ma(後期白亜紀)の 黒雲母 K-Ar 年代が得られている(沢田・板谷,1993). 同じく,本図幅内から連続している比叡花崗岩中の非顕 晶質細粒斑状花崗岩については,67.5 ± 3.4 Maの黒雲 母 K-Ar 年代が報告されている(沢田・板谷,1993).

岩石記載

産地:大津市国分旧石切り場(付図:第4.34図)

薄片の接写写真を第4.34 図 a に,顕微鏡写真を第 4.34 図 b に示す.アルカリ長石斑晶は,図に示されて いるように全体に熱水変質作用を受けており汚濁状態 (turbid)であるが,本産地の試料の巨斑晶(2cm)には 汚濁していない比較的清澄な部分が残存している(まれ に閃光を示す斑晶がある).

4.5.3 珪長質岩脈 (F)

分布・産状 西北西-東南東方向の伸長方向を示す小規 模珪長質岩脈が,宇治市炭山から二尾にかけての醍醐山 地に同方向に断続的に分布する(貴治,1986). 多くは 非顕晶質細粒斑状花崗岩質であるが,流紋岩(元記載は 珪長岩)と安山岩がそれぞれ1ヶ所で確認されている(貴 治,1986). 非顕晶質細粒斑状花崗岩は,音羽山地の弧 状岩脈の岩相と同じである.

貫入関係いずれも,丹波帯堆積岩中に貫入している. 放射年代 報告されていない.ただし,本地域の非顕晶 質細粒斑状花崗岩が,岩相が同じである音羽山地の弧状 非顕晶質細粒斑状花崗岩脈とは貫入方向も同方向である ので,同じ白亜紀末の一連の火成活動の可能性が高い. 岩石記載

非顕晶質細粒斑状花崗岩[貴治(1986)の花崗斑岩]

半自形~自形斜長石斑晶(最大径 1.5 cm, 平均 5 mm), ア ルカリ長石斑晶(最大径 2 cm, 平均 5 mm), 融食されて丸み を帯びた石英斑晶(最大 1 cm),緑泥石に変質した黒雲母斑晶 (平均径 2 mm)と,淡灰色の微粒石基(0.02~0.04 mm:斑晶 と同じ鉱物組み合わせ)とからなる.薄片の接写写真を第4.32 図 a, 顕微鏡写真を第4.33 図 a に示した.

流紋岩[貴治(1986)のフェルサイト]

白色で細粒緻密な岩石であり,高温石英の斑晶(平均径1 mm)が見られる.石英,長石,絹雲母からなる.変質した長 石質のバリオール(平均径0.2 mm)と絹雲母の定向配列が顕 著である.薄片の接写写真を第4.32 図 b,顕微鏡写真を第4.33 図 b に示した.モード組成:高温石英斑晶=0.9 %,石基(石 英=6.7 %,絹雲母=23.9 %,バリオール=68.5 %).

安山岩[貴治(1986)の石英ひん岩]

変質が著しいが、肉眼的に明瞭な斑状組織を示す. 斑晶は、 高温石英(最大径4mm)、卓状の斜長石(最大径5mm)、角閃 石や黒雲母が変質したと思われる定向配列している緑泥石から なる.石基は、石英、斜長石、緑泥石、絹雲母からなる.モー ド組成:斑晶(石英=0.5%、斜長石=7.0%、緑泥石(苦鉄 質鉱物)=9.6%)、石基=82.9%.

4.6 全岩化学組成

田上花崗岩体~信楽花崗岩体についての全岩化学分析 値は、主成分とラドンの分析を行った Asayama (1954) によって多数公表された.それらの分析値は藤本(1979) にまとめられている.その後の全岩化学分析は主成分の みならず各種微量成分を加えて行われており、本図幅地



第4.34図 非顕晶質細粒斑状花崗岩弧状脈 (Pg)の岩石組織 大津市国分の旧採石場からの試料.a:スラブ接写写真,スケールは1目盛が1cm.b:顕微鏡写真(写真の横幅は約2.5 mm).(産地は付図C参照)

域の火成岩類及び田上~信楽岩体についての全岩化学組 成公表値(沓掛ほか,1991;周琵琶湖花崗岩団体研究グ ループ,2000;ほか)は、天白・琵琶湖基盤地質研究会 (2001)に一括されている[中野・原山(2003)に再録]. 最近石原ほか(2005)が報告した田上花崗岩類の全岩化 学組成の特徴は次の通りである.田上花崗岩体は、非常 に珪質であり(73.3-76.7%SiO₂)アルカリに富んでい る(7.95-8.87%).また、Rbに富み(169~420 ppm), Sr に乏しい(6~107 ppm).他の山陽帯の花崗岩類と 比較すると、田上花崗岩体は相対的に希土類元素(合 計179~290 ppm)と放射性元素(U=3.1~6.0 ppm, Th=18~30 ppm)に富み、特にYは40~114 ppmに達 し重希土類元素に富み(L/HREE=0.56~1.04)、フラッ トな希土類分布パターン(スパイダー図)を示す.

本稿では、本図幅内の火成岩類について新しく得られ た希土類元素・放射性元素の含有量を含む全岩化学組成 に、石原ほか(2005)の結果を加えて、第4.3表(a, b) に示した. それに基づいて, 田上花崗岩体中の Gt1 ~ Gt3の各岩相及び暗色包有岩の SiO₂含有量を第4.35 図に示した. 今回得られた分析値の特徴は、概略石原ほ か(2005)の上記結果と調和的であるが、次の点が注目 される. すなわち, 石原ほか(2005) では, 細粒-細粒 斑状相(Gt1)は中-粗粒相(Gt3)及び中-粗粒斑状相 (Gt2)に比べて、軽希土類元素に乏しく重希土類元素と Yに富むと指摘されている. 今回得られた分析値におい ても、同じく Gtl 相では軽希土類元素が少なく重希土類 元素とY量がかなり多い. UとThの放射性元素につい ても、石原ほか(2005)の結果と調和的であるが、Gtl 相では両元素ともに非常に高い含有量を示すとともに, Th/U比はほかの2岩相に比べて低くなっている。細粒-細粒斑状相(Gtl)の化学組成は、石原ほか(2005)の 周辺相の特徴と同じく、最も珪長質であり(SiO₂=76~ 78%), Rbに富みSrに乏しい.

今回得られた全岩化学組成は、中-粗粒斑状相(Gt2) と細粒-細粒斑状相(Gt1)のデータがより多く追加さ れている(第4.3表).この点を考慮して、Gt2相につ いて特に注目すると、石原ほか(2005)では上記大戸川 試料のSiO₂=74.05%が報告されているのみであったが、 今回のデータにおいてはほとんどがSiO₂=72%前後であ ることが明らかになった.また、Rbにも富むがSrにも 富む点で中-粗粒相との違いがより明瞭になった.U・ Th含有量は、細粒-細粒斑状相(Gt1)ほどではないが 中-粗粒相(Gt3)に近いものであることも明瞭になった.

なお、細粒暗色包有岩の全岩化学組成については、本 図幅作成作業中に観察・採集された細粒暗色包有岩の解 析と検討(中野ほか)が別途印刷中であるので、本稿で はこれ以前に石原・村上(2006)によって公表された中 - 粗粒斑状黒雲母花崗岩中の特異な暗色包有岩について 言及するに留める(第4.3表).この暗色包有岩には、 その後採集され本稿で記載された試料と同じく,肉眼的には非常に優黒質に見えるにもかかわらず黒雲母しか含まれていない.しかし,その組成的特徴は,本図幅に記載の暗色包有岩とは異なり,希土類元素含有量が非常に高く(REE+Y=1,804 ppm),特にY(792 ppm)に富む.

4.7 田上花崗岩体の鉱物学

田上地域は、日本の三大ペグマタイト産地のひとつと して知られ(大林. 2002;高田. 2004).世界的にもト パーズほかの美晶の産地として知られてきた(Dana and Ford, 1959; Rakovan et al., 2009). 長島ほか (1975)・ 山田 (1981)・中沢 (1984) などによりこれまでに知ら れている田上ペグマタイトからの産出鉱物を、第4.4 表に示した.本表は、辻・北原(1979)及び滋賀県高等 学校理科教育研究会地学部会(2002b)と大林(2002) の産出鉱物リストを参照し、その後の産出鉱物-ベル トラン石 (高田・小林, 1984), バスタネ石 (小林, 1989), ヒンガン石 (高田・松原, 1989), トール石 (中 沢ほか、2005)、泡そう鉛(中沢、2006)、満礬ざくろ 石 (河野, 2007), ミラライト (ミラー石) (Rakovan et al., 2009) を加えたものである. 田上地域からの最近の 鉱物記載として、このほかにコルンブ石の記載(鶴田, 2002) があるが、上記の以前のリストに挙げられていた ものである.最近のペグマタイト鉱物の研究として、ア ルカリ長石の微細組織(パーサイト組織)の研究があ る. 大津市南郷地域のペグマタイト産のアルカリ長石 のパーサイト組織[用語等は中野(1992)参照]が詳し く解析され,熱水反応の記録が解読されている(中野, 1975; Nakano, 1997). 最近では, 大津市新免地域の岩 体天井相と考えられる細粒花崗岩(Gtl)中のミアロリ ティックなペグマタイト産アルカリ長石の熱史が明らか にされ、低温熱水時期(~200℃)の反応が大きく働い ていることが指摘されている(河野ほか, 2008).更に, アマゾナイト(淡緑色アルカリ長石)の色と微細組織の 解析からも,同様に低温熱水段階に至る広範なペグマ タイト環境の変遷の一端が明らかにされた(Nakano and Makino, 2010). なお、第4.4 表にはこれまでのリスト には挙げられていた「氷長石」や新しく記載された「ア マゾナイト」は載せられていない、これらの名称は、鉱 物の種名としてではなく、その形や色にちなんでつけら れているからである.

本地域の最近の鉱物学の特徴として、かつてのほと んどペグマタイト鉱物に限られていた研究(辻・北原, 1979;長島・長島,1960;滋賀県高等学校理科教育研究 会地学部会、2002b)が、ペグマタイトを含めた花崗岩 鉱物学あるいはペグマタイト岩石学[たとえばLondon (2008)]として展開されつつあることが挙げられる(西 村ほか,1990;中野ほか,1991:橋本ほか,2005;河野

第4.	3表a	田上花崗岩体各岩相の全岩化学組成	(主成分元素

岩相 試料番号	Gt3 KTC05	Gt2 KTM01	Gt2 KTM02	Gt2 KTM03	Gt2 KTM04	Gt2 KTM05	Gt2 KTM06	Gt2 KTM08	Gt2 KTM09	Gt1 KTF01	Gt1 KTF02	Gt1 KTF03	Gt1 KTF04
標本登録番号GSJ	R100371	R100372	R100373	R100374	R100375		R100376	R100377	R100378	R100379	R100380		
SiO2	75.68	73.24	73.8	72.16	73.38	71.44	73.75	71.64	74.09	77.65	75.75	77.59	76.02
TiO2	0.026	0.161	0.156	0.097	0.192	0.202	0.17	0.175	0.167	0.049	0.05	0.017	0.02
Al2O3	13.08	13.54	13.1	13.88	13.81	13.75	13.45	13.6	13.51	12.56	12.53	12.56	12.75
Fe2O3(T)	1.7	2.54	2.41	1.69	3.07	3.14	2.73	2.96	2.56	1.35	1.22	0.65	0.99
MnO	0.058	0.077	0.058	0.046	0.083	0.079	0.067	0.073	0.065	0.041	0.042	0.011	0.041
MgO	0.03	0.23	0.25	0.18	0.29	0.3	0.23	0.24	0.27	0.07	0.07	0.05	0.02
CaO	0.33	1.51	1.44	1.17	1.53	1.69	1.52	1.58	1.36	0.53	0.59	0.55	0.63
Na2O	4.25	3.58	3.47	3.69	3.94	3.87	3.61	3.62	3.7	3.93	3.94	4.18	3.36
K2O	4.11	4.32	4.33	4.9	3.71	3.52	3.97	4.01	4.45	4.32	4.23	4.3	5.56
P2O5	0.02	0.05	0.05	0.03	0.07	0.06	0.05	0.06	0.06	0.02	0.02	0.08	< 0.01
Total S	< 0.01	< 0.01	< 0.01	< 0.01	< 0.01	0.03	< 0.01	< 0.01	0.01	0.01	< 0.01	0.02	< 0.01
LOI	0.43	0.78	1.04	0.62	0.46	0.82	0.47	0.52	0.5	0.41	0.43	0.45	0.31
H2O+	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.4	0.4	0.2	0.1
H2O-	0.1	0.2	0.1	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1	< 0.1	< 0.1	< 0.1	< 0.1
Total	99.71	100.03	100.1	98.46	100.54	98.9	100.02	98.48	100.74	100.94	98.87	100.46	99.7

(主要元素)(%)

J	周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2000)				石原ほか(2005)							
岩相	Gt3	Gt2	Gt1	Gt3	Gt3	Gt2	Gt1	Gt1	Gt1	MME		
試料番号	Ш	IV	V	TKM01	TKM03	TKM01	TKM04	TKM05	TKM06	MNK50		
SiO2	76.55	72.61	76.26	76.36	74.87	73.25	76.36	75.35	76.73	57.62		
TiO2	0.03	0.03	0.03	0.02	0.07	0.16	0.05	0.03	0.03	0.81		
Al2O3	12.82	13.91	13.13	12.95	13.32	13.60	12.51	12.99	12.53	14.26		
Fe2O3	0.19	0.45	0.88	0.82	1.26	2.28	1.08	0.64	0.85	15.42		
FeO	0.75	1.50	nd									
MnO	0.05	0.07	0.03	0.04	0.04	0.06	0.03	0.01	0.03	0.43		
MgO	0.03	0.22	0.03	0.02	0.07	0.25	0.08	0.02	0.03	1.25		
CaO	0.45	1.41	0.45	0.46	0.94	1.36	0.69	0.28	0.42	0.69		
Na2O	4.04	3.76	3.87	4.21	3.55	3.78	3.33	3.64	3.66	2.69		
K2O	4.23	4.14	4.61	4.54	5.12	4.23	4.62	5.23	4.82	5.59		
P2O5	nd	0.05	0.01	0.01	0.02	0.07	0.02	0.02	0.02	0.29		
Total S						0.03				0.03		
LOI	0.59	1.32	nd	nd	nd		nd	nd	nd	nd		
H2O+						0.62				1.41		
H2O-						0.12				0.15		
Total	99.73	99.47	99.3	99.43	99.26	99.81	98.77	98.21	99.12	100.64		

ほか、2008). このような観点から、最近、田上・羽栗 の花崗岩ペグマタイト中の褐れん石の Mn 含有量と REE 元素分布パターン及びジルコン中のモナズ石の REE 元 素分布パターンが、I タイプチタン鉄鉱系の花崗岩の特 徴を示すことが示された(Hoshino et al., 2005, 2006). また、日本の花崗岩・花崗岩ペグマタイト中のジルコ ンが総括的に分析された中で、田上花崗岩(羽栗産) 中のジルコンの化学組成も報告された(Hoshino et al., 2010). このジルコン研究を展開して、田上ペグマタイ ト中のジルコンについての解析が現在進行中である(角 谷ほか, 2012).

田上花崗岩体における熱水の挙動の一つの特徴である ペグマタイトは、そのほとんどが本図幅域内の田上花崗 岩体西端部に分布している(中野ほか,2006).本図幅 内での熱水の挙動に関してのもう一つの証左である長石 鉱床は、水口図幅域に多いが本図幅域にも広く点在して いる.これらの長石鉱床とペグマタイト(鉱床)の成因 については、既に須藤(1991,2001)が統一的にまとめ た形成モデルを提起している.しかしこれについては異 論もある(港, 1974). いずれにせよ,ペグマタイトの 産状については,これまであまりに野外での産状記載例 が少ないので,今後はペグマタイト岩石学の観点からの 産状調査が必要とされている(London, 2008). かつて 中司(1945)は「晶洞はペグマタイト岩脈の一部にでき る空洞である」と述べたが,ペグマタイト岩脈そのもの がどのような形態や構造を有するかの具体的解明が残っ たままである.

ペグマタイトの母岩としての本図幅地域花崗岩体の長 石鉱物学として、アルカリ長石の三斜度の解析により田 上花崗岩体と信楽花崗岩体の冷却史の違いを明らかにし た研究(西村ほか、1990)と、長石鉱物学の観点から信 楽花崗岩体と田上花崗岩体の斜長石及びアルカリ長石の 組成と組織を比較した研究(中野ほか、1991)とがあ る.アルカリ長石の平均組成については、その後、信楽 岩体中では Or₈₂Ab₁₈An_{0.1} ~ Or₈₆Ab₁₄An_{0.1}, 田上岩体中で は Or₇₂Ab₂₇An₀₆ ~ Or₈₀Ab₂₀An₀₂であり、両岩体のアルカ リ長石の組成が異なることが確認された(青木, 1998). 最近では、田上花崗岩体中-粗粒相の模式標本地の1

	*					211						,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		て面にも	(2005)				云面	tt F(2006)
岩相	平報古 G±3	Gt2	Gt2	G+2	Gt2	Gt2	Gt2	Gt2	G±2	Gt1	G±1	G±1	G±1	11)示はか G±3	G±3	Gt2	Gt 1	Gt 1	口/床 G±1	・小」エ(2006) MME
試料番号	KTC05	KTM01	KTM02	KTM03	KTM04	KTM05	KTM06	KTM08	KTM09	KTF01	KTE02	KTE03	KTE04	TKM02	ткмоз	TKM01	ткм04	ткмое	ткмое	MNK50
標本登録番号	D100071	D100070	D100070	D100074	D100075		D100070	D100077	D100070	D100070	D100000									
GSJ	R100371	R100372	R100373	R100374	R100375		R100376	R100377	R100378	R100379	R100380									
F	1100	1500	1300	1000	2200	1800	1200	2000	1400	1100	1000	700	1500	1550	730	1120	830	480	590	10900
Li														87	36	60	18	10	17	
Sc	9	7	6	4	8	8	7	7	7	5	5	6	5							
Be	4	4	4	3	9	9	4	4	4	6	6	15	12							
Rb	375	242	224	242	263	274	199	216	243	300	308	290	342	334	172	219	250	355	319	588
Sr	5	121	111	82	118	129	124	143	87	24	20	20	7	4	63	101	33	5	19	11
Rb/Sr	75.0	2.0	2.0	3.0	2.2	2.1	1.6	1.5	2.8	12.5	15.4	14.5	48.9	83.5	2.7	2.2	7.6	71.0	16.8	53.5
Cs	13.6	11.7	9.2	100	14.6	15.3	11.7	13.9	9.1	7.6	6.5	1.1	41.5	16.4	2.8	8.7	2.6	2.3	5.6	20.3
Ba	17	564	409	436	327	504	513	499	338	00	49	121	38	20	330	415	144	10	37	207
Zr	42	142	. 115	18	120	101	148	145	113	02	/4	92	80	00	101	140	20	12	68	400
III NIL	2.9	4.9	4.4	3.0	4.0	4.0	11	10	4.0	3.0	4.3	0.2	10	3.1 19.9	3.0	4.0	3.0	4.0	4.2	1/1
IND	19	17	10	9	14	18	11	10	14	13	14	32	19	13.3	9.9	13.7	10.7	25.0	10.3	6 07
Ta V	4.0	1.7	1.7	1.0 E	17	3.0	2.3	1.5	2.0	3.4 ⁄ E	3.7	0.5	0.7	2.4	0.5 ⁄ 2	2.0	2.2	4.0	1.0	0.07
Ст.	240	< 20	/ 20	190	20	/ 20	140	/ 20	/ 20	120	< 20	< 20	< 20	~~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~	57	32	62	17	41	< 20
G	240	1	20	100	20	20	140	20	20	730	< 1	(20	< 1	53	4.3	7.9	1.9	2.4	57	7
Ni	< 20	< 20	J / 20	< 20	/ 20	/ 20	/ 20	/ 20	/ 20	< 20	< 20	< 20	< 20	-0.7	1 20	/.0	4.0	2.4	0.70	< 20
Cu	< 10	< 10	30	< 10	(10	10	< 10	< 10	< 10	< 10	< 10	(10	< 10	< 0.7	1.50	< 0.4	3 90	0.60	< 0.4	<2
Zn	20	50	20	< 20	40	50	50	10	40	< 20	20	< 20	< 20	21	20	42	3.30	16	10	296
Ph	16	25	12	19	15	28	23	11	16	31	21	36	58	24	26	19	20	25	39	17
6.	23	18	18	19	19	17	19	17	20	18	19	19	18	19	16	18	15	21	17	38.0
Ge	20	2	1	13	2	3	2	2	20	2	2	4	4	29	19	24	22	32	31	3.0
4e	< 5	< 5	. (5	. 5	-	< 5	< 5	< 5	< 5	6	< 5			< 0.5	< 0.5	< 0.5	0.3	< 0.6	< 0.6	< 5
Se					•			()				0		0.3	0.5	0.2	< 0.1	0.2	0.2	0.5
Mo	6	< 2	< 2	4	< 2	< 2	3	< 2	< 2	< 2	< 2	< 2	< 2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	0.30	3.3
Ag	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	< 0.5	C O IL	2010		2012	2010	0.00	<1
In	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2	< 0.2							<0.3
Sn	6	5	5	6	6	14	6	5	4	4	4	3	22	6	1	4	2	1	2	25
Sb	< 0.5	1.2	< 0.5	< 0.5	0.7	1	1.3	1.2	< 0.5	0.8	< 0.5	2.9	< 0.5	-			-		_	1.5
La	12	40.4	27.6	25.9	22.1	27.3	35.1	29	28.3	9.9	9.7	6.3	8	15.7	24.2	24	24.4	23	16.4	90.2
Ce	35.1	82.2	57	51.5	48.1	56.6	71.2	58.9	52.9	24.2	23.8	15.1	19.6	38.1	52	49.7	36.7	25.3	38.7	204
Pr	3.85	9.21	6.86	6.49	5.93	7.01	8.18	6.98	7.17	3.5	3.46	2.45	2.72	4.82	6.08	5.68	5.65	7.49	5.13	29.4
Nd	18.3	32.3	26	25.2	25.1	27.6	29.2	25.6	29.3	19.7	19.9	11	11.1	21.8	24.8	22.6	22	35	23	144
Sm	5.4	6.8	6.1	6.1	6.7	8.2	6.4	5.9	7.5	6.8	6.8	5.7	5.2	7.72	6.39	6.28	5.99	13.5	7.33	49.1
Eu	< 0.05	0.68	0.62	0.48	0.59	0.65	0.7	0.71	0.51	0.13	0.12	0.08	< 0.05	0.04	0.36	0.574	0.247	0.114	0.085	0.164
LREE	74.7	171.6	124.2	115.7	108.5	127.4	150.8	127.1	125.7	64.2	63.8	40.6	46.6	88.2	113.8	108.8	95.0	104.4	90.6	516.9
Gd	6.3	7	6.7	7	8.3	9.5	6.6	6.8	9	10	10.5	7.9	7.8	9.35	6.45	7.35	6.91	16.1	8.92	88.1
Tb	1.3	1.3	1.3	1.3	1.6	1.9	1.2	1.3	1.7	2.3	2.4	1.9	2	1.95	1.15	1.6	1.44	3.24	2	20.4
Dy	8.9	8.5	8.4	8.7	11.1	12.8	7.8	8.3	11.7	17.5	18.3	13.5	14.9	11.8	6.72	10	9.54	19.8	13.1	142
Ho	2	1.9	1.9	1.9	2.5	2.6	1.7	1.8	2.7	4.1	4.3	3	3.5	2.37	1.32	2.06	2	3.83	2.73	32
Er	6.3	6.2	6.1	6.3	7.9	8.2	5.5	5.8	8.6	13.5	14	10.4	11.9	7.84	4.24	6.93	7.03	12.5	9.38	99.4
Tm	0.99	0.95	0.94	0.95	1.27	1.43	0.87	0.89	1.32	2.16	2.23	1.98	2.29	1.32	0.674	1.14	1.18	2.05	1.56	14.1
Yb	6.5	6.1	6	6	8.3	9.9	5.8	5.7	8.6	14.1	14.7	15	17.2	8.15	3.91	7.12	7.47	12.4	9.42	78.4
Lu	0.92	0.88	0.86	0.86	1.18	1.45	0.84	0.81	1.28	1.99	2.1	2.36	2.64	1.29	0.624	1.11	1.18	1.89	1.46	10.5
HREE	33.2	32.8	32.2	33.0	42.2	47.8	30.3	31.4	44.9	65.7	68.5	56.0	62.2	44.1	25.1	37.3	36.8	71.8	48.6	484.9
Υ	50	54	52	52	71	85	48	50	73	115	114	134	125	77.9	40.3	66.6	66.3	114	84.3	792
HREE+Y	83.2	86.8	84.2	85.0	113.2	132.8	78.3	81.4	117.9	180.7	182.5	190.0	187.2	122.0	65.4	103.9	103.1	185.8	132.9	1276.9
L/HREE	0.90	1.98	1.47	1.36	0.96	0.96	1.93	1.56	1.07	0.36	0.35	0.21	0.25	0.72	1.74	1.05	0.92	0.56	0.68	0.40
W	1	4	2	< 1	1	8	1	2	1	1	1	< 1	2	-0.5	-0.5	-0.5	-0.5	17.0	-0.5	2.2
TI	1.6	3.5	1	1.2	2.2	1.2	2.8	1.8	1.1	3.6	2.2	1.2	1.3	2.9	1.5	1.8	1.9	2.6	2.6	5.17
Bi	0.6	59.2	0.5	0.6	42.5	< 0.4	52.7	27.2	0.7	38.3	72.7	13.5	1.2	< 0.3	1	< 0.3	0	1	< 0.3	<0.1
Th	21.7	17.3	16.5	13.5	18.2	20.5	16.4	14.6	14.1	25.4	26.8	25.5	29.7	24.2	18.0	20.5	29.0	30.1	25.1	192
U	4.8	4.9	5	3.5	4.9	6.7	4.3	3.4	4.4	13.2	13.3	9.7	9.7	5.3	3.1	5.3	4.3	4.1	6.0	41.2
Th/U	4.5	3.5	3.3	3.9	3.7	3.1	3.8	4.3	3.2	1.9	2.0	2.6	3.1	4.6	5.8	3.9	6.7	7.3	4.2	4.7

第4.3表b 全岩化学組成(微量成分元素)

(微量元素)(ppm)



第4.35図 田上花崗岩類の SiO₂ 量比較図

	分類名	鉱物名	化学式	英語名	晶系
1	硫化鉱物	方鉛鉱	PbS	Galena	立方晶系
2		閃亜鉛鉱	ZnS	Sphalerite	立方晶系
3		磁硫鉄鉱	Fe _{1-x} S(x=0.1-0.2)	Pyrrhotite	単斜晶系
4		黄鉄鉱	FeS₂	Pyrite	立方晶系
5		輝水鉛鉱	MoS ₂	Molybdenite	六方晶系
6	酸化鉱物	金紅石	TiO2	Rutile	正方晶系
7		轟石	(Mn²⁺, Ca) M⁴⁺₃O₁•(2±x)H₂O	Todorokite	単斜晶系
8		錫石	SnO ₂	Cassiterite	正方晶系
9		軟マンガン鉱	MnO2	Pyrolusite	斜方晶系
10		コルンブ石	(Fe,Mn)(Nb,Ta)₂O₅ (Nb>Ta)	Columbite	斜方晶系
11		イットロンタンタル石	(Fe,Mn)(Ta,Nb)2O6 Ta>Nb(Y,U,Fe ²⁺) (Ta>Nb)2O4	Yttrotantalite	斜方晶系
12		フェルグソン石	Y(Nb,Ta)O₄	Fergsonite	正方晶系
13		サマルスキー石	(Y,Er,Ce,U,Ca,Fe,Pb,Th)(Nb,Ta,Ti,Sn)₂O₅	Samarskite	単斜晶系
14		石英(水晶)	SiO2	Quartz	三方晶系
15		玉滴石	SiO2nH2O	Opal	非晶質
16		磁鉄鉱	Fe₃O₄	Magnetite	立方晶系
17	ハロゲン化鉱物	蛍石	CaF₂	Fluorite	立方晶系
18	炭酸塩鉱物	方解石	CaCO ₃	Calcite	三方晶系
19		菱鉄鉱	FeCO ₃	Siderite	三方晶系
20		バストネス石	(Ce,La)(CO₃)F	Bastnaesite	立方晶系
21		泡蒼鉛	(BiO) ₂ (CO ₃)	Bismutite	斜方晶系
22	タングステン酸塩鉱物	鉄まん重石	(Fe,Mn)WO₄	Wolframite	単斜晶系
23	リン酸塩鉱物	モナズ石	(Ca,La,Na)PO₄	Monazite	単斜晶系
24		ゼノタイム	YPO₄	Xenotime	正方晶系
25	ネソ珪酸塩鉱物	ガドリン石	Be ₂ FeY ₂ O ₂ (SiO ₄) ₂	Gadolinite	単斜晶系
26		鉄ばん石榴石	Fe3 ²⁺ Al ₂ (SiO ₄) ₃	Almandine	立方晶系
27		満ばん石榴石	Mn ₃ Al ₂ (SiO ₄) ₃	Spessartine	立方晶系
28		褐簾石	(Ca,Ce,La) ₂ (Al,Fe ²⁺ ,Fe ³⁺) ₃ Si ₃ O ¹² (OH)	Allanite	単斜晶系
29		ジルコン	ZrSiO₄	Zircon	正方晶系
30		トパーズ	Al ₂ SiO ₄ (F,OH) ₂	Topaz	斜方晶系
31		トール石	TnSiO₄	Thorite	正方晶系
32		ベルトラン石	Be4(OH)2Si2O7	Bertrandite	斜方晶系
33		葡萄石	Ca ₂ Al ₂ Si ₃ O ₁₀ (OH) ₂	Prehnite	斜方晶系
34		ヒンガン石	(Y,Nd,Ce,La,Sm,Gd)BeSiO₄(OH)	Hingganite-(Y)	単斜晶系
35	シクロ(リング)珪酸塩	電気石	Na(Mg,Fe)₃Al₀(BO₃)₃Si₀O₁₀(OH,F)₄	tourmaline	三方晶系
36	鉱物	緑柱石	Be3Al2Si6O18	Beryl	立方晶系
37	1	ミラライト	K₂Ca₄Al₂Be₄Si₂₄O₅₀ • (H₂O)	Milarite	六方晶系
38	フィロ珪酸塩鉱物	白雲母	KaAl₂AlSi₃O10(OH)2	Muscovite	単斜晶系
39		黒雲母	K(Fe,Mg,Al)3(Si3~2.5Al1~1.5)O10 (OH)2	Biotite	単斜晶系
40		チンワルド雲母	K₂(Fe,Li,Al)₅~₀(Si,Al)ଃO₂₀(OH,F)₄	Zinnwaldtite	単斜晶系
41		益富雲母	KLi(Mn,Fe)AlSi₃O₁₀(F,OH)₂	Musutomilite	単斜晶系
42		鉄リチア雲母	K₂Li₃Fe₃(AlSi₃O₁₀) (O,OH,F)	Proto-lithionite	単斜晶系
43		モンモリロナイト	Na _{0.33} (H ₂ O) ₄ (AI,Mg) ₂ [(OH) ₂ Si ₄ O ₁₀]	Montmorilonite	単斜晶系
44		緑泥石	(R ²⁺ ₆ -x− ₃ yR ³⁺ x+2y)(AlxSi ₄ −x)O ₁₀ (OH) ₈	Chlorite	単斜晶系
45	テクト珪酸塩鉱物	アルカリ長石	(K,Na)AlSi₃O₀	Orthoclase	三斜~単斜晶系
46		曹長石	NaAlSi₃O₅	Albite	三斜晶系
47	1	輝沸石	(Ca₀.₅,Na,K)₀(Al₀Si₂7O72) • ~ 24H₂O	Heulandite	単斜晶系
L	1			1	

第4.4表	田上山ペグマター	イト産の鉱物種
-------	----------	---------

つである大津市田代三筋の滝道路沿いの粗粒等粒状黒 雲母花崗岩試料(中野ほか,2003)中のアルカリ長石 (Or₇₀Ab₃₀An_{0.3}, Or₇₃Ab₂₆An_{0.4}, Or₇₅Ab₂₄An_{0.4}の平均組成を 有する3粒子)についての熱史が明らかにされ,その微 細組織形成に果たす熱水変質作用の重要性が明らかにさ れている(橋本ほか,2005).

一方, 黒雲母については, かつてその化学組成の特徴 が湿式分析により Fe/(Fe+Mg) 比と Mn 含有量の観点 から明らかにされた(立川, 1964; 立川・藤本, 1967). 中野ほか(1991) は, 田上花崗岩体と信楽花崗岩体(い ずれも水口図幅域)の黒雲母についてのX線マイクロ アナライザーによる分析値を記載した.最近では,地質 学の観点から琵琶湖南部周辺の各花崗岩中黒雲母の化学 組成の特徴を解析し,FeO-MgO図上で花崗岩体ごとの 組成が明瞭に異なりかつ同一トレンド上で変化すること が示されたが(Hiraoka, 1997a, b, 1998),田上花崗岩 体の黒雲母だけはそのトレンドから外れていた.現在, 田上花崗岩体とそのペグマタイト中の黒雲母の化学組成 の解析が更に詳しく行われている(花田ほか, 2011;中 野ほか,印刷中).それによると,田上花崗岩体の黒雲



 第4.36図 田上花崗岩体中の黒雲母の MgO-FeO 図 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2008)の第15
図をもとに、田上花崗岩体の黒雲母の組成範囲を 更新修正。

母も, 琵琶湖周辺花崗岩の黒雲母の組成変化トレンドに のる化学組成を有する(第4.36図). Hiraoka (1997a, b, 1998)との相違は, 黒雲母試料の風化の程度の差による 違いである可能性が高い.

4.8 本図幅地域火成岩類の位置づけ

本図幅内の非顕晶質細粒斑状花崗岩脈(Pg)は、かね て記載され(宮村,1959)また地質図で表現されてきた(宮 村,1959;上治、1962)ように、比叡山地域からの南北 方向の伸びが山科四ノ宮~音羽山地で弧状になり大津市 に入るとほぼ東西方向の伸びに変わることが、今回の調 査により二重の岩脈群としてより詳しく確認された.本 岩脈は、琵琶湖南部周辺の環状に分布していると見なさ れる各岩体の非顕晶質細粒斑状花崗岩と岩相的に同じで あり、また年代的にもほぼ同じ時期の活動の結果と考え られる。今回調査した本図幅内の非顕晶質細粒斑状花崗 岩脈が弧状をなして比叡花崗岩体から田上花崗岩体へと 連なる事実を含めて、琵琶湖南部周辺の各花崗岩体(鈴 鹿~比良花崗岩体~比叡花崗岩体~田上花崗岩体)を通 しての環状岩脈群の連続性が更に確認された. これらの 岩脈群は, 琵琶湖コールドロン形成時に発生した環状割 れ目を充填したものであると考えることができる(周琵 琶湖花崗岩団体研究グループ, 2008: 天白ほか, 未公表 資料).

本図幅域内に分布する花崗岩については,瀬田川以西 では岩脈状の分布形態であることがこれまでに示されて おり(宮村,1959:石田ほか,1980),今回の調査でそ のことがより詳しく確認された.すなわち,これまで 同一岩相を示すと考えられてきた瀬田川以西の花崗岩 が,瀬田川以東の田上花崗岩体と同様,中-粗粒相(Gt3) と中-粗粒斑状相(Gt2)の2岩相からなることが今回 新しく明らかになった.瀬田川以西の岩脈状の花崗岩 は,上記岩相中に岩脈状に産する細粒-細粒斑状相(Gt1) を含めて,瀬田川以東の餅盤状の田上花崗岩体の岩相構 成と同じである.瀬田川以東の田上花崗岩体の分布形状 は,上記非顕晶質細粒斑状花崗岩の弧状岩脈の伸長方向 と調和的な関係を有しているので,琵琶湖コールドロン 形成における花崗岩マグマの役割を考える資料となる.

本図幅では、花崗岩に伴うペグマタイト、球顆花崗岩、 細粒暗色包有岩及び熱水変質花崗岩について、主として その産状を記載したが、今後は花崗岩体の熱史の観点か らの総合的な検討が必要である。そのような研究は、琵 琶湖周辺のほかの花崗岩体あるいはより広域的な観点か らの他地域の花崗岩体との火成活動の特徴の比較検討を 行うためにも必要と考えられる。

今回の図幅域内の火成活動の更なる位置づけの問題と して,上記非顕晶質細粒斑状花崗岩脈とは異なる地域(字 治市西方近辺)での丹波帯に貫入する珪長質・苦鉄質の 岩脈群の存在がある.それらは,岩脈の伸びと分布の両 方に関して特定の方向性を示している.しかも,苦鉄質 岩脈群の方向性が珪長質岩脈群の東西方向とは異なりお よそ南北方向であることから,その活動時期やテクト ニック場がどのようなものであったかが,より広域的な 観点からの今後の重要な問題である.

(竹内圭史)

5.1 概要と研究史

綴喜層群は、本図幅地域南東部の宇治田原町地域に分 布する、砕屑岩からなる海成中新統である。綴喜層群な ど西南日本に広く点在する前期中新世後期-中期中新世 初頭の海成中新統は、第一瀬戸内累層群と総称されて いる(石田・佐藤、1987;吉田、1992;日本地質学会、 2009b 参照).

宇治田原町地域の中新統については、古くは中村 (1927) に言及があり、石井(1932)の地質図で分布が 示された. 綴喜層群の名称は地方名の綴喜郡にちなんだ もので、池邊(1949) が最初に綴喜累層として使用し、 藤田・中世古(1950) はこれを綴喜層群と仮称した.

石田ほか(1954)は綴喜層群を詳しく研究し、本層群 を奥山田累層・湯屋谷累層に2分し定義・記載した.更 に奥山田累層を川上礫岩層・宮村砂岩層・栢凝灰質泥岩 層の3部層に、湯屋谷累層を塩谷砂岩層・田原花崗質砂 礫岩層の2部層にそれぞれ細分した.Itoigawa(1956)は、 綴喜層群を川上基底礫岩・宮村砂岩・栢泥岩・塩谷砂岩・ 田原シルト岩に区分し、中部3層から貝化石48種を報 告した.上治(1961b・1962)は、石田ほか(1954)の 層序・地質図を踏襲しつつも、石田ほか(1954)が不整 合とした綴喜層群南縁については石井(1932)と同様に 全て断層とした地質図を示した.

しかし 1960 年代以後は、巡検案内書や京都大学の修 士論文がある他には詳細な研究はなされておらず、石田 ほか(1980, 1984b)の5万分の1地質図では石田ほか (1954)の地質図が概ね踏襲されている。

綴喜層群は貝化石を多産することでも知られている. 貝化石などについての報告は,Yokoyama (1930)が37 種を報告したことに始まり,池邊 (1949),窪田 (1951), 石田ほか (1954),Itoigawa (1956),西川 (1972)がある. 石田ほか (1954),Itoigawa (1956)は貝化石の瑞浪層群・ 鮎河層群との共通性を指摘し対比している.

綴喜層群は微化石による生層序学的研究はされていないが,吉田(1992)は浮遊性有孔虫層序により第一瀬戸 内累層群を対比する中で,綴喜層群を奈良県・三重県の 山粕層群・藤原層群に対比し,前期中新世の後期から中 期中新世初頭にかけての地層とした.佐藤・室生団体研 究グループ(2009)も同様に対比している.

石田ほか(1954)の部層単位での岩相区分は,彼らの 記載でも述べられているように全域には連続しない. そ のため本報告では,従来の部層区分は踏襲せず奥山田 層・湯屋谷層に区分するにとどめた.地質図では奥山田 層を、下位の礫岩を主とする岩相(To)と、上位の砂岩・ シルト岩を主とする岩相(Ts)に2分して示した.To はおおむね石田ほか(1954)の川上礫岩層に相当し、Ts は宮村砂岩層・栢凝灰質泥岩層を併せたものにほぼ相当 する.

5. 2 奥山田層(To, Ts)

地層名 石田ほか(1954)命名記載.

模式地 石田ほか(1954)は奥山田層の3つの部層毎に 模式地を指定しており,川上礫岩層は奥山田南方西の沢, 宮村砂岩層は奥山田小学校下の河床, 栢凝灰質泥岩層は 奥山田の国道沿いである.いずれの模式地とも現在でも よく観察できるほか,奥山田層全体としては奥山田川沿 いに露頭が見られる.

分布 字治田原町地域に国道 307 号線に沿って東西約5 kmの範囲に分布する. 殻池峠南西の林道沿いにも礫岩 の小分布がある.分布の西端は,宇治田原工業団地の南 縁で大阪層群長山層の下位に砂岩が観察され,以西では 確認されない.

東西に延びる湯屋谷断層及び裏白断層を境に,北半部 は南傾斜,南半部は北傾斜の向斜状の地質構造をしている.

層序関係基盤の丹波帯付加コンプレックスを不整合に 覆う.不整合露頭は,川上礫岩層の模式地である奥山田 南方の沢(石田ほか,1954)で観察される(第5.1図). 本図幅の調査では,他には不整合面を観察できる露頭は 見られなかった.

級喜層群は分布域の北部・西部で鮮新世の大阪層群大 福礫部層・長山層に覆われる。

層厚奥山田の東で140 m, 湯屋谷-奥山田間で約120 m. 岩相 奥山田層は, 下部(To)は主に礫岩からなり砂岩・ 砂質シルト岩を伴い,中上部(Ts)は砂岩・塊状シルト 岩を主とする.

下部(To)の礫岩は、径数 cm ~ 20 cm の丹波帯付加 コンプレックスの砂岩・泥岩、花崗岩などの礫を含み、 ときに花崗岩の人頭大~2m大の巨礫を含む.基質は淘 汰の悪い泥混じりの砂で花崗岩起源の石英・長石粒を多 く含む.礫岩の厚さは地域により数m~数十mとかな り異なり、不整合に近い層準でもしばしば砂岩や砂混じ りシルト岩が厚く発達している.したがって、本報告の 地質図における To と Ts の境界線は、礫岩の上限を示す 便宜的なものである.奥山田西1kmのトンネル東口で は厚さ1~2mで礫岩が極細粒砂岩と互層しており,分 布の北縁部の下部(To)の厚さはこの周辺で最も厚く なっている.礫岩は一般に上位へ花崗岩起源の石英・長 石粒の多い粗粒砂岩,または不淘汰な砂混じりシルト岩 あるいは雲母片に富むシルト岩に漸移する.礫岩の上位 に白色珪長質凝灰岩ないし凝灰質砂岩が見られることが あるが、連続性を確認できていない.

奥山田の南方,湯屋谷断層の南側地域には主に礫岩と 細礫混じり砂岩が分布する.川上礫岩層の模式地の沢の 不整合露頭では,丹波帯の地層を覆う不整合面の走向傾 斜は65~70°W,30~55°Nである(第5.1図).礫は 最大径1.2mの花崗岩が多く,丹波帯の砂岩礫・泥岩角 礫を含む.基質には花崗岩起源の石英・長石粒は少ない. より上位の礫岩は,礫径5~10 cmで最大30 cmの花崗 岩・丹波帯砂岩礫のほか,径数 cm以下のチャート礫も 含む.礫岩は上位へ塊状細粒砂岩に漸移している.

殻池峠南西の尾根に小分布する礫岩は,径3~8 cm, 最大20 cm で風化してクサリ礫化しており古琵琶湖層群 の信楽礫部層に似ているが,一部で径0.5~1.5 mの花 崗岩礫が含まれることから奥山田層である.

奥山田層の中上部(Ts)は、青灰色塊状の細粒砂岩な いしシルト岩からなる(第5.2図).全体として下位の 砂岩から上位のシルト岩へ細粒化している.塊状砂岩 にはしばしば粗粒砂岩・礫岩・貝化石密集層が挟在す る.上部の灰色塊状シルト岩には礫岩層などの挟在が少 なく、節理系が見られることがあり走向傾斜が判定しに くい.塊状シルト岩の一部には白色珪長質凝灰岩ないし 凝灰質シルト岩が挟在し、これは石田ほか(1954)の栢 凝灰質泥岩層にあたる.凝灰岩は奥山田東の砂防堰堤の 道沿いで厚さ20m以上のほか、茶屋トンネル北西の尾 根で数mの露頭が見られたがこれらの連続性は確認で きていない.分布域西部では露出が悪いため、塊状シル ト岩中の凝灰岩ないし凝灰質部の有無は観察できていな い.

地学団体研究会京都支部編(1976, 1978, 1990)など の巡検案内書で紹介された国道307号線沿いの露頭は, 今日では覆われてしまった個所も多い.

化石 石田ほか (1954) は, 宮村砂岩層の特徴として貝 化石 Katelysia nakamurai の化石床を, また栢凝灰質泥岩 層から Nuculana kongiensis · Phaxas izumoensis などを報 告している. Itoigawa (1956) は, 宮村砂岩を Nipponomarcia 群集, 栢泥岩を Lucinoma-Acila 群集 · Felaniella-Dosinia 群集で特徴づけた. このほか, 池邊 (1949) は 湯屋谷より貝化石 Nuculana · Chlamys とともに植物化石 Comptoniphyllum を, 窪田 (1951) は Vicaryella · Nuculana など貝化石 5種を, 西川 (1972) は湯屋谷の東より 魚鱗化石をそれぞれ報告した. 貝化石は化石床や礫岩中 に混在する産状以外にも, しばしば塊状砂岩中に殻溶解 跡化石が散在している.

また,清水ほか(1966)は奥山田西から続成作用起源 のアラレ石を報告している.

地質時代 前期中新世の後期から中期中新世初頭に対比 されている (吉田, 1992).







第5.2図 奥山田層上部の塊状細粒砂岩

砂岩は新鮮面では灰色で、風化面は褐色、一部で海 成層に特有の硫黄の黄色を示す。角張って大きく割 れ、礫岩・粗粒砂岩層や貝化石層が挟在しない露 頭では塊状無層理である。奥山田層の砂岩は全体と して上位へ次第にシルト岩に漸移し、シルト岩も色 調・割れ方などは砂岩と同様である。ハンマーの長 さ 28 cm. (奥山田の道路沿い:付図 B)

^{9 あんたに} 5.3 湯屋谷層 (Ty)

地層名 石田ほか(1954)命名記載. 地層名は「ゆあん たに」であるが、地名は平易に「ゆやだに」と読む.

模式地 石田ほか(1954)は湯屋谷層の2つの部層毎に 模式地を指定しており,塩谷砂岩層は奥山田の道路沿い, 田原花崗質砂礫岩層は奥山田南の河床である.しかしこ れらは近年露頭が悪くなっており,湯屋谷層は奥山田と 湯屋谷の間の農道沿いや茶屋トンネル西の沢でよく観察 される.

分布 奥山田層の上位に,湯屋谷南方から奥山田南方を 経て茶屋トンネルまで分布する。

層序関係奥山田層に整合に重なる.奥山田層の塊状シ ルト岩に,礫岩を多く挟む岩相が重なる層準を境界とす る.この境界は奥山田と湯屋谷の中間の農道沿いや茶屋 トンネル西の沢で観察される.

層厚上限は不明で,150m以上.

岩相 下部は礫岩層を挟む塊状砂岩を主とし,上部は主 に礫岩からなる。

奥山田川沿いでは,奥山田の塊状シルト岩の南側に, 湯屋谷層の塊状砂岩が分布する.両者は整合に重なると 考えているが境界部は観察できておらず,裏白断層が通 る可能性もある.砂岩中にはしばしば厚さ1~2m,礫 径5cm以下の礫岩層が挟在し,礫岩中に貝化石破片が 密集している場合もある.これらの礫岩層は南に25~ 30°,一部では60°傾斜している.

奥山田川の支流である茶屋トンネル西の沢では,奥山 田層の塊状シルト岩の上位に,厚さ10~50 cmの貝化 石床・礫岩を挟む湯屋谷層の塊状細粒砂岩が30°北傾斜 で重なり,その上位は単層の厚さ0.5~1 mの礫岩・シ ルト岩が北傾斜で重なる.この礫岩が主となる層準から 上位が石田ほか(1954)の田原花崗質砂礫岩層に相当す る.礫岩の礫は丹波帯の暗青灰色の砂岩・泥岩が主であ るが,最上部では花崗岩礫を主とする白色の礫岩の転石 も見られた.より北方の沢の最奥には再び奥山田層の塊 状シルト岩が分布することから,裏白断層が湯屋谷層の 北限を限っているものと考える.

奥山田と湯屋谷の間の南北に延びる農道沿いや湯屋谷 から東への道路沿いでは、北寄りに奥山田層の塊状シル ト岩が分布し、その上位(すなわち南側)に湯屋谷層の 厚さ5m以上の礫岩が重なる.ただし、礫岩の上位に も二枚貝化石(殻溶解跡)を含む奥山田層類似の灰色塊 状シルト岩が見られる.その南の湯屋谷断層に近い地域 には、層理を示す灰白色細粒砂岩・砂質シルト岩が分布 する.更に上位に当たる東方の丘陵の露頭では、単層の 厚さ50 cm 程度の砂岩シルト岩互層の上位に礫岩が重な る.この礫岩は石田ほか(1954)の田原花崗質砂礫岩層 に相当するが、露頭が限られており詳細は不明である. 化石 石田ほか(1954)は、主に塩谷砂岩層から貝化石 Protorotella yuantaniensis · Katelysia nakamurai などの化 石床を報告している. Itoigawa (1956)は、塩谷砂岩を Prototella - Anadara 群集で特徴づけた.本図幅の調査で は、奥山田川沿いなど石田ほか(1954)の化石産地のほ か、奥山田のバイパス道路工事現場で湯屋谷層下部の細 粒塊状砂岩中に貝化石密集層が見られた(第5.3図). 地質時代 前期中新世の後期から中期中新世初頭に対比 されている(吉田, 1992).



第5.3図 湯屋谷層下部の貝化石床 砂岩転石の層理面に沿って Anadara sp. が密集している.転石のため層理面の上面なのか下面なのか は不明.レンズキャップの径55 mm.(奥山田のバ イパス道路工事現場:付図 B)

(水野清秀)

6.1 研究史と概要

近畿地方の中軸部は、近畿三角帯(Kinki Triangle)と 呼ばれ(Huzita, 1962),大阪平野,奈良盆地,京都盆地, 近江盆地などの平野・盆地と生駒山地,比良山地,信楽 山地,鈴鹿山脈などの山地が交互に分布し,明瞭な地形 境界には断層が存在していることが多い.このような地 形配列は,鮮新世以降に形成されてきたものである(水 野ほか,2009aなど).また平野地下や周辺の台地・丘 陵地には鮮新世以降に堆積した地層が広く分布してい て、中新世の堆積物である第一瀬戸内累層群に対して, 第二瀬戸内累層群とも呼ばれている(池辺,1957).沖 積層や段丘堆積物及びそれらと同時代の地層を除いて, 大阪平野・奈良盆地・京都盆地及びその周辺の丘陵地に 分布している地層群は大阪層群,近江盆地及びその周辺 と南方の甲賀,伊賀地域に分布している地層群は古琵琶 湖層群と呼ばれている(市原編,1993など).

6.1.1 古琵琶湖層群の研究史と概要

古琵琶湖層群の層序学的な研究は、中村(1929)に 始まり、彼は段丘堆積物より古い地層を古琵琶湖層と その上位の山砂利層に区分した.その後,池辺(1933, 1934), 広瀬(1934) などによる地域的な層序学的調査 を経て、Takaya (1963) によって古琵琶湖層群の名称が 用いられ、琵琶湖北西岸地域を除くほぼ全域の地質図と 層序が示された、その後は、火山灰層などを鍵層として 各地域の詳細な層序や地質構造、地層対比などの調査が 行われた. 琵琶湖南方の伊賀・甲賀・信楽地域では近 藤 (1968), 横山ほか (1968, 1989, 1995), Yokoyama *et al.* (1980, 1982), 横田ほか (1978), 川邊 (1981, 1986), Kawabe (1989), 横山 (1989), 近江盆地南部の 大津~湖南~日野~多賀地域では、鎌掛団研グループ (1972), Ishida et al. (1976), 田村ほか (1977, 1993), 古琵琶湖団体研究グループ(1977, 1981, 1992), 横山・ 雨森(1991),雨森ほか(1993),琵琶湖西岸の堅田丘陵 ~ 高島地域では、東郷 (1971),林 (1974), Yokoyama (1975), Ishida and Nakagawa (1978), Yokoyama et al. (1979), 木谷ほか (1992) などによって層序や地質 構造が示されている. これら以外で火山灰層の対比に 基づき, 地層の層準や年代に言及している論文として, Yokoyama (1969), Yoshikawa (1984), 山崎ほか (1996), 吉川・檀原 (1996), 田村ほか (2005), 里口・服部 (2008) などがある.また古地磁気層序については、更に Ishida

et al. (1969), Hayashida et al. (1978), Hayashida and Yokoyama (1983) など、フィッション・トラック年 代については, 西村・笹嶋 (1970), Nishimura and Yokoyama (1974, 1975), Yokoyama et al. (1977), 鈴木 (1988) などの論文がある. 島倉(1966) は. 古琵琶湖 層群の広範囲にわたって、花粉分析を行っている.近 江盆地や琵琶湖の深層ボーリング調査も行われていて, 主なものは守山1,000 m ボーリング (Yokoyama *et al.*, 1976;横山ほか, 1980), 琵琶湖 1,400 m ボーリング (竹村・ 横山, 1989; 檀原ほか, 2010), 烏丸深層ボーリング(林 ほか、1999;吉川、1999)である。また琵琶湖西岸の大 津市雄琴地区での長尺コア(アクティバコア)の火山 灰を主とする分析が行われている(山崎ほか, 1994). 古琵琶湖層群全体を総括した文献としては、横山ほか (1979)、林・川辺(1993)、吉川・山崎(1998)、橋本ほ か(1998), 里口(2009)などがある. 更に古琵琶湖層 群の分布を示した5万分の1地質図幅として以下の地域 が出版されている. 熊川 (中江・吉岡, 1998), 竹生島 (中 江ほか, 2001), 北小松 (木村ほか, 2001), 彦根西部 (石 田ほか, 1984a), 彦根東部 (宮村ほか, 1976), 京都東 北部(木村ほか, 1998),近江八幡(吉田ほか, 2003), 御在所山(原山ほか, 1989), 水口(中野ほか, 2003), 亀山(宮村ほか, 1981), 奈良(尾崎ほか, 2000), 上野(川 辺ほか, 1996), 津西部 (吉田ほか, 1995), 名張 (西岡 ほか,1998). これらのほか,本図幅の範囲に限定すると, 石田ほか(1980)による「滋賀県南部地域地質図」や石 田ほか(1984b)による表層地質図も編集されている.

これらの既存研究から明らかにされていることは、古 琵琶湖層群は積算層厚1,500m以上に及ぶ,主として河 川〜湖沼成の堆積物で、初期の堆積盆地は、伊賀地域に あったが、段階的に堆積場が北方に移動し、現在の堆積 盆地は琵琶湖及びその周辺地域であるということである (横山ほか, 1979;川辺, 1989;林・川辺, 1993;吉川・ 山崎, 1998; 里口, 2009 など). 古琵琶湖層群の地層区 分は,基本的に火山灰層を鍵層として組み立てられた, このような堆積盆地の変遷とそれに対応した層相の違い に基づいて行われている. 古琵琶湖層群の累層オーダー での区分は、研究者により若干異なっているが、本図幅 では吉川・山崎(1998)による層序区分、すなわち下位 より上野層,伊賀層,阿山層,甲賀層,蒲生層,草津 層,堅田層,伊香立層に分ける区分を用いる.上野層に は広域火山灰の坂井火山灰(約4.1 Ma)に対比される 市部火山灰層が挟まっていて(田村ほか,2005)、古琵



第6.1図 古琵琶湖層群・大阪層群の地域ごとの層序対比図

琶湖層群基底の年代は、それより古い.また、古地磁気 層序では、上野層中にギルバート-ガウス境界が、甲賀 層と蒲生層のほぼ境界にガウス-松山境界が、堅田層中 に松山-ブリュン境界があるとされている(Ishida *et al.*, 1969; Hayashida *et al.*, 1978; Hayashida and Yokoyama, 1983; 内山、1996 など)、本図幅内では、阿山層から堅 田層(あるいは伊香立層)までの層準の地層が露出して いると考えられる.

本図幅内の古琵琶湖層群は,信楽(朝宮)地域と大津 ~草津地域に分かれて分布している.地域ごとの層序区 分及び対比・年代論の研究史と概要は以下のとおりであ る.また層序対比図を第6.1図に示す.

信楽 (朝宮) 地域

本図幅内南東部の信楽地域(朝宮丘陵)に分布する 古琵琶湖層群は、どの模式地とも接していないために、 その層準については不明な点が多かった.近藤(1968) は、信楽地域の古琵琶湖層群を下位の伊賀累層と、上位 の信楽礫層に区分した.横田ほか(1978)は、信楽礫層 に湖東流紋岩起源の礫が多量に含まれていることに注目 し、同様な礫種組成を示す島ヶ原地域の北又礫層(近藤、 1968)、宇治田原地域の大福礫層(石田ほか、1954)と の対比を行った.北又礫層の層準は、古琵琶湖層群最下 位層準の島ヶ原(累)層あるいは上野(累)層に重なる ことから、信楽礫層も伊賀(累)層層準と推定された(横 山, 1989: Kawabe, 1989:中野ほか, 2003 など). また, 横山ほか(1995)は、信楽地域の古琵琶湖層群を、下位 より江田礫層、信楽累層、信楽礫層に区分し、信楽累 層に挟まる火山灰層から4.8 ± 0.5 Maのフィッション・ トラック(FT)年代値を報告した.しかし水野(1999)、 中野ほか(2003)は、信楽礫層より下位の地層(中郷部層) 中に挟まる中郷火山灰層のFT年代を3.18 ± 0.18 Maと 求めた.また水野(1999)はこの火山灰層を甲賀地域の 馬杉火山灰層(横山ほか, 1968)に対比した.馬杉火山 灰層準は、阿山層(Kawabe, 1989)中に位置することか ら、信楽礫部層は更に上位の甲賀層(Kawabe, 1989)層 準の可能性が高い.なお、朝宮地域に分布する古琵琶湖 層群は、本報告では中野ほか(2003)に基づき、下位よ り中郷礫泥部層、信楽礫部層に区分する(第6.1図).

大津~草津地域

琵琶湖南方の草津〜瀬田〜石山〜膳所地域の古琵琶湖 層群の層序については、Ishida et al. (1976),古琵琶湖団 体研究グループ(1981,1992)によって詳しく調べられた. Ishida et al. (1976)は、瀬田〜石山〜膳所地域の古琵琶 湖層群の層序を、下位より関ノ津(累)層、南郷層、石 山層、神領層、瀬田層、園山層、膳所層、茶臼山層に区 分した(原典は英文).このうち関ノ津層の分布範囲は、 本報告では大阪層群に含める(6.4.1.1参照).古琵琶 湖団体研究グループ(1992)は、Ishida et al. (1976)を 修正して,関ノ津層を除いた地層群を下位より南郷互層, 石山礫層,寺辺砂層,国分互層,富士見台互層,茶臼山 礫層の各部層に区分した.そして南郷互層を蒲生累層, 石山礫層を草津累層の層準に対比し,寺辺砂層から上位 を膳所累層とした.吉川・山崎(1998)は,膳所累層を 広域対比に基づいて堅田累層に含めている.

東方に位置する草津地域については、国分互層から下 位の層準が連続しているが、古琵琶湖団体研究グルー プ(1981)は、更に東方の石部地域を含めて、石山~膳 所地域よりも先に調査を行っていた. そして図幅内に分 布する地層を下位から荒張互層、浅柄野砂層、瀬田礫層 に区分した. また, 古地磁気測定からは, 荒張互層上部 ~浅柄野砂層の層準にオルドバイ正帯磁亜帯が位置する ことを明らかにした. この層準は石山地域の南郷互層層 準にも追跡され(横山ほか, 1979;古琵琶湖団体研究グ ループ, 1992), その層準内の桐生Ⅱ火山灰層は湖東地 域の古琵琶湖層群の中火山灰層,大阪層群の三ツ松火 山灰層に対比されている (Yoshikawa, 1984). なお, 中 火山灰層は房総半島上総層群の Kd44 テフラに対比され る広域テフラ(Kd44 - 中テフラ)である(鈴木・中山, 2007). また瀬田礫層の最下部に挟まる五軒茶屋火山灰 層は、広域テフラである恵比須峠-福田テフラ(長橋ほ か、2000:約1.75 Ma) に対比されている (Yoshikawa, 1984). 国分互層に挟まれている池の内Ⅱ火山灰層は、 大阪層群のピンク火山灰層に対比されていて(古琵琶湖 団体研究グループ, 1992), このテフラはハラミヨ正帯 磁亜期中に噴出した広域テフラ(猪牟田ピンクテフラ: 町田・新井、2003)として認識されている。

このような火山灰層の対比に基づくと、荒張互層の層 準は、ほぼ南郷互層に、また瀬田礫層の層準は、石山礫 層の層準にほぼ対比され、層相も類似していることから、 本図幅では、大津~草津地域の広域にわたって、南郷礫 泥部層,瀬田礫部層という名称を用いた.石山地域の寺 辺砂層については、確認できる露頭がほとんどなかった ため、この層準を瀬田礫部層に含めた. また草津市桜ヶ 丘から追分にかけての地域では, 瀬田礫部層上部の層相 は、シルト-粘土層と砂層の互層が主体であるため、こ の地域を中心に分布する地層を新たに桜ヶ丘砂泥部層と 命名した. そのほかは基本的には古琵琶湖団体研究グ ループ(1981, 1992)に従い、瀬田~草津地域では下位 より, 南郷礫泥部層, 浅柄野砂部層, 瀬田礫部層, 桜ヶ 丘砂泥部層に、また膳所~石山地域では、下位より南郷 礫泥部層, 瀬田礫部層, 国分礫泥部層, 富士見台砂泥部 層, 茶臼山礫部層に区分した. そして吉川・山崎(1998) の区分に従い、南郷礫泥部層を蒲生層、浅柄野砂層から 桜ヶ丘砂泥部層までを草津層、国分礫泥部層から茶臼山 礫部層までを堅田層に含めた(第6.1図).

6.1.2 大阪層群の研究史と概要

京都,大阪地域などの鮮新-更新統については, Nakamura (1926)、中村 (1927) が古期洪積層の記述 を行ったのをはじめ、京都地域で石井(1932)、三木 (1933)、中村ほか(1936)、鳥居(1948)などが地層や 化石の記載を、山根(1930)が大阪市の地下層序区分を 行った.大阪層群研究グループ(1951)は、大阪・京 都・奈良の各盆地及びその周辺の丘陵地を構成し, 段丘 堆積物や沖積層に覆われる未固結の地層を総称して,大 阪層群と命名し、模式地を大阪の千里丘陵とした、その 後、播磨盆地や淡路島に分布する同様な地層群も、大阪 層群に含められた(池辺, 1959;池辺編, 1961). この 頃から,大阪層群に挟まる海成粘土層や特徴的な火山灰 層を鍵層にして、各地で詳細な層序学的研究や地質図作 成が行われるようになった. 大阪平野周辺では, Itihara (1953), 市原ほか(1955), 高谷・市原(1961), 原田ほ か(1963)、茨木団体研究グループ(1966)、竹辻・市 原(1967)、西山団体研究グループ・桂高校地学クラブ (1970), 光明池団体研究グループ (1971), 吉川 (1973), Itihara et al. (1975), 岡 (1978), 飯田 (1980a), 横山ほ か(1981),市原ほか(1984),大阪層群最下部団体研究 グループ(1992)など、京都盆地周辺では、深草団体研 究会 1962), 西山団体研究グループ (1967), 飯田 (1980b), 三田村(1992, 1993), 奈良盆地周辺では, 粉川(1954), 坂本 (1955), 池辺ほか (1971), 中川 (1973), 横山・ 中川 (1974, 1984), 染川·吉川 (1983), 三田村 (1992, 1993),河村(1993)などの論文がある。また、平野地 下の深層ボーリング調査としては、大阪平野の深層ボー リング (Ikebe et al., 1970; 三田村ほか, 1998; 吉川ほ か, 1997, 1998 など), 関西国際空港地盤調査(中世古 編, 1984)、神戸地域の深層ボーリング(関西地盤情報 活用協議会, 1998; 吉川ほか, 2000 など), 京都盆地の 深層ボーリング(関西地盤情報活用協議会, 2002;京都 市,2003b)などが平野地下の反射法探査,重力探査な どの物理探査とともに行われ、まとめられている、関連 した5万分の1地質図幅として,京都西北部(井本ほか, 1989), 京都東北部 (木村ほか, 1998), 広根 (松浦ほか, 1995),京都西南部(宮地ほか,2005),大阪西北部(藤田・ 笠間, 1982), 大阪東北部 (宮地ほか, 2001), 奈良 (尾 崎ほか, 2000), 大阪西南部 (藤田・前田, 1985), 大阪 東南部 (宮地ほか, 1998), 桜井 (西岡ほか, 2001), 岸 和田(市原ほか, 1986) などが出版されている. これら のほか、本図幅の範囲に限定すると、石田ほか(1980) による「滋賀県南部地域地質図」や石田ほか(1984b) による表層地質図も編集されている.

大阪層群は、日本における鮮新・更新統の模式地のひ とつとして、特に海成粘土層を汎世界的な温暖期に対応 させて層序学的な研究が進められた、岩相層序のほかに、 古地磁気層序、年代測定、大型植物化石・花粉化石層

序,哺乳動物化石層序などの研究が行われ,市原・亀井 (1970), 市原編 (1993a), 吉川・三田村 (1999) などに まとめられている。大阪層群の累層区分は、古琵琶湖層 群とは異なり、地域によって異なった地層名が用いられ ている.一方,挟在する福田火山灰層及びアズキ火山灰 層層準を境界として、大阪層群を最下部、下部、上部に 区分する分け方も、用いられている(市原, 1993b;市 原ほか,1991). この区分は、メタセコイア植物群(市原, 1960) 繁栄期の要素が、2009年以前の定義による鮮新 / 更新統境界に近い福田火山灰層層準近傍で消滅し、生き 残ったメタセコイアを主体とする消滅期の要素が、下部 / 中部更新統境界に近いアズキ火山灰層の下位で消滅す る植物化石層序に対応させたものであり、陸成層におけ る生層序と広域テフラをうまく使った区分法である.た だし, 最近の研究によると, いわゆるメタセコイア植物 群繁栄期を特徴づける植物の多くが新しい定義の鮮新 / 更新世境界(2.588 Ma)付近までに消滅しており(百原, 2010), 広域テフラも鮮新・更新世境界に近い朝代火山 灰層(吉川, 1976)が注目されている(里口, 2010). 大阪平野に分布する海成粘土層は下位より Ma-1 (マイ ナス1)~ Mal3層と呼ばれ、鍵層となっていて、Ma-1 層はおよそ1.3 Ma, Ma13 層は完新世の海成層である(市 原編, 1993a など).

本図幅内の大阪層群は、主に宇治田原〜大石丘陵、宇 治丘陵、桃山〜黄檗丘陵に分けて研究されてきた。地域 ごとの層序区分及び対比・年代論の研究史と概要は以下 のとおりである。また層序対比図を第6.1図に示す。

宇治田原~大石丘陵

京都盆地と近江盆地の間に位置する宇治田原丘陵から 田上・大石丘陵に分布する鮮新-更新統は、古琵琶湖層 群と大阪層群のどちらに属するのか、明確に定義されて いない.この地域の堆積盆地が当時どのように分布して いたかを考えると、古い地層は信楽地域と連続していた 可能性があるが、大部分の地層は宇治丘陵から更に奈良 盆地へとつながっていたと考えられることから、大阪層 群に属するものとする.大津市関ノ津地域に分布する地 層は、その北方の瀬田~石山地域の古琵琶湖層群とも連 続していた可能性が高いが、便宜上ここから南の地域に 分布する地層を大阪層群と呼ぶ.

宇治田原~大石地域の大阪層群は、飯田(1980b)に まって詳細に調査されていて、下位より大福礫層、長山 層、禅定寺層に区分されている。本報告でも、この区 分に従い、下位より大福礫部層、長山層、禅定寺層に区 分した(第6.1図)。なお、大福礫部層は部層区分であ るので、その累層名を、大福礫部層と類似した溶結凝灰 岩礫を含む鹿畑礫層(生駒山地東麓)が含まれる京阪奈 丘陵最下部の登美ヶ丘(累)層(三田村,1992)とした。 大福礫部層は、既に述べたように、信楽礫部層や北又礫 層に対比されるとともに、奈良盆地の最下位の層準に当 たるソノハ礫層(粉川, 1954)に対比されている(尾崎 ほか, 2000).

宇治丘陵

宇治丘陵に分布する大阪層群は、中川・横山(1975)、 横山ほか(1975)によって層序が示され、下位より青谷 粘土·礫互層,明星ヶ原砂層,城陽礫層Ⅰ,城陽礫層Ⅱ, 宇治砂礫層に区分された.城陽礫層研究グループ(1992) は、基本的にこの層序に従いながら、城陽礫層Ⅰ・Ⅱ間 に長谷粘土層を追加し, また城陽礫層Ⅱを下部・中部・ 上部に細分して、堆積相の解析を行っている. 三田村 (1993) は橋本(1978MS) を引用して、下位より青谷礫 層,城陽A礫層,城陽B礫層,宇治礫層に区分した地 質図,標準地質柱状図を示した(第6.1図). これらの うち、青谷粘土・礫互層あるいは青谷礫層とされている 層準は, 宇治田原丘陵では, 長山層の層準に相当するこ とから、本報告では、 宇治丘陵の本層準も長山層として 表現した.また,明星ヶ原砂層あるいは城陽 A 礫層か ら上位の層準は、全体が砂礫質であり、またこれらの地 層の分布域は現在では砂利採取後の地形改変や宅地化な どで、十分な露頭調査ができなかった. そこで本報告で は、これらの砂礫層優勢な地層群を一括して、長池層(新 称)として図示した.

なお、橋本(1978MS: 三田村, 1993の引用による)は、 城陽A礫層中に挟まる鴨谷火山灰層を広域テフラの恵 比須峠福田テフラに対比している.また、宇治礫層最上 部に挟まるサンドパイプを伴う厚さ約2mのシルト層を Mal層(ハラミヨ正帯磁亜期層準)に対比した.一方、 横山ほか(1975)、石田ほか(1984b)は、その1層準下 位の海成粘土層 Ma0が宇治砂礫層の基底層準にあると している.これらの対比から、砂礫層主体の層準は、古 琵琶湖層群の草津層(瀬田礫部層)の層準にほぼ対比さ れ、また宇治田原地域の禅定寺層もほぼこれらの層準に 対比される.この砂礫質な層準は広域に追跡され、石田・ 横山(1969)が Middle Gravel と総称している層準に対 応している.

桃山~黄檗丘陵

京都盆地東縁部に位置する桃山丘陵から山科盆地周辺,更にその南の黄檗丘陵にかけて分布する大阪層群は 比較的古い時代から研究が行われてきた.鳥居(1948)は, 桃山丘陵の大阪層群を山城層群と呼び,下位より堂ヶ原 層,谷口(介)層,中ノ茶屋砂礫層及び桃山礫層に区分 した.このうち桃山礫層は大部分が段丘堆積物に相当す るものである.また谷口層は貝化石を含む海成層に対し て用いられているが,必ずしも同じ層準を示していない. その後,深草団体研究会(1962)は,桃山丘陵のうちの 深草地区の地層を詳細に調査し,桃山礫層より下位の地 層を大阪層群とそれを覆う鞍ヶ谷累層に区分した(第 6.1図).大阪層群からは4枚の海成粘土層が識別され, 最下位の四郎粘土にはアズキ火山灰層が挟まれている.
このアズキ火山灰層は、中部九州から約85万年前に噴 出した広域テフラで(鎌田ほか, 1994), 猪牟田アズキ テフラ(町田・新井, 2003)と呼ばれている、深草団体 研究会(1962)は、更に下位の淡水成層から山田火山灰 層, ピンク火山灰層を見つけている. 亀井ほか(1969)は, 海成粘土層を Ma3 ~ Ma6 とするとともに、新たに3枚 の火山灰層を記載している.海成粘土層は、黄檗丘陵で も確認されていて(三木, 1933;石田ほか, 1984b), こ れらの海成層を含む地層は, 宇治丘陵に分布する地層の 最上部からより上位に位置すると考えられる。一方、こ の地域の大阪層群最上部の砂礫層主体層と高位段丘堆積 物の区別は非常に難しく, 鞍ヶ谷累層とされた地層も, 本報告では大部分,大阪層群に含めている.石田(2002a) は、桃山丘陵の東に小丘陵をなす醍醐東団地で、急傾 斜する砂・粘土層の間から阿蘇1テフラ(町田・新井、 2003:約25万年前)と考えられる火山灰層を記載した. この火山灰層を挟む地層は、大阪層群の可能性が高い、

このように,桃山丘陵~黄檗丘陵では,大阪層群の上 限が区域によって異なるのかどうか不明な点が多く,ま た各海成粘土層がどの層準のものなのか識別が難しいた め,本報告では,大阪層群の部層区分は行わず,全体を 深草層と呼ぶ(新称).また地質図では,Ma3層下限を 境にして,下部と上部に区分して表現した.

6.2 古琵琶湖層群

本図幅内の古琵琶湖層群は,信楽(朝宮)地域と草津 ~膳所地域に分かれているため,各地域ごとに記載する.

6. 2. 1 信楽(朝宮)地域(Kt, Kg)

信楽地域の古琵琶湖層群は、東方の甲賀地域の阿山層 と甲賀層に対比され、それぞれ中郷礫泥部層、信楽礫部 層から構成される.主な露頭地点を付図Dに、地質柱 状図を第6.2図に示す.なお、阿山層・甲賀層は本図 幅地域内ではそれぞれ1部層のみからなるが、東方地域 では複数の部層に細分されている(中野ほか、2003).

6.2.1.1 阿山層

中郷礫泥部層(Kt)

地層名 中野ほか(2003)の中郷部層に基づく. 模式地 は「水口」図幅内の甲賀市信楽町中郷である.

分布 甲賀市信楽町上朝宮,下朝宮の丘陵から和束町と の境界付近にかけて広く分布するほか,宇治田原町奥山 田北東方の山地内に孤立して分布する.

層位関係 基盤岩である花崗岩類や丹波帯堆積岩類を不 整合に覆っている.

層相 中礫~大礫サイズのチャート,砂岩,頁岩,花崗 岩類などの亜角~亜円礫からなる礫層を主体とする.下 朝宮南部のS-5地点(第6.2図)では,巨礫サイズの

礫も含まれ、最大径は約35 cm に達する. 上朝宮集落の 南(S-2)では、シルト層や礫まじりのシルト層が挟ま れていて、また2枚の風化した薄い火山灰層がみられ た. 更に南方の尾根上(S-4)では基盤の花崗岩を覆っ て,花崗岩の細-小礫層,更に花崗岩質砂層と薄い粘土 -シルト層の互層が重なり、薄い2枚の火山灰層が挟ま れていた(S-2, S-4地点は1981年当時の露頭). 朝宮 付近での層厚は、30m程度である。また、宇治田原町 奥山田北東約2kmの標高380~390mの林道沿い(S-9) では. 層厚 10 m 程度の中礫~大礫サイズのチャート. 砂岩などの亜角~亜円礫からなる礫層が分布している. この地層は孤立して分布しているため、その層準は不明 であるが、とりあえず中郷礫泥部層に対比しておく. テフラ 本部層中には、風化した薄い火山灰層が数枚挟 まれているが、最も特徴的なのが中郷火山灰層(中野ほ か、2003) である.本テフラは、S-2、S-4 地点で観察 され,層厚10 cm 程度で紫がかった灰色~褐色を呈し, 中粒〜粗粒砂サイズの結晶質火山灰からなり、保存がよ い場合には下部に厚さ1 cm ほどの細粒層を伴っている. 風化しているために火山ガラスは残っておらず、長石と 石英が主体であるが黒雲母が残っていることもある.本 テフラは、水口図幅内の中郷地区を中心に広く分布して いて、そのフィッション・トラック年代は 3.18 ± 0.15 Maと求められている(中野ほか, 2003).

6.2.1.2 甲賀層

信楽礫部層 (Kg)

地層名 近藤(1968)の信楽礫層に相当する. 模式地(もっとも厚い分布地) は「水口」図幅内の甲賀市信楽町杉山である.

分布 上朝宮, 下朝宮周辺から西方のゴルフ場周辺にか



第6.2図 信楽地域の古琵琶湖層群の地質柱状図 地点位置は付図 D 参照.

けて広く分布するほか、その南西(S-7など)から殻池 峠の東の丘陵地(S-8など)にかけて点在する.

層位関係朝宮では、中郷礫泥部層を覆っているほか、 殻池峠東から南東の丘陵地では、基盤の丹波帯堆積岩類 を直接覆っている。

層相 中礫~大礫サイズの流紋岩類(溶結凝灰岩,石英 斑岩)の円~亜円礫を多量に含み,そのほかにチャート, ホルンフェルス化した泥質岩,砂岩,頁岩,花崗岩など の円~亜角礫から構成される礫層である.チャート以外 の礫は風化して,いわゆるくさり礫になっている.シル ト層,砂層はほとんど挟まない.礫径は概して上方へ細 粒になる傾向がみられる.また水平方向では,概して西 方に粗くなり,この礫層が概して西方から供給されたこ とを示唆する.層厚は20~25m程度である.

6.2.2 草津~膳所地域

琵琶湖南方の瀬田丘陵~石山丘陵(草津~瀬田~石山 ~膳所地域)に分布する古琵琶湖層群は,蒲生層,草津 層及び堅田層に区分される.蒲生層は南郷礫泥部層から なり,草津層は更に浅柄野砂部層,瀬田礫部層,桜ヶ丘 砂泥部層に細分され,また堅田層は国分礫泥部層,富士 見台砂泥部層,茶臼山礫部層に細分される.主要な露頭・ 柱状図作成位置を付図 C に,また地質柱状図を第6.3 図に示す.なお,蒲生層は本図幅地域内では1部層のみ からなるが,東方地域では複数の部層に細分されている (吉田ほか, 2003;中野ほか, 2003).

6.2.2.1 蒲生層

南郷礫泥部層 (Kn)

地層名 Ishida *et al.* (1976)の Nango Formation 及び古琵 琶湖団体研究グループ(1992)の南郷互層に基づく. 模 式地は大津市南郷である. 瀬田〜草津地域では,古琵琶 湖団体研究グループ(1981)の荒張互層が本部層に相当 する.

分布 大津市上田上桐生町, 石居, 南郷

層位関係 基盤岩である花崗岩類及び丹波帯堆積岩類を 覆っている.

層相 亜角礫層を主体とする層準あるいは場所と,粘土 -シルト層主体の層準とに分かれる.上田上桐生町では, 最も東部のO-2地点が最下位の層準に当たる.ここで は,層厚20mに及ぶ中礫〜大礫サイズの角〜亜角礫層 が分布していて,下部では最大径が50cmに及んでいる. 礫種は,チャート,ホルンフェルス,花崗岩類などから なる.まれに薄い花崗岩質砂層やシルト層を挟んでいる. 更に上位にあたるO-3地点では,礫径が中礫サイズに 細かくなるとともに,薄い礫混じりシルト層や砂混じり シルト層を不規則に挟むようになり,また厚さ30cm前 後の亜炭層や炭質シルト層〜砂層,薄い風化した火山灰 層がそれぞれ数枚挟まれている.更に西方(O-4付近)は, その上位の層準と考えられるが、シルト-粘土層が厚く なり, 桐生 I, Ⅱ火山灰層と呼ばれるテフラを挟むとさ れている(古琵琶湖団体研究グループ, 1981)が、現在 では宅地化されて露頭はほとんど残っていない. 石居の 大戸川岸では、成谷 I、 IIと呼ばれる最下部層準の火山 灰層を挟むシルト主体層がみられた(古琵琶湖団体研究 グループ,1981)が、現在では露頭はほとんど消失して いる. 南郷地区の南部(O-10周辺)では、本部層の下 部が露出しており、シルト~砂混じりシルトと砂層と の互層に、厚さ10~250 cmの中礫-細礫サイズを主体 とする亜円-亜角礫層と薄い風化した火山灰層が数枚挟 まっている.また基盤の近くでは中礫-大礫サイズのホ ルンフェルスなどの亜角礫からなる礫層が楔状に挟まっ ている。O-11 地点付近は、更に上位の層準と考えられ、 宅地造成時に厚さ10m以上の粘土-シルト層がみられ、 上部に厚さ 60 cm 程度の風化した細粒火山灰層が挟まれ ていた. このテフラは桐生Ⅱ火山灰層(古琵琶湖団体研 究グループ,1981,1992)と推定されるが、風化が著しく、 記載岩石学的な特徴は明らかにできなかった。このテフ



3.3 図 早津~膳所地域の占芘琶湖層群の地質性状図 地点位置は付図C参照。

ラの10 m ほど上位から砂層~礫層が広くみられるよう になり、上位の瀬田礫部層となる。南郷礫泥部層の層厚 は全体で70 m 程度と推定される(Ishida *et al.*, 1976;古 琵琶湖団体研究グループ, 1992).

テフラ本部層に挟まる火山灰層は6~7枚あり, Yokovama (1969), Ishida et al. (1976), 横山ほか (1979), 古琵琶湖団体研究グループ(1981, 1992)などに記載さ れている.しかし、造成などによる露頭の消失と、観察 したテフラのほとんどが風化していることから、これら のテフラの大部分を同定・対比することができなかった. 古琵琶湖団体研究グループ(1981, 1992)によると、本 部層には下位より成谷Ⅰ, Ⅱ, 荒張Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, 桐生Ⅰ, Ⅱの各火山灰層が挟まれており,桐生 I, Ⅱ火山灰層が 正帯磁でオルドバイ正帯磁亜帯に対比されている. これ らのテフラのうち, 1983年に上桐生(O-4地点)で採 取した桐生 I 火山灰層が唯一同定された試料である. そ の火山ガラスの屈折率と化学組成値を第6.1表に示す. 本テフラは、厚さ約 50 cm で灰白色細粒の火山灰からな り、火山ガラス(屈折率 n=1.501-1.504)を主体として いるほか、重鉱物として普通角閃石と斜方輝石・単斜輝 石を含んでいる。ガラスの化学組成では、K₂O がやや少 ない特徴がある.これらの特徴は、桐生Ⅱ(=中)火山 灰層が対比されている房総半島上総層群下部の Kd44 テ フラの少し下位にある HSA テフラ(里口, 1995) に類 似し(第6.1表),対比される.

化石 中沢・石田 (1959) は南郷地区の瀬田川河床の 本部層から、シキシマサワグルミ (Cyclocarya paliurus: 原典では Pterocarya), コナンキンハゼ (Sapium sebiferum var. pleistoceaca), ヒメシャラ (Stewartia monadelpha) などの植物化石を報告している.また,古琵琶湖団 体研究グループ (1981) は、上桐生地区から、オオバ ラモミ (Picea koribai), ヒメトガサワラ (Pseudotsuga subrotunda), ヒメブナ (Fagus cf. microcarpa) などの 植物化石を,石居地区からメタセコイア (Metasequoia disticha) などの植物化石を、また両地区からコガネム シ科 (Scarabaeidea) やネクイハムシ亜科 (Donaciine) の昆虫化石を報告している.本調査では,上田上桐生(O-3 地点)の亜炭層からトガサワラ属 (*Pseudotsuga*),ハ シバミ属 (*Corylus*)の植物化石が確認された (千葉大学, 百原 新博士の同定による).

6.2.2.2 草津層

(1) 浅柄野砂部層 (Ka)

地層名 古琵琶湖団体研究グループ(1981)の浅柄野砂 層による.模式地は「京都東南部」図幅北東端から「水 口」図幅に入る,栗東市荒張である.

分布 栗東市荒張, 草津市草津市岡本町南部〜大津市松 が丘〜芝原〜堂〜稲津にかけての瀬田丘陵南部.

層位関係 南郷礫泥部層を整合に覆う.

層相 荒張(O-1付近)では、中粒〜粗粒砂層,ある いは小礫を含む粗粒砂層〜細粒礫層が主体であり、砂質 シルト層〜シルト層を挟んでいる。岡本町南から松が丘 にかけての地域では、この層準は宅地造成などによって、 露頭はほとんどみられない、大鳥居から堂、稲津にかけ ては、小規模な露頭が点在し、砂層を主体とし、シルト 層、中礫層を挟んでいる。層厚は20m程度である。 テフラ 古琵琶湖団体研究グループ(1981)は、下位よ り浅柄野、美濃郷火山灰層と呼ばれる薄いテフラを記載 している。

(2) 瀬田礫部層 (Ks)

地層名 古琵琶湖団体研究グループ(1981)の瀬田礫層 に基づく.瀬田〜石山地域では, Ishida *et al.*(1976)の Ishiyama Formation, Zinryo Formation, Seta Formation,古 琵琶湖団体研究グループ(1992)の石山礫層,寺辺砂層 の層準に相当する.模式地は,大津市堂から瀬田神領町 にかけての地域である.

分布 栗東市荒張から草津市馬場町,大津市松ヶ丘,芝 原,堂,稲津,瀬田月輪町,瀬田神領町,野郷原にかけ ての瀬田丘陵,大津市南郷の西部から千町,大平にかけ ての石山丘陵に分布する.

層位関係 瀬田丘陵では下位の浅柄野砂部層を, また石

第6.1表 古琵琶湖層群・大阪層群の主な火山灰層と関連するテフラのガラスの屈折率及び化学組成一覧

		屈折率		火山ガラスの主成分(wt%)									火山ガ	ラスの行	スの微量成分(ppm) Sc Sr V Y 6 210 17 35 5 233 18 37 12 235 23 38 5 217 11 31 9 241 15 33		
火山灰層名	採取地点(および標本豆球番号)	ガラス(n)	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃ T	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Ba	La	Sc	Sr	V	Y
阿蘇1火山灰層?	京都市醍醐団地No.10 14.00−14.28m	1.517-1.520	0.64	14.59	3.67	0.07	0.64	1.98	3.37	4.31	0.11	700	33	6	210	17	35
阿蘇1火山灰層?	京都市地下鉄勧進橋東線No.16 28.4-28.5m	1.517-1.519	0.61	14.27	3.41	0.08	0.60	1.83	3.27	4.28	0.13	812	38	5	233	18	37
阿蘇1火砕流堆積物	熊本県菊池市築地	1.520-1.525	0.70	15.90	4.09	0.10	0.69	2.17	3.61	3.47	0.14	784	40	12	235	23	38
アズキ火山灰層	京都市深草中ノ郷山町(K-5)(GSJ R100383)	1.510-1.515	0.49	14.11	2.72	0.08	0.48	1.71	3.71	4.26	0.07	763	36	5	217	11	31
アズキ火山灰層	大阪府和泉市いぶき野	1.509-1.547	0.53	14.53	2.97	0.09	0.47	1.98	3.59	3.96	0.11	892	33	9	241	15	33
桐生I火山灰層	大津市上田上桐生(O-4)(GSJ R100382)	1.501-1.504	0.22	11.27	1.37	0.10	0.21	1.60	4.00	1.54	0.05	493	11	4	119	5	34
上総層群 HS A 火山灰層	千葉県勝浦市花里	1.500-1.505	0.22	11.59	1.52	0.10	0.28	1.73	3.93	1.76	0.06	445	12	3	123	7	34
岩山火山灰層	宇治田原町岩山(U-9)(GSJ R100381)	1.500-1.501	0.13	10.22	1.32	0.06	0.16	1.24	2.28	3.37	0.05	546	22	1	130	2	15

火山ガラスの屈折率の測定はRIMS86及びMAIOTによる(測定者:水野清秀)

火山ガラスの化学組成値は、ICP発光分析法及び原子吸光法(Tamura et al., 2008)による(分析者:三菱マテリアルテクノ株式会社).

Fe₂O₃Tは, 総FeをFe₂O₃として計算した値.

山丘陵では南郷礫泥部層をそれぞれ整合に覆う.

層相 中礫サイズの礫層を主体とする. 瀬田丘陵では, 本部層下部が分布する馬場町周辺では、単層の厚さ5m 前後の中礫サイズのチャート礫を主体とする亜角〜亜円 礫層あるいは砂礫層が主体で、砂層、シルト層を頻繁に 挟んでいる。大津市松ヶ丘(O-7地点)周辺では、中 礫サイズの亜円~亜角礫層が主体で薄いシルト層~砂層 を挟んでいる. 礫種はチャートが多く,そのほかに砂岩, 石英斑岩,花崗岩などが含まれる.芝原~堂(0-9地点) 周辺では、中礫サイズの亜円~亜角礫層と礫混じりの砂 層が主体となり、また上部では径 10 cm 程度の大礫サイ ズの礫が含まれることがある.本部層上部が分布する, 瀬田月輪町(O-8地点)では、厚さ数m程度の中礫層 ~ 中礫混じりの砂層と厚さ1m前後のシルト-粘土層の 互層がみられる.野郷原周辺でも,中礫〜細礫層あるい は礫混じり砂層と薄いシルト層〜細粒砂層の互層が主体 である.石山丘陵においては、下部の層準にあたる南郷 (O-12 地点)では、中礫サイズのホルンフェルス、チャー トなどからなる厚さ1~5m程度の亜円礫層あるいは礫 混じり粗粒砂層と厚さ1m以内の細粒砂層との互層がみ られ、厚さ1m程度の中礫~大礫サイズのホルンフェル ス, チャートなどの亜角~亜円礫層が挟まっていた. 更 に上位にあたる千町~大平(O-13地点)周辺では,小 規模な露頭が点在し、いずれも中礫サイズのチャート礫 を主体とする亜円礫層が主体である.西部の基盤岩に近 いところでは、中礫~大礫サイズのホルンフェルス、花 崗岩の亜角礫からなる礫層がみられることが多い.本部 層の上部にあたる大平北部では、中礫サイズの亜円〜亜 角礫層とシルト層〜細粒砂層の互層がみられる。全体の 層厚は80m程度である.

テフラ 本部層中に、Yokoyama (1969), Ishida *et al.* (1976), 横山ほか (1979) は下位より寺辺,石山II, I 火山灰層を,また古琵琶湖団体研究グループ (1981) は 下位より下戸山I, II, 丸尾新田, 笠山, 桜ヶ丘火山灰 層を,古琵琶湖団体研究グループ (1992) は下位より大 平I, II, 下戸山I, 寺辺火山灰層を記載している. し かし, 露頭の消失や風化などにより,これらのテフラを 確認・同定することはできなかった.

化石 Ishida et al. (1976)は、大津市寺辺付近の本部層 上部から、オオバタグルミ (Juglans megacinerea)、マ ンシュウグルミ (Juglans mandshurica)、ヒメバラモミ (Picea maximowiczii)などの植物化石を報告している. 古琵琶湖団体研究グループ (1981)は、草津市桜ヶ丘の 南方の本部層上部からイチョウ (Ginkgo biloba)、メタセ コイア (Metasequoia disticha)、ムジナイス (Distylopsis parrioidea)など、大津市野郷原の本部層上部からミツ ガシワ (Menyanthes trifoliata)などの植物化石を報告し ている。また古琵琶湖団体研究グループ (1992)は、千 町の本部層からゴミムシ科 (Harpalidae) やミズクサハ ムシ属 (*Plateumaris* sp.)の昆虫化石を報告している. (3) 桜ヶ丘砂泥部層 (Kr)

地層名新称.古琵琶湖団体研究グループ(1981)の瀬 田礫層とされた層準上部のうち,草津市桜ヶ丘を模式地 として発達する砂泥層主体の地層に対して定義する.

分布 草津市岡本町北部から追分町, 桜ヶ丘, 大津市大 江にかけての瀬田丘陵北部.

層位関係 桜ヶ丘周辺では瀬田礫部層の下部に整合に重なり,東部の岡本町,西部の大江付近では瀬田礫部層上部と指交すると推定される.

層相 追分町(O-5地点)や桜ヶ丘(O-6地点)では、 単層の厚さ50~200 cm 程度の粗粒~細粒砂層とシルト -粘土層の互層が主体で、上部に薄い中礫~細礫層を挟んでいる。また部分的に植物片を含む有機質シルト~砂 層をレンズ状に挟んでいる(第6.4図)、瀬田丘陵北西 部では、段丘堆積物の下位にわずかしか露出がないため、 地層の連続性については不明な点が多い。全体の層厚は 30m 程度である。

テフラ 古琵琶湖団体研究グループ(1981)は、本部層 から丸尾新田,笠山,桜ヶ丘火山灰層を報告している. 風化した薄い火山灰層を確認したが、どのテフラに対比 できるのか、明らかにできなかった.

化石 古琵琶湖団体研究グループ(1981)は, 追分町付 近の本部層からエゴノキ(*Stylax japonica*)などの植物 化石とともに, ネクイハムシ亜科(Donaciinae)の昆虫 化石を報告している.

6.2.2.3 堅田層

(1) 国分礫泥部層 (Kk)

地層名 古琵琶湖団体研究グループ(1992)の国分互層 に基づく. Ishida *et al.* (1976)の Zinryo Formation, Seta Formation, Sonoyama Formation 層準にほぼ相当する. 露 出地は少ないが,模式地を膳所上別保町付近とする.



第6.4図 桜ヶ丘砂泥部層の露頭
 草津市桜ヶ丘(O-6地点:付図C).露頭の高さは約8m.

分布 大津市国分北方から膳所上別保町,池の里,朝日 が丘にかけての石山丘陵.

層位関係 基盤岩である丹波帯堆積岩類を直接不整合で 覆っている.

層相 礫層を主体とし、薄いシルト層、砂層を頻繁に挟む. 伽藍山北縁部では、中礫サイズのチャート、砂岩、 ホルンフェルスなどの亜円礫からなる礫層あるいは中礫 を含む砂礫層が主体で、薄いシルト層、砂層を挟んでい る. 膳所上別保のO-14地点では、中礫サイズのチャー トを主体とする厚さ2~4m程度の亜角礫層と厚さ50 ~100 cm程度のシルト層、シルト質砂層の互層がみら れ、薄い火山灰層と泥炭層が挟まれていた. より北方(O -15地点など)では、中礫~大礫サイズの亜角~角礫層 が主体であり、礫種はチャート、砂岩が主である. まれ に薄いシルト層~砂層が挟まれている. 全体の層厚は 80 m程度と推定されている(古琵琶湖団体研究グルー プ、1992).

テフラ 古琵琶湖団体研究グループ(1992)は、下位よ り国分Ⅰ,Ⅱ,池の内Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,上別保火山灰層を報 告している.このうち、池の内Ⅱ火山灰層は、厚さ40 cmのガラス質火山灰層で、正帯磁をしており、大阪層 群のピンク火山灰層に対比されている.この池の内の露 頭は現在消失している.それ以外のテフラについても、 同定できるものはなかった.

化石 古琵琶湖団体研究グループ(1992)は、上別保の 本部層から、いくつかの植物化石とともに、ミズクサハ ムシ属(*Plateumaris* sp.)、ゴミムシ科(Harpalidae)など の昆虫化石を報告している.

(2) 富士見台砂泥部層 (Kf)

地層名 古琵琶湖団体研究グループ(1992)の富士 見台互層に基づく. Ishida *et al.*(1976)の Sonoyama Formation, Zeze Formation 層準にほぼ相当する.現在観 察できる露頭として,秋葉台を模式地とする.

分布 大津市園山から富士見台,秋葉台,竜が丘にかけ ての石山丘陵北部に分布する.

層位関係 下位の国分礫泥部層を整合に覆う.

層相 砂層とシルト-粘土層の互層が主体である(Ishida et al., 1976;古琵琶湖団体研究グループ, 1992). 宅地 造成により多くの露頭は消滅し,シルト層と砂層の互層 からなる小規模な露頭を数地点で確認したのみである. 層厚は 80 m 程度である(Ishida et al., 1976;古琵琶湖団 体研究グループ, 1992).

テフラ Ishida *et al.* (1976) 及び古琵琶湖団体研究グルー プ(1992) によると、下位より富士見台、園山、膳所 I 火山灰層が挟まれている.いずれも風化した薄い火山灰 層である.

化石 Ishida et al. (1976) は、本部層からセタイシガイ (Inversidens hirasei)、オトコタテボシ(I. reiniana)、カ ラスガイ (*Cristaria plicata spatiosa*), マルドブガイ (*Anodonta calipygos*), ササノハ属 (*Lanceolaria sp.*) などの 淡水生貝化石や, ヒシ属 (*Trapa sp.*)の植物化石を報告 している.

(3) 茶臼山礫部層 (Kc)

地層名 Ishida *et al.* (1976) の Chausuyama Formation 及 び古琵琶湖団体研究グループ (1992) の茶臼山礫層に基 づく. 模式地は大津市秋葉台である.

分布 大津市富士見台,秋葉台,湖城が丘にかけての石 山丘陵東端部.

層位関係 富士見台砂泥部層を整合に覆う.

層相 富士見台(O-16地点)では、中礫〜大礫サイズ のチャート、砂岩、頁岩などの亜角〜亜円礫を主体とす る礫層があり、砂層と薄いシルト層が挟まれている.ま た園山北では段丘堆積物の下位に中礫を含む砂礫層と粗 粒砂層の互層が6m以上の厚さでみられた.これらの地 層の最上部の層準は、膳所断層に沿って東に急傾斜して 地表下に埋没するため、確認することができない.層厚 は20m以上に及ぶ.

テフラ Ishida *et al.* (1976) 及び古琵琶湖団体研究グループ (1992) によると,本部層中に膳所 Ⅱ火山灰層と呼ば れる風化したテフラが挟まれている.

6.3 大阪層群

本図幅内の大阪層群は,宇治〜宇治田原〜大石丘陵と 桃山〜黄檗丘陵に分かれているため,各地域ごとに記載 する.

6.3.1 宇治~宇治田原~大石丘陵

宇治丘陵から宇治田原丘陵,更に田上・大石丘陵にか けて分布する大阪層群は,下位より登美ヶ丘層大福礫部 層,長山層,禅定寺層,及び禅定寺層とほぼ同層準の長 池層に区分される(第6.1図).これらの地域の主要な 露頭・柱状図作成地点位置を付図 B・Cに,また地質柱 状図を第6.5 図に示す.なお,登美ヶ丘層は本図幅地 域内では1部層のみからなるが,南方地域では複数の部 層に細分されている(尾崎ほか,2000).

6.3.1.1 登美ヶ丘層 ナ短端辺网 (Of)

大福礫部層 (Of)

地層名 石田ほか(1954)の大福礫層に基づく.大津市 関津地域に分布する本部層は, Ishida et al. (1976)が古 琵琶湖層群の Sekinotsu Formation とした地層にほぼ相当 する. 模式地は宇治田原町大福である.

分布 大津市関津から南へ大石龍門,大石小田原,宇治 田原町奥山田の北,大福,湯屋谷にかけて分布する. 層位関係 基盤岩である花崗岩類,丹波帯堆積岩類,中



第6.5図 宇治田原~大石地域の大阪層群の地質柱状図 地点位置は付図B・C参照.

新統綴喜層群を不整合に覆う.

層相 中礫~大礫サイズ,まれに巨礫サイズ(最大径 40 cm)の亜円~亜角礫からなる礫層である(第6.6 図). 礫種は流紋岩類(溶結凝灰岩,石英斑岩),チャート,頁岩, 砂岩,花崗岩などからなり,チャート以外の礫は一般に 風化していわゆるくさり礫になっている.流紋岩類の起 源は,琵琶湖東岸などに露出している白亜紀の湖東流紋 岩と推定されている(横田ほか,1978:飯田,1980bなど). 全体として上方へ細粒化する傾向がある.砂層やシルト 層はほとんど挟まれていない.最大層厚は約60 m であ る.

古流路 飯田(1980b)は、礫のインブリケーションを 測定し、大局的に北から南への流向を求めている.また、 本図幅地域から更に南の大打峠、和束町への古河川を推 定している.信楽地域の信楽礫部層も類似した礫種組成 を示していることから、宇治田原町奥山田から殻池峠付 近を通り、信楽地域につながる旧流路も存在した可能性 があるが、殻池峠周辺に、大福礫部層の分布は確認され ていない.

6.3.1.2 長山層 (Ot)

地層名 飯田(1980b)の長山層に基づく. 宇治丘陵では, 中川・横山(1975),横山ほか(1975)の青谷粘土・礫互層, 三田村[1993:橋本(1978MS)を引用]の青谷礫層の層 準にほぼ相当する. 模式地は宇治田原町岩山の北東地域 である.

分布 大津市関津,大石龍門,石山外畑町,大石曽菜, 大石小田原,宇治田原町岩山,大福,湯屋谷,立川, ジロ西部,銘城台周辺,宇治市天ヶ瀬などに分布する. 層位関係 下位の大福礫部層を整合に覆い,また基盤岩 である花崗岩類,丹波帯堆積岩類,中新統綴喜層群を不 整合に覆っている.

層相 関津, 大石中(U-2地点), 大福(U-11), 湯屋 谷南部(U-12)などでは、下位の大福礫部層から漸移 的に変化し、礫層は流紋岩礫を全く含まなくなるととも に、全体的に細粒化し中礫サイズが主体となり、また円 磨度も低くなって、チャートの亜角礫が著しく多くなる 層相を示す. また薄いシルト層を挟むところもみられ る.一方.本部層が基盤岩を直接覆う場合には.石山外 畑町~大石曽束や郷之口西方、天ヶ瀬では礫層が発達す る.外畑町のU-3地点付近では、礫層は中礫~巨礫サ イズ(最大径 50 cm)のホルンフェルス,チャート,砂岩, 花崗岩などの亜角~亜円礫からなり、20mほどの厚さ を有している.大石曽束に分布する礫層は,主として中 礫サイズのチャート, 頁岩などの亜角~亜円礫層からな り、場所によってシルト層などを挟んでいて、基盤岩の 近くである U-4 地点では、シルト-粘土層が主体となり、 薄い風化した火山灰層が挟まれていた. 郷之口北西のく つわ池周辺では、中礫~大礫サイズのチャートを主体 とした亜円~亜角礫層が50m程度の厚さで分布してい る. また天ヶ瀬ダムの西部でも, 厚さ20m 程度の中礫 ~大礫サイズのチャート,砂岩の亜円~亜角礫を主体と する礫層がみられる。字治田原町立川南部(U-14 地点) や銘城台東(U-15~U-16地点)などでは、チャート や砂岩などの中礫サイズの角礫層とシルトー砂層の不規 則な互層がみられ、また植物片を含む有機質シルト層や 砂層が頻繁に挟まれている(第6.7図). 立川南部のU -13 地点では、角礫層の上位から5mほどは、薄い中礫 サイズの亜円~亜角礫層とシルト-粘土層の互層で、上 部に2枚の風化した薄い火山灰層が挟まれている.また, 岩山北東のU-9地点では、シルト層と砂層の互層が見 られ,その中にガラス質の火山灰層(岩山火山灰層:新称) が挟まれている.この火山灰層の約10m上位にも、風 化した火山灰層があり(U-8, U-10地点), そのすぐ上 位から禅定寺層がはじまる. 関津東部 (U-1 地点) では, シルト-粘土層の互層があり、薄い風化した火山灰層が 挟まれている.本部層の層厚は全体で最大 60 m 程度と 見積もられる.

テフラ 本部層上部に,岩山火山灰層(新称)が挟まっ ている.このテフラはU-9地点のみで観察され,これ までのところ,宇治田原〜大石地域で唯一風化していな いガラス質火山灰層である.厚さは約25 cmで黄灰白色, 細粒の火山灰からなり,火山ガラスを主体としていてそ の屈折率は n=1.500 ~ 1.501 である.重鉱物は非常に少

第6.2表 岩山火山灰層のフィッション・トラック年代データ一覧 標本登録番号:GSJ R100381

							(2)(3)		(4)	(5)		(6)(7)(8)(9)
山山田夕	測定鉱物	」 結晶数	自発核分裂飛跡		誘導核分裂飛跡		熱中性子線量		相関係数	χ ² 検定	占二、進中	年代値
火山灰石			ρ _s	Ns	ρ _i	Ni	ρ _d	Nd	r	$\Pr(\chi^2)$	リノノ辰反	Age $\pm 1\sigma$
		(個)	(cm ⁻²)		(cm ⁻²)		(cm ⁻²)			(%)	(ppm)	(Ma)
岩山火山灰	ジルコン	40	1.01 X10⁵	32	2.53 X10 ⁶	797	1.253 X10 ⁵	4511	0.046	61	170	1.9±0.3

(1)測定方法:外部ディテクター法(外部面ED2) (3)照射場所:原子力科学研究所JRR-3号炉 気送管PN-2 (5) $Pr(\chi^2): \chi^2$ 値の自由度(n-1)の χ^2 分布における上側確率 (7)誤差: $\sigma_{\tau}=Tx[1/\Sigma N_s+1/\Sigma N_t+1/\Sigma N_d+(\sigma_{\xi}/\zeta)^2]^{1/2}$ (9) $\zeta_{ED2}=371\pm4$

ない.火山ガラスの化学組成を第6.1表に示すが,こ れまでのところ,周辺地域のテフラと対比できるものは 見つかっていない.このテフラのフィッション・トラッ ク年代は,1.9±0.3 Maと求められた(第6.2表:測定 は(株)京都フィッション・トラックによる).本テフ ラの約10m上位に,厚さ30cmの細粒火山灰層が挟まっ ているが,風化のため,その記載岩石学的な特徴は明ら かでない.

化石 三田村 (1993) [橋本 (1978MS) を引用]は、字 治地域の本層から、メタセコイア属 (Metasequoia)、 オオバタグルミ (Juglans megacinerea)、トガサワラ属 (Pseudotsuga sp.) などの植物化石を報告している、本報 告では、銘城台北西 (U-17, 18) の有機質砂~シルト 層から、メタセコイア、オオバタグルミ、シキシマサワ グルミ (Cyclocarya paliurus) などが産出した。

6.3.1.3 禅定寺層 (Oz)

地層名 飯田(1980b)の禅定寺層に基づく. 模式地は, 宇治田原町禅定寺である.

分布 大津市大石小田原西部, 宇治田原町禅定寺, 岩山, 立川, 贄田に分布する.

層位関係長山層を整合に覆う.また,大石小田原西部 では,基盤岩の丹波帯堆積岩類を不整合で覆っている.

層相 禅定寺(U-8, U-10地点付近)では、下位の長 山層のシルト主体層の上に、中礫を含む砂層〜砂礫層が 7m程度重なり、更に上位に中礫サイズのチャートの亜 円礫を主体とする礫層が50mほど重なっている(第6.8 図). 礫層中には薄い砂層が挟まるが、シルト層はほと んど見られない、贄田南部(U-13地点周辺)では、中 礫サイズの、チャート、砂岩、礫岩などの亜円〜亜角礫 層が主体で、下部にはシルト〜砂層を挟んでいる。また 上部の礫層は、基質の粗粒砂の比率が多くなっている。 これらの砂礫層は、更に西方の宇治丘陵の長池層に連続 する.全体の層厚は70m程度である。 (2)熱中性子線量ガラス:NIST-SRM612
(4) r: ρ と ρ の相関係数
(6)年代値: T=(1/λ)·ln[1+λ · ζ · (ρ / ρ)· ρ]
(8) 238Uの全壊変定数: λ =1.55125X10⁻¹⁰ yr⁻¹
測定:(株)京都フィッション・トラック

6.3.1.4 長池層 (On)

地層名 新称. 宇治丘陵に分布する長山層より上位の 砂礫層主体の地層全体に対して命名する. 中川・横山 (1975),横山ほか (1975),城陽礫層研究グループ (1992) は本層を,下位より明星ヶ原砂層,城陽礫層 I,城陽礫 層 II,宇治砂礫層に,また三田村 (1993)は橋本 (1978MS) を引用して,下位より城陽 A 礫層,城陽 B 礫層,宇治 礫層に細分している.宇治丘陵では,宅地開発や砂利採 取後の地形改変などによって露頭が断片的にしか見られ ないため,これらの部層の詳細な分布を示せなかった. そこで地質図では長池層として一括して示した.

分布 宇治田原町銘城台から城陽市長池,寺田,宇治市 広野町,白川,善法,天神台にかけての宇治丘陵に広く 分布する.

層位関係下位の長山層を整合に覆う.また白川では基 盤の丹波帯堆積岩類を不整合で覆っている.本層の下部 層準は宇治田原丘陵に分布する禅定寺層から連続し,同 層準から更に上位の層準に相当すると考えられる.

層相 全体にわたって、中礫サイズ以下のチャートなど の亜円礫からなる砂礫層が主体であり、薄いシルト層 を挟んでいる.連続性のよいシルト-粘土層が2層準に 挟まれていて、その上限を基準に、三田村(1993) [橋 本(1978MS)」は、城陽A礫層、城陽B礫層、宇治礫 層に区分していて、全体の層厚をおよそ 200 m としてい る. 城陽 A 礫層に相当する層準の地層は, 宇治田原町 銘城台東(U-15, 16地点)で観察できた。下位の長山 層の角礫層とシルト-砂層の不規則な互層を覆って、中 礫サイズからまれに大礫サイズのチャート,砂岩,頁岩 などの亜円~亜角礫からなる厚さ10m程度の礫層があ り、更に中礫サイズ以下の砂礫層主体の地層が重なって いる. 薄いシルト層, 砂層を挟んでいる. 宇治市白川北 部では、中礫サイズ以下の砂礫層中に厚さ4m程度のシ ルト層が挟まれていて、この層準は城陽A礫層の上限 にされている. このシルト層より上位は、中礫サイズ以 下の砂礫層が 30 m 以上堆積していて, 城陽 B 礫層に相 当する. 城陽 B 礫層上部からその上位の宇治礫層とさ

れる層準については、大規模な、あるいは連続した露頭 がほとんどなく、層位関係や地質構造を把握することが できなかった。石田ほか(1984b)は、宇治丘陵北部の 城南荘周辺と西部の長池付近で、宇治砂礫層基底の層準 に Ma0 層を記載している。一方、三田村(1993)[橋本 (1978MS)]では、城南荘付近で厚さ2m程度のサンド パイプを伴う粘土層を記載しており、Ma1層に対比し ている。城陽礫層研究グループ(1992)は、長池東方の 長谷川、青谷川流域に分布する本層の層相を詳細に解析 し、下位の長山層層準を含めて6つの堆積相に区分する とともに、扇状地の形成過程について議論している。

テフラ 三田村 (1993) [橋本 (1978MS) を引用]は, 本層中に,下位より,鴨谷,白川 I,Ⅱ,鴻巣山,広野 I, Ⅱ,Ⅲ,宇治火山灰層を記載している.このうち,鴨谷 火山灰層は広域テフラの恵比須峠福田テフラ(長橋ほか, 2000) に,宇治火山灰層はピンク火山灰層にそれぞれ対 比されている(橋本,1978MS).

化石 三田村 (1993) [橋本 (1978MS) を引用]は、本 層上部 (字治礫層)の層準から、ヒメバラモミ (Picea maximowiczii)、チョウセンゴヨウ (Pinus koraiensis)、 ミツガシワ (Menyanthes trifoliata)の化石を報告してい る.

6.3.2 桃山丘陵~黄檗丘陵

京都盆地東縁部の桃山丘陵〜山科盆地周辺〜黄檗丘陵 にかけて分布する大阪層群を総称して深草層と呼ぶ(新 称).深草団体研究会(1962)は,桃山丘陵深草地域の 大阪層群を詳細に調査し,海成粘土層が4枚挟まること を明らかにしたが,これらの累層名をつけていない.そ こで,深草地区を模式地として深草層と呼ぶ.また深草 団体研究会(1962)はアズキ火山灰層が挟まる海成粘土 層(=Ma3)が最も下位の海成層であることを明らかに している.そこで Ma3 層より下位の淡水成層のみから なる層準を下部,Ma3 層から上位を上部と呼ぶ.ただ し Ma3 層は各地に連続して分布するわけではないので, 実質的には,その地域で見つかった海成粘土層より下位 の層準を下部として地質図では表現している.主な露頭 観察地点を付図 A·B に,地質柱状図を第6.9 図に示す.

6.3.2.1 深草層

(1) 下部 (OI)

分布 桃山丘陵では京都市伏見区深草東部,小栗栖,山 科区勧修寺,黄檗丘陵では,宇治市平尾台~莵道~志津 川にかけて分布する.

層位関係ボーリング資料や反射法探査結果(京都市,2003b;小泉ほか,2002など)によると,黄檗丘陵の地下では300m以上に及ぶ大阪層群が存在すると推定され,下位の長池層層準あるいは更に下位の地層が伏在している.これらの地層を整合に覆っていると推定される.



第6.6図 大福礫部層の露頭 大津市大石小田原(付図B:U-6地点近傍). 流紋 岩礫は「くさり礫」化して表面にこけが生えている. ハンマーの柄の長さは約35 cm.







第6.8図 禅定寺層の中礫サイズのチャート礫を主とする礫 層の露頭 宇治田原町禅定寺(付図B:U-8地点).露頭の高 さは約3m.

-69 -





また東端部や志津川付近では,基盤の丹波帯堆積岩類を 直接不整合で覆っている.桃山丘陵や山科盆地では,ボー リング調査や反射法探査結果(京都市,2000,2001a, 2002a,2003a)によると,基盤岩の上に深草層下部層準 が不整合で覆っていると推定されている.

層相 菟道から志津川にかけての地域では,主に中礫(~ 大礫)サイズのチャートの亜角~亜円礫からなる礫層が 主体で,砂層,シルト層を挟んでいる.東縁の山地縁辺 部では特に礫層が発達し,K-12地点では,中礫~大礫 サイズのチャートの亜角~亜円礫層が40mほどの厚さ で見られ,上部に薄いシルト~砂層が挟まれている.深 草のK-5地点では,深草層の上部と下部を区切るMa3 層の下位は,単層の厚さ50~300cmほどのシルト-粘 土,粗粒砂-細礫層の互層がみられる.小栗栖では,中 礫サイズの主としてチャートの亜角~亜円礫層とシルト 層の互層があり,基盤岩に接するところでは,中礫~大 礫サイズ(まれに径40cm)のチャートなどの角礫層が みられる.全体の層厚は最大100m程度と推定される. テフラ 深草団体研究会(1962)は、勧修寺の名神高速 道路沿いでピンク火山灰層を記載している.またその上 位の山田火山灰層層準の薄い火山灰層も記載されてい る.

化石 深草団体研究会(1962)は、勧修寺のピンク火山 灰層より下位の層準から、ランダイスギ (Cunnighamia *konoshii*). $シ + \upsilon = \neg \neg \neg \neg$ (*Cyclocarya paliurus*). マンシュウグルミ (Juglans mandshurica) などの植物化 石を報告している. また,山田火山灰層準の粘土層から, ランダイスギ,メタセコイア (Metasequoia disticha), センダン (Melia azedarach), コナンキンハゼ (Sapium sebiferum var. pleistostoceaca), コウセキハマナツメ (Paliurus nipponicus) などの植物化石を、同層準からカラス ガイ属 (Cristaria), ドブガイ属 (Anodonta) などの淡水 貝化石を報告している。三木(1948)はMa3層直下の 層準からミツガシワ(Menyanthes trifoliata)を報告して いる (Kokawa, 1961). 田井 (1963) は深草地域の深草 層について花粉分析を行い. Ma3層の少し下位層準を 境に下位の Metasequoia 帯と上位の Fagus 帯に区分し、 Ma3 層の少し下位でメタセコイアが消滅したことを示 している.

(2) 上部 (Ou)

分布 京都盆地東縁の京都市東山区清閑寺から今熊野, 伏見区深草,桃山町,山科盆地周縁の山科区日岡,髭茶 屋,伏見区醍醐,小栗栖,日野,黄檗丘陵の木幡周辺に 分布する.

層位関係 深草層下部に整合で重なる.清閑寺~今熊野, 日岡, 醍醐付近の基盤岩沿いでは丹波帯堆積岩類を不整 合に覆っている.

層相 深草では, Ma3~ Ma6 層と呼ばれる4枚の海成 粘土層(単層の厚さ2~10m,一部は淡水成)を挟み、 その間は中礫サイズ以下のチャートの亜円~亜角礫を主 体とする砂礫層と薄い淡水成のシルト層、砂層の互層か らなる(深草団体研究会, 1962; 亀井ほか, 1969). K -5 地点では厚さ5 m 以上の Ma3 層が観察され,アズキ 火山灰層が挟まれている。海成粘土層は、伏見稲荷大社 (K-4 地点) では少なくとも2枚みられ, その間には薄 いシルト層、砂層を挟む中礫サイズ以下の砂礫層がみら れたが、どの層準かは明らかにできなかった。また東海 道本線東山トンネル西口の工事中に、西側に傾く大阪層 群が観察され、3枚の海成粘土層が記載されていて(石 田、1969), Ma4~ Ma6と推定されている(石田ほか、 1984b). この南の「東山洪積世植物遺体包含層」として 天然記念物に指定されている露頭(K-2地点)の下部 も海成粘土層と考えられる(石田ほか, 1984b). 更にす ぐ南の丘陵地にも海成粘土層が分布する. 山科盆地の南 部から黄檗丘陵にかけての地域では、醍醐(K-9地点)、 日野(K-10地点),小栗栖(K-8地点),御蔵山団地(K -11 地点) で、それぞれ1層(準)の海成粘土~サンド

パイプを含む砂質シルト層が観察されたが、それらの層 準は明らかにできなかった. 醍醐では、この上位に厚さ 20m以上の中礫~大礫サイズのチャート、頁岩などの 亜角礫を主体とする礫層が重なっている. このほか, 木 幡や黄檗でも1~2枚の海成粘土層が報告されている(三 木、1933;石田ほか、1984b;石田、2002b)、また山科 盆地北西部の日岡でも、海成粘土層の分布が図示されて いる(石田ほか, 1984b). この南のK-1地点では,中 礫~大礫サイズのチャート,砂岩,頁岩などの亜角~亜 円礫層が30m以上の厚さで堆積している. 醍醐東団地(K -7 地点) では,石田(2002a) によって急傾斜した粘土・ 砂層中に阿蘇1テフラに対比される火山灰層が報告され ている.この地層は、礫層を主体とする高位段丘堆積物 とは異なり、大阪層群と推定され、深草層上部に含める. 阿蘇1テフラ層準が広域的にみて大阪層群に含まれるの かどうかは、今後の検討課題である.深草層上部の層厚 は、ボーリング調査や反射法探査結果(京都市, 2000, 2001a, 2002a, 2003a) などから 200 m に達すると推定 される.

テフラ 深草付近に分布する深草層上部には、下位より アズキ,深草Ⅰ,深草Ⅱ,伏見火山灰層が挟まれてい る(深草団体研究会, 1962; 亀井ほか, 1969). このう ち K-5 地点でアズキ火山灰層のみ,確認することがで きた. アズキ火山灰層の火山ガラスの屈折率と化学組成 を第6.1表に示す. この火山灰層は厚さ25 cm 程度で. 灰白色を呈し、屈折率の高い火山ガラスが主体である. 少量含まれる重鉱物は斜方輝石,単斜輝石が多い. 醍醐 東団地でのボーリング調査で採取された、石田(2002a) の阿蘇1火山灰層に対比される火山灰層,及び地下鉄の ボーリング調査(伏見区竹田)で採取され、やはり阿蘇 1火山灰層に対比されている火山灰層(藤原, 2003)の 分析値を第6.1表に示した(藤原重彦氏の試料提供に よる).いずれの試料も、ガラスの屈折率が高く、また 化学組成も阿蘇1火砕流堆積物に類似している. 琵琶 湖高島沖ボーリングコアでは、近接した層準の BT62, BT61, BT59 がこれらに類似した特徴を持ち(吉川・井内, 1991, 1993;長橋ほか, 2004), このうち BT61 が阿蘇1 テフラに対比されている.本報告で扱ったボーリングコ アのテフラはガラスの屈折率からは BT62 と BT61 に似 ており,両テフラとの対比は今後の課題とする.

化石 三木 (1948), 鳥居 (1948) や深草団体研究会 (1962) は深草地域から産出する植物化石, 貝化石の報 告を行っている。以下、層準を明確にしている深草団体 研究会(1962)に従って記載する. Ma3 層からはアマ ミゴヨウ (Pinus armandi var. amamiana), アカマツ (P. densiflora) などの植物化石が、また貝化石ではサルボ ウガイ属 (Anadara) が産出している. Ma4 層準及び Ma5 層準からはアカマツ,シラキ属 (Sapium) などの 植物化石が産出している.更に Ma5 層準では,ハイガ イ (Anadara granosa), シジミ属 (Corbicula), ウラカ ガミ (Dosinia angulosa), スダレガイ属 (Paphia) など の貝化石, フナクイムシ属 (Teredo), カニ, ウニなど が産出している.一方,亀井ほか(1969)は,深草の Ma6 層下底からトウヨウゾウ (Stegodon orientalis) の臼 歯化石などを報告している. 東海道本線東山トンネル西 口工事現場では、アカニシ(Rapana thomasiana)が産出 した(鳥居, 1948)が、ほかに石田(1969)は下位の海 成粘土層からマガキ (Ostrea gigas) 化石を報告している. また野口(1969)は、同じ地点の中位の海成層から珪藻 化石 Coscinodiscus lacustris, 放散虫破片, イソカイメン 針骨を、上位の海成層から珪藻化石 Auliscus pruinosus, Coscinodiscus lacustris, Melosira cf. lyrata などを報告し ている.今熊野の「東山洪積世植物遺体包含層」から は、三木 (1948) によりアマミゴヨウ (Pinus armandi var. amamiana), コナンキンハゼ (Sapium sebiferum var. pleistoceaca), コウセキハマナツメ (Paliurus nipponicus) などの植物化石が報告されているほか、海成層からシジ ミ属 (Corbicula) が報告されている (鳥居, 1948). 小 栗栖でもイタボガキ属(Ostrea sp.) などの貝化石が産 出した(鳥居, 1948). 三木(1933)は、黄檗で、コウ セキブナ (Fagus microcarpa), コナンキンハゼ, コウセ キハマナツメ、シリブトビシ (Trapa macropoda)、など 多数の植物化石を記載するとともに、二枚貝の印象化石 を報告している.

(小松原 琢)

7.1 研究史

近江盆地南部周辺の段丘堆積物の研究は, Takaya (1963)による地質調査において段丘堆積物が記載され たことに始まる。1960年代末から70年代には琵琶湖総 合開発計画と関連して地質調査が盛んに行われた。宇野 沢(1968)は湖南平野の扇状地を区分するとともにボー リングコアを採取し,平野地下に連続する腐植土が最終 氷期に形成されたことを明らかにしている。また,小谷 (1964, 1971)は国土地理院による湖沼図作成調査に基 づいて湖底の地形と環境をまとめ,湖底段丘について記 載している。

これらとは別に大橋・植村(1970)は近江盆地の地形 分類を行い,近江盆地の低位段丘面が湖底段丘に連続す ることを指摘した.植村(1972)は湖東平野の扇状地面 と琵琶湖の水位変動の関係を論じ,約15,000年前以降, 平均1 mm/年の相対的水位上昇が生じていることを明 らかにした.更に大橋(1975,1978a,b)は琵琶湖湖岸 及び瀬田川上流部の段丘面を湖岸段丘とみなし,それら を指標として琵琶湖の水位変動を議論した.池田ほか (1979)は,近江盆地の地形に関する当時の研究成果を 集大成している.

更に1980年代には詳細な地形分類図が相次いで公表 され,現在でも基本的に踏襲される段丘面区分がなされ るようになった(第7.1表).国土地理院(1982)によ る土地条件図は縮尺1/25,000で作成され,現在でも最 も大縮尺で詳細な地形分類図である.小林ほか(1982) は土地分類基本調査において段丘区分を示している.ま た滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 (1983)は大橋らの研究成果を取りまとめて,詳細な地 形面の区分と対比を行っている.更に植村・横山(1983) や滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 (1984) は湖東〜湖南地域の地下地質と段丘面の関係に ついて議論し,最終氷期の指標テフラである姶良 Tn テ フラ(AT) が近江盆地地下の多くの地点で産出するこ とを報告するとともに,地形面構成層の層相を詳しく記 載した.池田ほか(1991)は,これら80年代に得られ た新たな知見を総合して近江盆地の地形発達・地殻変動 や琵琶湖の湖水位変動を取りまとめている.

最近では,植村(2001a)が植村による一連の近江盆 地の研究成果(植村・太井子,1990:Uemura,1999 など) をとりまとめて,近江盆地の地形面を広域的に対比する とともに中期第四紀以降において近江盆地全体が西に傾 動沈下する近江傾動運動が継続的に行われていることを 明らかにしている.また小松原・関西地質調査業協会地 盤情報データベース作成委員会(2010)は,近江盆地の 浅層地下地質を取りまとめ,沖積層の厚さや層序の概要 を示している.

京都盆地の地形は古く塚本(1933)に記載された.上 治(1962)は現世層(沖積層・段丘),上部洪積層など を区分した地質図を発表しているが,第四系に関する層 序学的研究は行っていない.深草団体研究会(1962)は 桃山丘陵に分布する高位段丘が大阪層群を不整合に覆う ことを記載し,国土地理院(1966,1977)は縮尺1/25,000 の地形分類図を示し,段丘面を区分した.更に池田・植 村(1980)は木津川流域の段丘面を詳細に記載した.こ の研究は現在では失われた貴重な露頭を記載しており, 重要な価値を持つ.その後吉岡(1987)は京都盆地・山 科盆地周辺の活断層を記載し,その中で当該地域の段丘 面を細分している.

1995年の兵庫県南部地震後には、活断層の詳細な記載や地震危険度評価に関連して数多くの研究がなされるようになった。京都市による詳細な活断層調査・地下構造調査によって京都盆地・山科盆地の変動地形の詳細や

第7.1表 研究者別層序対比表

							地域							
京都府域									京都東南	有部地域				
		桃山丘陵	木津川流域	京都盆地• 山科盆地	京都盆地·山 科盆地	瀬田丘陵	石山丘陵 瀬田丘陵	石山丘陵·瀬 田丘陵	瀬田丘陵	瀬田川流域	石山丘陵·瀬 田丘陵	石山丘陵		
国土地理院 (1966)	国土地理院 (1977)	深草団研 (1962)	池田・植村 (1980)	吉岡(1987)	植村(2001)	Takaya (1963)	大橋(1978)	池田ほか (1979)	古琵琶湖団 研(1980)	滋賀県教育 委員会 (1983)	池田ほか (1991)	古琵琶湖団研 (1992)	小林ほか (1982)	本調査
			高位礫層		['			最高位段丘		低位小起伏 面群	I'	'	砂礫台地 I	
洪積段丘上位	高位面	桃山礫層	上位即后	I 面	古法邸后	Upper Old		高位段丘	上位段丘堆	南郷面群	群 南郷面 上位段丘堆積層		1 r	高位I段丘
洪積段丘中位	上位面		工业按旦	I面	尚世权丘	terrace		,	積層		瀬田I面		,	高位Ⅱ段丘
进発のこてた	中位素	1	中位积后		由住邸后	Lower Old	110/110	中位段丘	中位段丘堆	瀬田面群	瀬田Ⅱ面	中位段丘堆積層	砂礫台地Ⅱ	由历代日
洪慎段丘下江	屮1⊻曲	'	甲位按丘	山田	中世校正	Terrace	HZ/HJ	1'	積層	i'	瀬田亚面	<u> </u>	<u> '</u>	甲位叔正
油蒜矾片	下位面	'	下位 I 段丘	W7 -		Younger	<u> </u>	低合同日	下位段丘堆	亚油素群	平津I面	工作机合带建展	低位段丘 I	低位I段丘
沖積段丘 但	低位面	下位Ⅱ段丘	TA III	低世段丘	Terrace	1 ' '	低过段丘	積層	半洋面杆	平津Ⅱ面	下位段丘堆積層	低位段丘Ⅱ	低位Ⅱ段丘	

地下地質構造が明らかにされた.更に植村(2001b)は 京都盆地・山科盆地周辺の地形と活断層を詳細に記載した. 関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会(2002)は 盆地地下の地質に関する研究成果を取りまとめ詳細な層 序及び構造に関する資料を提示している.

7.2 高位段丘堆積物 (th1, th2)

本報告では、赤色(マンセル色表示で 5YR4/8 程度 ~ 2.5YR5/8 程度の色調)を呈するローム層に被覆され、 砂岩や泥岩などの礫では指や鎌で容易に表面を削ること ができる程度まで風化した礫(くさり礫)を多く含む段 丘堆積物を高位段丘堆積物として記載する.

高位段丘堆積物は表土の特徴と地形的な配列に基づい て古期から順に高位 I 段丘堆積物及び高位 II 段丘堆積物 の2層に区分される.

7.2.1 高位 I 段丘堆積物 (th1)

定義 表土中に黄褐色の網斑状組織(ロース斑)が発達 し、最高位の段丘面を構成する地層を高位 I 段丘堆積物 と定義する.

層序関係 丘陵に露出する部分では大阪層群及び古琵琶 湖層群以下の地層を傾斜不整合に覆う. **分布** 京都盆地・山科盆地及び近江盆地を取り囲む丘陵 に広く分布する.特に宇治丘陵北西部と瀬田丘陵北部に は広範囲に連続して分布する.

層相本層は全層厚1~5m程度の淘汰の良くない砂礫 層,砂層と泥層からなる(第7.1図).砂礫層中の礫は チャートなど耐風化性の強い礫種のものを除くと「くさ り礫」となっていることが多く,チャート礫も大部分が 漂白されて割れやすくなっている.礫の大きさや円摩度 は場所による違いが大きく,特に山麓の砂礫層では後背 地に分布する岩種の角~亜角礫が多く混入し,ところに よって巨礫を主体とする.砂層は砂礫層から上方細粒化 して漸移するもので,砂礫層と同じく場所による層相の 変化が激しい.一般に泥分を含み,上部ほど赤色を呈す る.泥層は砂礫層中にレンズ状に挟まれるか,または本 層の最上部に薄く分布する.

本層中の泥層及び表土中には黄色ないし黄褐色の明瞭 な「ロース斑」が発達する.

本層が大阪層群の深草層や古琵琶湖層群の草津層の砂 礫層を覆う場所では、両層の境界が見えない露頭で両者 を識別することは困難である.

なお,池田・植村(1980)は宇治市折居台の本層中に, 屈折率1.500-1.504の火山ガラスを含む厚さ約30 cmの 黄桃色火山灰層を記載しているが,この露頭は厚い植生



第7.1図 高位 I 段丘柱状図 地点位置は付図 B-C 参照. に覆われており同火山灰層を確認することはできなかった.

地形面の形状開析された平坦面が残存する。特に宇治 丘陵北西部と瀬田丘陵北部では広大な段丘面を形成す る.

7. 2. 2 高位 II 段丘堆積物 (th2)

定義 2段の高位段丘面の中では低位の面を構成する段 丘堆積物を高位Ⅱ段丘堆積物と定義する.場所によって 表土中に「ロース斑」が認められることもあるが,礫の 風化程度は高位Ⅰ段丘堆積物よりも低い.

層序関係陸上に露出する部分では下位層を不整合に覆う.

分布 京都盆地・山科盆地及び近江盆地の縁辺部と宇治 田原盆地に断片的に分布する.特に黄檗丘陵と天ヶ瀬ダ ム付近より下流の宇治川沿いに連続的に分布する.

層相本堆積物は砂礫層を主として砂層や泥層を挟む (第7.2図).砂礫層中の礫は地域によって礫種や円摩 度に大きな違いがある.特に天ヶ瀬ダム付近より下流の 宇治川沿いや宇治田原では本層の砂礫層は10 m以上, 最大約50 mの厚さをもち,斜交層理や覆瓦構造が発達 する多数の上方細粒化ユニットに分けられる.このよう な厚い砂礫層は宇治田原丘陵でも特徴的に認められ,堆 積段丘をなしている.厚い砂礫層が発達する地域では, 本層の上部に細礫層を挟み,上方細粒化するユニットを なす砂層及び泥層が発達する.一方近江盆地周辺では厚 さ数 m 以下の淘汰の良くない砂礫層を主体とする.山 麓では後背地に分布する岩種によって構成された不淘汰 な角〜亜角礫を多量に含み,赤色風化した基質によって 充填された礫混じり土が主体をなす.

本層上の表土の一部では「ロース斑」が認められるが, 多くの箇所で「ロース斑」は認められない.

地形面の形状開析された地形面を構成する.特に山麓 部では崖錘状の斜面と河成段丘面が滑らかに連続するこ とが多い.



7.3 中位段丘堆積物 (tm)

定義 黄褐色の表土(マンセル色表示で7.5YR5/8 程度) に覆われ,若干風化した砂礫層などにより構成される段 丘堆積物を中位段丘堆積物と定義する.

層序関係 陸上に露出する部分では下位層を不整合に覆う.

分布 宇治丘陵や桃山丘陵及び石山丘陵では高位段丘面 を開析する谷沿いに分布するほか,大石・田上丘陵や宇 治田原丘陵などの山間盆地や信楽川沿いに断片的に分布 する.

層相本堆積物全体を観察できる露頭は少ない.桃山丘陵の伏見区桃山町伊賀では厚さ数mの成層した円〜亜円礫を主体とする砂礫層が認められる(第7.3図).その最上部は砂と比較的径の小さな礫の互層をなす.大石田上丘陵の大津市南郷6丁目では成層した円礫を多く含む砂礫層が観察される.両地点以外でも中位段丘堆積物は比較的厚い成層状の砂礫層を主体としており,その多くは堆積段丘であると推定される.

地形面の形状 支流に入りこむように分布する地形面を 構成する.特に山麓部では段丘化した埋谷緩斜面状の斜 面と河成段丘面が滑らかに連続することが多い.

7.4 低位段丘堆積物 (tl1, tl2)

本報告では暗褐色(マンセル色表示で10YR2/3~3/4 程度)の表土に覆われた段丘堆積物を低位段丘堆積物と して記載する.低位段丘面は2段に区分することができ る.本報告では古期(高位)のものを低位 I 段丘堆積物, 新期(低位)のものを低位 II 段丘堆積物と区分して記載 する.

7.4.1 低位 I 段丘堆積物 (tl1)

定義 2段の低位段丘面のうち高位の段丘面を構成する 堆積物を低位 I 段丘堆積物と定義する.

層序関係陸上に露出する部分では下位層を不整合に覆う.

分布 近江盆地では琵琶湖西岸側に, 京都盆地では盆地





東縁に広く分布するほか,瀬田川・宇治川沿い,信楽川 沿い及び宇治田原盆地に断片的に分布する.

層相 現在本堆積物全体を観察できる露頭は少ない.人工的な掘削に伴う露頭や河川沿いの断片的な露頭と地形から,未風化な礫からなる砂礫層を主体とすると考えられる.大津市石山に分布する本堆積物中にも,始良Tnテフラ(AT)が挟まれている(古琵琶湖団体研究グループ,1992).大津市大石では2段の低位段丘面のうち,高位の段丘面を構成する堆積物中にATが挟在する(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会,1983).また,宇治田原丘陵の禅定寺において,低位段丘堆積物に対比される崖錘堆積物中に厚さ5~12 cmのATが挟在することが小倉(1995)により報告されている. 地形面の形状 支流に入りこむように分布する地形面を構成する.特に宇治田原盆地では段丘化した埋谷緩斜面状の斜面と河成段丘面が滑らかに連続する.

7. 4. 2 低位Ⅱ段丘堆積物 (tl2)

定義 2段の低位段丘面のうち低位の段丘面を構成する 堆積物を,低位Ⅱ段丘堆積物と定義する.

層序関係陸上に露出する部分では下位層を不整合に覆う.

分布 京都盆地東縁と,瀬田川・宇治川沿い,信楽川沿いに断片的に分布する.

層相 断片的な露頭と地形から,未風化な礫からなる砂 礫層を主体とすると考えられる。

地形面の形状 低位 I 段丘堆積物の低位に狭い段丘面を 構成していることが多い.

7.5 斜面堆積物 (t, v)

本報告では堆積性の斜面を構成する堆積物を斜面堆積 物として記載する.本図幅内には,崖錘堆積物と埋谷緩 斜面堆積物が存在する.なお,後期更新世以前に堆積し, 現在は開析されている斜面堆積物は段丘として図示して いる.

7.5.1 崖錐堆積物 (t)

定義 斜面基部に分布し崖錐斜面を構成する堆積物. 分布 山地・丘陵の麓に点在する.地質図に示したもの 以外にも,1/50,000 図で示すことができない小規模な崖 錐堆積物が山地及び丘陵斜面の基部に点在する.

層相一般に締まりのゆるい礫,砂,泥からなる.礫の 種類や形状は背後斜面・流域の地質と地形によって変化 する。

7.5.2 埋谷緩斜面堆積物 (v)

定義 丘陵を開析する谷を埋めて幅広い(おおむね幅約 50 m 以上)緩斜面を構成する堆積物. 分布 田上山地,瀬田丘陵や宇治丘陵などの山地・丘陵 を開析する谷に沿って分布する.特に砂礫を主体とする 古琵琶湖層群・大阪層群の分布する丘陵では,直線状の 谷に沿って広く分布する.

層相 さまざまな大きさの角〜亜角礫の間を,不淘汰な 砂混じり泥の基質が充填する礫層と,礫の少ない基質主 体の泥層からなる.礫層の一部には上部に粗大な礫が密 な逆級化成層が認められる.

7.6 沖積層 (af, ab, rb, al, ac, l, r, m)

本章では沖積層のうち特に微地形を構成する表層部の 地質に関して記載し、地下地質に関しては第8章で記載 する.

沖積層の表層部は微地形と対応して緩扇状地堆積物, 後背湿地堆積物,天井川堆積物,自然堤防堆積物,旧河 道堆積物,現河床堆積物,干拓地堆積物及び盛土に細分 される.

7.6.1 緩扇状地堆積物 (af)

本報告では勾配が概ね3°以下の,主として掃流によっ て形成された扇状地の堆積物を,それよりも急勾配で主 として土石流によって形成された扇状地の堆積物と区分 して,緩扇状地堆積物として示す.本図幅において緩扇 状地堆積物は京都盆地北部と近江盆地の琵琶湖西岸地域 及び山科盆地東部に分布する.この堆積物は一般に砂礫 層を主体として砂層を含む.

7.6.2 後背湿地堆積物 (ab)

後背湿地堆積物は,洪水時に河道から溢流して沖積低 地に堆積した細粒の砕屑物からなる.主として砂泥から なるが,扇状地周辺や山間部の河谷及び大規模河川近傍 では礫を多く含む.本図幅では近江盆地や京都盆地,山 科盆地のほかに大戸川沿いの低地にまとまって分布す る.

7.6.3 天井川堆積物 (rb)

天井川堆積物は,河道を固定するために人工的に堤防 を高く積み上げた結果,周囲の沖積面よりも河床が高く なった河川の河道と堤防を構成する堆積物である.近江 盆地の草津川や大戸川水系の天神川に典型的な天井川堆 積物が発達するほか,木津川や宇治川の支流にも分布す る.

7. 6. 4 自然堤防堆積物 (al)

自然堤防堆積物は,洪水時に河道から溢流・堆積した 礫や砂などからなり,河道沿いに微高地を構成する堆積 物である.礫を含み,比高1m程度の微高地を構成して いる.本図幅内では木津川周辺に大規模なものが発達す るほか,鴨川周辺や近江盆地にも分布する.

7.6.5 旧河道堆積物 (ac)

旧河道堆積物は,かつて沖積低地内を流れていた河川 の河道上に堆積した河道堆積物及び河道埋積堆積物であ る.これは場所によって大礫主体の砂礫から泥主体のも のまで様々な層相を示す.京都盆地の宇治川近傍に特に 顕著なものが認められるほか,近江盆地や山科盆地にも 分布する.昭和以降の人工地形改変によって多くの旧河 道堆積物が盛土に被覆されている.

7.6.6 現河床堆積物 (I)

天井川堆積物を除いて,堤外地に堆積しつつある堆積 物を現河床堆積物として記す.本図幅内では宇治川及び 木津川において,1/50,000 地質図上に表現可能な現河床 堆積物が分布する.宇治川の現河床堆積物は主として砂 及び泥からなり,木津川の現河床堆積物は砂及び礫を主 体とする.

7.6.7 干拓地堆積物(旧湖沼堆積物)(r)

干拓地堆積物は,かつての湖沼のうち干拓によって陸 化された地区の表層堆積物である.宇治川南岸の巨椋池 干拓地やその対岸(右岸)の横大路沼,及び木幡池周辺 の干拓地などがこれに該当する.いずれもかつては宇治 川の遊水池であり,増水時と渇水時で水域の面積が大き く変化していた.このような堆積環境を反映して,干拓 地堆積物の表層部には主として泥質な堆積物が分布す る.巨椋池をはじめとする京都盆地の遊水池は,近代以 降だけでなく桃山時代にも豊臣秀吉による大改修が行わ れるなど盛んに人工地形改変を受けていた(巨椋池土地 改良区編,1962;伊藤・増田,2008:巨椋池については 第12章参照).地質図に示す干拓地堆積物の分布は明治 後期に発行された地形図(1/20,000 正式図)から読み取っ たものである.

7.6.8 盛土 (m)

盛土は、人工的に水域ないし自然地盤上に土砂を盛っ て造成した堆積物である.琵琶湖畔では大津城建設(16 世紀末)以降湖岸に盛土され、特に近代以降には大津市 周辺の琵琶湖畔で大規模な盛土がなされた.また、丘陵・ 山地では住宅地、工場団地や変電所、ゴルフ場などの造 成のために谷埋盛土がなされている.地質図では、近世 以来の歴史記録及び明治以降の旧版地形図から盛土の範 囲を読み取って図示した. 本報告では,近江盆地及び京都盆地・山科盆地の第四 紀堆積盆地の地下層序と地質構造を記載する.

8.1 近江盆地

本図幅内の近江盆地の深部地下地質に関する詳細な資 料はないが、大津市瀬田(琵琶湖東岸)の温泉ボーリン グによると深度約500mで基盤岩(丹波帯付加コンプ レックス・花崗岩)に到達する。本図幅内では古琵琶湖 層群とそれを覆う段丘堆積物の境界の深度を直接示す ボーリング資料はないが、「京都東北部」図幅内の烏丸 地区ボーリングでは深度170m付近に段丘堆積物相当層 と古琵琶湖層群相当層の境界が位置すると考えられてい る(烏丸地区深層ボーリング調査団、1999)ことから、 それよりも浅い深度に両者の境界が位置する可能性が高 い.

近江盆地の浅層地下地質は、小松原・関西地質調査業 協会地盤情報データベース作成委員会(2010)に概要 がまとめられている。それによると、湖東地域では姶 良 Tn テフラ(AT)を挟有する最終氷期の腐植土が広く 追跡され分布する、その上限(未補正¹⁴C年代で約16.5 ka)より上位を沖積層とみなしてその層厚分布を求める と、本図幅内の陸上ではほとんどの場所で5m未満と薄 い(第8.1図).また、近江盆地の沖積層は地域や地形 場に対応する層相の違いが著しく、連続性に乏しい特徴 がある。

8.2 京都盆地及び山科盆地

京都盆地の地下層序及び構造については、1995年兵 庫県南部地震(阪神・淡路大震災)以降の,京都市及び 京都府・他の研究機関で実施された活断層調査,地下構 造調査によって集積されてきた.京都盆地の深部地質や 構造については,京都盆地での中・古生層基盤まで届 くボーリング3地点,及び反射法地震探査・重力探査 により情報が蓄積された(京都市,1999a,2000,2001a, 2002a,2003a;竹村ほか,2003;宮地ほか,2005;竹村, 2009).表層地盤については,ボーリングデータベース の収集が進められ,その利活用がされてきた(関西地盤 情報活用協議会地盤研究委員会編,2002).ここでは, それらの情報に基づき,京都盆地・山科盆地の地下第四 系について記述する.



第8.1図 近江盆地の沖積層の厚さ

8.2.1 地下深部層の層序と地質構造

(1)3本のボーリング結果から明らかにされた盆地内 地下層序

京都盆地内の地下層序は,基本的に中・古生層を基盤 として第四系(大阪層群相当層,段丘堆積物相当層,沖 積層)が重なっている.基盤まで届くボーリングは京 都市によって平成11年(KD-1),平成12年(KD-2), 平成14年(KD-0)に実施された(第3.2表,第8.2 図位置図).

KD-1ボーリング(第8.3図)における基盤岩の上面 深度は223.2 mで、基盤岩は頁岩・砂岩・チャートから なる.基盤岩と不整合で、未固結の粘土・砂・砂礫の互 層が重なる.これらの地層は、盆地東西の丘陵に分布す る大阪層群に対比される地層群である.大阪層群相当層 はこの地点では、深度37 m付近以深とされている。均



第8.2図 ボーリング及び反射法位置図 (京都市,2003b) KD-0の位置は久御山 -八幡測線の北東端,宮地(2005)参照.

質な粘土層が周期的に挟まれ、コア色調の肉眼判定や、 貝殻片・黄鉄鉱などの含有調査により、5層の海成層が 挟まれていることが明らかにされた.8層の火山灰層が 確認され,深度 207.36 ~ 207.88 m(厚さ 52 cm)の火 山灰はアズキ火山灰層に,深度140.90 mの火山灰は八 町池 I 火山灰層に、深度 133.21 m の火山灰は誓願寺 - 栂 火山灰に対比された.この火山灰対比に基づき,最下位 の海成粘土層は大阪地域や京都盆地周辺に分布している 第3海成粘土層(Ma3)に対比され、その上位の3層の 海成粘土層は第4海成粘土層(Ma4)から第6海成粘土 層(Ma6)に対応するとされている.最上位の海成粘土 層(深度 63.03 ~ 68.70 m)は花粉分析等のデータや大 阪地域からの分布が連続する可能性を含めて第9海成粘 土層(Ma9)相当と考えられている。弾性波速度は下部 ほど速く、Vp = 1.8~2.0 km/sec であり、粘土部分で遅く、 岩質とのよい対応が認められる.上位(37m以浅)の 段丘堆積物から沖積層は,砂礫・粘土混じり砂礫・陸成 粘土で構成されている.

KD-2ボーリング(第8.4図)の基盤岩の上面深度 は198.0mで、基盤岩は頁岩・砂岩・チャートからなる. 基盤岩に不整合で、未固結の粘土・砂・砂礫の互層が重 なる. 大阪層群と上位の段丘堆積物~沖積層との境界は 不明瞭である.KD-1が均質の粘土層を周期的に挟んだ のに比べ、淘汰の悪い扇状地堆積物と考えられる粘土混 じり砂礫が80%以上を占めている。3層の海成粘土層 が確認され、深度155.80~160.07 m (厚さ4.27 m)と 182.21~190.37 m (厚さ 8.16 m)の粘土層には、大型の カキ化石が含まれている。肉眼で確認できる火山灰層は 発見できなかったが、反射法地震探査の結果で判断され る地層の連続性から、最下位の粘土層が第5海成粘土層 (Ma5)に、その上位が第6海成粘土層(Ma6)に対比 できると考えられる. 最上位の海成粘土層は第9海成粘 土層(Ma9)に対比されている。弾性波速度は下部ほど 速くなり, 岩質とのおおまかな対応がみられる. KD-1 と比較すると、KD-2の弾性波速度と密度は大きく、岩 質の違いが現れている.

KD-0ボーリング(第8.5図)の基盤岩の上面深度 694.5 mで,基盤岩は頁岩・チャートからなる.その上 位には基盤岩に不整合に未固結の粘土・砂・砂礫層の互 層が重なる.深度460~520 mと620 m以深は粘土層 が卓越し,深度641~691 mは粘土が卓越する.コア観 察では、5層の海成粘土層が推定された.上位より深度 101.82~106.00 m(厚さ4.18 m),183.56~186.45 m(厚 さ2.89 m),213.19~217.87 m(厚さ4.68 m),249.05~ 250.69 m(厚さ1.64 m),297.84~300.64 m(厚さ2.80 m) である.火山灰としては、164.88~164.92 mにサクラ 火山灰,295.30~297.84 mにアズキ火山灰,667.80~ 670.79 mに福田火山灰が挟まれている.それらを参照 して、海成粘土層層準は、下位より、第3海成粘土層,



第8.4図 KD-2の柱状図 (京都市, 2000)



第8.5図 KD-0の柱状図(京都市, 2003b)

第4海成粘土層層準,第5海成粘土層,第6海成粘土層 及び第9海成粘土層層準と推定されている.また,深度 72.5 mを境に上部は茶灰色,下部は灰色を示すことから, 大阪層群相当層と段丘堆積物・沖積層の境界は73 m付 近と推定されている.

(2) 反射法地震探査と重力探査による基盤形状と地質 構造

京都盆地では,地下構造探査のために,長い8測線(堀 川-巨椋池測線:19.6 km;丸太町測線:7.38 km;五条測線: 5.59 km; 久世橋測線: 10.5 km; 五条測線: 5.59 km; 五 条第2測線:4.58 km;山科測線:3.52 km;外環状測線: 8.94 km; 久御山-八幡測線: 4.92 km)の反射法地震波 探査が実施された(第8.2図).その他に大学等の研究 機関で活断層構造調査のために実施された測線が存在す る. 南北ほぼ 20 km の堀川 - 巨椋池測線は, 基盤岩と堆 積層の境界が明瞭に認められた。境界(すなわち基盤岩 上面深度)は、測線南部の巨椋池干拓地あたりでもっと も深くて 600~800 m 程度であり、北部の烏丸鞍馬口 付近(CMP3200あたり)では、ほとんど地表面下数十 mとなり、南から北へ浅くなる傾向がみられる. また 中央部の基盤岩上面では、100~200m程度の起伏が認 められる(第8.6図). 堆積層には, 明瞭な反射面の繰 り返しが見られ、砂礫・砂と粘土層の互層を反映してい ると考えられる. 深層ボーリングコア (KD-1, KD-2, KD-0)の層序との対応から、反射測線での海成粘土層 の分布状態を明らかにできる. これらの反射面はほとん ど水平であるが、わずかに北へ傾斜していることが認め られる.この堆積層にみられる構造と、基盤岩上面の形 状はほとんど無関係で、基盤起伏は大阪層群堆積時にす でに存在した埋没地形である.基盤岩上面に落差を伴っ た明瞭な堆積層変形が宇治川付近で見られ、伏在断層の 存在(宇治川断層)が指摘された(京都市, 1999a).反 射法探査8測線から推定される京都盆地の地下構造は第 8.7 図にまとめられる。山科盆地の地下では、基盤岩深 度が200mを超え、反射法断面には4層の明瞭な反射面 が認められる.周辺に分布する海成層を考慮すると,第 3海成粘土層, 第4海成粘土層層準, 第5海成粘土層, 第6海成粘土層と考えられる.

重力調査結果は、京都市(2003a)や井上ほか(2004) にまとめられている.ブーゲー異常図では、一般的な傾 向として琵琶湖湖盆方向に負の異常が大きくでる傾向が あり、東西方向の反射法断面ではほぼ水平の地層である のに対して、盆地東側のブーゲー異常の負の値が大きく なっている.この補正のために、京都市(2003a)や井 上ほか(2004)では、反射法地震探査測線で実施した重 力調査結果と反射法地震探査で求められた基盤深度を用 いて、補正を実施することにより、基盤深度分布を求め ている.その結果、基盤岩深度は宇治川断層を挟んで南 北で大きく異なることが明らかになった.最深部は宇治

京都盆地及び山科盆地には、南北方向の活断層の活動 等により、地下深部に厚い第四紀層が存在している。そ のほとんどは、大阪層群相当層である。海成粘土層と火 山灰層及び花粉分析結果等から、最下位の海成粘土層は 第3海成粘土層であり、その上位には少なくとも第4海 成粘土層層準, 第5海成粘土層, 第6海成粘土層, 第9 海成粘土層が確認された(第8.8図).反射法地震探査 と重力探査の組み合わせにより、京都盆地及び山科盆地 の基盤岩上面構造や堆積層にみられる構造が明らかに なった. 基盤岩上面構造は宇治川断層により深さが南北 で大きく異なり、南側では 600~800 m の深度、北側で 250 m 程度であり、北に向かって浅くなる傾向がみられ る. 京都盆地の深部地下第四系に関しては, Ma9の上位 に Mal0 の存在を記載した報告(藤原, 2003) や, KD -0の粘土層の解析を海成粘土の観点から実施した報告 (木谷・加茂, 2010)が出されている。今後も、Mal0 相当層の課題、京都盆地や山科盆地への海進・海退の規 模と断層運動に伴う地層の保存などの情報を整理し、大 阪側からの地層の連続性や海進の状況との整合性をとり ながら、地下層序に関する知見の整理が必要である.

8.2.2 地下の段丘相当層及び沖積層

京都盆地及び山科盆地地下浅層には、大阪層群の上位 に段丘相当層及び沖積層が堆積している. これらの地層 状況や広がりをまとめるには、ボーリングデータが有 効な役割を果たす. 京都盆地内のボーリングデータは. 2002 年に発行された新関西地盤 - 京都盆地 - (関西地盤情 報活用協議会地盤研究委員会編, 2002) にまとめられ, その概説が北田ほか(2003)により紹介されている。本 図幅では、約8,000本のボーリングデータを用いて、N 値などを参考にして地質区分がなされた. 京都盆地浅部 は、大部分で礫層が分布している。特に、盆地北部は礫 層が地表面に露出している地域があり、N値は50を超 える.この上位に被覆する表層細粒層(北部ではクロボ クが分布)には鬼界アカホヤ火山灰(7300 cal yrBP)が 挟まれている.また,平安神宮周辺や丸太町西大路周辺 などでは、最終氷期を示す姶良 Tn 火山灰(AT 火山灰) が発見されており、これらと¹⁴C年代測定結果が年代決 定に有効である.

沖積層と段丘堆積物相当層との境界は,主に層相とN 値から推定され,沖積層は,粘土層でN値10以下,砂 層でN値40以下を目安として,側方への連続性も考慮 された(北田ほか,2003).京都盆地の浅部地質の代表 例として,南北反射法測線(堀川-巨椋池測線)に沿っ た南北断面を示す(第8.9図).全体にわたって,厚く 礫層が見られ,その下位に粘土・砂からなる大阪層群相 当層が確認できる.厚い礫層は北部地域で地表に達し,



第8.6図 反射法断面(南北方向:堀川-巨椋池測線)(京都市, 1999a)



第8.9図 ボーリングデータからみた京都盆地の南北断面(関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編, 2002)

+条通り以南では,礫層上位に砂・粘土層が分布する. 京阪本線以南では10m程度に達する.沖積層の層厚分 布(第8.10図)からは,東西方向での変化より南北方 向の変化が大きいことがわかる.また構成層の土性(第 8.11図)では,三川合流地域から宇治川北部では粘土 層が優勢で,南部地域は砂層が優勢である.基本的に風 化花崗岩からの砕屑粒子が卓越する木津川系と宇治川系 の関係が表現されていると考えられる.また,宇治川と 木津川の中間部である大久保付近では両河川に挟まれた 後背湿地型の粘性土が卓越している.

山科盆地の浅部地下地質に関しては、ボーリングデー タを南北に並べた第8.12図から、京都盆地のように段 丘相当層の厚い礫層が発達していないことがわかり、沖 積層相当層との区分は明確にできない.全体に礫層主体



で粘土層を挟む. 第8.11 図に見られる名神高速道路から府道782 号線あたりに分布するシルト・砂の卓越する 地層は,表層地質分布からみて大阪層群相当層が地表面 近くまで分布していると考えられる.このあたりから北 部が盆地状になり,周辺山地河川からの砂礫の堆積と, 氾濫原でのシルトと砂の堆積がくりかえして互層状の地 層が形成されたと考えられる. なお、年代に関する資料は少ないが、西野小学校の北 緯 34°58′59.8″、東経 135°48′11.3″地点のボーリングで 3 点の¹⁴C 年代測定を実施した. 深度 6 mで 24,130 ± 110 yrBP, 深度 8.2 mで 26,690 ± 140 yrBP, 深度 15 m で 48,130 ± 780 yrBP の年代値が得られており、沖積層の 層厚は薄いことが理解される.





8.12図 ボーリングデータからみた山科盆地の南北断面 (関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編, 2002)

9.1 中生界の地質構造

中生界の地質構造は, 丹波帯ジュラ紀 付加コンプレッ クスの地質構造と後期白亜紀火成岩類の地質構造に細分 できる.

丹波帯ジュラ紀付加コンプレックスの地質構造 丹波帯 ジュラ紀付加コンプレックスからなる北西部や中央の地 塊は、南北ないし北北東-南南西方向の断層などで区切 られている. 中央の地塊の中にも北北東-南南西方向の 断層が,明瞭にその構造を切って分布している.丹波帯 付加コンプレックスは、Ⅰ型地層群とⅡ型地層群に区分 され、両者は明瞭な断層で区切られている、両者の境界 はその成因から判断して本来低角な断層だったと推定さ れるが、現在は東西方向の高角断層として地表に現れて いる(第3.1図). Ⅰ型地層群はⅡ型地層群の構造的下 位に位置している。全体として大きく正立褶曲している が、後世の構造変形によって更に複雑な地質構造となっ ている。例えば、宇治市菟道から宇治田原町高尾にかけ ての地質体は、厚い砂岩層が卓越する箇所とメランジュ の泥質基質が卓越する地域が褶曲により繰り返している が、後世の断層により本来の褶曲構造が不明瞭となって いる. また. 砥石型珪質粘土岩とチャートのスラブが卓 越するメランジュではしばしば翼の閉じた褶曲が観察さ れ,特に宇治市西笠取下荘川西の東にある採石場では, 砥石型珪質粘土岩・チャート・泥岩優勢砂岩泥岩互層が 明瞭な褶曲構造を有している.

丹波帯付加コンプレックスの走向は、Ⅰ型地層群、Ⅱ 型地層群ともに北西-南東ないし西北西-東南東方向で、 一部東西あるいは東北東-西南西となっている.傾斜は、 60°以上で南あるいは北に傾斜している.メランジュの 剥離性の方向と地質図に描けるサイズのスラブの延びの 方向はほぼ平行である.丹波帯付加コンプレックスは、 新生代の高角断層によって所々分断されているが、それ ほど大きな変位は受けていない.

本図幅地域の丹波帯付加コンプレックスのうち北西部 や中央の地塊においては、南北ないし北北東-南南西方 向の断層が顕著である。それらはかつて笠取断層・音羽 山断層として地質図に示されている(石井,1932:上治, 1962).本図幅において調べた断層の位置は、上治(1962) の位置と若干異なっており、同一の断層とするべきか判 断が分かれるところであるが、これらの断層が丹波帯付 加コンプレックスを切る非常に重要な断層であることに は違いない、丹波帯付加コンプレックスの西縁にある黄 (小松原 琢・水野清秀・脇田浩二・竹内圭史)

檗断層系は、活断層として認識されているが、丹波帯付加コンプレックスの分布を限る重要な断層系でもあり、 古くから活動していた断層系が新生代にも再活動していると推定される。大津市石山から岩間山の西を経て宇治 田原町郷之口にかけても、北北東-南南西の笠取断層が 推定される。笠取断層の方向は、花折断層や中央部地塊 の西縁の構造方向と一致する。同方向の断層はより東に も分布するが、図幅地域東部では花崗岩の分布によって その構造が明瞭ではなくなっている。

丹波帯付加コンプレックスを切る断層として,西北西 -東南東方向の断層がしばしば観察される.これは,丹 波帯付加コンプレックス内部の構造とほぼ平行である. 宇治市喜撰山で砂岩の北限を境する喜撰山断層(上治, 1962)はその一例であるが,その位置は本図幅の調査結 果とは相違する.

他には北西-南東方向の断層が丹波帯付加コンプレッ クスの分布の北部で観察される.京都市山科区髭茶屋付 近で南北に走る断層は、多くの地点で岩相のずれから位 置が特定され、新幹線音羽山トンネル内でも破砕帯が確 認されている.

後期白亜紀火成岩類の地質構造 田上花崗岩体の貫入形 態については、大津市立木観音・妙見山で丹波帯の地層 がルーフペンダントとなっているのをはじめ、岩間山・ 袴腰山や東部の太神山南では貫入面が低角南西・南傾斜 である.したがって田上花崗岩体の南部から西部にかけ ての地域では、深成岩体の上面付近が現在地表で観察さ れているものと考えられる.田上花崗岩体全体としても、 大きな傾動運動などは被っていないように思われる.

後期白亜紀火成岩類を切る断層には大津市千頭岳東の 笠取断層(上治,1962)がある.そこでは北北東-南南 西方向の笠取断層が田上花崗岩体と丹波帯の地層を境し ており、変位は西落ちである.また、音羽山周辺の岩脈 が南北系の断層系により切られている.一方、東部の田 上花崗岩体の周辺では地質図に示される規模の断層の存 在は確認されていない.

9.2 綴喜層群の地質構造

湯屋谷断層(新称)

宇治田原町湯屋谷南方から東方へ殻池峠の北方へ延び る,東西延長約4.5km,垂直変位北落ちの断層.従来の 地質図では裏白断層(石田ほか,1954:次項参照)が西 方へ湯屋谷断層に連続するとされていたが,両者は別の 断層である.西部・東部では南側の丹波帯付加コンプレッ クスと北側の綴喜層群を境する.中央部では綴喜層群の 分布域内に位置し,綴喜層群が本断層の北側では南傾斜, 南側では北傾斜する向斜構造をなしている.本報告の調 査では断層露頭は観察されず,断層の位置は基盤岩と綴 喜層群の露頭分布,綴喜層群の傾斜方向,及び地形から 推定した.東端は殻池峠の道路で位置を特定できるが, 以東への延長は不明である.西端では大阪層群長山層を 変位させていないことから,長山層の堆積以前に活動を 終えていたと考えられる.

その他の断層 奥山田北方の道沿いで,奥山田層の塊 状シルト岩と丹波帯のチャート角礫岩・チャートが N55°W, 80°Sの断層で接している.北西・南東への延長 は不明であるが,北西地域の丹波帯付加コンプレックス に見られる西北西-東南東断層系と関連する可能性もあ る.

9.3 活構造

京都東南部図幅には鮮新-更新統から上部第四系を変 位させる地質構造が数多く認められる.第四紀後期の変 位基準を変形させている構造が活構造に該当することは 確実であるが,第四紀後期の変位基準面を欠き鮮新-更 新統に変位を与えている地質構造の中にも活構造が含ま れている可能性は否定できない.

本図幅地域には逆断層を主体とする活構造が多く認め られている(第9.1図).活構造の多くは山地・丘陵と 平野の境界をはじめとする地形境界に位置し,堆積盆地 や山地など地形の形成に深く関与してきた.

この地域の活断層に主眼を置いた研究は、藤田ほか (1974)による第四紀地殻変動図の作成に始まる.その後、 活断層研究会(1980)による全国的な断層調査によって 本図幅を含む近畿地方が全国的に見ても活断層の密集す る地域の一つであることが明らかにされた. 吉岡(1987) は京都盆地周辺の活断層を記載し、盆地の形成機構につ いて議論した.また、池田ほか(1991)は滋賀県の活断 層や変動地形について記載した.

1995年の兵庫県南部地震以降,活構造に関する調査 が活発に行われ多くの知見が得られた.それらの調査は 詳細な活断層分布図の作成(岡田ほか,1996;岡田・東郷, 2000;植村,1999,2001a;中田・今泉,2002),活断層 の活動履歴の解明(京都市,1998a,b,1999b,2001b) 及び地下地質構造の解明(京都市,1999a,2003b)など 多くの成果を生み出した.しかし一方で研究ごとに異 なった断層名が用いられる例がある.研究別の活構造名 対照表を第9.1表に示す.

本図幅内には、1)高位段丘堆積物ないしそれより新 期の地層を変位させる構造(活構造)、2)古琵琶湖層 群・大阪層群を変位させるものの、第四紀後期の変位基



第9.1図 近畿地方活断層図 水野ほか (2002), 岡田・東郷 (2000) に加筆して作図.

準を欠く構造(鮮新世または前期第四紀以降に活動した 構造),3)第四系を変位させる露頭や明瞭な変位地形は 見つかっていないものの活構造である可能性をもつ断層 (推定活断層),が存在する(第9.2図).このうち,後 2者は第四紀後期に活動した証拠はないが,活構造と密 接な関係をもつ地質構造であるため,本章で記載する.

9.3.1 瀬田傾動帯(新称)

瀬田傾動帯は、本図幅の北に位置する野洲川左岸付近

から大津市の瀬田川付近に至る長さ約15kmの北西傾斜の傾動帯である。瀬田丘陵では、本傾動帯によって高位 I段丘面が1/100の勾配で北西に傾斜する(第9.3図). 瀬田川沿いの河成段丘面の縦断面図(第9.4図)によ ると、この傾動帯の南端は瀬田丘陵南端に及んでいる。 中位段丘面が変位していることから、この傾動運動は少

本研究	植村(2001)	京都市(2001)		岡田・東郷編 (2000)	岡田ほか (1996)	活断層研究 会(1991)	吉岡(1987)	活断層研究 会(1980)	地震調査研 究推進本部 (2011)
瀬田傾動帯				図示のみ					
膳所断層				膳所断層	膳所断層	膳所断層		図示のみ	琵琶湖西岸 断層帯南部
				茶戸町(断層)					
			小野断層	小野−醍醐断層	図示のみ	黄檗断層	小野断層		_
黄	黄 檗 断 層	黄	御蔵山断層	御蔵山断層			御蔵山断層	黄	三方
葉 断 層		檗 断 届	木幡断層(撓 曲)	木幡断層				 檗断	花
		系	黄檗断層	南山断層			黄檗断層	層	折断
				菟道断層					層
花山−勧修寺	花山断層	花山断層			図テクル	花山断層	花山断層	山科西(断層)	帯
断層	勧修寺断層		勧修寺断層	12山-11111 12 12 12 12 12 12 12 12		勧修寺断層	勧修寺断層		部
桃山断層	桃山断層	桃山断 層系	桃山断層	桃山断層	桃山断層	桃山断層	東山西縁断 層	桃山断層	
宇治傾動帯				図示のみ					
宇治川断層		宇治川断層							
曾束断層									
和束谷断層						和束谷断層		和束谷断層	

第9.1表 研究別の活構造名対照表



第9.2図 京都東南部図幅の活構造

裏白断層の西半部は鮮新世以降に活動した証拠がないので図示していない.



第9.3図 瀬田傾動帯の平面図 「京都東南部」地域における範囲は第9.2図参照.



なくとも後期更新世以降も継続していると考えられる. この傾動帯は近江傾動運動(植村,2001a)の一部をなし, 近江盆地の形成に直接関与していると考えられる. 瀬田 丘陵に分布する古琵琶湖層群は,地質図の断面図に示さ れるように全体に緩く北西方向に傾斜しており,この傾 動運動の影響によるものと考えられる.

9. 3. 2 膳所断層(Ishida et al., 1976)

膳所断層は琵琶湖の湖岸から大津市園山に至る長さ 約4kmの東落ちの活断層である.この断層は琵琶湖西 岸断層帯の南端に位置し,石山丘陵と近江盆地の境界を なしている.膳所断層沿いでは古琵琶湖層群・堅田層が 50~70°傾斜する急傾斜帯が認められるほか,高位 I~ 中位段丘面が撓曲するが,低位段丘面には明瞭な変位は 認められない.高位 I 段丘面の上下変位量は隆起側だけ で約50 m である(第9.3 図).しかし,沈下側におい て地下数m~10 m以浅に AT が出現すること(小松原, 2006)から,上下平均変位速度は0.1 mm/千年を大きく 上回るとは考えにくく,琵琶湖西岸断層帯を構成する他 の活断層と比較して変位速度が著しく小さい.

9.3.3 黄檗断層(上治,1962)

黄檗断層は山科盆地の東縁に位置する長さ約10kmの 活断層である.複雑な形態を示し、岡田・東郷(2000)は、 この断層を小野-醍醐断層、御蔵山断層、木幡断層、菟 道断層などの短い断層によって構成される断層群として 記載している(第9.2図).また、黄檗断層全体として は西落ちの断層とみなされるが、御蔵山断層は東落ちの 活動である.

黄檗断層は、京都市(2001b, 2002c)により露頭調査 やボーリング調査などが行われ、地質構造が詳細に記載 されている。それらによると、御蔵山断層の北部では低 位段丘堆積物を切る副次断層の露頭が確認されたほか (第9.5図:現在は開発により露頭は無くなっている)、 大阪層群が逆転し低位 I 段丘堆積物に約3mの変位が生 じていることがボーリング調査により明らかにされてい る。菟道断層に関しては、小林ほか(1980, 1984)、小 泉ほか(2002)による反射法地震探査やボーリング調査 によって、地下に伏在する低角逆断層の存在が確認され ている。





第9.5図 黄檗断層(御蔵 山断層)の露頭 (京都市 2002c: 京都市伏見区石 田)

小野-醍醐断層及び御蔵山断層の更に東側では、大阪 層群深草層上部が西に急傾斜する撓曲帯があるが(京都 市,1998a;石田,2002b),変位地形としては明瞭ではない. 小野-醍醐断層は、第四紀後期に本断層上端の位置が盆 地側に移動したものと考えられる.

黄檗断層は,最北部の茶戸町断層や中部の小野-醍醐 断層及び御蔵山断層で低位 I 段丘面に明確な変位が認め られることから,後期更新世以降に活動していると考え られる.

なお,既往研究では茶戸町断層と小野-醍醐断層の間 に明瞭な変位地形が認められないことからこの区間に断 層を引いていないが,本報告では新期の扇状地堆積物(沖 積層)に覆われているものとみなし伏在断層を推定した.

9.3.4 花山-勧修寺断層 [吉岡(1987)の花山断層 と勧修寺断層を岡田・東郷(2000)が一括]

花山-勧修寺断層は山科盆地の西縁に位置する長さ約 6kmの東落ちの活断層である.この断層は雁行する断 層群からなり、北半部では断層の東(沈下)側に低位段 丘面を変形させる開いた活背斜を伴っている. 山科区西 野町における撓曲帯のトレンチ調査によって、約12,000 年前以前-AT 降下以降及び約 35,000 年前以前 48,000 年 前以降に活動したことが明らかにされている(京都市, 2001b, 2002c). また, 京都市営醍醐東団地の造成時に は Aso-1 火山灰層に対比されるテフラを含む大阪層群・ 深草層最上部が直立ないし西に急傾斜する露頭が出現し ており(京都府企画環境部環境企画課, 2002), 大阪層 群堆積以降に活発に活動してきたと考えられる. 山科区 西野山地区におけるピット調査から、本断層の最新の活 動時期は約25,000~12,000年前で、その際の上下変位 量は約1.4 m以上であったと見積もられている(第9.6 図:京都市,2001b).

9.3.5 桃山断層(活断層研究会, 1980)

桃山断層は,花折断層帯の最南部に位置する長さ約 10kmの西落ちの断層である.この断層は大部分の区間 で大阪層群・深草層と高位段丘面を明瞭に変位させる東 側の撓曲と,低位段丘面を緩やかに変位させる西側の撓 曲の2条の撓曲からなる.

京都市(2001b)によると,京都市東山区東福寺南側 道路上での群列ボーリングでは,大阪層群から低位段丘 堆積物にいたる地層が下位ほど大きく累積的に西傾斜す る状態が観察された(第9.6図).また,断層南部の伏 見区桃山長戸町の京都府総合教育センターでは,伏見城 遺物包含層の下部層を切り,伏見城遺物包含層の上部層 に覆われる小断層が見出されている(第9.7図:京都市, 2001b,2002c).京都市(2001b)は,東福寺付近に分布 する低位段丘面の変位量から,第四紀後期における桃山 断層の上下変位速度を0.2~0.35 mm/年と見積もって いる.また,川崎ほか(1992)は桃山断層の南方延長で 反射法地震探査を行っている.

9.3.6 宇治傾動帯(新称)

宇治傾動帯は、宇治丘陵において高位 I 段丘堆積物及 び高位 II 段丘堆積物を西に傾動させる傾動帯である(第 9.8図・第9.9図).宇治川の段丘縦断面形から推定さ れる撓曲帯の幅は約5kmに及び、高位 II 段丘形成時の 河床勾配が現河床と同程度であったと仮定するなら上下 変位量は100mに達する.しかし、宇治川右岸(黄檗丘 陵)における黄檗断層による高位 II 段丘面の傾動と比較 して、本傾動帯による同段丘面の傾動量は顕著に小さく、 宇治傾動帯と黄檗断層は一連の構造とみなしがたい.

なお、宇治丘陵東端部の宇治田原町銘城台(付図 B のU-15 地点)では、大阪層群長池層及び長山層が東に 急傾斜している撓曲帯が見られ、およそ南北に1 km ほ ど連続する.この撓曲を銘城台撓曲と呼ぶ.しかし、変 位地形にはほとんど現れないことから、後期更新世以降



は活動していないと考えられる.

9.3.7 宇治川断層(京都市, 2001b)

宇治川断層は、京都盆地を東西に横断する南落ちの長 さ約9kmの伏在断層である.この断層は、最初植村・ 中塚(1992)によって京都盆地中央部に沖積層を南落ち に変位させる断層(横大路断層)として指摘され,川崎・ 小林(1993)や兵庫県南部地震以降に行われた地下構造 探査によって位置や活動度が詳しく検討された(京都市 活断層調査委員会, 2004). 宇治川断層は, 京都盆地西 縁の宇治川と桂川の合流地点付近から宇治川沿いに桃山 丘陵南縁に達する.この間で行われた反射法地震探査で は、いずれの測線においても大阪層群と基盤岩を南落ち に変位させ、かつ下位層ほど変位量が大きいという変位 の累積性が認められている(京都市, 2001b). ボーリン

(京都市, 2002c:京都市伏見区桃山町)

グ調査によると、大阪層群上部堆積期以降における本断 層の平均変位速度は 0.2 m / 千年程度と想定される(京 都市, 2001b). また最新活動は約3,100年前の天城カワ ゴ平軽石降下以降で約1,000年前以前と考えられている (京都市, 2002b).

宇治川断層の北東側延長にあたる小栗栖では、大阪層 群深草層上部のシルト層が 45°以上の傾斜で南東に傾い ている様子が見られる. また, 桃山丘陵頂部に深草層下 部の地層が分布していることを考えると、桃山丘陵の南 東縁に断層がないとこの地質構造を説明できない. これ らを総合的に解釈すると、宇治川断層の延長部が、桃山 丘陵の南東縁に連続(あるいは断続して存在)している 可能性が高い.









9.3.8 會束断層(新称)

曾束断層は醍醐山地南東部の瀬田川南岸に位置する長さ2.5 kmの短い北北西-南南東走向の断層である.この断層は丹波帯 I 型地層群に属する泥岩を幅1~2m程度にわたって破砕し、固結していない断層ガウジを含む千枚岩状の破砕帯を形成している(第9.10図).また断層を横断する谷や尾根を系統的に右横ずれに数十m変位させていることから、第四紀後期に活動している可能性が高い.断層南端付近においては大阪層群長山層の砂

礫層を急傾斜させる露頭が認められる.

9.3.9 和束谷断層(横田ほか, 1978)

和束谷断層は本図幅南端から南の奈良図幅に至る長さ 約15kmの北東-南西走向の活断層である.本図幅にお いては丹波帯II型地層群の泥岩を最大幅数mにわたって 著しく破砕させ、固結していない断層ガウジを含む破砕 帯を形成する.また古琵琶湖層群甲賀層の礫層と丹波帯 堆積岩類の境界をなし、地形的に明瞭な東落ちの断層で



第9.10図 曾束断層の露頭 スタッフの長さは3m. (大津市曾束:付図C)



第9.11図 田上断層群の露頭 鍬の柄の長さは90 cm. (大津市天神川上流部:付 図 C)

ある. 殻池峠の南(付図 D の S-8 地点)では, 1981 年 当時, 逆断層の露頭が見られた. ここでは中位ないしは 低位段丘堆積物相当層と考えられる崖錐性の角礫層と丹 波帯堆積岩類が N32°E, 66°W の断層面で接し, 基盤岩 中には幅約2mの破砕帯が形成されていた.

9.3.10 美白断層(石田ほか,1954;横田,1974) 裏白断層は、朝宮丘陵の北縁に位置し、宇治田原町奥 山田から裏白峠、甲賀市信楽町朝宮をへて、東隣「水口」 図幅内の信楽町杉山へ、ほぼ東西方向に約7km連続す る断層である。この断層は綴喜層群及び古琵琶湖層群を 変位させる、北側隆起の断層である。 裏白峠の東方(付図 D の S-6 地点)では,丹波帯の 地層の破砕帯と古琵琶湖層群信楽礫部層の礫層主体層と が傾斜ほぼ90°の断層面で接していた.朝宮(付図 D の S-1 地点)では,やや破砕した花崗岩と古琵琶湖層群中 郷礫泥部層のシルト混じり礫層が,幅10 cm 程度の断 層粘土~角礫帯を介して72°南に傾く断層面で接してい た.

西端部の茶屋トンネル西の沢では, 綴喜層群奥山田層 上部の塊状シルト岩, 湯屋谷層の塊状砂岩・礫岩が北傾 斜しており, それらの北方に奥山田層上部の塊状シルト 岩が分布することから, 両者の間を裏白断層が通ると推 定される. その西の奥山田川では, 奥山田層の塊状シル ト岩, 湯屋谷層の礫岩を挟む塊状砂岩が南傾斜で分布し ている. 岩相・地質構造が不連続であることから両地域 の間に北西-南東方向の断層の存在を推定しており, こ の断層が裏白断層をも切っている可能性があるが確認で きていない.

本断層は変位地形が明瞭ではなく,後期更新世以降は 活動していないと考えられる.

9.3.11 田上断層群(新称)

田上断層群は,田上花崗岩体中に認められる西北西-東南東走向あるいは北東-南西走向で,直線状の谷や高 度変換線として明瞭なリニアメントを伴う断層を総称す る.これらのリニアメント沿いには花崗岩中の石英脈な どを変位させる明瞭な地質断層が認められることが多 い.これらの断層の破砕帯は固結したカタクレーサイト からなり,固結していない断層ガウジは認められなかっ た(第9.11図).地質図に推定活断層として示したも のはいずれも断層露頭を確認しているが,第四系を変位 させている証拠は得られなかった.

10.1 鉱物資源

本図幅地域には、滋賀県内に8箇所の長石鉱山と若干 のマンガン鉱山が,京都府内には京都市伏見区醍醐に1 箇所, 宇治田原町地域に数箇所のマンガン鉱山があった. このうちの長石鉱床は、母岩の花崗岩が熱水変質作用を 受けてできたものと考えられている [第4章の優白質花 崗岩(熱水変質花崗岩)の項を参照].一方,マンガン 鉱床は、丹波帯の堆積岩類が花崗岩による接触変成作用 を受けた際にできたものと考えられており、丹波帯中に 存在する多数の他のマンガン鉱床同様、いずれも小規模 なものである(高瀬・物部, 1960; 井本, 1966; 日下部, 1976). これらの鉱床のうち、現在も稼行されているの は2箇所の長石鉱床のみであり、マンガン鉱山はいずれ も閉山している、そのほかに、本図幅地域宇治市域には 笠取重晶石鉱山が存在したが現在は閉山している. 滋賀 県田上花崗岩体ペグマタイトは、フェルグソン石、モナ ズ石、ゼノタイム、イットロタンタル石、ジルコン、ガ ドリン石, 褐れん石, サマルスキー石, ユークセン石, コロンブ石等の含放射性元素鉱物を含むことから、かつ てウラン鉱床として記載されている(瀧本,1973).また, 同ペグマタイトは、かつて雲母類の鉱床として記載され たほか(地質調査所, 1953), 錫鉱床の典型として田上 型として分類された(地質調査所, 1955).

以下の記述は基本的に,長石鉱床については浅山 (1973)・港(1974)・須藤(1991,2001)を,マンガン 鉱床については吉村(1952,1969),瀧本・石垣(1973) を引用し,その他の鉱床については瀧本(1973)を引用 して記述する.

なお、マンガン鉱床については、石山大平鉱山(大津 市国分)と淀山鉱山・大石鉱山・黒山鉱山(以上大津市 大石)の各鉱床が「日本のマンガン鉱床」(吉村、1952) に列挙されている.また、「日本地方鉱床誌:近畿地方」(瀧 本、1973)には、大津市大石地区の池ノ尾鉱山と京都市 伏見区の峯山鉱山が鉱床分布図上に示されている、宇治 田原地域の立川・宇治田原・大石・第2吉浦・宮前の5 鉱山についても、吉村(1969)により表に挙げられてい る.これらの旧鉱山についてはいずれも詳細が不明であ るため、本図幅では省略し地質図にも示していない.

10.1.1 長石鉱床

本図幅地域産の長石は、鉱種名アプライトとして全 国生産の多くを占めていた(浅山,1973;辻・北原,

(中野聰志・田口雄作・水野清秀)

1979;小早川,1991).浅山(1973)では,以下に記載 する鉱床のうち最初の2鉱床は花崗岩中におけるペグマ タイトの長石として,残りの6鉱床は花崗岩中の特異な 長石鉱床として分類されている.このうち現在採掘が行 われているのは,井上平津鉱山と朝宮乾鉱山である.安 斎(1950)は,戦後間もない時期に本図幅内の長石鉱床 の報告をしている.そこには,他の文献にはない井上陀 羅谷鉱床・大江南郷・ヤマカ南郷・ヤマカ石倉の各鉱床 が記載されている.ここでは,そのうち井上陀羅谷鉱床 のみ個別に取り上げ,他の3鉱床は溪井南郷鉱山と石倉 鉱山の記載に含める.井上陀羅谷鉱床は丹波帯中の長石 鉱山であり,他の鉱山はいずれも田上花崗岩体中と信楽 花崗岩体中の鉱山であるが,そのほとんどは丹波帯の堆 積岩との境界部付近に位置する.

井上陀羅谷鉱床:京都市伏見区醍醐陀羅谷(滋賀-京都 境界部,大津市南郷千町西端)

鉱床は,花崗岩と丹波帯堆積岩の境界部にあたり,堆 積岩に貫入した走向 N20°W 傾斜 70°E の優白質花崗岩 脈であり,石英が多くかつ割れ目に沿う汚染が多く良質 でなく,鉱量も期待できないと記載されている.かつて 若干の砕石の採取が行われたようであるが,詳細は不明 である.

新平津鉱床:大津市石山平津の袴腰山の北中腹

N60°E 方向の延長 55 m 最大幅約 30 m の, 良質の長 石を 50 ~ 70 % 含むペグマタイト鉱山として, 1950 年 から約 5 年間採掘された.

平津石垣鉱床:大津市平津東山

南北方向に約50m延びる幅約15mのほぼ直立のレンズ状鉱体として,戦後数年間採掘された.鉱石は長石 を約70%含む.

井上平津鉱床:大津市石山平津

京滋バイパスのすぐ西, 桜峠の約 300 m 北に位置する. 鉱床は3~4 鉱体に分かれ,南北約 400 m 東西約 100 m の範囲に不規則な塊状,一部はほぼ板状に存在する.井 上長石平津鉱山は1942 年から採掘が開始され,地下坑 道が-90 m までの数レベルにおいて細かく展開された (第 10.1 図).鉄分・石英の少ない良質の長石鉱石を産 出する鉱山として知られてきたが,現在は坑道採掘が休 止され岩間山東麓の露天掘りが行われているのみである (第 10.2 図).往時,月産約 500 トン.以前より坑道 から湧く地下水を温泉の源泉として利用していたほか, 2000 年頃からは飲用として販売している.

一般に, 粗粒黒雲母花崗岩→(粗粒優白質花崗岩)→

小空隙に富む粗粒長石鉱石→細粒長石鉱石→細粒黒雲母 花崗岩→粗粒黒雲母花崗岩と並ぶ帯状構造を示す.お互 いは漸移している場合が多いが,急に移化する場合もあ る.産状と鉱石については,それぞれ港(1974)と小早 川(1991)の詳しい報告がある.

本鉱床中では場所によって小規模のペグマタイトが伴い、優白質花崗岩及び石英脈も存在する.これらの岩石と鉱石及び母岩の成因的関係は、非常に重要な問題である.港(1974)は、第10.3回に示すように、産状に基づき粗粒〜細粒の花崗岩のもとの岩相変化を基礎にしてその後の熱水変質反応で各種鉱石が形成されたと指摘した.更に、須藤(1991,2001)は、細粒花崗岩(優白質花崗岩)の貫入に伴う一連の熱水反応がペグマタイトや交代性長石や変質花崗岩を異なる場所ごとに形成したとするモデルを考え(第10.4回)、井上平津鉱床を溪井南郷鉱床や笹間・石倉鉱床等とともに交代性長石鉱床として位置づけた.

旧溪井平津鉱床:大津市石山平津

井上平津鉱床に隣接する鉱山として,1913年露天掘 り開始,1960年代初頭まで坑内採掘を行った後,閉山 した.鉱石は,井上平津鉱床の鉱石と同様である. 渓井南郷鉱床:大津市南郷新浜

沃开闰烟弧床·入伴川南卿利供

瀬田川の右岸に直近の場所にあり,南西方向に約20° 傾斜し長さ200m幅最大100m厚さ平均5m(最大20m) の鉱床である.露天掘りから坑内掘りへと採掘が展開さ れたが(第10.5図),現在は閉山している(第10.6図). 往時,月産約200トン.なお,多数の断層が母岩及び鉱 体を切っている.鉱石の種類と産状は井上平津鉱床と同 様であるが,本鉱床中にも小規模のペグマタイトが伴っ ている(第10.5図).鉱石には、場所により少量の蛍 石が伴う.

笹間鉱床:大津市田上笹間ヶ岳の南西中腹

鉱床は数個の鉱体に分かれており、そのうちの一つ は長さ約25m幅最大15mのかなり厚みのある鉱体で あった.主として露天掘りで採掘が進められたが、1970 年の閉山間際には坑道が掘削されて稼行された. 往時、 月産120トン.鉱石は粗粒で少量の石英を伴う.

石倉鉱床:大津市大石富川

鉱床は数個の鉱体に分かれる.第1鉱体は延長25m 幅15m厚さ約10m,第2鉱体はN-Sの走向方向に延 長約60m,70~90°Eの傾斜方向に幅最大30m,厚さ 最大20m,第3鉱体は延長約30m,幅最大15mの規 模であり,そのほかのいくつかの鉱体が認められた.鉱 山として採掘時,月産約150トン.鉱石の大部分は石英 を含む粗粒鉱石であったが,一部不純物の少ない細粒鉱 石が採掘された.小規模のペグマタイトが伴い,まれに わずかに緑柱石が産した.

乾長石朝宮鉱床:甲賀市信楽町上朝宮

現在なお稼行中の, 信楽花崗岩体中にある鉱山である



第10.1図 井上長石鉱山平津鉱床6号坑内地質図 [浅山,1973:原図は八木(1966)]



 第10.2図 井上長石鉱山遠望
 a:京滋バイパスを隔てた岩間山東麓にある井上長石 鉱山を袴腰山西山麓から望んだ遠景.
 b:現在の露天掘り露頭の状況.

いずれも 2011 年撮影. (位置は付図 C)



第10.3図 井上長石鉱床の産状
 a:井上長石平津鉱床の母岩と鉱石の産状
 模式図,b:同 鉱床のペグマタイトと鉱の産状模式図.(港,1974)



第10.4図 田上花崗岩体中での交代性長石~変質花崗岩の形 成過程モデル図(須藤, 1991)



第10.5図 溪井南郷鉱山坑内地質図 [浅山, 1973:原図は中村(1965)]

(第10.7図). 丹波帯の地層との境界が鉱山のすぐ北西 側にあるとともに,田上花崗岩体との境界にも近い場所 に位置する.鉱床は,N50°E方向に延長約600 m,幅最 大250 mの規模である(大阪通商産業局非金属鉱物資源 対策委員会,1989).1970年頃は月産2,500 tであった(浅 山,1973).鉱石は粗粒であり,黒雲母をかなり含む部 分がある.現在採掘されている鉱石は主として変質花崗 岩からなる.上記の大津市南部地域の長石鉱床とは異な り,雲井鉱山タイプ(中野ほか,2006)のものと考えら れる.現在も稼行されている「水口」地域内の信楽中野 鉱山や日産信楽長石鉱山と同じ産状と考えられるが,か つて須藤(1991)が記載した鉱体中央部に産する交代性 長石や優白質花崗岩は現在では確認できない(高木・小 村,2003).

稲森朝宮鉱床:甲賀市信楽町下朝宮

乾長石朝宮鉱山と同じく,信楽花崗岩体が丹波帯の堆 積岩に貫入している境界部にある鉱山であったが,須藤 (1991)の調査時には既に閉山していた.

10.1.2 マンガン鉱床

烧野鉱床:大津市膳所上別保町

チャートと泥岩が花崗岩による接触変成作用を受けて できた鉱床である. 鉱区の南部に花崗斑岩があることか らそれが熱源とされてきたが,熱源は地下に伏在する花 崗岩と考えるのが妥当であろう.「近江八幡」図幅内の 五百井マンガン鉱床が花崗岩による熱水変質鉱床として 五百井型マンガン鉱床とされているのに対し,焼野型マ ンガン鉱床として知られていた.しかし,熱水変質を受 けた五百井型鉱石も存在し,それが主たる稼行対象で あったようである.旧鉱山は,池ノ端・東・露天掘鉱山 に分かれていた.昭和の初め頃から採掘され,1944年 当時月産100トン(Mn 30%)の採掘量であった.地質 調査所(1954,表 p.152)によれば,鉱床は珪化した幅0.3 m以上の板状鉱床である.高瀬・物部(1960)は焼野・ 別保・鳴滝鉱床の坑道図を示している.

鉱石は二酸化マンガン鉱と珪酸マンガン鉱であり,軟 マンガン鉱・炭酸マンガン鉱・バラ輝石・マンガンざく ろ石・テフロ石・ペンビス石・石英等からなる(武村,
2011a 参照). 見掛品位は Mn 20 ~ 30 %. 別保鉱床:大津市膳所上別保町

焼野鉱山の北西方約500mにあり、鉱山は本鉱床と東 部鉱床に分かれて稼行していた。母岩はチャートの接触 交代鉱床である。狭い範囲に富鉱体が集中しており、地 表からも浅く、短期間に採掘された。鉱石は二酸化マン ガン鉱であり、主として硬マンガン鉱・軟マンガン鉱か らなる。見掛品位は Mn 50-55%。地質調査所(1954, 表 p.152)によれば、鉱床は東西走向、平均幅0.4m、延 長数百m、1949-51年に Mn約1,200トンを産した。

鳴滝鉱床:大津市膳所雲雀丘鳴滝不動南

鉱石は珪酸マンガン鉱であり, 菱マンガン鉱・菱鉄鉱・ バラ輝石・テフロ石・石英等からなる(武村, 2011b 参照). 見掛品位は Mn 20 ~ 30 %.

醍醐鉱床:京都市伏見区醍醐

鉱石は MnO₂ であり, 品位は Mn 30 ~ 42 %.

10.1.3 重晶石鉱床

笠取鉱床: 宇治市西笠取下庄

丹波帯の堆積岩中に田上花崗岩体由来の熱水鉱液に よって生じた鉱床(鉱量は5万トン程度)と考えられて いる.かつては重晶石鉱山として知られていたが,現在 は閉山している.鉱床は,本坑鉱床・北坑鉱床・常磐鉱 床に分かれる.前2鉱床は,走向N60~70°Wであり, 第4章で述べた珪長質岩脈の貫入方向と調和的である. 母岩の変質には,珪化作用やスカルン化作用などが認め られている.

鉱石は,主として重晶石からなるがときには黄鉄鉱や 赤鉄鉱などを伴う.重晶石は白色不透明で,ときに半透 明の小結晶が産する.脈石鉱物は主として石英で,母岩 との境界部にはアロフェンやハロイサイト系粘土鉱物を 伴う.本鉱山の重晶石鉱石と粘土鉱物の化学分析値が公 表されている(牧, 1957).

10.1.4 ウラン鉱床(ペグマタイト鉱床)

田上山 田上花崗岩体のうち,特にその分布西側の本図 幅地域の大津市田上〜上田上地区のペグマタイト地帯 が,花崗岩中のペグマタイトに伴うウラン鉱床として, 瀧本(1973)の表 II.I.25 に挙げられている.田上ペグマ タイトは第4章で既述のようによく知られてきたが,花 崗岩自体もUとThの含有量が多い(石原ほか,2005参照; 第4章4.6全岩化学組成).天白(2007)は,田上花崗 岩体からのy線量が山陽帯の他の花崗岩や領家帯新期花 崗岩より多いという測定結果を報告している.

1975-79年に大石富川町の石倉長石鉱床で試錐が行われたが,ウラン鉱床としての価値は低く稼行されたことはない(動力炉・核燃料開発事業団,1988;動力炉・核燃料開発事業団中部事業所,1994).



第10.6図 溪井南郷鉱山

a: 溪井南郷鉱山の南側露頭(既に閉山しており現 在 は他の目的に転用されている).

b: 写真 a の中央部奥に見られる旧坑道入口. 露頭 では細粒花崗岩脈が不規則に中~粗粒花崗岩中に 貫入している.いずれも 2006 年撮影.(位置は付 図 C)



第10.7図 乾長石朝宮鉱山

a: 事務所横から東方に向かって鉱山奥の露頭を望 む.b: 同鉱山奥から北方を見た露頭の写真.露頭 の後方すぐに堆積岩との境界がある.(位置は付図D)



第10.8図 珪灰石の露頭 短径10 cm 程度,長径数十 cm 以上の珪灰石が集 合したレンズ状の産状が特徴的である。新鮮面で は白色であるが露頭表面は黒ずんでいる。珪灰石 レンズに接する大理石部分は真っ白であるがやや 離れた部分は黒色大理石になっている。(大津市国 分:付図 C)

10.1.5 珪灰石鉱床

石山寺:大津市寺辺(天然記念物)

石山寺の珪灰石は、丹波帯のチャート中にできている 珪灰石・方解石・石英の集合体で、珪灰石部分が大きく 発達しているので鉱床ともみなせる(岡野,1961).石 山寺本堂東側の天然記念物に指定されている大きなブ ロック(第12章参照)が代表的であるが、境内全体に わたり分布しているものと考えられる.その量は、露出 する石灰岩の8~10%と推定された.なお、西隣の国 分で黒色大理石との特徴的なカラーゾーニングを示す珪 灰石岩塊が産する(第10.8図,中野,2011d)ことから、 意外にその広がりは大きい可能性がある.

珪灰石の成因に関してはこれまで,接触交代作用にお ける次の反応式

 $CaCO_3 + SiO_2 \Leftrightarrow CaSiO_3 + CO_2$

におけるシリカの供給源は花崗岩であるとされてきた. これに対し清水(1989)は、母岩である丹波帯のチャー トがその供給源であろうと推論している.

10.2 地下水

本図幅内の地下水は、とくに京都府側で古くより活発 に利用されて現在に至っている。

10.2.1 山科・醍醐地区

本地区は西, 北, 東の三方を山地に囲まれた盆地状の 構造になっており, 地下水の大部分は周囲の山地から涵 養されるものと考えられる.このため, 地下水は比較的 豊富で, 古くより染色・紡績工業用として利用されてお り, 1950年代には10万 m³以上を揚水していた(小池, 1955).

瀬野・川端(1965)が1961年8月末に実施した測水 調査によると、本地区の不圧地下水は、地形面を踏襲す る形で、周囲の山地から涵養され、山科川へ流出する地 下水面形状を呈している.動水勾配は、北部の山麓部か ら新幹線の沿線付近までは100分の1以上と比較的きつ いが、そこから宇治川合流点付近までは、250~300分 の1程度で極めて緩いものとなっている、地下水面まで の深さは、西方や北方の山麓で、地表から3mを越える ものはなく、盆地中央部では1m未満の地点も見られる、 水温は18~24℃で気温の影響を強く受けている。

瀬野・川端(1965)の調査当時,本地区の被圧地下水 はさほど多く利用されておらず,深井戸はいずれも自噴 していた.小西ほか(1960)によれば,JR山科駅の南 約1kmの位置にあった紡績工場は深度120m以深の井 戸2本を所有しており,スクリーンは深度9m以下の6 箇所の砂礫層に切られていた.水質は重炭酸ナトリウム 型を示し,水温は18℃前後であった.この型の水質は 滞留時間が長い地下水に多く,したがって本地区の被圧



第10.9図 京都市内不圧地下水面図及び水温分布図 (川端, 1960)

地下水は循環が活発ではないと推察される.

10.2.2 東山·伏見地区

本地区は京都盆地の東縁で,桂川の支流である鴨川の 下流域に当たる.本地区の東側に位置する東山丘陵及び 桃山丘陵が地下水の流域界となっており,両丘陵に降っ た降水が浸透して地下水を涵養している.両丘陵と鴨川 の中間には琵琶湖疎水が流下しており,地下水の流動系 に少なからぬ影響を与えていると推察される.

松原(1929)は、伏見区桃山地区の水質から地下水の 流下方向を、概して南西方向に向かっているとし、地層 の走向の局部的変移に起因すると推定した.また、水温 の分布から、桃山地区の西部及び南部の地下水は、琵琶 湖疎水の冷却効果を著しく受けているとした.また、大 島(1955)は、1950年代、伏見区では工業用水を地下 水に依存する割合が多く、業種別では、染色・紡績関係、 食品・醸造関係、化学関係の従業員数50人以下の小規 模工場での依存率が高いと記述している。

1950年代頃までは、本地区の不圧地下水は水質もよ く水量も豊富であったが、地下水使用量の増加による水 位の低下に伴い、1960年代頃から徐々に深井戸による 被圧地下水利用へと変換した(堀池、1994).

本地区の不圧地下水は、河川堆積物・段丘堆積物ある いは扇状地状堆積物中に胚胎している.被圧地下水は、 主として大阪層群の上部の比較的透水性のよい2枚の帯 水層に胚胎している.本地区の地下水利用は、不圧地下 水及び大阪層群上部帯水層からなされている.本図幅の 西縁に当たる桂川本流周辺(京都盆地の中央部)では、 地表から深度130m以下に胚胎する、大阪層群下部の帯 水層から揚水する深井戸も存在する.

鴨川地下水系の流動量は、透水係数3×10⁻²cm/秒, 動水勾配1/80,流動幅6km,帯水層厚80mと仮定し計 算すれば15.6万m³/日となる.この流域の揚水量は13.3 万m³/日と推定されるので、差し引き約2万m³/日のプ ラスとなる.流域の揚水量は推定値より大きい可能性が 見込まれるので,鴨川地下水系の地下水収支はマイナス (揚水過多)と評価され、京都盆地の経年的な地下水位 の低下や、地盤沈下の原因となっていることも考えられ る(以上、大阪通商産業局総務部開発業務課,1983).

不圧地下水の流動に関し,川端(1960)の地下水面図 及び地下水温分布図(第10.9図)によれば,東山丘陵 から鴨川流域へは,河川を涵養するような流動形態を有 することが明白である.堀池(1994)は,桃山丘陵から は新高瀬川を涵養するような流動系で,新高瀬川へは鴨 川本流方向からも涵養があると推定している.被圧地下 水の流動系は,大阪層群の堆積状況を踏襲し,周辺部か ら京都盆地中央部方向へ,更に桂川下流方向へ傾斜して いると考えられている(大阪通商産業局総務部開発業務 課,1983).

東山丘陵及び桃山丘陵には湧泉が多く存在するが, そ れらの多くは地表の汚染を受け,塩化物イオン,硝酸イ オン,ナトリウムイオンなどの濃度が高く,季節的な濃 度の変動も大きい.これに対し,沖積層の不圧水の水質 は比較的安定し,地表からの汚染はほとんど見られず, 重炭酸カルシウム型の水質を示している(堀池, 1994).

伏見地区は日本酒の醸造地として名高く,多くの酒造 会社が存在する.桃山丘陵から沖積平野にかけては,鉄 分が0.005 mg/L以下, CaCO₃としての硬度が60~80 mg/Lの良質の地下水が得られ,温雅な旨口の「伏見酒」 を生み出している.しかし,地下水使用量の増加により, 地下水の安定的確保が難しくなったため,1960年代頃 から徐々に被圧地下水利用へと転換されている(堀池, 1994). 日本名水百選に選ばれている「伏見の御香水」は、桃山地区の御香宮にあった湧泉で、水量不足で涸れてし まっていたが、1982年に深さ150mの深井戸が掘削さ れて現在に至っている、水質はマグネシウムイオンが5.5 mg/Lと若干高い重炭酸ナトリウム型を示している。

沖積地の被圧地下水の水質は,重炭酸カルシウム型が 基本であるが,深度が増すに連れて,ナトリウムイオ ン,塩化物イオン,鉄分などが増加する傾向にあり,海 水の組成に類似した nonbicarbonate alkali を示している. このことから深層部の地下水は,浅層地下水の供給をほ とんど受けていないものと考えられている(小西ほか, 1960).

10.3 温鉱泉

本図幅内の温鉱泉は、京都府のウェブサイト及び産業 技術総合研究所地質調査総合センター(2005)によると、 京都府に12箇所、滋賀県に5箇所存在する.このうち、 泉質の分析データがあるのは、第10.1表に示すとおり、 京都府1箇所、滋賀県2箇所であり、いずれも泉温が 40℃以下と低い.以下に概要を記述する.このほかの温 泉は詳しい資料が入手できないので、前述の資料から抜 き出して第10.2表に一覧する.

第10.1表 京都府及び滋賀県の温鉱泉の水質 (京都府薬務課及び滋賀県生活衛生課の資料によ る)

記号	K1	S1	S2	
住 所	宇治市志津川	大津市月輪	大津市石山	
泉温(℃)	32.4	28.6	14.8	
рН	8.31	7.60	6.43	
蒸発残留物(g/kg)	0.225	N	N	
Na^+ (mg/L)	98.6	759.8	8.8	
K^{+} (mg/L)	0.8	6.9	1.0	
Mg²⁺ (mg∕L)	7.7	3.4	0.9	
Ca ²⁺ (mg/L)	2.7	1,082.0	4.1	
NH_4^+ (mg/L)	0.2	N	N	
AI^{3+} (mg/L)	0.0	N	N	
Fe³⁺ (mg∕L)	0.1	N	N	
Mn²⁺ (mg∕L)	0.0	N	N	
Cl⁻ (mg/L)	7.3	3,013.3	2.1	
SO4 ²⁻ (mg/L)	0.3	0.8	2.6	
$HCO_3^{-}(mg/L)$	242.7	172.3	29.4	
F⁻ (mg/L)	0.3	2.1	1.2	
HS⁻ (mg/L)	0.3	N	N	
CO ₃ ²⁻ (mg/L)	0.0	0.5	N	
BO_2^{-} (mg/L)	0.0	N	N	
H ₂ SiO ₃	7.9	24.2	48.3	
Rn(x10 ⁻¹⁰ Ci/kg)	6.48	83.3	138.4	
知覚的試験	無色, 無味, 透明,	N	N	
	微硫化水素臭			
泉質	低張性弱アルカリ性	低張性アルカリ性	低張性中性	
	低温泉	低温泉	冷鉱泉	
分析日付	1985年10月11日	1999年3月12日	2005年6月2日	

(注)表中のNは記述なし

番号	名 称	住 所	深度(m)	温度(℃)	pН	泉 質	資料
K-2	桃山温泉	京都府京都市伏見区桃山町泰長老	180	22.2	7.7	単純硫黄泉	А, В
K-3	桃山指月森温泉	京都府京都市伏見区桃山町本多上野	N	N	N	N	А
K-4	霊山新温泉	京都府京都市東山区清閑寺霊山町	37	15.4	7.2	単純弱放射能冷鉱泉	А, В
K-5	黄壁温泉	京都府宇治市五ケ庄折坂	500	26.5	N	ナトリウムー炭酸水素塩泉	А, В
K-6	朝日温泉	京都府宇治市宇治又振	2	20.3	7.55	ナトリウムー炭酸水素一塩化物塩泉	А, В
K-7	天ヶ瀬温泉	京都府宇治市池尾仙郷山	N	N	N	ナトリウムー炭酸水素塩泉	А
K-8	三室戸温泉	京都府宇治市	130	17.5	7.7	単純弱放射能冷鉱泉	в
K-9	兎道温泉	京都府宇治市	1	21.5	N	N	в
K-10	くつわ池温泉	京都府綴喜郡宇治田原町湯屋谷	238	13	5.7	単純第二鉄泉	А, В
K-11	湯屋谷温泉	京都府綴喜郡宇治田原町湯屋谷	1	16.6	7.6	ナトリウムー炭酸水素塩泉	А, В
K-12	真言院亀の井温泉	京都府綴喜郡宇治田原町岩山	1	17.2	7.1	単純硫黄泉	А, В
S-3	大石温泉	滋賀県大津市	1,500	25.1	7.8	含ラドン-ナトリウムー炭酸水素一塩化物塩泉	в
S-4	南郷温泉	滋賀県大津市	1	25	N	Ν	в
S-5	黒津温泉	滋賀県大津市	1	25	N	Ν	в

第10.2表 京都府及び滋賀県内のその他の温泉

(注):表中Nは記述なしを示す. 資料欄のAは京都府のウェブサイトhttp://www.pref.kyoto.jp/yakumu/onsenlist.html, Bは産業技術総合研究所地質調査総合センター(2005)による

10.3.1 京都府の温泉

宇治市志津川にあり,深井戸から揚湯している.泉 温 32.4 ℃, pH 8.31 と弱アルカリ性を示す.無味,無色 透明で,わずかに硫化水素臭がある.泉質は重炭酸ナト リウム型を示すが,溶存物質総量が少なく,いわゆる単 純泉である.泉質的には,低張性弱アルカリ性低温泉に 分類される.老人保健施設として利用されている.

10.3.2 滋賀県の温泉

(1) 大津市 月 輪

深度1,500 mの深井戸から揚湯している. 泉温28.6 ℃, pH 7.60 と弱アルカリ性を示す. 泉質は塩化カルシウム 型で,ナトリウムイオンを多く含む. 溶存成分量が多く, 濃塩化物泉である. 泉質的には,低張性弱アルカリ性低 温泉に分類される. この温泉はラドン濃度が83.3×10⁻¹⁰ Ci/kg と高く,放射能泉でもあり,温泉施設として利用 されている.

(2) 大津市石山

石山平津町の岩間山東麓桜峠付近にあり、坑道掘り・ 露天掘りの長石鉱山の坑道からの湧水を利用しているた め、泉温 14.8℃と低く、pH 6.43と弱酸性を示す.泉質 は重炭酸ナトリウム型であるが、溶存物質総量がきわめ て少ない単純泉である.泉質的には低張性中性冷鉱泉に 分類される.この温泉はラドン濃度が 138.4 × 10⁻¹⁰ Ci/ kgと比較的高い放射能を有している.2000 年頃からは、 湧水をミネラルウォーターとしても販売している.

10.4 碎石·砂利

本図幅地域では, 丹波帯付加コンプレックスの地層と 大阪層群で砕石・砂利が採取されている.

丹波帯の地層については、宇治市の西笠取で泥岩・ チャートが、志津川で砂岩が砕石として大規模に稼行さ れている.また、本図幅地域北東端から「水口」図幅に かけての栗東市荒張では接触変成を被った泥岩・チャー トが、本図幅地域東端から「水口」図幅にかけての甲賀 市信楽町畑では接触変成を被った泥岩が、それぞれ砕石 として稼行されている(高木・小村、2003).

城陽市から宇治田原町に分布する大阪層群の砂礫層 を,骨材資源として採取している.現在稼行している砂 利採取場は、城陽市長池からその東にかけて大規模に展 開されている. そのほか, 宇治田原町贄田南部や禅定寺 にも採取場がある.これらの砂利は、大阪層群長池層及 び禅定寺層層準の砂礫層を対象にして採掘されている. 城陽市(1997)の資料によると、城陽市で砂利採取が始 まったのは 1961 年(昭和 36 年)からであり,採取計画 認可量は1978年度(昭和53年度)から1988年度(昭 和 63 年度) にかけて原土石量が年間 200 万 m³ を超え ていたが、その後は減少していて、1995年度(平成7 年度)では、採取計画認可量は原土石量 166 万 m³,製 品量 133 万 m³,砂利採取税申告量は 104 万 m³ となって いる. 京都府の資料によると,年間の砂利採取実績量は, 平成16年度から21年度までの間で、城陽市では75~ 133万 m³, 宇治田原町では 8 ~ 24 万 m³ となっている.

(小松原 琢)

11.1 地震

京都東南部図幅周辺は日本でもっとも長期にわたる歴 史記録が残されている地域にあたり、過去の地震活動に 関する豊富な史料が存在する.本図幅内で家屋・構造物 の損壊以上の被害(ほぼ震度V弱以上)を与えたことを 示す歴史時代の地震を第11.1表に示す.

このうち、特に本図幅周辺で生じた地震としては天延 四年(976年)山城·近江地震,元暦二年(1185年)近 江·山城地震, 文禄五年(1596年)伏見地震(慶長伏 見地震とも呼ばれる), 文政十三年(1830年) 京都地震 が挙げられる。元暦二年近江・若狭地震は京都東北部図 幅地域の堅田断層など琵琶湖西岸断層帯南部を起震断層 として (Kaneda et al., 2008), 京都盆地東部から近江盆 地南西部に大きな震動被害をもたらした(西山, 1998, 2000). 文禄五年伏見地震は京都西南部図幅内から南西 に伸びる有馬-高槻断層帯を起震断層として(寒川ほか, 1996 など) 大きな震動被害をもたらした. この地震に よって建造中であった伏見城や伏見の城下町は大きな被 害を蒙った一方で、京都盆地北東縁の諸寺の被害は軽微 であった(たとえば寒川, 2010). 文政十三年京都地震 の震央は京都西北部図幅内に想定されており、京都盆地 西部から亀岡盆地にかけて被害が著しかったほか、京都 盆地中部の淀付近でも著しい被害が生じている(三木, 1979;西山, 2010). このような地震被害分布には震央 からの距離だけでなく地盤条件が強く影響していると考 えられ、特に軟弱地盤が発達する京都盆地中部や琵琶湖 沿岸の埋立地においてはしばしば局所的に大きな地震被 害が生じている(第11.1表).

地震に伴う液状化や地すべりなどの痕跡は京都盆地と 近江盆地の多くの地点で認められている(寒川,1992, 2007 など).第11.1図に京都東南部図幅の周辺におい て認められた地震跡を示す(寒川,2007 を元に作図). 近江盆地南部では弥生時代中期頃の地震に伴うと考えら れる噴砂跡や,古代以降の遺構面や遺物包含層を変位さ せる断層や噴砂跡が沖積低地や湖底(河床)において多 く認められる.古代以降に地盤の液状化を生じさせた地 震としては上記の地震のほかに,福井県若狭地方の三方 断層-花折断層帯北部が活動した寛文二年(1662 年)近 江・若狭地震を挙げることができる(寒川,1994).ま た,大津市瀬田の高位 I 段丘上にある近江国庁跡遺跡に おいては,天延四年山城・近江地震に伴って倒壊した建 物の瓦礫とその後に再度整地されて建設された建物の遺 構が見つかっている(寒川,2007).一方,京都盆地で は文禄五年伏見地震によるものと考えられる古代・中世 の遺構面を切る液状化跡が多数見つかっている(寒川, 1992,2010など).特に京都盆地中央部では規模の大き な液状化跡が見つかっており,強い地震動が生じたこと が読み取られる.また,京都市伏見の中位段丘上では文 禄五年伏見地震に伴って生じた表層地盤を変位させる小 断層が認められている(京都市,2002a:寒川,2010など).

11.2 斜面災害

11.2.1 地すべり

京都東南部図幅地域には、信楽川沿いの接触変成帯や 桃山丘陵の大阪層群分布地域の一部に小規模な地すべり 地形が認められるが、現在地すべりとして活動している ものは認められていない(清水ほか,2005).また,醍 醐山地南部の宇治川両岸にはところによって、過去の地 すべりによって形成されたと考えられるクラックが発達 する岩盤や破砕された角礫層が緩傾斜面を構成している 場所がある.しかし、それに伴った地すべり地形は認め がたく、現在は安定した状態にある可能性が高い.

11.2.2 斜面崩壊

本図幅内において、特に注目すべき斜面変動として 田上花崗岩体分布地域の土砂流出が挙げられる(稲垣, 2000). 田上花崗岩体分布地域の中でも植生が十分な状 態では多量の土砂流出は起きていないが、本図幅地域内 では7世紀末の藤原京造営の頃から大量の森林が伐採さ れ、更に燃料利用のための樹根掘り取りが重なって、江 戸時代には田上花崗岩体分布地域の広い範囲が禿山と化 していた. 更に禿山化にともなってマサ土と呼ばれる花 崗岩表層の風化土層で崩壊と土砂流出が盛んとなり,著 しい斜面荒廃が進んだ(池谷, 2006). その結果, 土砂 流出量の増加や河川の天井川化が進んだ。17世紀後半 からは山林保護、治山事業や瀬田川の浚渫が行われるよ うになったが、本格的な植生の回復と土砂流出の沈静化 は20世紀を待たなければならなかった。現在でも植生 回復を図る山腹工などの治山事業が継続して行われてい る. その結果第11.2図に示すように土砂流出が減少し てきている (池谷, 2006).

第11.1表 京都近江地震歴史字佐美(2003)等に基づいて作成.

年月日(和暦)	年月日(西暦)	地震名	被害地区	マグニ チュード	備考
天長四年七月十二日	827年8月7日		京都	6.5 ~ 7.0	京都で家屋多く潰れる
斉衡三年三月	856年		京都		群発地震・京都で家屋破損
仁和三年七月三十日	887年8月22日	仁和五畿七道地震	五畿七道	8.0~8.5	南海トラフの海溝型巨大地震
					京都で家屋・垣倒れる
寛平二年六月十六日	890年7月6日		京都	6.0	家屋傾く
承平八年四月十五日	938年5月17日		京都・紀伊	7.0	京都の家屋や垣ことごとく破損
天延四年六日十八日	976年7日17日	天延山城 · 近江地震	山城・近江	>67	京都東部および近江国府(大津市瀬田)な ど近江南部で家屋倒壊多い
	0,0+,),1, L			=0.7	近江国府庁跡で瓦礫を埋めた後に整地された遺構が見出されている
長久二年七月二十日	1041年8月19日		京都		京都・法成寺の鐘楼転倒
延久二年十月二十日	1070年11月25日		大和·山城	6.0~6.5	京都で垣倒れる
寛治七年二月十四日	1093年3月13日		京都	6.0~6.3	京都で搭が破損
嘉保三年十一月二十四日	1096年12月11日	嘉保東海地震	畿内·東海道	8.0~8.5	東海沖の巨大地震 京都の被害は軽微,東寺の搭の九輪落ち
元暦二年七月九日	1185年7月18日	元暦近江地震	近江·山城·大和	7.4	るなと、近たの劣少(麻山)病(含うる) 堅田断層を含む琵琶湖西岸断層帯南部を 起震断層とする 京都東部、山科盆地、近江盆地南西部で 家屋倒[違多」、)
	1245年8月19日		京都		壁や垣がところどころで破損
正和六年一月三日	1317年2月14日		京都	6.5~7.0	京都・白河辺の人家ことごとく潰れる
	1350年6月28日		京都	6.0	京都・祇園社の石塔の九輪が落ちる
康安元年六月二十四日	1361年7月26日	康安(正平)南海地震	畿内・四国	81/4~8.5	南海トラフの海溝型巨大地震
応安二年七月二十七日	1369年8月29日		京都		京都・東寺の講堂傾く
	1425年12月14日		京都	6.0	京都のところどころで垣破損
文安六年四月十二日	1449年5月4日		山城·大和	53/4~6.5	京都・仙洞御所傾くなど市街各地で家屋・ 垣が破損
	1520年3月25日		紀伊·京都	7.0~73/4	京都ではところどころで垣破損
天正十三年十一月二十九日	1586年1月18日	天正地震	畿内・東海道ほ	7.8±0.1	養老断層等の活断層の活動
			ימ		京都・東寺の講堂破損、壬生の堂倒れる
		文禄伏見地震	近畿及び近隣	71/2±1/4	有馬−高槻断層帯等の活断層
文禄五年閏七日十三日	1596年9月5日				伏見で被害大.
又称五中国七月十二日	1390-49730				京都府八幡市八幡の木津川河床遺跡・京都市伏見区の志水町遺跡で液状化・遺構 面の変位を生じさせた可能性大
					三方−花折断層帯北部の活断層の活動
宵文二年五月一日	1662年6月16日	宵文䜣汀若狭地震	畿内及び近隣	71/4~7.6	伏見・大津の沿岸部で被害大
		ж л ена м-6 ф			大津市蛍谷(瀬田川河床)の蛍谷遺跡で大 規模な液状化跡を生み出した可能性大
寛文三年十二月六日	1664年1月4日		京都·山城	5.9	二条城と伏見の諸邸破損
寛文五年五月十二日	1665年6月25日		京都	6.0	二条城の石垣崩れる
宝暦三年一月九日	1753年2月11日		京都		洛中の築地等に小被害
文政二年六月十二日	1819年8月2日	文政近江八幡地震	伊勢·美濃·近江	71/4±1/4	深い地震と考えられる
	1020年0日10日	立 功 古 初 地 雪	古知みび隣国	65-00	京都市中で石灯籠多く倒れる 烈震地域は京都市内に限られる. 土蔵で
又咸十二年月二日	1830年8月19日	入	泉御及び隣国	0.5±0.2	被害大、民家の倒壊少ない。
安政元年六月十五日	1854年7月9日	安政伊賀上野地震	伊賀・伊勢・大和 および隣国	71/4±1/4	木津川断層の活動 膳所城大破など
安政元年十一月四日・五日	1854年12月23 日・24日	安政東海地震および 南海地震	東海道~九州	8.4•8.4	南海トラフの海溝型巨大地震,2つの地震 が約32時間の間隔を置いて続発 膳所城大破,京都市中で潰家あり
	1927年3月7日	北丹後地震	京都府北西部	7.3	郷村断層・山田断層の活動
昭和二十一年十二月二十一日	1946年12月21日	昭和南海地震	中部~九州	8.0	南海トラフの海溝型巨大地震
					野島断層等の活断層の活動
平成七年一月十七日	1995年1月17日	兵庫県南部地震	近畿地方	7.3	京都盆地で微地形と対応して被害生じる



第11.1図 京都近江盆地地震跡図寒川(2007)を元に作図.

11.2.3 土石流

本図幅内には瀬田丘陵や宇治丘陵を中心として広い範 囲に埋谷緩斜面が多数発達する.これらは土石流が谷を 埋めて堆積することによって形成された新期の地形面で ある.このことは本図幅の山地・丘陵の広い範囲で新し い地質時代に土石流が多く発生してきたことを示すもの である.最近の事例としては,昭和28年(1953年)に 本図幅南部の宇治田原町周辺から「奈良」図幅北部に大 きな被害をもたらした南山城水害時の土石流の発生が知 られている.



第11.2図 天ヶ瀬ダムと大戸川支流の堆砂量変遷(池谷,2006)

12.1 天然記念物

石山寺珪灰石(硅灰石) 大津市石山の石山寺境内には, 天然記念物の珪灰石がある(岡野, 1961;高瀬, 2001; 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編, 2002a;中 野, 2011c). 天然記念物の指定は1922年(大正11年)で, 2007年には「日本の地質百選」にも選ばれている.地 層としての原岩は石灰岩チャート互層であり,厚さ10 ~100 cmの灰白色石灰岩と厚さ5~30 cmの灰色チャー トの互層が,田上花崗岩体による接触変成作用によって 珪灰石ないし大理石と珪岩の互層となっている. 露頭規 模の褶曲構造が見られる(第12.1図a). 珪灰石(CaSiO₃) 自体は特に稀な鉱物ではないものの,石山寺の珪灰石は 長さ4~5 cm に達する羽毛状結晶の見事な集合体であ り(第12.1図b),それが天然記念物指定の理由とされ ている.

東山洪積世植物遺体包含層「東山洪積世植物遺体包含 層」は、1943年2月19日に国指定の天然記念物とされ た.場所は,京都市東山区今熊野南日吉町(付図Aの K-2地点)にある.この付近は、中部更新統の大阪層 群深草層上部が分布しているところであり、かつては採 土場から多くの植物化石が産出したが、現在では露頭は 消失している.石碑が立っている私有地内には高さ2m 程度の小規模な露頭があり、そこには海成粘土層と上位 にやや有機質の砂質シルト層が見られるが、植物化石が 大量に産出するわけではない. 三木(1948) は、この近 辺からアマミゴヨウ (Pinus armandi), クロマツ (Pinus thunbergii), ツガ (Tsuga sieboldii), サワラ (Chamaecyparis pisifera), ハイネズ (Juniperus conferta), オニグル ミ (Juglans sieboldiana), ハンノキ (Alnus japonica), ニ レバケヤキ (Zelkova ungeri), ヤドリギ (Viscum cororatum), ホオノキ (Magnolia obovata), カラスザンショウ (*Eagara ailanthoides*), ヤマフジ (*Wistaria brachybotrys*), ウコギ (Acanthopanax sieboldianum), エゴノキ (Styrax *japonica*), ハマゴウ(*Vitex rotundifolia*) など25 種類の 植物化石を報告している. 植物化石にはシリブトビシ (Trapa macropoda), コナンキンハゼ (Sapium sebiferum var. pleistoceaca), コウセキハマナツメ (Paliurus nippon-メサワフタギ (Symplocos reticulata) などの絶滅種が含 まれており、天然記念物に指定された理由としても、絶 滅した種類を含み学術上価値が高いとされている。これ らの植物化石は、深草地域の大阪層群など同時代の地層

(竹村恵二・水野清秀・竹内圭史・小松原 琢)



 第12.1図 石山寺珪灰石露頭
 a:石山寺本堂前の天然記念物に指定されている珪 灰石露頭.厚さ10~100 cmの灰白色石灰岩と厚さ
 5~30 cmの灰色チャートの互層が褶曲構造を示す.
 b:境内遊歩道沿いの珪灰石の近接写真.
 珪灰石独特の羽毛状~柱状の産状が見られる.
 硬貨の直径は2 cm.(大津市石山寺:付図 C)

からも産出しているが、市街化による露頭の消失によって、現在ではほとんど見ることができなくなっている.



第12.2図 三川合流付近の地形図(1590年代)
 (建設省近畿地方建設局・淀川百年史編集委員会編,
 1974;関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編,
 2002)



第12.5図 オランダ堰堤 (大津市上田上桐生町の草津川:付図 C)







第12.4図 三川合流付近の地形図(現在) (建設省近畿地方建設局・淀川百年史編集委員会編, 1974;関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編, 2002)

12.2 巨椋池の干拓

巨椋池干拓は,桂川・宇治川・木津川の三川合流の立 地と地盤に関連した土木工事と考えることができ,この 地域の治水と干拓は一体的な考察が必要である.旧巨椋 池を含む京都盆地南部・三川合流点付近の治水史につい ては,「淀川百年史」(建設省近畿地方建設局・淀川百年 史編集委員会,1974)に詳しい.それらの資料をまとめ て,「新関西地盤-京都盆地-」(関西地盤情報活用協議 会地盤研究委員会,2002)に,巨椋池干拓に関するまと めが記述された.

巨椋池は,昭和の時代(戦前)までは,桂川・宇治 川・木津川の三川合流地点にあった約800haの遊水池 であり,1933年(昭和8年)に国営干拓事業第1号と された場所である。巨椋池に流れ込んでいたのは宇治川 であったが,洪水時には三川から流れ込む淀川の水が逆 流して頻繁に水害が起こってきた。以下,治水関連事業 との関連事項をまとめる。

この地域の大規模治水事業は16世紀に豊臣秀吉に よって実施された.大きな工事として、南東から直接流 れ込んでいた宇治川を、槙島堤の築堤により北側を迂回 させ、同時に太閤堤を築いた(第12.2図).1868年(明 治元年)から木津川を淀から下流の八幡付近に付け替え る工事が行われた.1889年(明治22年)から1911年(明 治44年)にかけて、淀川改良工事が施工された.主な 項目は、新淀川の開削、淀川堤防の拡築、三川合流地点 の整備、琵琶湖からの流量調整のための瀬田川洗堰の整 備の4点であった.三川合流地点整備では、桂川の川幅 拡幅、桂川と宇治川合流地点の下流への付け替えなどが 実施された.改良工事前の三川合流地点付近の様子を第 12.3図に示す.また、1924年(大正13年)から1929 年(昭和4年)にかけても付け替え工事が実施され、桂 川と宇治川の背割堤、宇治川と木津川の隔流堤を築いた ことにより, 巨椋池は完全に締め切られることになり, 水質の悪化が進むことになった. 最後に, 1933年(昭 和8年)~1941年(昭和16年)に国営干拓事業第1号 として干拓が実施され, 巨椋池は干拓地として利用され ることになった(第12.4図).

12.3 オランダ堰堤

オランダ堰堤は、大津市上桐生の草津川に造られた、 切石積みのアーチ式の砂防堰堤である(滋賀県高等学校 理科教育研究会地学部会編,2002c:第12.5図).この 堰堤は1882年(明治15年)にオランダ人技師ヨハネス・ デ・レーケの指導の下で田邊義三郎が設計,1889年(明 治22年)に完工したと伝えられることから,オランダ 堰堤ともデ・レーケ堰堤とも呼ばれ,わが国最古の砂防 堰堤とされている.田上山地の治山事業は1873年(明 治6年)の「淀川水源砂防法」制定以降本格化し,田上 山地の全域で数多くの石積砂防堰堤が造られた.これら の砂防堰堤は植栽工とともに,治山事業着手以前には禿 山であった田上山地の緑化と土砂流出防止に大きく寄与 している.オランダ堰堤は日本の産業遺産300選,土木 学会選奨土木遺産及び大津市指定遺跡に認定されてい る.

- 雨森 清・荒川忠彦・北川明照・小早川 隆・多賀 優・但馬 達雄・田村幹夫・西川一雄・三矢信昭(1993) 愛知川化 石林の地層と堆積環境. 琵琶湖博物館開設準備室研究調査 報告, no.1, p.15-31.
- 安斎俊男 (1950) 滋賀縣下長石鉱床概查報告. 地調月報, vol.1, no.2, p.19-22.
- 青木映里香 (1998) Cooling histories of feldspars in the Tanakami and Shigaraki granites from the southeast to Lake Biwa, southwest Japan. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, vol.1, p.62-63.
- 有田忠雄(1949) 京都府笠置附近の花崗岩類及び変成岩類. 地質雑, vol.55, p.89-104.
- Asayama, T. (1954) The radium content and chemical composition of granitic rocks in Japan, especially in the Tanakami-Mikumo and Hiei regions, Shiga and Kyoto Prefectures. *Mem. Fac. Ind. Arts, Kyoto Tech. Univ., Sci. & Tech.*, no.3-B, p.25-54.

浅山哲二(1973) 2.5 長石. 瀧本 清編, 日本地方鉱床誌 近 畿地方, 2. 非金属鉱床, 朝倉書店, 東京, p.312-326.

- Barbarin, B. (2005) Mafic magmatic enclaves and mafic rocks associated with some granitoids of the central Sierra Nevada batholith, Carifornia: nature, origin and relations with the hosts. *Lithos*, vol.80, p.155-177.
- 琵琶湖基盤地質研究会編(2001) 琵琶湖のカルデラ形成史の 研究. 琵琶湖博物館研究調査報告, no.15, 120p.
- 地学団体研究会京都支部編(1976) 京都五億年の旅.法律文 化社,京都,206p.
- 地学団体研究会京都支部編(1978) 京都地学ガイド.法律文 化社,京都,206p.
- 地学団体研究会京都支部編(1990) 新京都五億年の旅. 法律 文化社, 京都, 171p.
- 地質調査所編(1953) 日本鉱産誌 B Ⅳ 物理的特性を利用する 鉱物. 地質調査所, 270p.
- 地質調査所編(1954) II マンガン鉱. 日本鉱産誌 B I-c 主と して金属原料となる鉱石. 地質調査所, p.56-102.
- 地質調査所編(1955) V 錫鉱. 日本鉱産誌 B I-a 主として金 属原料となる鉱石. 地質調査所, p.185-204.
- Dana, E.S. and Ford, W.E. (1959) A textbook of mineralogy. 4th ed., Modern Asia edition, John Wiley & Sons Inc., 851p.
- 檀原 徹・山下 透・岩野英樹・竹村恵二・林田 明 (2010) 琵琶湖 1400m 掘削試料の編年:フィッション・トラック 年代とテフラ同定の再検討. 第四紀研究, vol.49, p.101-119.
- 動力炉・核燃料開発事業団(1988) 日本のウラン資源(II), 59p.
- 動力炉・核燃料開発事業団中部事業所(1994) 4.4.酸性貫 入岩に伴うタイプ-琵琶湖周辺地域-. 日本のウラン資源, 動力炉・核燃料開発事業団中部事業所, p.375-378.

- 藤本秀弘(1966) 瀬田川及び信楽川のポットホール. 地学研究, vol.17, p.157-162.
- 藤本秀弘(1979) 滋賀県の花崗岩類. 滋賀自然環境研究会編, 滋賀県の自然 総合学術調査研究報告, 滋賀県自然保護財 団, p.205-227.
- 藤原重彦(2003) 京都盆地東南部の地下に分布する Ma10 海 成粘土層について.自然災害科学, vol.22, p.225-228.
- 深草団体研究会(1962) 近畿地方の新期新生代層の研究 I. -京都東南,深草付近の新生代層-.地球科学, no.63, p.1-9.
- 花田遥平・木股三善・清水雅浩・星野美保子・越後拓也・西田 憲正・中野聰志 (2011) EPMA による黒雲母の化学組成式: 結晶化学と成因的意義.日本地質学会第 118 年学術大会・ 日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会講演要旨集(セ クション C), p.139
- 原田哲朗・石田志朗・大西郁夫・徳岡隆夫(1963) 大阪南方 和泉地域の大阪層群.地球科学, no.66, p.1-8.
- 原山 智・宮村 学・吉田史郎・三村弘二・栗本史雄(1989) 御在所山地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地 質図幅),地質調査所,145p.
- 橋本 勘・周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2000) 雄琴ボー リングコア花崗岩の記載岩石学.日本地質学会第107年学 術大会講演要旨集, p.163.
- 橋本 勘・赤井純治・中野聰志(2005) 田上花こう岩中の アルカリ長石の微細組織とその形成史. 岩石鉱物科学, vol.34, p.1-14.
- 橋本定樹(1978MS) 宇治南東部の大阪層群.大阪市立大学理 学部地学教室卒業論文, 51p.
- 橋本定樹・吉川周作・山崎博史(1998) 20万分の1 古琵琶湖 層群の地質図. アーバンクボタ, no.37.
- 早瀬一一(1950) 田ノ上山附近の花崗岩地質(豫報). 地質雑, vol.56, p.257-258.
- 早瀬一一(1951) 田ノ上山花崗岩接觸帶に於ける Extinct Hallo Type A. 京都大學理學部地質學鑛物學教室編, 地學, no.3, p.19-23.
- 早瀬一一・石坂恭一(1967) Rb-Sr による地質年令(I)西南 日本. 岩鉱, vol.58, p.201-212.
- 林 隆夫(1974) 堅田丘陵の古琵琶湖層群. 地質雑, vol.80, p.261-276.
- 林 隆夫・川辺孝幸(1993) 古琵琶湖層群と段丘堆積層・沖 積層. 市原 実編著, 大阪層群, 創元社, 大阪, p.158-168.
- 林 隆夫・山崎博文・川辺孝幸(1999) 琵琶湖東岸, 草津市 烏丸地区深層ボーリングコアの岩相層序. 琵琶湖博物館研 究調査報告, no.12, p.31-60.
- Hayashida, A., Sasajima, S. and Yokoyama, T. (1978) The Brunhes/ Matuyama polarity epoch boundary in the Kobiwako group on the west coast of Lake Biwa, central Japan. *Rock Magnetism*

and Paleogeophysics, vol.5, p.55-64.

- Hayashida, A. and Yokoyama, T. (1983) Paleomagnetic chronology of the Plio-Pleistocene Kobiwako Group to the southeast of Lake Biwa, central Japan. *Jour. Geol. Soc. Japan*, vol.89, p.209-221.
- Hiki, T. (1917) The granite and its satellites in Mount Hiei environs. Mem. Coll. Eng. Kyoto Imp. Univ., vol.7, p.275-282.
- Hiraoka, Y. (1997a) Characterization of weathered products from granites around southern Lake Biwa, central Japan - application to forensic geology. *Jour. Geol. Soc. Japan*, vol.103, p.36-46.
- Hiraoka, Y. (1997b) Presumption method for the provenance of weathered products from granites around southern Lake Biwa, central Japan, based on chemical analysis of biotite. *Jour. Geol. Soc. Japan*, vol.103, p.770-780.
- Hiraoka, Y. (1998) Estimation of the sedimentary source of biotite in the Plio - Plistocene Osaka Group, southern Kyoto Prefecture, Japan. Jour. Geosci. Osaka City Univ., vol.41, p.1-17.
- 広瀬正資(1934) 琵琶湖東南岸の地質. 地球, vol.21, 91-106.
- 堀池 昭(1994) 古都の名水と伏見の御香水. 日本地下水学 会編,名水を科学する,技報堂出版,東京, p.173-185.
- Hoshino, M., Kimata, M., Nishida, N., Kyono, A., Shimizu, M. and Takizawa, S. (2005) The chemistry of allanite from the Daibosatsu Pass, Yamanashi, Japan. *Mineral. Mag.*, vol.69, p.402 -423.
- Hoshino, M., Kimata, M. and Shimizu, M. (2006) Allanite (Ce) in granitic rocks from Japan: Genetic implications of patterns of REE and Mn enrichment. *Canadian Mineralogist*, vol.44, p.45 -62.
- Hoshino, M., Kimata, M., Nishida, N., Shimizu, M. and Akasaka, T. (2010) Crystal chemistry of zircon from granitic rocks, Japan: genetic implications of HREE, U and Th enrichment. *Neues Jahrbuch fur Mineralogie*, Abhandlungen. vol.187, p.167-188.
- Huzita, K. (1962) Tectonic development of the median zone (Setouchi) of Southwest Japan since the Miocene. Jour. Geosci. Osaka City Univ., vol.6, p.103-144.
- 藤田和夫・笠間太郎(1982) 大阪西北部地域の地質.地域地 質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,112p.
- 藤田和夫・前田保夫(1985) 大阪西南部地域の地質.地域地 質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,103p.
- 藤田和夫・中世古幸次郎(1950) いわゆる"山砂利"について. 地質雑, vol.56, p.360.
- 藤田和夫・尾池和夫・松村一男(1974) 第四紀地殻変動図 近畿. 1:500,000), 地質調査所.
- 茨木団体研究グループ(1966) 茨木北方の大阪層群とゾウ 化石(*Elephas shigensis*)の産出.松下進教授記念論文集, 松下進教授退官記念事業会, p.117-131.
- 飯田義正(1980a) 泉南地域の大阪層群内に認められる前期更 新世の不整合.大阪微化石研究会誌, no.8, p.1-15.
- 飯田義正(1980b) 信楽高原西部の古地理学的研究-大福礫層 により復元される鮮新世の河谷について-. 地質雑, vol.86, p.741-753.

- 池辺展生(1933) 琵琶湖西方の古琵琶湖層. 地球, vol.20, p.241 - 260.
- 池辺展生(1934) 鈴鹿山脈西側近江甲賀郡下の新生界.地質雑, vol.41, p.399-401.
- 池邊展生(1949) Comptoniphyllumの新産地. 鑛物と地質, vol.3, p.99-100.
- 池辺展生(1957) 日本の新生代の積成盆地-特に中新世の積
 成盆地-.新生代の研究, no.24・25, p.1-10.
- 池辺展生(1959) 近畿における旧象化石の分布. 第四紀研究, vol.1, p.109-118.
- 池辺展生編(1961) 17万分の1 兵庫県地質鉱産図及び同説明
 書. 兵庫県, 171p.
- Ikebe, N., Iwatsu, J. and Takenaka, J. (1970) Quaternary geology of Osaka with special reference to land subsidence. *Jour. Geosci.*, *Osaka City Univ.*, vol.13, p.39-98.
- 池辺展生・石田志朗・千地万造(1971) 奈良県北葛城郡馬見 丘陵から Stegodon の発見. 中部地方の鮮新統および最新 統, 竹原平一教授記念論文集, 竹原平一教授記念会, p.163 -172.
- 池田 碩(1964) 花崗岩地域の地形学的研究-信楽山地南縁 堂山を事例として-.立命館文学, no.233, p.157-174.
- 池田 碩(1967) 花崗岩山地の解体過程について-信楽山地 南縁・田ノ上山地を事例として-. 京都府私学研究論集, no.5, p.1-24.
- 池田 碩(1982) 滋賀県田ノ上山地のバッドランド.水山高 幸編,空から見た地形景観,大明堂,東京,111p.
- 池田 碩・植村善博(1980) 南山城,木津川流域の段丘地形. 奈良大学紀要, no.9, p.75-85.
- 池田 碩・大橋 健・植村善博・吉越昭久(1979) 近江盆地 の地形. 滋賀自然環境研究会編, 滋賀県の自然 総合学術 調査研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.1-112.
- 池田 碩・大橋 健・植村善博(1991) 滋賀県近江盆地の地形. 滋賀県自然誌編集委員会編, 滋賀県自然誌 総合学術調査 研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.105-295.
- 池谷 浩 (2006) 「マツ」の話-防災からみた一つの日本史-. 五月書房,東京, 212p.
- 井本伸廣(1966) 丹波帯中央部のマンガン鉱床. 京都教育大 学紀要, B: 自然科学, no.29, p.19-32.
- 井本伸広(1991) 滋賀県の中・古生界-特に丹波帯 I 型・II 型 地層群との関係について. 滋賀県自然誌編集委員会編, 滋 賀県自然誌 総合学術調査研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.297-308.
- 井本伸広・清水大吉郎・武蔵野 実・石田志朗(1989) 京都 西北部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図 幅),地質調査所,84p.
- 稲垣秀輝(2000) 滋賀県南西部に分布する風化花崗岩の表層 崩壊の特徴. 応用地質, vol.41, p.103-112.
- 稲垣絋武(1966) 田ノ上山産花崗岩質球顆岩に就いて. 地学 研究, 益富記念号, p.212.
- 井上直人・田中靖之・伊藤陽之・岩野祥子・北田奈緒子・福田 洋一・竹村恵二(2004) 2次元重力解析より推定された 京都盆地における未固結堆積層の密度-堀川-巨椋池測線

および久世橋測線-. 地震, 第2輯, vol.57, p.45-54.

- 石田志朗(1969) 京都東山トンネル西口の大阪層群. 大阪層 群総研連絡紙, no.4, p.12-14.
- 石田志朗(2002a) 醍醐の阿蘇-1火山灰層. 京都府レッドデー タブック 2002 下, 地形・地質・自然生態系編, 京都府, p.157.
- 石田志朗(2002b) 平尾台の大阪層群と高位段丘. 京都府レッ ドデータブック 2002 下, 地形・地質・自然生態系編, 京都府, p.163.
- Ishida, S. and Nakagawa, Y. (1978) Preliminary report on Geology of Aibano, northwest of Lake Biwa, Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.6, p.39-53.
- 石田志朗・横山卓雄(1969) 近畿・東海地方の鮮新・更新統 火山灰層序,及び古地理・構造発達史を中心とした諸問題 -近畿地方の新期新生代層の研究,その10-.第四紀研究, vol.8, p.31-43.
- 石田志朗・佐藤隆春(1987) (2) 瀬戸内区. 第3章 新第三系 および第四系,日本の地質6近畿地方,共立出版,東京, p.119-126.
- 石田志朗・糸魚川淳二・森島正夫・森下 晶・中澤圭二・小黒 譲司(1954) 京都府奥山田の新生代層. 地質雑, vol.60, p.160-166.
- Ishida, S., Maenaka, K. and Yokoyama, T. (1969) Paleomagnetic chronology of volcanic ash of the Plio-Pleistocene series in Kinki district, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan, vol.75, p.183-197.
- Ishida, S., Nakagawa, Y., Nasu, T. and Nishiyama Research Group (1976) Stratigraphy of the Kobiwako Group in Konan area, south of Lake Biwa, central Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa* and the Japanese Pleistocene, vol.4, p.109-124.
- 石田志朗·松田高明·渡辺 農·古谷正和·岡本哲雄(監修)(1980) 滋賀県南部地域地質図. 5万分の1,建設省近畿地方建設 局大戸川ダム調査事務所.
- 石田志朗・河田清雄・宮村 学(1984a) 彦根西部地域の地 質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, 121p.
- 石田志朗・井本伸広・武蔵野 実(1984b) 京都府地域表層地 質図. 土地分類基本調査(5万分の1),京都東北部・京都 東南部・水口,京都府農林部耕地課・滋賀県企画部土地対 策課, p.103-129.
- Ishiga, H. (1982) Late Carboniferous and Early Permian radiolarians from the Tamba Belt, Southwest Japan. *Earth Science* (*Chikyu Kagaku*), vol.36, p.333-339.
- 石賀裕明(1983) "丹波層群"を構成する2組の地層群について 一丹波帯西部の例-. 地質雑, vol.89, p.443-454.
- Ishiga, H. (1986) Late Carboniferous and Permian radiolarian biostratigraphy of southwest Japan. Jour. Geosci., Osaka City Univ., vol.29, p.89-100.
- Ishiga, H. and Imoto, N. (1980) Some Permian Radiolarians in the Tamba District, Southwest Japan. *Earth Science* (*Chikyu Kagaku*), vol.34, p.333-345.
- Ishiga, H., Kito, T. and Imoto, N. (1982a) Late Permian radiolarian assemblages in the Tamba district and an adjacent area, Southwest Japan. *Earth Science* (*Chikyu Kagaku*), vol.36, p.10

- 22.

- Ishiga, H., Kito, T. and Imoto, N. (1982b) Permian Radiolarian Biostratigraphy. News of Osaka Micropaleontologists (NOM), Special Volume, Proceedings of the First Japanese Radiolarian Symposium, no.5, p.17-26.
- Ishiga, H., Kito, T. and Imoto, N. (1982c) Middle permian radiolarian assemblages in the Tamba District and an adjacent area, southwest Japan. *Earth Science* (*Chikyu Kagaku*), vol.36, p.272-281.
- Ishihara, S. (1977) The magnetite-series and ilmenaite-series granitic rocks. Mining Geology, vol.27, p.293-305.
- 石原舜三(2003) I-A3 ペグマタイト鉱床. 資源地質学会編, 資源環境地質学,資源地質学会, p.17-22.
- 石原舜三・村上浩康(2006) 西南日本花崗岩類のレアアース 特性:足摺岬の新第三紀深成岩類と山陽帯の後期白亜紀花 崗岩類. 地質調査研究報告, vol.57, p.89-103.
- 石原舜三・中野聰志・寺島 滋(2005) 近畿地方田上花崗岩 の化学的特性-特に放射性元素と希土類元素の役割-. 地 質調査研究報告, vol.56, p.93-98.
- 石井清彦(1932) 7万5千分の1地質図幅「伏見」及び同説明書. 地質調査所, 42p.
- Isozaki, Y. and Matsuda, T. (1980) Age of the Tamba Group along the Hozugawa "Anticline", Western Hills of Kyoto, Southwest Japan. Jour. Geosci., Osaka City University, vol.23, p.115-134.
- Itihara, M. (1953) Mechanical analysis of the Hattyoike Alternations of the Neogenic Osaka Group. Jour. Inst. Polytech. Osaka City Univ., Ser. G., vol.1, p.19-33.
- 市原 実(1960) 大阪,明石地域の第四紀層に関する諸問題. 地球科学, no.49, p.15-25.
- 市原 実編(1993a) 大阪層群. 創元社, 大阪, 340p.
- 市原 実(1993b) 大阪層群の層序学的研究のまとめ.市原 実編,大阪層群,創元社,大阪, p.305-310.
- 市原 実・亀井節夫 (1970) 大阪層群-平野と丘陵の地質-. 科学, vol.40, p.282-291.
- 市原 実・藤田和夫・森下 晶・中世古幸次郎 (1955) 千里 山丘陵-大阪層群の研究 (その1)-. 地質雑, vol.61, p.433 - 441.
- Itihara, M., Yoshikawa, S., Inoue, K., Hayashi, T., Tateishi, M. and Nakajima, K. (1975) Stratigraphy of the Plio-Pleistocene Osaka Group in Sennan-Senpoku area, south of Osaka, Japan -A standard stratigraphy of the Osaka Group-. *Jour. Geosci.*, *Osaka City Univ.*, vol.19, p.1-29.
- 市原 実・吉川周作・川辺孝幸・三田村宗樹(1984) 岸和田 市津田川流域のいわゆる"芝の不整合"について-大阪層 群の古地磁気層序とフィッション・トラック年代-.地球 科学, vol.38, p.1-16.
- 市原 実・市川浩一郎・山田直利(1986) 岸和田地域の地 質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, 148p.
- 市原 実・吉川周作・三田村宗樹・水野清秀・林 隆夫 (1991) 12万5千分の1 大阪とその周辺地域の第四紀地質図. アーバンクボタ, no.30.

- 伊藤有加・増田富士雄(2008) 京都市南部, 巨椋池干拓地の 地形と地下地質から復元した湖水深分布と湖水位. 日本地 質学会第115年学術大会講演要旨, p.271.
- Itoigawa, J. (1956) Molluscan founa of the Tsuzuki Group in Kyoto Prefecture, Japan. Mem. Coll. Sci., Kyoto Univ., Ser.B, vol.23, p.179-192.
- 城陽礫層研究グループ(1992) 宇治丘陵における前期更新世 扇状地の形成過程. 地球科学, vol.46, p.57-68.
- 城陽市(1997) 山砂利採取に関する資料,平成8年度.城陽市, 60p.
- 角谷安華・河野俊夫・中野聰志・西村彰子・星野美保子(2012) 滋賀県田上花崗岩体ペグマタイト中のジルコン:産状・形 態・組織・化学組成.地質調査研究報告, vol.63, p.203-226.
- 鎌掛団研グループ(1972) 滋賀県蒲生郡,鎌掛・駒月付近の 古琵琶湖層群. 地質雑, vol.78, p.601-609.
- 鎌田浩毅・檀原 徹・山下 透・星住英夫・林田 明・竹村 恵二(1994) 大阪層群アズキ火山灰および上総層群 Ku6c 火山灰と中部九州の今市火砕流堆積物との対比-猪牟田カ ルデラから噴出した co-ignimbraite ash-. 地質雑, vol.106, p.848-866.
- 亀井節夫・石田志朗・横山卓雄・楠木幹浩・田末利治(1969) 深草より Stegodon orientalis の産出とその層準,あわせて Ma6下位の火山灰層について.日本地質学会関西支部報, no.66, p.4-8.
- Kaneda, H., Kinoshita, H. and Komatsubara, T. (2008) An 18,000year record of recurrent folding inferred from sediment slices and cores across a blind segment of Biwako-seigan fault zone, central Japan. *Jour. Geophys. Res.*, vol.113, B05401.
- 関西地質調査業協会地盤情報データベース作成委員会・小松原 琢(2007) 近江盆地の地下地質. 日本応用地質学会平成 19 年度研究発表会講演論文集, p.77-78.
- 関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編(1998) 新関西地 盤-神戸および阪神間-. 関西地盤情報活用協議会, 270p.
- 関西地盤情報活用協議会地盤研究委員会編(2002) 新関西地 盤-京都盆地-. 関西地盤情報活用協議会, 196p.
- 烏丸地区深層ボーリング調査団編(1999) 琵琶湖東岸・烏 丸地区深層ボーリング調査. 琵琶湖博物館研究調査報告, no.12, 168p.
- 活断層研究会(1980) 日本の活断層-分布図と資料-. 東京大 学出版会,東京, 363p.
- 川端 博(1960) 京都市内加茂川流域の浅層地下水.京都學 藝大學學報, B, 理科, no.16, p.43-47.
- 川邊孝幸(1981) 琵琶湖南東方,阿山・甲賀丘陵付近の古琵 琶湖層群.地質雑, vol.87, p.457-473.
- 川辺孝幸(1986) 上野盆地西部,花ノ木丘陵の古琵琶湖層群. 地球科学,vol.40, p.383-398.
- Kawabe, T. (1989) Stratigraphy of the lower part of the Kobiwako Group around the Ueno basin, Kinki district Japan. *Jour. Geosci. Osaka City Univ.*, vol.32, p.39-90.
- 川辺孝幸(1989) 近畿の鮮新~更新統堆積盆地のブロック運動.
 地球科学, vol.43, p.402-416.

- 川辺孝幸・高橋裕平・小村良二・田口雄作(1996) 上野地域 の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質 調査所,99p.
- 河田清雄・宮村 学・吉田史郎(1986) 京都及大阪. 20万分 の1地質図幅,地質調査所.
- 河村善也(1993) 奈良丘陵の大阪層群. 地質雑, vol.99, p.503 -523.
- 川崎慎治・小林芳正 (1993) 推定される京都市内「横大路断層」 における反射法探査. 地震, 第2輯, vol.46, p.275-283.
- 川崎慎治・小林芳正・筒井智樹(1992) 京都市桃山断層の反 射法地震探査. 地震, 第2輯, vol.45, p.239-245.
- 建設省近畿地方建設局・淀川百年史編集委員会編(1974) 淀 川百年史.建設省近畿地方建設局,1424p.
- 貴治康夫(1986) 丹波帯東南部の小規模火成岩体の産状と岩 石記載. Magma, no.76, p.18-24.
- 貴治康夫(1989) 丹波帯の高マグネシア安山岩およびそれに 類似する脈岩. 白木敬一編, 総合研究(A)報告書:日本 の高マグネシア安山岩, p.125-132.
- 貴治康夫・高田雅介(1994) 京都府宇治田原の玄武岩脈に含 まれる単斜輝石斑晶. 地学研究, vol.43, p.187-194.
- 貴治康夫・小澤大成・村田 守(2000) 京都市北部,山陽帯 に分布するアダカイト質丹波花崗岩質岩. 岩石鉱物科学, vol.29, p.136-149.
- 木村克己・貴治康夫(1993) 美濃-丹羽帯に貫入する高マグ ネシア安山岩および玄武岩シートの K-Ar 年代. 地質雑, vol.99, p.205-208.
- 木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野 実・高橋 裕平(1998) 京都東北部地域の地質.地域地質研究報告(5 万分の1地質図幅),地質調査所, 89p.
- 木村克己・吉岡敏和・中野聰志・松岡 篤(2001) 北小松地 域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地 質調査所,102p.
- 記録しておきたい滋賀県の地形・地質編集委員会編(2011) 記録しておきたい滋賀県の地形・地質. 琵琶湖博物館研究 調査報告, no.26, 221p.
- 北田奈緒子・斎藤礼子・竹村恵二(2003) 地盤情報データベー スからみた京都盆地浅部地質. 自然災害科学, vol.22, p.216 - 220.
- 木谷幹一・加茂裕介 (2010) 京都盆地南部で掘削された KD -0 コアの海成層層序の再検討.地球科学, vol.64, p.99-109.
- 木谷幹一・松原 久・植村善博(1992) 滋賀県高島町畑にお ける古琵琶湖層群の層準と堆積環境. 第四紀研究, vol.31, p.113-116.
- 小林健太郎・高橋誠一・水山高幸・坂口慶治・清水 弘・園田 平悟(1982) I 地形分類図.土地分類基本調査(5万分 の1),京都東北部・京都東南部・水口,京都府農林部耕地課・ 滋賀県企画部土地対策課, p.29-91.
- 小林うさ(1989) 田上から. 京都地学会会誌, no.43, p.97-102.
- 小林芳正・入倉孝次郎・堀家正則・天池文男・岸本清行・春日 茂(1980) 黄檗断層の地震探査. 京都大学防災研究所

年報, no.23 B-1, p.95-106.

- 小林芳正・安藤正孝・入倉孝次郎・吉住永三郎(1984) 黄檗 断層の地球物理的・地質学的調査. 地震, 第2輯, vol.37, p.417-428.
- 古琵琶湖団体研究グループ(1977) 水口丘陵西部の古琵琶湖 層群. 地球科学, vol.31, p.115-129.
- 古琵琶湖団体研究グループ(1981) 瀬田・石部地域の古琵琶 湖層群. 地球科学, vol.35, p.26-40.
- 古琵琶湖団体研究グループ(1992) 大津・石山地域の古琵琶 湖層群. 地球科学, vol.46, p.221-234.
- 小早川 隆(1991) 井上平津鉱床の鉱化作用. 滋賀県自然誌 編集委員会編, 滋賀県自然誌 総合学術調査研究報告, 滋 賀県自然保護財団, p.809-846.
- 河野俊夫(2007) 滋賀県田上山産満礬ザクロ石について.地 学研究, vol.56, p.97-103.
- 河野俊夫・中野聰志・下林典正(2008) 滋賀県・田上花崗岩 体小ペグマタイト産のマントル長石の形成過程. 地質雑, vol.114, p.435-446.
- 小池洋一(1955) 京都市に於ける地下水使用工業の現状と展 望. 京都商工情報, no.22, p.8-9.
- 小泉尚嗣・佃 栄吉・高橋 誠・横田 裕・岩田知孝・入倉孝 次郎・上砂正一・高木 清・長谷川昌志 (2002) 黄檗断 層の地下構造調査. 地震, 第2輯, vol.55, p.153-166.
- 甲賀市史編さん委員会編(2007a) 第一節-甲賀の地史. 甲賀 市史 第1巻 古代の甲賀, 甲賀市, p.32-81.
- 甲賀市史編さん委員会編(2007b) 甲賀市地質図(5万分の1). 甲賀市史第1巻付図,甲賀市.
- 粉川昭平(1954) 奈良三笠山附近の地質. 地質雑, vol.60, p.487 - 493.
- Kokawa, S. (1961) Distribution and phytostratigraphy of Menyanthes remains in Japan. Jour. Biology, Osaka City Univ., vol.12, p.123-151.
- 国土地理院(1966) 京都南部. 1:25,000 土地条件図, 国土地 理院.
- 国土地理院(1977) 京都. 1:25,000 土地条件図, 国土地理院.
- 国土地理院 (1982) 大津. 1:25,000 土地条件図, 国土地理院. 小松原 琢 (2006) 琵琶湖西岸断層帯の変位量分布. 地球,
- 号外, no.54, p.165-170. 小松原 琢・関西地質調査業協会地盤情報データベース作成委 員会(2010) 近江盆地の地下地質.地学雑誌, vol.119, p.683 - 708.
- 光明池団体研究グループ(1971) 光明池周辺の大阪層群. 地 球科学, vol.25, p.201-210.
- 近藤善教(1968) 伊賀構造盆地の構造地質学的研究. 地調報告, no.231, p.1-30.
- 小西泰次郎·村下敏夫·武居由之·後藤隼次(1960) 京都市 工業用地下水調査報告書-淀川水系地域調査第6報-.地 調月報, vol.11, p.101-116.
- 小阪優子·石賀裕明(1996) 丹波帯上部トリアス系層状チャー ト中の"竜ヶ石"石灰岩の形成. 地質雑, vol.102, p.1064 - 1067.
- 小谷 昌(1964) 湖底地形の区分について. 地理学評論,

vol.38, p.374.

- 小谷 昌(1971) 琵琶湖の湖底地形およびその環境. 琵琶 湖国定公園学術調査報告書, 琵琶湖国定公園学術調査団, p.125-175.
- 久保和也(1987) 花崗岩の集積構造. 地質ニュース, no.398, 口絵1-4.
- 久保和也(2000) 累帯深成岩体の貫入固結過程. 月刊地球, 号外 30, p.153-160.
- 窪田 薫(1951) 京都府綴喜郡宇治田原村附近産中新統貝化 石の若干について、鑛物と地質, vol.4, p.159-160.
- 日下部吉彦(1976) 丹波山地のマンガン鉱床. 地質ニュース, no.267, p.39-45.
- 楠 利夫(1989) 丹波帯Ⅱ型地層群天ヶ瀬砂岩層の堆積機構 と堆積場.地球科学, vol.43, p.211-223.
- 楠 利夫(2001a) 宇治市東方, 宇治川沿いの丹波層群から産 出した微化石について.日本地質学会近畿支部報, no.1, p.26 - 29.
- 楠 利夫(2001b) 京都府宇治田原町の丹波層群の頁岩から産 出したジュラ紀放散虫化石とその意義. 地球科学, vol.55, p.313-317.
- 楠 利夫(2010) 砂岩組成から後背地を探る-日本のジュラ 紀新世砂岩を例にして-. 地球科学, vol.64, p.83-90.
- 楠 利夫・武蔵野 実(1989) 丹波帯砂岩の特性. 地球科学, vol.43, p.75-83.
- 楠 利夫・小原正顕・武蔵野 実(2004) 丹波帯東南部,字 治市志津川のチャートから得られた石炭紀-ペルム紀の微 化石層序.地球科学, vol.58, p.37-54.
- 沓掛俊夫・中野聰志・国分一徳・高島里香・周琵琶湖花崗岩団 体研究グループ(1991) 琵琶湖周辺の花崗岩質岩体−そ の3. 花崗岩類の微量元素含有量−. 地球科学, vol.45, p.363 - 367.
- Kutsukake, T., Nakano, S. and the collaborative research group for the granites around Lake Biwa (2010) Geochemistry and mineral chemistry of mafic dykes associated with Hiei Granite pluton, southwest Japan. *Jour. Mineral. and Petrol. Sci.*, vol.105, p.309-319.
- 京都地学会編(1993) 京都の地学図鑑. 京都新聞社, 京都, 264p.
- 京都府企画環境部環境企画課(2002) 京都府レッドデータブッ ク 2002 下巻-地形・地質・自然生態系編-. 京都府企画 環境部環境企画課, 471p.
- 京都府農林部耕地課・滋賀県企画部土地対策課編(1984) 京 都東北部・京都東南部・水口.土地分類基本調査(5万 分の1),京都府農林部耕地課・滋賀県企画部土地対策課, 200p.
- 京都市(1998a) 平成9年度地震関係基礎調査交付金 京都盆 地-奈良盆地断層帯に関する調査成果報告書. 京都市消防 局防災対策室, 129p.
- 京都市(1998b)「京都盆地-奈良盆地断層帯」に関する調査. 科学技術庁編,第2回活断層調査成果報告会予稿集, p.143 -152.
- 京都市(1999a) 平成10年度地震関係基礎調查交付金 京都

盆地の地下構造に関する調査 成果報告書(概要版).京 都市消防局防災対策室,33p.

- 京都市(1999b) 平成10年度地震関係基礎調査交付金 三 方・花折断層帯(桃山断層)に関する調査 成果報告書. 106p.
- 京都市(2000) 平成11年度地震関係基礎調査交付金 京都盆 地の地下構造に関する調査 成果報告書(概要版).京都 市消防局防災対策室,46p.
- 京都市(2001a) 平成12年度地震関係基礎調査交付金 京都 盆地の地下構造に関する調査 成果報告書(概要版).京 都市消防局防災対策室,64p.
- 京都市(2001b) 京都の活断層.京都市消防局防災対策室, 244p+付録.
- 京都市(2002a) 平成13年度地震関係基礎調査交付金 京都 盆地の地下構造に関する調査 成果報告書(概要版).京 都市消防局防災対策室,45p.
- 京都市(2002b) 平成13年度地震関係基礎調査交付金 宇治 川断層に関する調査 成果報告書(概要編).京都市消防 局防災対策室,17p.
- 京都市(2002c) 京都の活断層 第2版. 京都市消防局防災対 策室, 272p.
- 京都市(2003a) 平成14年度地震関係基礎調査交付金 京都 盆地の地下構造に関する調査 成果報告書(概要版).京 都市消防局防災対策室,46p.
- 京都市(2003b) 京都盆地の地下構造. 京都市消防局防災対策 室, 133p.
- 京都市活断層調査委員会(尾池和夫・岡田篤正・竹村恵二・植 村善博・吉岡敏和・松井和夫・古澤 明・園田玉紀・杉森 辰次・梅田孝行・斎藤 勝)(2004) 京都盆地の地下構造 を南北に分ける宇治川断層の第四紀断層活動.活断層研究, no.24, p.139-156.
- Le Maitre, R. W. ed. (2002) Igneous rocks: A classification and glossary of terms, 2nd edition. Recommendations of the International Union of Geological Sciences, Subcommission of the Systematics of Igneous Rocks, Cambridge University Press, 236p.
- London, D. (2005) Granitic pegmatites: an assessment of current concepts and directions for the future. *Lithos*, vol.80, p.281-303.
- 町田 洋・新井房夫(2003) 新編火山灰アトラス「日本列島 とその周辺」、東京大学出版会,東京,336p.
- 牧 俊夫(1957) 京都府宇治市笠取重晶石鉱床の成因につい て. 地学研究, vol.9, p.201-213.
- 松原 厚 (1929) 伏見町の地下水に就いて. 醸造學雑誌, vol.6, p.568-588.
- 松田博幸・奥西一夫(1970) 田上山地の禿山の地形学的特性, 京都大学防災研究所年報, no.13A, p.541-555.
- 松本哲一・中村仁美・廣田明成・星住英夫・高橋 浩・中野 俊・中野聰志(2012) 日本列島における年代未詳岩石の K-Ar年代測定-地質図幅作成地域の火山岩・深成岩(平 成23年度版)-. 地質調査研究報告, vol.63, p.291-300.
- 松下 進(1950) 京都府地質誌. 京都大學理學部地質學鑛物 學教室編, 地學, no.2, p.41-49, 及び no.3, p.36-41.

- 松下 進(1953) 近畿地方. 日本地方地質誌, 朝倉書店, 東京, 293p.
- 松浦浩久・栗本史雄・寒川 旭・豊 遙秋 (1995) 広根地域 の地質.地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅),地質 調査所,110p.
- Mikami, T., Ishida, K. and Suzuki, S. (2008) Conodont biostratigraphy across the Carnian – Norian Boundary in the Jifukudani Creek, Tamba Terrane, SE Kyoto, Japan. *Stratigraphy*, vol.5, p.163-178.
- 三木晴男(1979) 京都大地震. 思文閣出版, 京都, 334p.
- 三木 茂(1933) 山城盆地周辺に於ける洪積層の植物化石. 京都府史蹟勝地保存委員会編,京都府史蹟名勝天然記念物 調査報告,第14冊, p.1-27.
- 三木 茂(1948) 鮮新世以来の近畿並に近接地域の遺体フロ ラに就いて、 鑛物と地質、第9集, p.105-144.
- 三村弘二・片田正人・金谷 弘(1976) 琵琶湖南東八尾山地 域の湖東流紋岩類の火成作用. 岩鉱, vol.71, p.327-338.
- 港 種雄(1974) 近畿地方の長石アプライト鉱床. 日本鉱業 会昭和49年度合同秋季大会(大阪)分科研究会資料, p.1-8.
- 三田村宗樹(1992) 京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造.第四紀研究, vol.31, p.159-177.
- 三田村宗樹 (1993) 奈良盆地. 市原 実編, 大阪層群, 創元社, 大阪, p.87-100.
- 三田村宗樹・吉川周作・石井陽子・貝戸俊一・長橋良隆(1998) 大阪平野 OD ボーリングコアの岩相. 大阪市立自然史博 物館研究報告, no.52, p.1-20.
- 宮地良典(2005) 京都西南部地域の地質,第6章 大阪層群 (鮮新-更新統).地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 産総研地質調査総合センター, p.60-67.
- 宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川 旭(1998) 大阪東 南部地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所,113p.
- 宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭 (2001) 大阪東北部地域の 地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅),地質調 査所, 130p.
- 宮地良典・楠 利夫・武蔵野 實・田結庄良昭・井本伸広(2005) 京都西南部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1 地質図幅),産総研地質調査総合センター,90p.
- 宮村 学(1959) 如意山塊と醍醐山塊の間の地質について.地学研究, vol.11, p.47-60.
- 宮村 学・三村弘二・横山卓雄(1976) 彦根東部地域の地 質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, 49p.
- 宮村 学・吉田史郎・山田直利・佐藤岱生・寒川 旭 (1981) 亀山地域の地質.地域地質研究報告 (5万分の1地質図 幅),地質調査所, 128p.
- 宮崎一博(2000) IV. 領家変成岩類及び新期領家花崗岩類によ る接触変成岩類. 奈良地域の地質, 地域地質研究報告(5 万分の1地質図幅), 地質調査所, p.16-42.
- 水野清秀(1999) 近畿中部, 信楽高原周辺に分布する流紋岩 礫を含む礫層の年代-火山灰層の対比による検討. 日本地 質学会第106年学術大会講演要旨, p.32.

- 水野清秀・寒川 旭・関口春子・駒澤正夫・杉山雄一・吉岡敏和・ 佐竹健治・苅谷愛彦・栗本史雄・吾妻 崇・須貝俊彦・栗 田泰夫・大井田 徹・片尾 浩・中村正夫・森尻理恵・広 島俊男・村田泰章・牧野雅彦・名和一成(2002) 50万分 の1活構造図「京都」(第2版)説明書.活構造図11,産 総研地質調査総合センター,50p.
- 水野清秀・岡田篤正・寒川 旭(2009a) 鮮新世以降の地質構 造発達史. 日本地質学会編,日本地方地質誌5近畿地方, 朝倉書店,東京, p.62-72.
- 水野清秀・小松原 琢・脇田浩二・竹内圭史・西岡芳晴・渡辺 寧・駒澤正夫(2009b) 20万分の1地質図幅「名古屋」(第 3版). 産総研地質調査総合センター.
- 水山高幸(1973) 地質、林屋辰三郎・藤岡謙二郎編,字治市 史1古代の歴史と景観,序説Ⅱ字治市の自然と人文,1自 然的基礎,字治市役所,p.41-50.
- 百原 新(2010) 中部ヨーロッパと中部日本の新第三紀から 第四紀への植物化石群変化の時期:気候変動との関連で. 第四紀研究, vol.49, p.299-308.
- 長橋良隆・里口保文・吉川周作(2000) 本州中央部における 鮮新-更新世の火砕流堆積物と広域火山灰層との対比およ び層位噴出年代. 地質雑, vol.106, p.51-69.
- 長橋良隆・吉川周作・宮川ちひろ・内山 高・井内美郎(2004) 近畿地方および八ヶ岳山麓における過去43万年間の広 域テフラの層序と編年 – EDS分析による火山ガラス片の 主要成分化学組成 –. 第四紀研究, vol.43, p.15-35.
- 長島弘三・原田一雄・本田真理子(1975) 滋賀県大津市田ノ 上山産新鉱物益富雲母(Masutomilite). 地学研究, vol.26, p.319-324.
- 長島乙吉・長島弘三(1960) 日本希元素鉱物. 長島乙吉先生 祝賀記念事業会(日本砿物趣味の会), p.436.
- 中江 訓 (2000) 西南日本内帯ジュラ紀付加複合体の広域対
 比. 地質学論集, no.55, p.73-98.
- 中江 訓・吉岡敏和(1998) 熊川地域の地質.地域地質研究 報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, 71p.
- 中江 訓・吉岡敏和・内藤一樹(2001) 竹生島地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, 71p.
- 中川要之助(1973) 京都府南部木津川左岸地区の大阪層群. 第四紀, 第四紀総合研究連絡誌, no.19, p.43-48.
- 中川要之助・横山卓雄(1975) 古瀬田川に関する新知見.日 本地質学会第82年学術大会講演要旨集, p.397.
- 中島和一(1960) 大和高原領家帯北縁部の地質. 地球科学, no.49, p.1-14.
- 中本好一(1982MS) 霊仙山地域の石英閃緑岩について. 滋賀 大学教育学部卒業論文, 26p.
- Nakamura, S. (1926) Guide book of excursion D-Geography and geology of Kyoto, Nara, Osaka and Kobe-.3rd Pan pacific Congr., Tokyo.
- 中村新太郎(1927) 京都大阪奈良神戸四近地質図説明文.地球, vol.8, p.37-44.
- 中村新太郎 (1929) 日本に於ける洪積統の分層. 日本学術協 会報告, no.5, p.115-117.

- 中村新太郎・松下 進・館林寛吾(1936) 京都西山山地の地質. 地球, vol.26, p.311-334.
- 中野聰志(1975) 正長石及び微斜長石マイクロパーサイト中 での加熱に伴う K, Na 及び Ca イオンの挙動. 鉱物学雑誌, vol.12, p.165-183.
- 中野聰志(1992) アルカリ長石:パーサイト研究の現状と課題. 鉱物学雑誌, vol.21, p.161-173.
- Nakano, S. (1997) Calcium distribution in a microperthite from the Nango pegmatite, Otsu City, Japan. *Earth Science* (*Chikyu Kagaku*), vol.51, p.51-59.
- 中野聰志(2001) IV. 花崗岩類及び岩脈類. 北小松地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, p.44 -74.
- 中野聰志(2011a) 平津井上長石鉱山. 琵琶湖博物館研究調査 報告, no.26, p.181.
- 中野聰志(2011b) 鹿跳橋の菫青石. 琵琶湖博物館研究調査報 告, no.26, p.183.
- 中野聰志(2011c) 石山寺の珪灰石. 琵琶湖博物館研究調査報 告, no.26, p.185.
- 中野聰志(2011d) 国分の珪灰石. 琵琶湖博物館研究調査報告, no.26, p.186.
- 中野聰志・原山 智(2003) 第4章 後期白亜紀火成岩類. 水口地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 産総研地質調査総合センター, p.12-40.
- Nakano, S. and Makino, K. (2010) Amazonitic alkali feldspar from the Tanakami Granitic pluton, southwest Japan. *Jour. Mineral.* and Petrol. Sci., vol.105, p.45-56.
- 中野聰志・西村貞浩・竹下真弓・稲田里香(1991) 田上・信 楽地域の鉱物学-長石類-. 滋賀県自然誌編集委員会編, 滋賀県自然誌, 滋賀県自然保護財団, p.451-473.
- 中野聰志・沢田順弘・牧野州明・細川栄子・谷村友紀 (2001) 琵琶湖西岸比良山地花崗岩中変質脈の産状と特徴. 日本 鉱物学会年会,日本岩石鉱物鉱床学会学術講演会講演要旨 集,p.192
- 中野聰志・川辺孝幸・原山 智・水野清秀・高木哲一・小村良二・ 木村克己(2003) 水口地域の地質.地域地質研究報告(5 万分の1地質図幅),産総研地質調査総合センター,83p.
- 中野聰志・吉見典浩・冨田克敏(2006) 滋賀県田上花崗岩体 の熱水変質. 滋賀大学教育学部紀要(自然), vol.56, p.35 -49.
- 中野聰志・大橋義也・石原舜三・河野俊夫(2013) 滋賀県琵琶 湖南方・田上花崗岩体中の細粒暗色包有岩. 地質調査研究 報告, vol.64, p.25-49.
- 中世古幸次郎編(1984) 関西国際空港地盤地質調查. 災害科 学研究所報告, 285p.
- 中田 高・今泉俊文(2002) 活断層詳細デジタルマップ.東 京大学出版会,東京, 60p, CD2枚.
- 中司 稔 (1929) 田上山の鑛物. 地球, vol.11, p.330-344.
- 中司 稔 (1932) 田ノ上山の鑛物の分布状態に就て. 我等の 鑛物, vol.1, p.196-206.
- 中司 稔 (1945) 滋賀県田上山地方の晶洞について. 日本鉱
 物趣味の会研究報告, vol.2, no.1, p.1-14.

- 中沢和雄(1984) 滋賀県田ノ上,及び高島地方産の変形水晶 について. 地学研究, vol.36, p.107-113.
- 中沢和雄(2006) 滋賀県大津市田上山産泡蒼鉛. 地学研究, vol.55, p.171-172.
- 中沢和雄・鶴田憲次・高田雅介(2005) 滋賀県田上山の中沢 大晶洞から産出したトール石とその結晶形態. 地学研究, vol.54, p.2-4.
- 中沢圭二・石田志朗(1959) 瀬田川河床の化石林. 地学研究, vol.11, p.138-143.
- 中沢圭二・立川正久・石田志朗監修(1979) 滋賀県地質図. 10万分の1, 滋賀県自然保護財団.
- 西橋秀海(1977MS) 田上地域を中心とする花崗岩の岩石学的 研究. 滋賀大学教育学部卒業論文, 41p.
- 日本地質学会編(2009a) 近畿地方. 日本地方地質誌 5, 朝倉 書店, 東京, 453p.
- 日本地質学会編(2009b) 4.1 第三系. 日本地方地質誌 5, 近 畿地方, 4. 新生界, 朝倉書店, 東京, p.193-210.
- 日本の地質『近畿地方』編集委員会編(1987) 近畿地方.日本の地質6,共立出版,東京, 297p.
- 西堀 剛·西川一雄·小早川 隆·但馬達夫·岨中貴洋(1991) 湖東流紋岩類. 滋賀県自然誌編集委員会編, 滋賀県自然 誌, 滋賀県自然保護財団, p.387-422.
- 西川一雄・西堀 剛・小早川 隆・但馬達夫・辻 一信・佐藤 義成(1979) 湖東流紋岩類. 滋賀自然環境研究会編, 滋 賀県の自然 総合学術調査研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.387-422.
- 西川一雄・西堀 剛・小早川 隆・但馬達夫・上嶋正人・三村 弘二・片山正人(1983) 湖東流紋岩およびその活動につ いて、岩鉱, vol.77, p.51-64.
- 西川廉行(1972) 綴喜層群および一志層群産の魚鱗化石につ いて. 関西自然科学, no.24, p.19-21, 関西自然科学研究会.
- 西村貞浩・中野聰志(2002) 滋賀県野洲花こう岩体中の熱水 変質岩. 滋賀大学教育紀要(自然), vol.52, p.21-35.
- 西村貞浩・中野聰志・冨田克敏・牧野州明(1990) 田上・信 楽花崗岩中のアルカリ長石の三斜度. 地質雑, vol.96, p.133 -142.
- 西村 進・笹嶋貞雄(1970) Fisson-Track 法による大阪層群 とその相当層中の火山灰の年代測定.地球科学, vol.24, p.222-224.
- Nishimura, S. and Yokoyama, T. (1974) Fission-track ages of volcanic ashes of core samples of Lake Biwa and Kobiwako Group. Paleolim. Lake Biwa Japan. *Pleisto.*, vol.2, p.38-46.
- Nishimura, S. and Yokoyama, T. (1975) Fission-track ages of volcanic ashes of core samples of Lake Biwa and Kobiwako Group (2) . Paleolim. Lake Biwa Japan. *Pleisto.*, vol.3, p.138-142.
- 西岡芳晴・尾崎正紀・山元孝広・川辺孝幸(1998) 名張地域 の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質 調査所,72p.
- 西岡芳晴・尾崎正紀・寒川 旭・山元孝広・宮地良典(2001) 桜井地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図 幅),地質調査所,141p.

- 西山団体研究グループ(1967) 京都盆地西南部,西山山麓の 大阪層群-近畿地方の新期新生代層の研究,その7-.地 球科学, vol.21, p.1-10.
- 西山昭仁(1998) 元暦二年(1185)京都地震の被害実態と地 震直後の動静.歴史地震, no.14, p.19-44.
- 西山昭仁(2000) 元暦二年(1185)京都地震における京都周 辺地域の被害実態. 歴史地震, no.16, p.163-184.
- 西山昭仁 (2010) 文政京都地震 (1830年) における京都盆地 での被害要因の検討-- 桟瓦葺屋根の普及による被害の拡大 -. 東京大学地震研究所彙報, vol.85, 1/2, p.33-47.
- 西山団体研究グループ・桂高校地学クラブ(1970) 高槻北方 丘陵の大阪層群-近畿地方の新期新生代層の研究, その17 -. 地球科学, vol.24, p.208-221.
- 野口寧世(1969) 東山トンネル西口の大阪層群の珪藻化石. 大阪層群総研連絡紙, no.4, p.14-15.
- 大林達生(2002) 田上地方のペグマタイト鉱物-日本のペグ マタイト産地 その1-. 中津川市鉱物博物館, 20p.
- 小倉博之(1995) 近畿地方中部の低所に分布する崖錘堆積物. 第四紀,第四紀総合研究会連絡誌, no.27, p.55-63.
- 巨椋池土地改良区編(1962) 巨椋池干拓誌. 巨椋池土地改良区, 737p.
- 大橋 健(1975) 瀬田川の段丘と湖面変化. 人文地理, vol.27, p.649-651.
- 大橋 健(1978a) 琵琶湖南岸地域の地形発達史. 立命館文学, no.394・395, p.280-302.
- 大橋 健(1978b) 段丘からみた琵琶湖の湖面変動について. 地学教育, vol.31, p.75-81.
- 大橋 健・植村善博 (1970) 琵琶湖とその周辺の地形. 地理 学評論, vol.43, p.401.
- 大橋義也(2010MS) 田上花崗岩体中苦鉄質包有岩の岩石学 的・鉱物学的解析. 滋賀大学大学院教育学研究科修士論文, 81p.
- 大橋義也・中野聰志・石原舜三(2009) 滋賀県南部・田上花 崗岩体中の MME. 日本地質学会第 116 年学術大会講演要 旨, p.268.
- 岡 義記(1978) 和泉山脈の形成と大阪層群. 第四紀研究, vol.16, p.201-210.
- 岡田篤正·東郷正美編(2000) 近畿の活断層.東京大学出版会, 東京, 395p.
- 岡田篤正·東郷正美·中田 高·植村善博·渡辺満久(1996) 京都東南部. 1:25,000都市圏活断層図,国土地理院.
- 岡田素彦 (1990) 京都府南部宇治田原町から産出した二畳紀 放散虫化石. 地質雑, vol.96, p.937-939.
- 岡野武雄(1961) 京都·滋賀地区の珪灰石. 地調月報, vol.12, p.713-716.
- 大阪層群研究グループ(1951) 大阪層群とそれに関連する新 生代層. 地球科学, no.6, p.49-60.
- 大阪層群最下部団体研究グループ(1992) 大阪層群中の「不 整合」について-松尾丘陵北部の大阪層群-. 地球科学, vol.46, p.209-220.
- 大阪通商産業局非金属鉱物資源対策委員会(1989) 滋賀県長 石資源の合理的開発に向けて(非金属鉱物資源対策事業報

告書). 大阪通商産業局, 49p.

- 大阪通商産業局総務部開発業務課(1983) 桂川下流地域地下 水利用適正化調査報告.工業用水, no.297, p.28-49.
- 大島裏二(1955) 京都の工業と用水の種類. 京都商工情報, no.22, p.3-8.
- 尾崎正紀·寒川 旭·宮崎一博·西岡芳晴·宮地良典·竹内圭史・ 田口雄作(2000) 奈良地域の地質.地域地質研究報告(5 万分の1地質図幅),地質調査所,162p.
- Plumper, O. and Putnis, A. (2009) The complex hydrothermal history of granitic rocks: Multiple feldspar replacement reactions under aubaolidua conditions. *Jour. Petrol*, vol.50, p.967-987.
- Rakovan, J., Ono, M. and Francis, C.A. (2009) Tanakamiyama : a classical Japanease Pegmatite district. *Rocks & Minerals*, vol.84, p.520-527.
- Raymond, L.A. (1984) Classification of mélanges. Geological Society of America, Spec. Paper, no.198, p.7-20.
- Sakaguchi, S. (1961) Stratigraphy and Palaeontology of the South Tamba District, Part 1 Stratigraphy. *Mem. Osaka Univ. Liberal Arts and Educ.*, B, Nat. Sci., vol.10, p.35-67.
- Sakaguchi, S. (1963) Stratigraphy and Palaeontology of the South Tamba District Part 2 Palaeontology. *Mem. Osaka Univ. Liberal Arts and Educ.*, B, Nat. Sci., vol.12, p.89-173.
- 坂本 亨(1955) 奈良南方の新生代層. 地質雑, vol.61, p.62 -71.
- 寒川 旭 (1992) 地震考古学.中公新書,中央公論社,東京, 251p.
- 寒川 旭(1994) 琵琶湖周辺の遺跡で検出された地震の痕跡. 琵琶湖博物館開設準備室研究調査報告, no.2, p.53-70.
- 寒川 旭(2007) 地震の日本史 大地は何を語るのか. 中公 新書, 中央公論社, 東京, 268p.
- 寒川 旭(2010) 秀吉を襲った大地震 地震考古学で戦国史 を読む. 平凡社新書, 177p.
- 寒川 旭・杉山雄一・宮地良典(1996) 有馬高槻構造線断層 系の活動履歴および地下構造調査. 平成7年度活断層調査 研究概要報告書, 地質調査所研究資料集, no.259, p.33-46.
- 産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2005) 日本温 泉・鉱泉分布図及び一覧(第2版)(CD-ROM版).数値 地質図GT-2,産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 佐藤隆春・室生団体研究グループ(2009)(2)奈良県北部と その周辺.4.新生界,4.1.3新第三系,b.瀬戸内地域,日 本地質学会編,日本地方地質誌5近畿地方,朝倉書店, 東京,p.202-204.
- 里口保文(1995) 上総層群中・下部の火山灰層序. 地質雑, vol.101, p.767-782.
- 里口保文(2009) 伊賀·近江盆地. 日本地質学会編, 日本地 方地質誌 5 近畿地方, 朝倉書店, 東京, p.253-258.
- 里口保文(2010) 鮮新・更新世境界付近の広域テフラとテフ ラ層序の分解能. 第四紀研究, vol.49, p.315-322.
- 里口保文・服部 昇(2008) 中部更新統古琵琶湖層群上部と 上総層群上部の火山灰層の対比. 第四紀研究, vol.47, p.15 -27.

- 澤田一彦・吉田源市・藤井(高島)里香(1997) 琵琶湖周辺 の花崗岩質岩体:江若花崗岩体.地球科学, vol.51, p.401 -412.
- 沢田順弘・板谷徹丸(1993) 琵琶湖南部後期白亜紀環状花崗 岩質岩体の K-Ar 年代-巨大コールドロンにおける冷却史 -. 地質雑, vol.99, p.975-990.
- 沢田順弘・斎藤 眞(2000) IV. 火成岩類. 横山地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所, p.57 -86.
- 沢田順弘・加々美寛雄・松本一郎・杉井完治・中野聰志・周琵 琶湖花崗岩団体研究グループ(1994)琵琶湖南部白亜紀環 状花崗岩質岩体と湖東コールドロン,地質雑, vol.100, p.217 -233.
- 瀬野錦蔵・川端 博(1965) 山科、醍醐地区不圧地下水(浅井戸)調査. 伏見醸友会誌, no.7, p.49-61.
- 滋賀地学研究会編(1977) 生きている化石湖. 法律文化社, 京都市, 223p.
- 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編(2002a) 7.石山寺 周辺-大理石とホルンフェルス-. 改訂 滋賀県 地学のガ イド(上),コロナ社,東京, p.94-104.
- 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編(2002b) 8. 田上山 と大戸川-治水と利水-. 改訂 滋賀県 地学のガイド(上), コロナ社,東京, p.116-129.
- 滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編(2002c) 9. 金勝山 - 花崗岩の風化地形と石仏-. 改訂 滋賀県 地学のガイド (上),コロナ社,東京, p.105-115.
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1983) 第一章 瀬田川とその周辺の地形・地質・水文. 滋賀県教 育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編,瀬田川浚渫 工事に伴う流域分布調査瀬田川,滋賀県教育委員会・財団 法人滋賀県文化財保護協会, p.1-80.
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1984) 第2章 琵琶湖南部,瀬田川周辺の地形・遺跡の立地環境 -. 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会編, 粟津湖底遺跡発掘調査報告書,滋賀県教育委員会・財団法 人滋賀県文化財保護協会, p.6-58.
- 滋賀自然環境研究会編(1979) 滋賀県の自然 総合学術調査研 究報告,及び10万分の1 滋賀県地質図. 滋賀県自然保護 財団,1148p.
- 滋賀県自然誌編集委員会編(1991) 滋賀県自然誌 総合学術調 査研究報告. 滋賀県自然保護財団, 2056p.
- 島倉巳三郎(1966) 本邦新生代層の花粉層序学的研究区 古 琵琶湖層群.奈良学芸大学紀要(自然),vol.14, p.25-39.
- 清水大吉郎(1989) 洛東五別所と大津石山寺の珪灰石の産状・ 源岩・成因(要旨),日本地質学会関西支部報,no.108, p.8.
- 清水文健・井口 隆・大八木規夫(2005) 京都東南部.5万 分の1地すべり地形分布図,第22集京都及大阪,防災科 学技術研究所研究資料, no.270.
- 清水照夫・松尾源一郎・加藤 昭 (1966) 京都府宇治田原産 含ストロンチウム-アラレ石. 地学研究, vol.17, p.44-47.
- 染川治実・吉川周作(1983) 京都府南部,田辺丘陵の大阪層群. 地球科学, vol.37, p.98-109.

- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1982) 琵琶湖周辺の花崗 岩質岩体-甲賀地方の花崗岩類-. 地質雑, vol.88, p.289-298.
- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1990) 琵琶湖周辺の花崗 岩類-その2. 鈴鹿花崗岩体-. 地球科学, vol.44, p.184-195.
- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(1997) 琵琶湖周辺の花崗 質岩体-その4.比良山地の花崗岩類-.地球科学, vol.51, p.188-198.
- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2000) 琵琶湖周辺の花こ う質岩体-その5.田上地域の花崗岩類.地球科学, vol.54, p.380-102.
- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2005) 琵琶湖周辺の花こ う 質岩体-その 6. 野洲花崗岩体. 地球科学, vol.59, p.89-392.
- 周琵琶湖花崗岩団体研究グループ(2008) 比叡花崗岩体の 形成史と白亜紀末火成活動における位置付け.地質雑, vol.114, p.53-69.
- Słaby, E., Götze, J., Wörner, G., Simon, K., Wrzalik, R. and Smigielski, M. (2008) K-feldspar phenocrysts in microgranular magmatic enclaves: A cathodoluminescence and geochemical study of crystal growth as a marker of magma mingling dynamics. *Lithos*, vol.105, p.85-97.
- 須藤定久(1991) 滋賀県南郷~信楽地区の長石質資源-鉱床 の分布とその地質.日本セラミック協会見学資料,11p.
- 須藤定久(2001) 滋賀県南郷~信楽地区の長石質資源-鉱 床の分類とその地質・鉱床学的意味-. 地質ニュース, no.559, p.41-49.
- 菅森義晃(2006) 京都西山地域の上部ペルム系高槻層,中部 三畳系島本層及び三畳紀堆積岩複合体.地質雑, vol.112, p.390-406.
- 杉井完治・沢田順弘(1999) 琵琶湖北東部,後期白亜紀貝月 山花崗岩体.島根大学地球資源環境学研究報告,vol.18, p.69 -84.
- 鈴木正男(1988) 第四紀火山灰層のフィッショントラック年 代について. 地質学論集, no.30, p.219-221.
- 鈴木毅彦・中山俊雄(2007) 東北日本弧, 仙岩地熱地域を給 源とする 2.0Ma に噴出した大規模火砕流に伴う広域テフ ラ. 火山, vol.52, p.23-38.
- 田井昭子(1963) 深草・枚方地域における第四紀の堆積物の 花粉分析. 地球科学, no.64, p.8-17.
- 田結庄良昭・弘原海 清・政岡邦夫・周琵琶湖花崗岩団体研究 グループ(1985) 近畿地方における白亜紀~古第三紀火 成活動の変遷.地球科学, vol.39, p.358-371.
- 田結庄良昭・加々美寛雄・柚原雅樹・中野聰志・澤田一彦・森 岡幸三郎(1999) 高 Sr 同位体比初生値を有する近畿地方 の白亜紀~古第三紀花崗岩類. 地質学論集, no.53, p.309 -321.
- 田結庄良昭・森岡幸三郎・井口 譲・島田正明・榛葉昌次・藤 井宏明・加々美寛雄(2000) 近畿地方領家帯深成岩類の 火成活動区分と放射年代.月刊地球号外, no.30, p.196-

203.

- 高木哲一・小村良二(2003) 第7章 応用地質.水口地域の 地質,地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),産総研 地質調査総合センター, p.57-70.
- 高瀬 博・物部長進(1960) 滋賀県琵琶湖南東地域マンガン 鉱床-珪酸マンガン 第1報-. 地調月報, vol.11, p.301 -318.
- 高瀬元通(2001) 天然記念物に指定されている地質環境-石 山寺-. 地質と調査, vol.90, p.28-29.
- 高田雅介 (2004) 滋賀県田上山にトパーズを求めて-その1 -. ペグマタイト, no.66, p.17-20.
- 高田雅介・小林 進(1984) 滋賀県田上産ベルトラン石につ いて. 地学研究, vol.35, p.7-12.
- 高田雅介・松原 聰 (1989) 滋賀県田上新免産・ヒンガン石. 地学研究, vol.38, p.7-14.
- Takaya, Y. (1963) Stratigraphy of the Paleo-Biwa Group and the paleogeography of Lake Biwa with special reference to the origin of the endemic species in Lake Biwa. *Mem. Coll. Sci.*, *Univ. Kyoto*, Ser.B, vol.30, Geology and mineralogy, p.81-119.
- 高谷好一・市原 実(1961) 枚方丘陵の第四紀層-とくに新 香里層・枚方層にみられる気候変化について-. 地質雑, vol.67, p.584-592.
- 竹本健一・吉田源市・中野聰志(1977) 滋賀県大津市田上山 における球顆花崗岩の新露頭の発見.地球科学, vol.31, p.130-131.
- 竹村恵二 (2009) 京都盆地 (大阪層群,段丘層,盆地地下). 日本の地質 近畿地方,朝倉書店,東京, p.240-244.
- 竹村恵二・横山卓雄(1989) 琵琶湖 1400m 掘削試料からみた 堆積環境. 陸水学雑誌, vol.50, p.247-254.
- 竹村恵二・横田 裕・末廣匡基 (2003) 京都盆地の深部構造. 自然災害科学, vol.22, p.220-225.
- 武村道雄(2011a) 鳴滝鉱山(平尾旧坑)のマンガン鉱床. 琵 琶湖博物館研究調査報告, no.26, p.188.
- 武村道雄(2011b) 焼野鉱山のマンガン鉱床. 琵琶湖博物館研 究調査報告, no.26, p.189.
- 竹辻 正・市原 実(1967) 千里山丘陵中央部の大阪層群. 大阪層群総研連絡紙, no.1, p.6-11.
- 竹内圭史・王 革凡 (1999) 京都府和束地域の低変成度領家 変成岩. 地調月報, vol.50, p.527-534.
- 竹内圭史・西岡芳晴(2005) 京都府南部の領家変成帯北縁部. 日本地質学会第112年学術大会(2005年京都)見学旅行 案内書, p.15-27.
- 瀧本 清編(1973) 日本地方鉱床誌-近畿地方. 朝倉書店, 東京, 436p.
- 瀧本 清・石垣参策(1973) 1.7 マンガン鉱. 瀧本 清編,日本地方鉱床誌 近畿地方,1.金属鉱床,朝倉書店,東京, p.176-220.
- 瀧本 清・港 種雄・佐野美則(1964) 滋賀県石山平津長石 の鉱床学的研究(1), とくに母岩および鉱石の鉱物組成に ついて、水曜會誌, vol.15, p.237-240.
- 田村糸子・山崎晴雄・水野清秀(2005) 前期鮮新世 4.1Ma 頃の広域テフラ,坂井火山灰層とその相当層.地質雑,

vol.111, p.727-736.

- Tamura, I., Yamazaki, H. and Mizuno, K. (2008) Characteristics for the recognition of Pliocene and early Pleistocene marker tephras in central Japan. *Quaternary International*, vol.178, p.85-99.
- 田村幹夫・松岡長一郎・横山卓雄(1977) 滋賀県水口町北方 丘陵の古琵琶湖層群,特に蒲生累層の層序について.地質 雑, vol.83, p.749-762.
- 田村幹夫・松下修治・伊藤克己・酒井助太郎(1979) 滋賀県 の古生層と中生層. 滋賀自然環境研究会編, 滋賀県の自然 総合学術調査研究報告,(財) 滋賀県自然保護財団, p.133 -159.
- 田村幹夫・雨森 清・小早川 隆・荒川忠彦・北川明照・多賀 優・但馬達雄・西川一雄・三矢信昭(1993) びわ湖東 部中核工業団地造成地域の古琵琶湖層群について.多賀町 文化財・自然誌調査報告書, no.3, p.26-82.
- 丹波地帯研究グループ(1971) 丹波地帯の古生界(その2)-京都府北桑田郡京北町南部の古生層-.地球科学, vol.25, p.211-218.
- 丹波地帯研究グループ(1974) 丹波地帯の古生界(その3)-京 都市北方大森・雲ヶ畑地域の古生層-.地球科学, vol.28, p.57 -63.
- 丹波地帯研究グループ(1975) 丹波地帯の地向斜堆積相の研究. 地向斜の諸問題,地団研専報, no.19, p.13-23.
- 丹波地帯研究グループ (1979a) 丹波地帯の中・古生界 (その4) -京都市西北山地の中・古生界の岩相と地質構造-.地
 球科学, vol.33, p.137-143.
- 丹波地帯研究グループ(1979b) 丹波地帯の中・古生界(その 5)-京都市西北山地の中・古生界のコノドント化石-.地 球科学, vol.33, p.247-254.
- 丹波地帯研究グループ(1980) 丹波地帯の中・古生界(その6)
 -京都府北桑田郡京北町東南部の地質-. 地球科学, vol.34,
 p.200-204.
- 立川正久(1964) 黒雲母花崗岩中の黒雲母のマグネシュウム 及び鉄含有量-主として近畿地方産-. 地質雑, vol.70, p.127-142.
- 立川正久・藤本秀弘(1967) 造花崗岩黒雲母のマンガン含有 量について – 近畿地方産のもの – . 地質雑, vol.73, p.193 - 198.
- 天白俊馬・琵琶湖基盤地質研究会(2001) 琵琶湖南部花こう 岩類の化学組成. 琵琶湖博物館研究調査報告, no.15, p.84 -105.
- 天白俊馬(2007) y線の測定. 地学教育と科学運動, no.55, p.48 -52.
- 天白俊馬(2011) 田上花崗岩 細粒相. 『記録しておきたい滋 賀県の地形・地質』,琵琶湖博物館研究調査報告, no.26, p.61.
- 東郷正美(1971) 饗庭野台地の変形について. 地理学評論, vol.44, p.194-200.
- 鳥居昭三(1948) 京都東山洪積層. 鑛物と地質, 第8集, p.62 -68.
- 辻 一信・北原隆男(1979) 滋賀県下のおもな鉱物・鉱床.
 滋賀自然環境研究会編, 滋賀県の自然 総合学術調査研究報告,(財) 滋賀県自然保護財団, p.479-541.

- 塚本常雄(1933) 京都市域の變遷と其地理學的考察. 京都帝 国大学地理論叢, 第1輯, p.155-229.
- 鶴田憲次(2002) 滋賀県田上山産コルンブ石. 地学研究, vol.51, p.29-30.
- Tuttle, O.F. and Bowen, N.L. (1958) Origin of granite in the light of experimental studies in the system NaAlSi₃O₈ - KAlSi₃O₈ - SiO₂ -H₂O. Geol. Soc. Amer. Mem., no.74, 151p.
- Uchiyama, E. (1983) Plutonic rocks in the Hira mountain range. Abstracts of Master Thesis, Div. Educ., Grad. Cour., Kobe Univ., p.48-49.
- 内山 高(1996) 古地磁気.服部川足跡化石調査団編,古琵 琶湖層群上野累層の足跡化石,三重県立博物館, p.33-37.
- 上治寅次郎(1961a) 比叡造山帯南部の地質構造概観. 槇山次 郎教授記念論文集, 槇山次郎教授退官記念事業会, p.163-173.
- 上治寅次郎(1961b) 京都近傍地質誌-京都・大津・宇治・亀 岡・高槻及び隣接市町村を含む-.地下資源研究所,82p.
- 上治寅次郎(1962) 京都近傍地質図. 5万分の1,地下資源研 究所.
- 植村善博(1972) 洪積世末期以降の琵琶湖の湖面変動. 地理 学評論, vol.45, p.499.
- Uemura, Y. (1999) Geomorphic history and tectonic movement of Lake Biwa during the Quaternary period, Japan. Jour. Fac. Letter. Bukkyo Univ., no.83, p.19-29.
- 植村善博(1999) 京都の地震環境-(付)京都盆地の地震災 害危険度マップ.ナカニシヤ出版,京都,118p.
- 植村善博(2001a) 比較変動地形論-プレート境界域の地形と 第四紀地殻変動-. 古今書院,東京, 203p.
- 植村善博(2001b) 京都の地震環境. ナカニシヤ出版, 京都, 123p.
- 植村善博・横山卓雄(1983) 琵琶湖の自然-地形と地層・地 質-. 「琵琶湖, その自然と社会」, サンブライト出版, 京都, p.39-45.
- 植村善博・太井子宏和(1990) 琵琶湖湖底の活構造と湖盆の 変遷. 地理学評論, Ser. A, vol.63, p.722-740.
- 植村善博・中塚 良(1992) 京都盆地南部の地下を横断する 横大路断層について.活断層研究, vol.10, p.65-72.
- 宇治田原町史編さん委員会(1980) 地質.宇治田原町教育委員会編,宇治田原町史第一巻,序章,自然景観,宇治田原町, p.5-15.
- 宇野沢 昭(1968) 琵琶湖南平野の構造およびその発達過程 について. 地理学評論, vol.41, p.382-383.
- 宇佐美龍夫(2003) 最新版日本被害地震総覧-[416]-2001-. 東京大学出版会,東京,605p.
- Wakita, K. (1988) Origin of chaotically mixed rock bodies in the Early Jurassic to Early Cretaceous sedimentary complex of the Mino terrane, central Japan. *Bull. Geol. Surv. Japan*, vol.39, p.675 -757.
- 脇田浩二(2000) 美濃帯のメランジュ. 地質学論集, no.55, p.145 - 163.
- Wang, G. (1989) Carbonaceous material in the Ryoke metamorphic rocks, Kinki district, Japan. *Lithos*, vol.22, p.305-316.

- Wang, G., Banno, S. and Takeuchi, K. (1986) Reactions to define the biotite isograd in the Ryoke metamorphic belt, Kii Peninsula, Japan. Contrib. Mineral. Petrol., vol.93, p.9-17.
- 和束町町史編さん委員会編(1995) 和束町史(第一巻). 437p.
- 八木伸二郎・早瀬一一・能田 成(1969) Rb-Sr 法による田 ノ上花崗岩類の地質年令. 地質雑, vol.75, p.84.
- 山田滋夫(1981) 滋賀県田ノ上山産希有な ζ (1122) 面をもつ 煙水晶. 地学研究, vol.32, p.37-39.
- 山根新次(1930) 大阪地質概観. 小川博士還暦記念地学論叢, p.187-203.
- 山崎博史・吉川周作・林 隆夫(1994) 琵琶湖西岸,古琵琶 湖層群基底部のコアの層序. 地質維, vol.100, p.361-367.
- 山崎博史・吉川周作・此松昌彦・三矢信昭(1996) 古琵琶湖 層群高島累層白土谷部層の地質年代. 地質雑, vol.102, p.303 -311.
- 八尾 昭(1968) 京都府宇治田原町より紡錘虫化石の発見. 地質雑, vol.74, p.399-400.
- 横田修一郎(1974) 滋賀県 "湖南アルプス"における花崗岩 中の節理系. 地質雑, vol.80, p.205-214.
- 横田修一郎・松岡数充・屋舗増弘(1978) 信楽・大和高原の 新生代層とそれにまつわる諸問題-信楽・大和高原のネオ テクトニクス研究 その1-.地球科学, vol.32, p.133-150.
- Yokoyama, M. (1930) Neogene shell from Yamashiro. Jour. Fac. Sci., Imp. Univ. Tokyo, Sec.II, vol.II, p.399-403.
- Yokoyama, T. (1969) Tephrochronology and paleogeography of the Plio-Pleistocene in the eastern Setouchi geologic province, southwest Japan. *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ.*, ser. Geol. Mineral., vol.36, p.19-85.
- Yokoyama, T. (1975) Plio Pleistocene Kobiwako Group on the west coast of Lake Biwa with special reference to correlation to the 200 m core sample of Lake Biwa by tephra. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.3, p.114-137.
- 横山卓雄(1989) 伊賀盆地西方,島が原地域の古琵琶湖層群. 同志社大学理工学研究報告,vol.30, p.210-224.
- 横山卓雄・雨森 清(1991) 古琵琶湖層群地質図について. 滋賀県自然誌編集委員会編,滋賀県自然誌,滋賀県自然保 護財団, p.535-542, および滋賀県湖東地域古琵琶湖層群 地質図.
- 横山卓雄・中川要之助(1974) 関屋地域の大阪層群の層序と 古水流方向からみた"奈良湖"の水の流出口について.地 質雑, vol.80, p.277-286.
- 横山卓雄・中川要之助(1984) 奈良市北方丘陵の古大阪層群. 同志社大学理工学部紀要, vol.24, p.231-251.
- 横山卓雄・松岡長一郎・那須孝悌・田村幹夫(1968) 古琵琶 湖層群下部,特に狭山累層について-近畿地方の新期新生 代層の研究,その9-.地質雑,vol.74, p.327-341.
- 横山卓雄・中川要之助・松岡長一郎(1975) 近畿地方の鮮新・ 更新統. 日本地質学会第 81 年総会, 巡検案内書, p.1-24.
- Yokoyama, T., Ishida, S., Danhara, T., Hashimoto, S., Hayashi, T., Hayashida, A., Nakagawa, Y., Nakajima, T., Natsuhara, N., Nishida, J., Otofuji, Y., Sakamoto, M., Takemura, K., Tanaka,

N., Torii, M., Yamada, K., Yoshikawa, S. and Horie, S. (1976) Lithofacies of the 1000m core samples on the east coastof Lake Biwa, Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.4, p.52-66.

- Yokoyama, T., Danhara, T., Kobata, Y. and Nishimura, S. (1977) Fission-track ages of volcanic ashes of core samples of Lake Biwa and the Kobiwako Group (3). *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.5, p.44-53.
- 横山卓雄・松岡長一郎・田村幹夫・両森 清(1979) 古琵琶 湖層群. 滋賀自然環境研究会編, 滋賀県の自然 総合学術 調査研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.309-389.
- Yokoyama, T., Nakagawa, Y., Takemura, K., Mori, S., Makinouchi, T., Hayashida, A., Iida, Y. and Matsuoka, K. (1979) Stratigraphy of the Takashima Formation of the Plio-Pleistocene Kobiwako Group, Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.7, p.100-114.
- Yokoyama, T., Makinouchi, T., Takemura, K., Hayashida, A., Sannomiya, T. and Yamamura, H. (1980) Stratigraphy of the Pliocene Iga-Aburahi Formation of the Kobiwako Group at the east of Iga-Ueno City, Mie Prefecture, Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.8, p.45-64.
- 横山卓雄・中川要之助・竹村恵二・林田 明 (1980) 琵琶湖 深層試錐からみた中期更新世. 第四紀研究, vol.19, p.185 -201.
- 横山卓雄・中川要之助・檀原 徹・竹村恵二(1981) 芝の不 整合について(I)-千里山丘陵北縁部の大阪層群の層序 および大阪層群中における不整合の発見と意味について-. 同志社大学理工学研究報告, vol.21, p.301-320.
- Yokoyama, T., Makinouchi, T., Mori, S., Nakagawa, Y., Tamura, M., Takemura, K., Hayashida, A., Amemori, K. and Mori, H. (1982) Stratigraphy of the Pliocene Iga-Aburahi Formation of the Kobiwako Group around Iga-Ueno City, Mie Prefecture, Japan. *Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene*, vol.10, p.48-58.
- 横山卓雄・雨森 清・竹村恵二・田村幹夫・中川要之助・林田 明・ 牧野内 猛・森 忍・森 彦人(1989) 伊賀盆地西南 の古琵琶湖層群. 同志社大学理工学研究報告, vol.30, p.181 - 198.
- 横山卓雄・林田 明・太井子 宏・高宮秀毅・竹村恵二・森 彦人(1995) 滋賀県信楽地域の古琵琶湖層群. 同志社大 学理工学研究報告, vol.36, p.45-59.
- 吉田史郎(1992) 瀬戸内区の発達史-第一・第二瀬戸内海形 成期を中心に-. 地調月報, vol.43, p.43-67.
- 吉田史郎・高橋裕平・西岡芳晴(1995) 津西部地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅),地質調査所, 136p.
- 吉田史郎・西岡芳晴・木村克己・長森英明(2003) 近江八 幡地域の地質,地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 地質調査所,72p.
- 吉田源市・西橋秀海(1987) 1. 琵琶湖周辺地域.(4)山陽帯 の花こう岩類, 2.5 内帯の白亜紀~古第三紀の火成岩類, 第2章中・古生界および古第三系,日本の地質『近畿地方』

編集委員会編,日本の地質6,近畿地方,共立出版,東京, p.47-49.

- 吉田源市・西橋秀海・竹本健一・久田義之・西村貞浩・齊田敏 彦・澤田一彦・中野聰志(1991) 琵琶湖周辺の花崗岩質 岩体. 滋賀県自然誌編集委員会編, 滋賀県自然誌 総合学 術調査研究報告, 滋賀県自然保護財団, p.423-449.
- 吉川周作(1973) 大阪南東部の大阪層群. 地質雑, vol.79, p.33 -45.
- 吉川周作 (1976) 大阪層群の火山灰層について. 地質雑, vol.82, p.497-515.
- Yoshikawa, S. (1984) Volcanic ash layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki district, Japan. Jour. Geosci. Osaka City Univ., vol.27, p.1-40.
- 吉川周作(1999) 琵琶湖東岸,烏丸地区深層ボーリングコア の火山灰層序.琵琶湖博物館研究調査報告, no.12, p.75-87.
- 吉川周作・檀原 徹(1996) 火山灰とその年代.服部川足跡 化石調査団編,古琵琶湖層群上野累層の足跡化石,三重県 立博物館, p.25-32.
- 吉川周作・井内美郎(1991) 琵琶湖高島沖ボーリングコアの 火山灰層序. 地球科学, vol.45, p.81-100.
- 吉川周作・井内美郎(1993) 琵琶湖高島沖ボーリング火山 灰から見た中期更新世〜完新世の噴火火山史. 地球科学, vol.47, p.97-109.
- 吉川周作・三田村宗樹(1999) 大阪平野第四系層序と深海底 酸素同位体比層序との対比. 地質維, vol.105, p.332-340.
- 吉川周作・山崎博史(1998) 古琵琶湖の変遷と琵琶湖の形成. アーバンクボタ, no.37, p.2-11.
- 吉川周作·佃 栄吉·三田村宗樹·中川康一·水野清秀·東脇愛子·

片岡香子・高橋 誠(1997) 大阪市天王寺区夕陽丘 600m ボーリングコアの岩相・火山灰層序. 地調月報, vol.48, p.661 - 672.

- 吉川周作・三田村宗樹・中川康一・長橋良隆・岩崎好規・越後智雄・ 辻江賢治・北田奈緒子(1998) 大阪市津守・大手前・浜ボー リングコアの岩相・火山灰層序.地質雑, vol.104, p.462-476.
- 吉川周作・水野清秀・加藤茂弘・里口保文・宮川ちひろ・衣笠善博・ 三田村宗樹・中川康一(2000) 神戸市東灘 1,700m ボーリ ングコアの火山灰層序. 第四紀研究, vol.39, p.505-520.
- 吉村豊文(1952) 日本のマンガン鑛床. マンガン研究會資料, マンガン研究会, 567p.
- 吉村豊文(1969) (2)焼野鉱山. 第7節石山地域,第7章近 畿地方,吉村豊文教授記念事業会編,日本のマンガン鉱床 補遺,後編日本のマンガン鉱山, p.680-682.
- 吉岡敏和(1987) 京都盆地周縁部における第四紀の断層活動 および盆地形成過程. 第四紀研究, vol.26, p.97-109.
- Yoshizawa, H., Ishizaka, K., Kaneko, K. and Kawahara, M. (1965) Geology and petrology of the Hira granite and mutual relations between granites in the North - eastern Kinki district, Japan. *Mem. Coll. Sci., Univ. Kyoto*, Ser.B, vol.31, p.279-289.
- Yoshizawa, H., Nakajima, W. and Ishizaka, K. (1966) The Ryoke metamorphic zone of the Kinki district, southwest Japan: Accomplishment of a regional geological map. *Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto*, Ser.B, vol.32, p.437-454.
- Zhang, J. (1996MS) Geology and radiolarian age of the Tamba Group in the Uji area, Kyoto Prefecture. Kyoto University master thesis, 53p.



付図 A-D 露頭・試料採取位置図 基図は国土地理院発行の数値地図 50000,「京都東南部」「水口」の一部を使用.

QUADRANGLE SERIES,1:50,000 Kyoto (11) No.40

Geology of the Kyōto-Tōnambu District

By

Koji WAKITA*⁺, Keiji TAKEUCHI*, Kiyohide MIZUNO*, Taku KOMATSUBARA*, Satoshi NAKANO**, Keiji TAKEMURA***, and Yusaku TAGUCHI****

(Written in 2012)

(ABSTRACT)

The Kyoto-Tonambu district is located in the southern part of Kyoto Prefecture, Honshu Island, Japan. Its latitude and longitude range from 34°50' to 35°00' north and 135°45' to 136°00' east, respectively. The geologic entities of the Kyoto-Tonambu district are divided into accretionary complexes, plutonic rocks and Cenozoic sediments, with a Jurassic accretionary complex being the oldest among them. Cretaceous plutonic rocks are widely distributed in the eastern part of the district. Quaternary sediments are found mainly in the western and northeastern parts. The dominant direction of the fault system is NNE to SSW followed by some faults oriented NW to SE. There are active faults in the western and central parts of the district.

Jurassic accretionary complex of the Tamba Belt

A Jurassic accretionary complex occupies the central and southeastern part of the Kyoto Tonambu district. Until the 1960s, it was understood to be a sediment geosyncline, and was also called the Paleozoic Chichibu, but now it is interpreted as being products of ocean plate subduction in Late Triassic to Early Cretaceous times. This complex is one of the most important components of the Japanese basement, and is distributed throughout Japan. The southern margin of this complex suffered low-pressure high-temperature metamorphism, which formed the Ryoke Metamorphic Belt.

The Jurassic accretionary complex in this district is mainly composed of sandstone, mudstone, siliceous mudstone, chert, siliceous claystone, limestone and basalt with minor amounts of chert breccia, conglomerate, interbedded limestone and chert, and interbedded chert and dolomite. The limestone yields Permian fusulinids, the chert contains Late Carboniferous to Triassic conodonts and radiolarians, and the siliceous shale and mudstone include Late Triassic to Early Cretaceous radiolarians. These rock components were deposited on the ancient ocean plate. The basalt and limestone were components of Late Paleozoic seamounts on the ocean plate. The chert came from pelagic sediments, while the siliceous shale is made of hemipelagic sediments. The sandstone, mudstone and conglomerate are trench sediments along the convergent margins. All these rocks are components of Ocean Plate Stratigraphy. The rocks and sediments on the ocean plate subducted and accreted along the continental margins together at the ancient convergent margin.

These rock components of the Jurassic accretionary complex in the Tamba Belt were deformed during and after the accretionary process. The Ocean Plate Stratigraphy sequence is tectonically stacked at the toe of a trench. It accreted to form an ancient accretionary wedge, which sometimes collapsed along the trench due to submarine sliding and mud diapirism, and the components were tectonically disrupted and mixed to form chaotic units called mélanges. The degree of deformation and disruption varies from place to place. However, most of the Jurassic accretionary complex of the Tamba Belt is composed of chaotic mélanges showing block-in-matrix structures. The blocks are chert, basalt, limestone, dolomite, and sandstone, while the matrices are composed of argillaceous rocks such as mudstone and siliceous shale.

The complex is subdivided into two units, the Type I and Type II suites (Ishiga, 1983). The former was formed in the late Middle to early Late Jurassic, while the latter was developed in the late Early Jurassic time. The Type I suite contains Triassic chert and limestone, while the Type II suite yields chert and limestones of the Carboniferous to Permian and Triassic ages. Type I is more

^{*} Institute of Geology and Geoinformation

⁺ present address: Yamaguchi University

^{**} Shiga University

^{***} Kyoto University

^{****}Institute for Geo-Resources and Environment



Fig.1 Geological summary of the Kyōto-Tōnambu District

widely distributed than Type II, and occupies the central and northwestern parts of the district. Type II is distributed in the southern and southeastern parts of the district. These two suites were originally formed in different times and places, and attached to each other by out-of-sequence thrusts in the ancient accretionary wedge.

Several vertical faults cut though the accretionary complexes. The faults in the complexes are dominantly NNE-SSW and WNW-ESE. The two suites are also bounded by a vertical fault, although their original boundary was a thrust fault.

The southern margin of the Jurassic accretionary complexes of the Tamba Belt suffered Late Cretaceous low-pressure/hightemperature-type Ryoke metamorphism. The lowest grade chlorite zone is recognized in this district. In the southeastern and central part of the district, the accretionary complexes surrounding the Late Cretaceous granites are metamorphosed up to the cordierite zone, making contact aureoles. The Late Cretaceous dikes intruded into the Jurassic accretionary complexes.

Late Cretaceous igneous rocks

Igneous rocks in the Kyoto-Tonambu district, which was active during the Late Cretaceous period, are divided into Shigaraki granite, Tanakami granite, and dyke rocks.

The Shigaraki granite is distributed as biotite granite locally only in the southeastern margin of this district, in contact with the Tanakami granite. The Tanakami granite, which has intruded into the Shigaraki granite, is subdivided into the following three biotite granite facies on the basis of grain size: medium to coarse-grained, medium to coarse-grained porphyritic, and fine-grained to fine-grained porphyritic biotite granite. The first facies is widely distributed in the pluton, while the second appears to have intruded into the first as the central or inner facies of the pluton. The third facies occurs as sheets in the roof areas of the pluton and as dykes and sheets in other areas. This fine-grained facies includes aphanitic and porphyritic to aphanitic biotite granite dykes. These sheets and dykes are closely associated with pegmatites, spherulitic ball granites and hydrothermally altered rocks. Round mafic microgranular inclusions (enclaves) around 10 cm in diameter are noted to be widely dispersed in the area around the Tanakami granite pluton.

Miocene Tsuzuki Group

The Tsuzuki Group is distributed in the southern part of the Kyoto-Tonambu district. It is the latest Early Miocene to earliest Middle Miocene marine stratum. The Tsuzuki Group is one of the First Setouchi Supergroups in southwest Japan. The Tsuzuki Group is divided into two formations, the Okuyamada and the Yuantani. Both formations are composed of conglomerate, sandstone, and mudstone with minor felsic tuffs. The Tsuzuki Group yields several molluscan fossils, i.e. *Vicaryella* sp., which indicate a warm environment in the earliest Middle Miocene time.

Pliocene to Quaternary sediments

Pliocene to Middle Pleistocene sediments, called the Kobiwako Group, are distributed in the Omi Basin and surrounding hills. The Osaka Group, which is distributed in the Kyoto Basin and surrounding hills, consists mainly of a sequence of fluvial and lacustrine sediments. Marine clay beds are intercalated in the upper part of the Osaka Group. The Kobiwako Group in the mapped district is divided into five formations, the Ayama, Koka, Gamo, Kusatsu and Katata formations in ascending order. The Osaka Group is divided into five formations, the Tomigaoka, Otonoyama, Zenjoji, Nagaike and Fukakusa formations. The two widespread tephras, the Shishimuta-Pink tephra (1.0 Ma) and the Shishimuta-Azuki tephra (0.85 Ma), are intercalated in the Katata and Fukakusa formations. The sand and gravel beds of the Zenjoji and Nagaike Formations are exploited for as aggregate resources.

The terrace deposits are distributed in the Omi, Kyoto, and Yamashina Basins and surrounding hills. These terrace deposits consist of gravel, sand and mud. They are subdivided into higher, middle and lower terrace deposits in ascending order.

The Omi, Yamashina and Kyoto Basins are piled up with Quaternary sediments. Deep drilling, seismic exploration and gravity investigation show that the basin-fill deposits reach 600 to 800 m thick on the southwern side of the Ujigawa Fault in the Kyoto Basin.

Resource geology

There are several hydrothermally altered granite (feldspar) deposits, many small manganese deposits, and a barite deposit in this district. Most of these are now closed. The Tanakami Granite pegmatites were noted in earlier years as natural resources of uranium and mica.

Geohazards

Many historical documents have records of natural disasters, such as flooding, landslides and earthquakes in this district. Earthquakes causing major damage have hit the city of Kyoto every 100 to 300 years since the ninth century.

Soil outflows due to deforestation of the Tanakami granite have been the most frequent and bothersome geohazards in this district since the late seventh century, but reforestation efforts reduced soil outflow in the twentieth century.

執筆分担			
第1章	地形		小松原 琢
第2章	地質概説 脇田浩二・竹内圭史・	中野聰志	・水野清秀・小松原 琢・竹村恵二
第3章	丹波帯ジュラ紀付加コンプレックス		脇田浩二・竹内圭史
第4章	白亜紀深成岩類		中野聰志
第5章	中新統綴喜層群		竹内圭史
第6章	鮮新 - 中部更新統古琵琶湖層群及び大阪層	群	水野清秀
第7章	段丘堆積物・沖積層とその相当層		小松原 琢
第8章	堆積盆地の地下地質		竹村恵二・小松原 琢
第9章	地質構造	小松原	琢・水野清秀・脇田浩二・竹内圭史
第10章	資源地質		中野聰志・田口雄作・水野清秀
第11章	災害地質		小松原 琢
第12章	その他の地質関連事項	竹村恵二	 ・水野清秀・竹内圭史・小松原 琢

文献引用例

脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聰志・竹村恵二・田口雄作(2013)京都東南 部地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1地質図幅). 産総研地質調査総合センター, 124p.

章単位での引用例

小松原 琢(2013) 京都東南部地域の地質,第1章 地形,地域地質研究報告(5万分の1地質 図幅). 産総研地質調査総合センター, p.1-4.

Bibliographic reference

Wakita, K., Takeuchi, K., Mizuno, K., Komatsubara, T., Nakano, S., Takemura, K. and Taguchi, Y.
 (2013) Geology of the Kyoto-Tonambu District. Quadrangle Series, 1:50,000, Geological Survey of Japan, AIST, 124p. (in Japanese with English abstract, 3p.).

Bibliographic reference of each chapter

Komatsubara, T. (2013) Geology of the Kyoto-Tonambu District. Chapter 1, Topography. Quadrangle Series, 1:50,000, Geological Survey of Japan, AIST, p.1-4. (in Japanese)

> 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 京都東南部地域の地質 平成25年4月15日発行 独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

〒 305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 中央第7
 TEL 029-861-3601
 本誌掲載記事の無断転載を禁じます.

印刷所 株式会社アイネクスト

©2013 Geological Survey of Japan, AIST